

以貌取人、失之子羽

【萌芽】 事の端緒をいふ、草木の初めてもえ出づるに

喩ふ、漢書劉向傳に「詩始一」

【榜歌】 舟人のうたふ歌、蕭穎士の句に「一、天際聞」榜

は舟をこぐ、カイなり、歌ひつづ「カイ」を使ふを歌榜

といふ、張説の句に「綠渚轉歌榜」

【烹醢】 烹は「カマイリ」醢は「ヒシホ」にすること、古の

刑法、殺戮の義、史記魯仲連傳に「吾將使秦王一」梁

建の句に「日入聞虎闕、空山滿一」

【咆哮】 大いなる聲してほゆる義「ドナル」抱朴子に「一

者不必勇、淳談者不必怯、また虎のほゆる聲、常

韻に膨脹に作る、義同じ、

【彭亨】 膨脹するなり、彌明石鼎聯句に「豕腹脹一」廣

韻に膨脹に作る、義同じ、

【方孝孺】 字は希直、一の字は希古、克勤の仲子なり、明

の寧海侯城の人、少くして宋濂に従ひて學ぶ、洪武二

十五年、薦を以て召され、漢中の教授に除せらる、蜀の

獻王其の賢を聞き、聘して世子の師となし、尊ぶに殊

禮を以てす、召對するに名いはず、其の讀書の廬を號

して正學といふ、惠帝位に即くに及び、召して翰林博

士と爲し、侍講に遷る、建文四年、燕兵の執ふる所ると

中に除す、入りて太子に論語を授け、大鴻臚に累遷す、

明帝位に即き、咸に師傅の恩あるを以て、特に俸祿を

加賜す、咸皆散じて諸生の貧しき者に與ふ

【榜眼】 進士の試に應じて第二番に及第せしをいふ、

雲麓漫鈔に「世目狀元第二人、爲一、一、また王禹偁の

送朱巖詩に「一科名釋褐初」

【方技】 醫術の類をいふ、またその書をいふ、漢書藝文

志に「侍醫李柱國校一、一、醫書を校正せしをいふ、晉

書にも「華於圖緯一之書、莫不詳悉」

【忘機】 世の中うるさき機事をうちわすれて心し

づかなる義、李白の句に「陶然共一」機とは、世に處

するに巧なる心術などをいふ

【耄期】 禮記の曲禮に「八十九十ヲ耄トイヒ、百歳ヲ期

トイフ」とあり、書經大禹謨に「一、倦于勤」

【魚然】 自ら矜りて、氣の健かなる貌、詩の大雅蕩篇に

「咨女般商汝一、于中國、斂怨以爲德、魚然、魚は

咻に作る、同じ、

【旁求】 「アマネクモトメル」書經太甲に「一、一、俊彦」

【庖犧氏】 太昊庖犧氏、支那の太古三皇の世の初に出

てし皇帝なり、庖犧は一に伏羲とも書く、養犧牲以庖

厨故曰「庖犧」とあれば、庖犧とは其の徳に由りて名づ

なり、獄に下さる、成祖孝孺をして登極の詔を草せし

ひ、孝孺筆を地に投じ、且つ罵りて曰く、死せんことは

即ち死せんのみ、詔は草すべからずと、燕賊篡位の四

字を大書す、成祖怒り命じて之を市に磔せしむ、孝孺

慨然として死に就く、時に年四十六、著す所る遜志齋

集二十四卷あり、遜志齋集を見よ、

【方孝孺ノ篤厚】 明史に「方孝孺、宋景濂ノ門ニ在リテ

高弟タリ、濂貶所ニ卒ス、私居シテ念及ビ、或ハ其ノ手

蹟ヲ見或ハ談濂ノ事ニ及ブ毎ニ、輒涕泣ス、既ニシテ

漢中ニ官スルトキ、其ノ家存スルコト能ハズ、蜀王ニ

言ヒテ厚ク之ヲ撫恤ス、舟變ニ次スル毎ニ、必ズ往キ

テ墓下ニ祭リ、慟哭時ヲ移シテ方ニ去レリ」

【方岳】 宋ノ人、字ハ巨山、秋崖ト號ス、詞翰ニ長ズ、小藁

アリ世ニ行ハル、方澄孫之ニ序シテ曰ク、奇奇怪怪ノ

文、ソノ人ノ如ク、磊磊落落ノ氣、ソノ文ノ如シト」

【放學】 學課の終りて、休みとなりたる義、陸游の詩に

「負看忘却還家飯、恰似兒童一、一時」

【暴客】 外寇をいふ、易經繫辭に「重門擊柝、以禦一、一、

【包咸】 字は子良、漢の會稽の人、東海に客たり、赤眉の

得るところとなる、晨夜經を誦して自若たり、賊異み

て之を遣る、光武中興、郷里に歸り孝廉に擧げられ、郎

けたるものにして、伏羲は、音を借りたるものなり、

【忘却】 忘るる義、却是俗語の助字、夢遊錄に「舞袖弓

彎渾一、羅緯空、度九秋霜」

【包舉】 囊を以て物を包むが如く、悉く取るをいふ、賈

誼の過秦論に「席卷天下、一、一、字内」

【鮑魚】 「ヒモノ」また「シホツケ」の魚なり、玉篇に「漬魚

ナリ」と、臭氣あり、孔子家語に「與不善人居、如入一、

一之肆、久而不聞其臭」とあり、悪人と交るときは知

らず識らず悪に化せらるるに喩ふ、

【魴魚頰尾】 頰は赤なり、本は頰に作る、魴の尾は、本

と白きものなり、而るに赤くなるは、勞すること甚し

きが故なり、所謂魚勞則尾赤、人勞則髮白の意に同じ

く、人の勞苦の甚しさに比す、詩の周南汝墳篇に「一、一、

一、王室如燬、雖則如燬、父母孔邇」とあるは、今や勞

苦の甚しき王室（殷紂）の虐政酷烈燬くが如きに由る

と雖も、父母たる西伯（周文）近きに在れば、亦以て心を

慰むべしとの意、

【放勳】 堯帝の名、書經堯典に「曰若稽古帝堯、曰一、一、

史記五帝紀にも見ゆ、

【方外】 方は猶ほ道の如し、斯の道に由らざる者をい

ふ、莊子の太宗師に「孔子曰彼遊方之外者也、而丘遊

方之内者也。彼は子桑戸、孟子反、子琴張三人を斥す。また方域外の義にも用ふ、楚辭に「覽一之荒忽兮、司馬相如の難、蜀父老文に「羣生澍濡、洋溢乎一、即ち中國の外なる蠻夷の地をいふ、

【包荒】易の泰卦に「九二、一用馮河、不遐遺」と、荒穢を包含するは、宰相の度量あるなり、不遐遺とは遐遠を以て之を遺棄せざるをいふ、

【仿徨】次條を見よ、

【彷徨】一に彷徨、また方皇に作る、徘徊の義、莊子に「茫然、一平塵垢之外、逍遙乎無爲之業、また史記刺客傳に「彷徨不能去、

【葆光】葆は蔽(カクス)なり、知をおほひかくして、顯はひかる義、莊子の齊物論に「注焉而不滿、酌焉而不竭、而不知其所由來、此之謂葆光、

【包括】「カネアハせて、ひとつにくくる、西京雜記に「賦家之心、一宇宙、

【抱關擊柝】抱關は門番なり、擊柝は、柝(ヒヤウシギ)を撃ちて、夜を警する者をいふ、皆賤役なり、孟子萬章下に「辭尊居卑、辭富居貧、惡乎宜乎、抱關擊柝、荀子榮辱篇に「一、而不自以為寡、

【旁觀スル者ハ審カナリ】利害の外に身を置く者は

派の一派を開けり、而して苞は實にその宗たり(方苞)を見よ、

【萌孽】萌は芽なり、孽は芽の旁出する者、ヒコバエ物の發生するをいふ、孟子告子上に「是其日夜之所息、雨露之所潤、非一之生、

【望月】十五夜の月なり、類書纂要に「望ハ十五日ナリ、月半ノ夜、月圓ニシテ日ト對望ス、望ハ月滿ツルノ名ナリ、後赤壁賦に「是歲十月之望、

【方言】地方の土語なり、揚子方言の標題に「輜軒使者、絶代語釋、別國方言」とあり、また唐の王維の詩に「因入見風俗、入境聞方言、

また書名十二卷方言一萬一千九百餘字を解説す、世に揚子一と稱するは、後漢の末、應劭風俗通義を作り、その序文に於てこの書を揚雄の自著となせるに本づく、

【邦彦】彦は美士なり、詩の鄭風に「彼其之子、邦之彦兮、また漢書敘傳に「尊實起超、邦家之彦、尊は王尊なり、

【放言高論】ほしいままに言論する義、文章軌範侯字集の小序に「一、筆端不窘束、

【貌言ハ華ナリ、至言ハ實ナリ】史記商君傳に「貌言、華也、至言、實也、苦言、藥也、甘言、疾也、貌言とは飾りて實な

その判断公平に、理を見ること明かなれども、局に當る者は迷を生じ易し(當局者)を見よ、鹽鐵論にも「從旁議者易是、其當局則亂」とあり、

【報瓊】人我に贈るに、微物を以てすれば、我當に之に報ゆるに、重寶を以てすべしとの義、詩の衛風木瓜篇に「投我以木瓜、報之以瓊琚」とあるに本づく、瓊は玉の美なるもの、琚は佩玉の名、書言故事に「惠ヲ受ケテ報謝スルナキヲ、報瓊ニ乏シキヲ、愧ヅトイフ、

【忘形】己の形體あることを忘るる義、莊子に「故養志者一」とあり、淮南子に「遺形去智」とある、遺形に同じ、圓機活法に「孟郊性介ニシテ諧合スルコト少シ、韓愈一見シテ一ノ交ヲ爲ス、李白の詩に「一、到爾汝、

【旄倪】旄は老人、倪は弱小の義、小兒をいふ、孟子に「反、其一、」

【望霓】渴望の切なる意(大旱ノ)を見よ、

【望溪集】清の方苞撰す、その弟子王兆符程卓二人の編するところ、方望溪文抄中に收む、苞は經學に深く最も禮に精し、その文縱橫奔放の致無しと雖も、法度謹嚴にして浮華冗漫の病なし、蓋し亦歸有光(震川)の流なり、後ち劉大魁姚鼐等皆この風を追ひ、遂に桐城

【房玄齡】字は喬孫、臨淄の人、父彥謙、隋に仕へて監察御史となる、道を直くし常を守り、介然孤立、涇陽令に終る、玄齡幼にして警敏、墳典を貫綜し善く文を屬し、草隸に工なり、唐の太宗渭北を徇ふる時、策を杖き上謁し、一見舊の如し、府の記室となり征伐に従ひ、獨り人物を收めて幕府に置く、累官して尙書左僕射となる、相位に居ること十五年、公に任じ節を竭す、世その賢を稱す、貞觀二十二年薨す、年七十一、大尉を贈り、文昭と諡せらる、新唐書に「房玄齡家ヲ治ムルニ、法度アリ、常ニ諸子ノ驕侈ニシテ、勢ニ席リ人ヲ凌ガンコトヲ恐レ、乃チ古今ノ家誡ヲ集メ、書シテ屏風ト爲シ、各一具ヲ取ラシム、曰ク、意ヲ此ニ留ムレバ、以テ躬ヲ保ツニ足レリ、漢ノ袁氏ノ、累葉忠節ナルハ、吾ガ心ニ向ブ所ロナリ、爾宜シク之ヲ師トスベシト、

【方壺】海中に在る仙山、拾遺記に「海中ノ三山ハ一ヲ方壺方丈ト名ヅケ、二ヲ蓬壺蓬萊トイヒ、三ヲ瀛洲トイフ、形壺ノ如ク、上廣ク下狹シ、列子湯問篇に「渤海ノ東ニ大壑アリ、ソノ中ニ五山アリ、一ニ曰ク岱輿、二ニ曰ク員嶠、三ニ曰ク一、四ニ曰ク瀛洲、五ニ曰ク蓬萊、ソノ山高下周旋三萬里(中畧)居ル所ノ人ハ皆仙聖

ノ種ナリ

【旁午】一縦一横なり、猶ほ交横といふが如し、漢書霍光傳に「使者——」

【亡國ノ音】滅亡せし國の音樂にて淫靡なる音樂をいふ、禮記の樂記に「鄭衛之音亂世之音也、比於慢矣、桑間濮上之音、亡國之音也、其政散、其民流、誣上行、私而不可止也」の註に「比ハ近也、桑間濮上ハ、衛ノ地、濮水ノ上、桑林ノ間ナリ、張子曰ク、鄭衛ノ地、大河ニ濱シテ、沙地土薄シ、故ニ其ノ人氣輕浮ニシテ、其ノ地平下ナリ、故ニ其ノ質柔弱ナリ、其ノ地肥饒、耕耨ヲ費サズ、故ニ人心怠惰ス、其ノ人ノ情性此ノ如シ、其ノ聲音亦然リ、故ニ其ノ樂ヲ聞キテ、人ヲシテ此ノ如ク懈慢セシムルナリト、韓非子に「衛靈公將之晉、至濮水之上、聞鼓、新聲者、使師涓撫琴而寫之、去之晉、以新聲示平公、師曠撫之曰、此亡國之聲也、師延與紂爲靡靡之樂也、及武王伐紂、師延走濮水、而自投、聞此聲者、必于濮水之亡」

【亡國ノ大夫】ハ以テ存ヲ圖ル可カラズ、大夫は政を執る者なり、滅亡せる國の大夫は、國家を存立することを謀る資格なしとの義、敗軍ノ將を見よ、

【暴虎馮河】虎を「テウチ」にするを暴虎といひ、河を「カチ」にするを馮河といふ、

【苞桑】桑の本の根なり、易經否卦に「其亡其亡、繫于苞桑」疏に「苞ハ本ナリ、凡ソ物、桑ノ苞本ニ繫ゲバ即チ牢固ナリ」——之計は根本を固くする「ハカリゴト」

【莽蒼】（——）を見よ、

【包藏禍心】（禍心ヲ）を見よ、

【方冊】書籍をいふ、方策に同じ、陸倕の石關銘に「布在——無彰器用」

【方策】方は木版なり、策は竹簡なり、中庸に「文武之政、布在——」古は紙なく事あれば、之を木版または竹簡に書す、故に——は書物の義なり、

【忙愆】「イソガワシ」愆は殺の俗字、笑殺、妬殺の殺に同じく助字なり、一説に助字のときは音サイ馬樸臣の詩に「——隣家小兎女」

【邨山】（北邨ノ）を見よ、

【鮑參軍集】十卷、宋の鮑照撰す（照一ニ昭ニ作ル）（鮑照）を參看せよ、

チヲタリするを馮河といふ、暴虎馮河は、極めて危きことに喩ふ、詩經の小雅小旻に「不敢暴虎、不敢馮河」論語述而に「子曰ク——、死シテ悔ナキ者ニハ吾ハ與ミセザルナリ」

【亡魂】死人の「タマシヒ」後漢書段熲傳に「以慰忠將之——」

【茅坤】字は順甫、鹿門と號す、明の歸安の人、嘉靖十七年の進士、才文武を兼ね、禮部主事を歴て、大名兵備副使となる、恐む者の中つるところとなりて落職し、萬曆二十九年卒す、坤古文を善くし、最も唐順之に服す、順之唐宋諸家の文を喜ぶ、著すところの文編唐宋人は韓柳歐三蘇、王曾八家の外取るところなし、故に坤また唐宋八大家文鈔一百六十四卷を撰び、盛んに行はる、詳しくは、明文苑傳を見よ、

【望湖樓下水如天】蘇軾の望湖樓題壁の詩の句なり、曰く「黑雲翻墨未遮山、白雨跳珠亂入船、卷地風來忽吹散、——」

【茅柴酒】うすき惡酒をいふ、カヤやシバの忽ち燼えつくるが如く酒に力なきをいふ、韓子蒼の詩に「三年逐客臥江阜、自與田工釀小精、飲慣茅柴酒、苦硬不知如蜜有、香醪事物紺珠に「薄酒世謂之茅柴、飲易」

【方山冠】古の樂人の服せし冠の名、後漢書輿服志に「——制似進賢、前高七寸、後高三寸、纓長八寸、似進賢冠、五采穀爲之、祠宗廟、天子八佾、四時五行樂人服之、冠衣各如其行方之色」また蘇軾の方山子傳に見、其所著帽、方屋而高、曰此豈——之遺像乎、因謂之方山子、冠頂を屋といふ、

【寶山ニ入りテ空手ニシテ歸ル】（入寶山空手歸）（寶山ニ）を見よ、

【放肆】己の欲する儘にする義、關尹子に「一鍛至微亦能——乎大海」

【望子】目標（メジルシ）なり、廣韻に「青帝酒家——」

【髦士】髦は俊なり、俊士をいふ、詩の小雅に「烝我——儀禮士冠禮に「——攸宜」爾雅の釋言には「髦、我——ナリ」と、疏に「毛中ノ長毫ヲ髦トイフ、士ノ俊選ナル者ナリ」

【方舟】二舟を比ぶるなり、比舟に同じ、爾雅に「大夫——士特舟、莊子山木に「——而濟于河」

【堡聚】衆を聚めて保守するをいふ、左傳に「我敝邑用不敢——」

【防秋】匈奴を防ぐをいふ、秋氣至り、弓弩用ふべし、匈奴常に以て軍を出すの候とす、故にいふ、舊唐書の陸

贊傳に「河隴陷、蕃已來、西北邊常以重兵守備、謂之「高適の九曲詞に、青海只今將飲馬、黃河不用更防秋」

【茅茨剪ラズ、采椽斷ラズ】「茅茨不剪、采椽不斲、宮殿の「ソマツ」なるをいふ、采は柞木なり、字探に作る、本木に従ふ、茅を以て屋を覆ひ、採を以て椽(タルキ)と爲すは、質素の甚しきをいふ、墨子に「堯堂高三尺、土階三等、茅茨不翦、采椽不刊」また韓非子五蠹篇に「堯之王、天下也、茅茨不翦、采椽不斲、糲糲之食、藜藿之羹、冬日麤裘、夏日葛衣、雖監門之服、養不虧於此」矣」とあり、また漢書の藝文志に「墨家者流ハ、蓋シ清廟ノ守ニ出ヅ、茅屋采椽是ヲ以テ儉ヲ貴ブ」また帝王世紀にも類語あり、一解に采椽は山より採り來りたる木をそのまゝ斧斤を施さずして「タルキ」とするなりと、

【亡是公】亡は無なり、音ブ是の公無しといふ義にて、假設の人名(烏有)を見よ、
【貌執】禮貌もて接待するの義、荀子に「一之士者、百餘人」
【芒刺背ニ在リ】「芒刺在背、言故事に「恐懼シテ安カラザルヲイフ、漢ノ宣帝、高帝ノ廟ニ謁ス、霍光驂乘ス、上内ニ之ヲ嚴憚ス、芒刺ノ背ニ在ルガ如シ」と、註に「芒」

刺ハ、草端ナリ、草端其ノ背ヲ刺シテ、安カラザルガ若シ、この事も漢書霍光傳に見ゆ
【放心】放逸せる心なり、孟子告子上篇に「學問之道無他、求其放心而已矣」とあり、孟子のこの語、蓋し書經の畢命に「雖收放心、閑之維難」とあるに本づく
【保眞】眞を保つ義、天より與へられし眞性を保ちて失はざるをいふ、楚辭卜居に「寧超然高舉、以保眞乎」
【庖人】「レウリ」する人、穆天子傳に「命一熟之」
【榜人】舟子なり、センドウ、張協の七命に「一奏、採菱之歌、古雋考畧に「一ハ舟師ナリ、船梢、撐夫皆同じ、

【鮑謝】(鮑照)を見よ、
【方城】西漢に廣陽國一縣あり、東漢は幽州涿郡一縣あり、晉は幽州范陽國一縣あり、今の直隸順天府固安縣の南十五清里、また北魏以後の一縣は、今の河南南陽府裕州治なり
【彭城】西漢の縣、楚國に屬す、東漢、晉は徐州一國一縣あり、南宋以後隋までは一郡一縣あり、唐は河南道徐州一縣あり、今の江蘇徐州府銅山縣治是れなり、
【保障】保は堡に同じ、障は蔽ひ扞ぐなり、城堡の義、左傳定十三年に「成孟氏之障也、無成、是無孟氏也」

た租税を軽くして人民を保護する政治をいふ、史記趙世家に「簡子使尹鐸爲晉陽、請曰、以爲、繭絲乎、以爲、一乎、簡子曰、一哉、尹鐸損其戶數」
【亡狀】(一)を見よ、

【放生會】畜ひおける魚鳥の類を放ちて慈悲を積むを主とする佛事の會、乾淳佛時記に「四月八日ハ佛ノ誕日タリ、諸寺各浴佛會アリ、コノ日西湖ニテ一ナス、小舟ニテ編魚螺蚌ヲ競賣シ放生セシム」と、唐の肅宗天下に詔して放生池を置くこと八十一と史に見ゆ、放生を參看せよ、

【彭祖ヲ齊ウス】駿臺雜話、朝かほの花一時の條に引けり、長壽と短命とを同視するをいふ、莊子の齊物論に「天下莫大於秋毫之末、而大山爲小、莫壽乎殤子、而彭祖爲天」と、彭祖は、莊周が長壽者に名づけし假名なり、逍遙遊にも「彭祖乃今以久特聞」とあり、殤とは禮記に生れてより三月以上十九年まで死する者を無服、殤下殤中殤長殤に分てり(彭祖)を參看せよ、

【旁若無人】眼中に人無きなり、史記刺客傳に「高漸離擊筑、荆軻和而歌於市中、相樂也、已而相泣、旁若無人者、旁二人)を見よ、
【亡酒】酒席を逃れ避くる義、史記齊悼惠王世家に「諸

呂有一人醉亡酒
【卯酒】アサノムサケ卯時の酒なり、白樂天に卯時酒の詩あり、
【苞苴】薬にて包みたるを苞といひ、下に藉くを苴といふ、贈物をいふ、それより賄賂の義に轉用す、説苑の君道篇に「苞苴行、耶、讒夫昌、耶、宮室營、耶、女謁盛、耶、何不、雨之極也、類書纂要に「苞苴、餽遺也、事文類聚に「杜衍爲相、一貨賄不敢到其門、時號清白宰相」
【茅茹】易の泰卦に「拔茅茹、茹」とあり、茹は茅根の相牽連するもの、以て君子の進んで仕ふるに、その朋類と牽援するに喩ふ、衆賢一は賢者の引援して朝に仕ふるをいふ、

【望舒】月の馭者なり、楚辭に「前使先驅」
【苞苴】毛などの亂るる貌、左傳僖五年に「狐裘一以苞苴」以テ家ヲ汚サズ、(不以苞苴汚家、圓機活法に「章詵、休日、樓ニ登リ、人ノ圍ニ於テ瘞藏スル有ル者ヲ見ル、諸ヲ吏ニ訪フニ、曰ク、參軍裴寬ガ居ナリト、與ニ偕ニ來ラシム、詵狀ヲ問フ、答ヘテ曰ク、寬ハ義、苞苴ヲ以テ家ヲ汚サズ、適、人有リ、鹿ヲ以テ餉ト爲シ、致シ去ル、敢テ自ラ欺カズ、故ニ之ヲ瘞ムト、詵嗟異シ、乃チ引キテ判官ト爲ス、苞苴は、賄賂なり

るに本づく、杜甫の詩に「方丈渾連水」

また三神山の「蓬萊」を見よ、

また一丈四方の義、孟子盡心下に「食前方丈、侍妾數百人、我得志不爲也」

【抱住】「ダキトメル」仕學大乘に「母胡氏妻蔡氏」

【亡匿】「ニゲカクル」亡匿を見よ、

【庖丁牛ヲ解ク】「庖丁解牛」莊子の養生主篇に「庖丁文惠君ノ爲メニ牛ヲ解ク、手ノ觸ルル所口、肩ノ倚ル所

口足ノ履ム所口、膝ノ踏ル所口、若然爾然、刀ヲ奏ムル

駘然音ニ中ラザル莫シ、桑林ノ舞ニ合ヒ、乃チ經首ノ

會ニ中ル、文惠君曰ク、請善哉、技蓋シ此ニ至ルカト、庖

丁刀ヲ釋テテ對ヘテ曰ク、臣ノ好ム所口ノ者ハ、道ナ

リ、技ヨリ進ム矣、始メ臣ガ牛ヲ解クノ時、見ル所口牛

ニ非ザルモノナシ、三年ノ後、未ダ嘗テ全牛ヲ見ズ、

良庖ハ歲ニ刀ヲ更ム、割スレバナリ、族庖ハ月ニ刀ヲ

更ム、折スレバナリ、今臣ガ刀十九年ナリ、解ク所口

數千牛ナリ、而シテ刀刃新タニ剛ヨリ發スルガ若

シ、彼ノ節ニハ剛アリテ、而シテ刀刃ハ厚キコトナシ、

厚キコトナキヲ以テ剛アルニ入ル、恢恢乎トシテ其

レ刃ヲ遊ブニ於テ必ズ餘地アリ、是ヲ以テ十九年ニ

シテ、刀刃新タニ剛ヨリ發スルガ若シト、文惠君曰ク善イ哉、吾レ庖丁ノ言ヲ聞キテ生ヲ養フコトヲ得タ

【方底圓蓋】四角なる底に、圓き「フタ」互に相合はざる

に喩ふ、顔氏家訓に「使疎薄之人而節量親厚之恩、猶

方底而圓蓋、必不合矣」(圓蓋)を參看せよ、

【暴殄】殄は絶なり、一はあらしてたち亡す義、書經

に「一暴十寒」天物ヲ

【暴天物】拾遺の(天物ヲ)を見よ、

【茅土】古、諸侯に封せらるる者には、天子より其の方

色の土を取り、直ぐに白茅を以てして授け賜ふ、故に

封土を「一」といふ、李陵の典、蘇武書に「足下當享一

一之薦、受千乘之賞」と轉じて諸侯の義にも借り用

ふ、蔡邕の獨斷に「天子大社以所封之方色、直以白茅

授之、謂之授一」方色土とは東は青、南は赤、西は

白、北は黒、中央は黄色の土なり、

【房杜姚宋】四人共に唐の賢宰相なり、房喬字は玄齡

杜如晦字は克明、竝に太宗に仕へて相たり、姚崇字は

元之、宋璟字は廣平、竝に玄宗に仕へて相たり、錦字箋

に「唐ノ世ノ賢相、前ハ房玄齡、杜如晦ヲ稱シ、後ハ姚

崇、宋璟ヲ稱ス」

【芒芒】無知の貌、孟子公孫丑上に「一然、歸」一に罷

倦(ツカレム)の貌とも解す、また多き貌、東哲の補亡

詩に「一其稼」

【望望】去りて顧みざる貌、孟子公孫丑上に「一然、去

之」また人を見送る貌、禮記問喪に「其往送也、一

然」

【寶馬香車】「リツバ」なる馬や車なり、武平一景龍文館

記に「上巳禊於渭濱、沈佺期詩、一一一清渭濱、紅桃

碧柳禊堂春」

【方伯】「ハタガシラ」一方の長なり、卒正連帥、屬長を

統ぶる者、禮記王制に「千里之外設一」また「十國以

爲連、連有帥、今は布政使の別名に用ふ、

【旁魄】廣く下に被り及ぶ義、漢書司馬相如傳に「大漢

之德一一」

【旁礴】混同して一つにする義、莊子の逍遙遊篇に「之

人也、之德也、將旁礴萬物以爲一」の註に「旁礴ハ猶

混同ノゴトシ」また轉じて、みちひろがることに用

【包茅】包は束なり、束ねたる茅をいふ、之に灌ぐに酒

を以てして、祭に供ふる者、左傳僖四年に「爾貢一不

入、王祭不共、共は供に同じ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

【望溪集】見よ、

ノ中ニ入ルヲイフ、ソノ心已ニ孝弟忠信禮義廉恥ノ八字ヲ忘ル、故ニ一ト名ツグ亡八官は、タイコモチ

【放飯流歎】 食ふこと、放肆にして、節する所なく、飲むこと流しこむ如くにするなり、禮記の曲禮に「母、放飯、毋流歎」

【放飯流歎シテ齒決スルナキヲ問フ】 大飯長歎は不敬の大なるものなり、乾肉は手にて割くべし、齒にて決するは不敬なり、されども齒決は不敬の小なるものなり、自ら放飯流歎の大不敬を行ひながら無齒決の義を人に問ふは、これ當に先づ務むべき所を知らざるなり、孟子盡心下に「不能三年之喪、而細小功之察、放飯流歎、而問無齒決、是之謂不知務」禮記の曲禮に「濡肉齒決、乾肉不齒決」

【芳菲】 草又は花の「ヨキニホヒあるを云ふ、庾肩吾の詩に「春日生——また芳草の茂生する貌、

【襄美】 ほむる義、後漢書東平王傳に「制書——班之四海、

【抱負】 物を抱き負ふ義、後漢書儒林傳に「四方學士莫不——墳策、雲會京師、轉じて人の志を懷抱せる義にも用ふ、——遠大などいふ如し、

【望夫石】 幽明録に「武昌ノ北山上ニ石アリ、狀人ノ立

テル如シ、古傳ニイフ、昔貞婦アリ、其ノ夫役ニ從ヒ遠ク國難ニ赴ク、子ヲ携ヘ此ノ山ニ餞送シテ夫ヲ望ミ化シテ石ト爲ル因リテ名ツク」この事神異經にも見ゆ、欽明帝の時、大伴佐手彦が妻佐用姫、夫の遣唐使となりて、唐土へ渡る時、別を悲み、其の船を戀ひて、松浦に來りて死し、其の屍化して石と爲るといふ傳説に似たり、

【方物】 その地方の土に生ずる所の物をいふ、書經に「無有遠邇畢獻——また方は猶ほ別の如し、物は名なり、衆くの物を一つ一つ別ち名づくる義、史記五帝記に「民神雜糅不可——也」一解に——は彷彿に同じと、

【仿佛】 一に髣髴、また彷彿に作る、ぼんやりとして、明かならざる貌、揚雄の甘泉賦に「——其若夢」

【髣髴】 「サモニタリ」説文に「若似ナリ」後漢書馮衍傳「以至人之——前條を見よ、

【方物スベカラズ】 「不可方物」方は別なり、物は名なり、混亂して別ち名づくべからざるをいふ、國語に「民神雜糅、——方物を見よ、

【方便】 大藏法數に「方ハ方法ヲイヒ、便ハ便宜ヲイフ、猶ホ善巧ノ如キナリ、眞實ニ對スルノ語、所謂權道ナ

リ、無著論ニ衆生ノ色身ノ相ニ執著スルヲ破セント欲ス、故ニ佛、喩ヲ假リテ微細ニ分析シ善巧シテ説ク、維摩經に「以無量方便、饒益衆生」品字箋に「釋氏——法門アルハ方ニ隨ヒ便入スルノ傍門ナリ、正法ノ門ハ莊嚴高廣ニシテ、行クモ到リ易カラズ、一大城ノ四門ノ如シ、特ニ四角ノ旁方ニ於テ便ニ隨ヒテ門ヲ開キ近キニ就テ入ラシム、故ニ——トイフ」通鑑に「晉王休祐性剛狠、上積不能平欲——除之」の胡三省の註に「方略ヲ施シ、便利ニ乗ジテ之ヲ殺サントスルナリ」

【襄貶】 襄は美を稱揚するなり、「ホムル」貶はしりぞけおとす義、杜預の左傳序に「春秋雖以——一字爲——、然皆須數句以成言」

【茅蒲】 竹の皮にて作りたる笠、茅一に萌に作る、笠笠なり、國語に「首戴——、身衣襜褕、襜褕は襄なり、

【抱朴子内外篇】 八卷、晉の葛洪撰す、洪字は稚川、抱朴子と號す、神仙道術を好みてその秘奥を得たり、羅浮山に入りて丹を煉り、山に在ること七年、遂にこの書を著し、年八十一にして卒す、この書内篇は神仙修煉符錄の諸事を論じ、純然たる道家の言なり、外篇は、時政の得失、人事の臧否を論じ、多く排偶の體を作し、詞旨辯博にして名理あり、故に隋志に、内篇を道家に入

れ、外篇を雜家に入る、然れども外篇の大旨も亦黃老を以て宗となす、故に簡明目録には内外二篇を併せて道家類に入れたり、

【報本反始】 物の由りて出てたる根本に反り報ゆる義、禮記の郊特牲に「社、供粢盛、所以報本反始也、社は后土、ツチノカミなり、民をして之を祀らしめ以て農を祈るなり、

【暴慢】 暴は粗厲なり、慢は放肆なり、論語泰伯篇に「動容貌、斯遠——矣」

【方命】 「命ニ方フ」を見よ

【亡命】 命は名なり、名籍(コセキ)を脱して逃亡するをいふ、カケオチ漢書張耳傳に「少時嘗——遊外黃、卓氏漢林には「君命ヲ弃テテ、外ニ遊ブノ徒ヲイフ、揚雄の解嘲に「范睢魏之——也」

【方面】 一方面を引き受くる大將をいふ、後漢書の馬融傳に「方面重寄、註に「四方ノ一面ニ當ルナリ」また一方の土の義、石關銘に「區宇又安、——靜息、留青日札に「方者面也、一方之面也、故今之方伯曰——官、また方

向の義、李白の明堂賦に「九夷八狄順——而來奔、

また顔面の方形なるをいふ、後漢書高獲傳に「爲人尼首——」

【方羊】 勞苦のさま、一解に遊戯なり、左傳に「如魚頰尾衡流而一」

また彷彿に通ず、徘徊に同じ、史記吳王濞傳に「外隨大王後車彷彿天下」

【烹羊】 羊を烹る、漢書楊敞傳の楊惲與孫會宗書に「臣之得罪已三年矣、田家作苦、歲時伏臘烹羊烹羔、斗酒自勞」

【滂洋】 「ユタカ」に多きなり、盛大の貌、漢書禮樂志に「福—澤汪濊」

【亡羊】 莊子に「臧ト殺ト二人、相與ニ羊ヲ牧シテ俱ニソノ羊ヲ亡フ、臧ニ笑ヲ事トセシカト問ヘバ、則チ曰ク「儻ヲ挾ミテ書ヲ讀メリト、殺ニ笑ヲ事トセシカト問ヘバ、則チ曰ク「博塞（すごろく）シテ以テ遊ベリト、二人ノ者ノ事業ハ同ジカラザルモ、ソノ—ニ於テハ均シキナリ—之嘆ヲ參看せよ、」

【眈洋】 猶ほ望羊の如し、仰ぎ視る貌、一に遠く視る貌と解す、莊子秋水に「河伯始旋其面目、—向若而歎、」若は北海若といふ海神なり、眈は本望に作る、同じ、

【望羊】 遠く視るをいふ、史記仲尼世家に「眼如—」（眈洋）を見よ、

【亡羊之歎】 學問の道、多岐多端にして、一も得る所ろなきを歎ずるなり、列子說符篇に「楊子ノ隣人羊ヲ亡セリ、既ニ其ノ黨ヲ率キ、又楊子ノ豎ニ請ヒテ之ヲ追フ、楊子曰ク「嘻、一羊ヲ亡ス、何ソ追フ者ノ衆キヤト、隣人曰ク「岐路多ケレバナリト、既ニシテ反ル、問フ羊ヲ獲タルカト、曰ク「之ヲ亡セリト、曰ク「奚ゾ之ヲ亡セルト、曰ク「岐路ノ中ニ、又岐アリ、吾レ之ク所ロヲ知ラズ反ル所以ナリト、楊子曰ク「大道ハ、多岐ヲ以テ羊ヲ亡ヒ、學者ハ、多方ヲ以テ生ヲ喪フ、」

【貌瘦セタリト雖モ、天下肥ユ】（貌雖瘦天下肥）唐書韓休傳に「玄宗、鏡ニ臨ミ、默然トシテ樂マズ、左右曰ク「韓休ガ相ト爲リシヨリ、陛下殊ニ瘦セタリト、上曰ク「吾ガ貌瘦セタリト雖モ、天下必ズ肥エタルナラント、既ニシテ母ニ供シ、自ラ草蔬以テ客ヲ同ジク飯

ス泰起チテ拜シテ曰ク、卿ハ賢ナル哉ト、因リテ勸メテ、學バシメ、卒ニ以テ德ヲナス、

【炮烙ノ刑】 銅柱に膏を注ぎ、之を炭火の上に加へ、罪ある者をして、行かしむれば、軋ちすべりて火中に墮ちて焚死す、極めて殘酷の刑なり、史記殷紀に「紂乃重辟刑、有炮烙之法、」

【保鑾】 天子の親兵なり、鑾は鑾輿なり、保は保護なり、—はわが近衛兵に當る、歐文の王彦章畫像記に見ゆ、

【忙裡閑ヲ偷ム】 多忙中に閑を求めて樂む義、江湖長翁集に「同陳宰黃簿遊靈山、宰云、吾輩可謂忙裡偷閑、苦中作樂、遂以八字爲韻、作詩八首、」

【茅栗】 「シバグリ」桐栗に同じ、莊子に「先生居山林、食—」

【方略】 計策なり、漢書霍去病傳に「願—如何耳、」

【擄掠】 擄は答掠（ムチウツ）なり、擄掠に同じ、史記李斯傳に「趙高治斯、—千餘、」

【亡慮】 亡音ブ無に同じ、無慮を見よ、

【暴戾恣睢】 兇暴惡戾にして、行を恣にし、目を仰ぎて怒り視るをいふ、史記伯夷傳に「—聚黨數千人、橫行天下、」また禮書には「暴慢恣睢」とあり、

【彭蠡湖】 荊州記にいふ「—即チ洞庭湖ナリ、又宮亭湖ト名ヅク、宮亭湖ノ廟神甚ダ靈驗アリ、途旅ノ經過スルモノ、祈禱セザルハナシ、能ク湖中ヲシテ風ヲ分チ帆ヲシテ南北セシム、又分風湖ト名ヅク」と、洞庭湖ヲ參看せよ、

【彭蠡ノ濱ニハ魚ヲ以テ犬ニ食ハシム】（彭蠡之濱、以魚食犬）物多きときは貴からざるに喩ふ（崑山）を見よ、

【茅鹿門】（茅坤）を見よ、

【播越】 遠方に放たれ「サスラフル」なり、流離に同じ、左傳に「不穀震蕩、—竄在荆蠻、」

【巴猿】 巴峽の猿をいふ、荊州記に「三峽猿、鳴至、三聲、聞者皆淚、白居易の舟夜贈、内詩に「三聲猿後垂、鄉淚、一葉舟中載病身、」本朝文粹三、江澄明の山水策に「胡雁一聲、秋破、商客之夢、—三叫、曉露、行人之裳、」謝觀の清賦に「瑤臺霜滿、一聲之玄鶴、天、巴峽秋深、五夜之哀猿、叫、月、巴峽」を參看せよ、

【馬援】 字は文淵、後漢の茂陵の人、少くして大志あり、嘗て賓客に謂つて曰く、丈夫志を立つる、窮しては當に益、堅かるべく、老いては當に益、壯なるべし、建武中拜して伏波將軍となる、交趾を撃ちて還る、曰

なきを歎ずるなり、

【方輿】 地をいふ、坤輿に同じ、宋玉の賦に「方地爲輿、圓天爲蓋、」

【茅容】 後漢書に「茅容字ハ季偉、陳留ノ人ナリ、年四十餘、野ニ耕ス、時ニ等輩ト雨ヲ樹下ニ避ク、衆皆箕踞シテ相對ス、容獨リ危坐シテ愈恭シ、郭泰字ハ林宗、見テ之ヲ異トシ、因リテ留リテ寓宿ス、且日容鷄ヲ殺シ饌ヲツクル、泰オモヘラク己ノ爲メニ設クルナラント、既ニシテ母ニ供シ、自ラ草蔬以テ客ヲ同ジク飯

く男兒、要は當に邊野に死し、馬革を以て屍を裹むべきのみと、武陵五溪蠻反す、援年八十餘自ら行かんと請ひ、鞍に據り顧眄して以て用ふべきを示す、帝笑つて曰く、嬰鑠たるかな是の翁やと、進んで壺頭に營す、利を失ひ病みて卒す、女は明帝の后となり、德後宮に冠たり、崩じて明德と諡す、

【馬遠】 宋の畫家、字は欽山、達の弟、その先は河中の人、後ち錢塘に居る、光寧兩朝に仕へ、畫院待詔を授けらる、山水人物花鳥すべて妙に臻り、畫院に獨歩す、子麟、また畫を能くす、然れども父に及ばず、

【齒ヲ見ハサズ】 (不見齒) 微笑するのみをいふ、大笑するときは、齒の本をあらはし、常の笑には齒をあらはし、微笑には齒を露はさず、禮記に「三年未嘗見齒」

【齒ヲ切り腕ヲ搯ス】 (切齒) を見よ、

【破屋數間】 狭小なる陋屋(アバラヤ)をいふ、韓愈の寄廬全詩に「玉川先生洛陽裏、一一而已矣、一奴長鬚不裹頭、一婢赤脚老無齒、詩は古文眞實に出づ、參看せよ、

【齒堅チ舌存ズ】 剛者は亡び、柔者は存するに喩ふ、說苑に「常縱、疾アリ、老子往イテ問ウテ曰ク、先生疾甚

シ、教ヲ弟子ニ遺スコトナキカト(中畧)常縱乃チ其ノ口ヲ張リ、老子ニ示シテ曰ク、吾ガ舌存セルカト、老子曰ク、存ゼリト、吾ガ齒存セルカト、老子曰ク亡セリト、老子曰ク夫レ舌ノ存ズルヤ、豈ソノ柔ヲ以テニアラズヤ、齒ノ亡スルヤ、豈ソノ剛ヲ以テニアラズヤト、常縱曰ク、嘻是レノミ天下ノ事已ニ盡キタリト、また孔叢子にも「齒堅剛、卒盡相磨、舌柔順、終以不弊」
【馬革ヲ以テ屍ヲ裹ム】 (以馬革裹屍) 烈士の戰場に死するをいふ、後漢書馬援傳に「男兒要當死於邊野、以一一一還葬耳、何能臥床上在兒女子手中耶」
【博士】 漢書の百官表に「博士ハ、秦ノ官、古今ニ通ズルコトヲ掌ル、秩六百石ニ比ス、員多キハ數十人ニ至ル、武帝ノ建元五年、初メテ五經博士ヲ置ク」また成帝紀に「儒林ノ官ハ四海ノ淵源ナリ、宜シク皆古今ニ明カニシテ、故ヲ温ネ、新キヲ知リテ、國體ニ通達スベシ、故ニ之ヲ博士トイフ」
【馬家ノ五常】 兄弟をろひて才名高き者を稱す(白眉)を見よ
【巴峽】 巴東の三峽をいふ、楊子江の上流に在りて四川省に屬す、晉の無名氏の女兒子と題する詩に「巴東三峽、猿鳴悲、夜鳴三聲、淚沾衣、三峽とは廣溪峽巫

峽、西陵峽なり、猿聲の悲を説くこと此の詩に始まる、南史梁紀に「元帝元年、武陵王紀率巴蜀之衆東下、遣護軍將軍陸法和屯一一以拒之、沈佺期の詩に「西南出一一不與衆山同、陳子昂の詩に「寧知一一路、辛若石尤風」

【破顔】 顔を和けて、少しく笑ふをいふ、五燈會元に「惟迦葉尊者破顔微笑」とあり、白樂天の詩にも「一放狂歌一破顔」

【馬銜】 馬の「クツツ」説文の註に「一一ハ、之ガ行ヲ制スル所以ナリ、金ニ从ヒ行ニ从フ會意文字ナリ」

また海神の名、木華の海賦に「海童遊路、一一當蹊」註に「海童一一皆神名」

【籌ヲ帷幄ノ中ニ運ラス】 (籌策ヲ帷幄) を見よ、

【謀、定マリテ後ニ戰フ】 謀計を決定して、然る後に戦を初むる義、唐書李光弼傳に「光弼用兵、謀定而後戰、能以少覆衆」

【謀、婦人ニ及ブ】 (謀及婦人) 男兒は自ら事を成すべし、婦人に謀り及ぶは漏洩の恐あり、故に之を譏りていふ、左傳桓十五年に「桓公曰、一一一一宜其死也」
【衡、誠ニ懸クルトキハ欺クニ輕重ヲ以テス可カラズ】 (衡誠懸不可欺以輕重) 正直の人は欺くべからざる

に喩ふ、禮記の經解篇に「禮ノ國ヲ正スニ於ケルヤ、猶ホ衡ノ輕重ニ於ケル、繩墨ノ曲直ニ於ケル、規矩ノ方圓ニ於ケルガ如キナリ、故ニ衡誠ニ懸ルトキハ、欺クニ輕重ヲ以テスベカラズ、繩墨誠ニ陳ゾルトキハ、欺クニ曲直ヲ以テスベカラズ、規矩誠ニ設クルハ、欺クニ方圓ヲ以テスベカラズ、君子禮ヲ審カニスレバ、誣ルニ姦詐ヲ以テスベカラズ」
【馬遠】 宋の畫人、世榮の子、家學の妙を得、山水人物花果禽鳥、疏道極めて工に、毛羽燦然、飛鳴生動の態眞に逼る、弟遠亦畫に妙なり、
【馬牛ニシテ襟裾ス】 學識なきものを譏りていふ、唐の韓愈の符讀書城南詩に「人不通古今、馬牛而襟裾」
【波及】 餘波のうるほひ及ぶ義、左傳の僖二十三年に「楚子饗之曰、公子若反晉國、則何以報、不穀對曰、子女玉帛、則君有之、羽毛齒革、則君地生焉、其波及晉國者、君之餘也、其何以報、君」とあり、其餘波、晉國に及ぶ者は、楚國享用の餘剩棄物なりとの意、
【破鏡】 鏡をわる、夫婦の離別の事にいふ、神異經に「昔夫婦相別ルルアリ、鏡ヲ破リ、各、其ノ半ヲ執ル、後チ其ノ妻、人ト通ズ、鏡化シテ鵲トナリ、飛ビテ夫ノ前ニ至ル、後人鏡ヲ鑄ルニ、背ニ鵲ノ形ヲ爲スハ此ヨリ

始マシ、丹鉛總録に、洞山語録を引きて、「一不重照、落花難上枝、また片われ月をいふ、古詩に「何當大刀頭一飛上天」

【博愛】 偏私することなく博く衆をめぐみ愛する義、韓愈の原道に「一仁之謂仁、行而宜之謂義」また國語の周語下の「言仁必及人」の韋昭の註に「博愛於人爲仁」とあり、論語學而篇に「子曰、汎愛衆而親仁」とある汎愛も一と義同じ、新書修政語上に「帝譽曰、徳莫高於博愛人、而政莫高於博利人」

【莫哀】 古の豪壯なる歌曲の名、その詞今は知るべからず、杜甫の短歌行贈王郎司直に「王郎酒酣拔劍斫地歌一我能拔爾抑塞磊落之奇才」明の高啓の詩に「三盃勸君歌一歸時應過黃金臺」

【白衣】 史記儒林傳に「公孫弘以春秋一爲天子三公、一は白丁に同じ、また無位無官の人をいふ、後漢書鄭均傳に「時號爲一尚書」とあるは官職なくして、尙書の祿を食むを以ての故にいふ、

【博依】 詩をいふ、詩は博く物理に依託して作るものなるによりていふ、禮記の學記に「不學一不能安詩」

【白衣宰相】 南史に「永明十年、陶弘景脱朝服、上表辭

【白羽扇】 白き鳥の羽の扇、諸葛亮、司馬懿と、渭濱に戦ふや、一を持して三軍を指揮す、衆軍その進止に随ひぬ、

【白雲郷】 天帝の居をいふ、莊子の天地篇に「乘彼白雲、遊于帝郷」蘇軾の潮州韓文公碑に「公昔騎龍一

【白雲孤飛】 客中親を思ふ故事、望雲を見よ、

【博奕】 博は局戲、奕は圍碁なり、論語陽貨篇に「飽食終日無所用心、難矣哉、不有、一者乎、爲之猶賢乎已」

【白ヲ舉グ】 (舉白) 白は罰杯なり、説苑の善説篇に「魏ノ文侯大夫ト酒ヲ飲ム、公乘不仁ヲシテ、觴政ヲ爲サシム、曰ク、飲ンデ嘯サザル者ハ、浮スルニ太白ヲ以テセヨト、文侯飲ンデ盡ク嘯サズ、公乘不仁白ヲ舉ゲテ

君ニ浮ス、君視テ應ゼズ、侍者曰ク、不仁退ケ、君已ニ醉ヘリト、公乘不仁曰ク、周書ニ曰ク、前車ノ覆ルハ、後車ノ戒ト、蓋シ其ノ危キヲイフ、人臣タル者易カラズ、君タルモ亦易カラズ、今君已ニ令ヲ設ク、令行ハレズシテ可ナランヤト、君曰ク善シト、白ヲ舉ゲテ飲ム、飲ミ畢リテ曰ク、公乘不仁ヲ以テ上客トナセト」觴政とは人に酒を飲すに其の式を正す職なり、轉じて、單に

ハクウ—ハクガ

ハクウ—ハクガ

ハクウ—ハクガ

【白雁】 古今詩話に「北方ノ白雁、秋深クシテ乃チ來レバ、則霜降ル、之ヲ霜信ト謂フ」

【白眼】 睥睨(ニラミツケル)する意、晉書阮籍傳に「籍字ハ嗣宗、禮教ニ拘ハラズ、能ク青一ヲナス、禮俗ノ士ヲ見レバ、一ヲ以テ之ニ對ス、稽喜ノ來ルニ及ビテ即チ籍一ヲナス、喜懽バズシテ退ク、喜ノ弟康之ヲ聞キ、乃チ酒ヲ齎シ、琴ヲ挾ミテ造ル、籍大ニ悦ビ乃チ青眼ヲ見ハス、是レニ由リ、禮法ノ士、之ヲ疾ムコ

【伯夷叔齊】 孤竹君の二子なり、父叔齊を立てんと欲す、父卒するに及び、伯夷曰く父の命なりと、遂に逃る、叔齊も亦逃る、國人その中子を立つ、周の武王殷を伐たんとて西伯の木主を載せて以て行く、一馬を叩へて諫めて曰く、父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ孝といふべけんや、臣を以て君を弑す、仁と謂ふべけんやと、左右之を殺さんと欲す、太公曰く義士なりと、扶けて之を去らしむ、王すてに殷を滅し、天子となり、天下周を宗とす、一之を恥ぢ首陽山に隱る、歌を作りて曰く、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣と、遂に餓死す

【白雨】 清異録に「關中電ヲ謂ヒテ一トイフ」また驟雨をいふ、蘇軾の詩に「一跳珠亂入船」

【魄ヲ奪フ】 (奪魄) 魄は人の精爽なり、精神を喪ふをいふ、左傳に「原叔必有、大咎、天一之」矣

【白屋】 白茅にて屋をふきたる家にて、貧家をいふ、轉じて庶人の稱とす、韓詩外傳に「窮巷一之士、周公所先見者、四十九人」漢書蕭望之傳に「恐非、周公相成王、躬吐握之禮、致一之意、註に「一ハ賤人ノ居ル所、ロナリ」賈島の雪晴晚望の詩に「樵人歸一、寒日下危峰」

【白附】 白き、オビダマ「楚ハ一」を見よ、

【伯牙琴ヲ絶ツ】 (伯牙絶琴) 説苑、列子等に見ゆ、知音を見よ、

【白雁】 古今詩話に「北方ノ白雁、秋深クシテ乃チ來レバ、則霜降ル、之ヲ霜信ト謂フ」

【白眼】 睥睨(ニラミツケル)する意、晉書阮籍傳に「籍字ハ嗣宗、禮教ニ拘ハラズ、能ク青一ヲナス、禮俗ノ士ヲ見レバ、一ヲ以テ之ニ對ス、稽喜ノ來ルニ及ビテ即チ籍一ヲナス、喜懽バズシテ退ク、喜ノ弟康之ヲ聞キ、乃チ酒ヲ齎シ、琴ヲ挾ミテ造ル、籍大ニ悦ビ乃チ青眼ヲ見ハス、是レニ由リ、禮法ノ士、之ヲ疾ムコ

酒杯の意にも用ふ、漢書の班氏敘傳に「諸侍中皆引滿、舉白、談笑大噱」一説に、白は酒杯、罰杯は轉義なりと、

【魄ヲ奪フ】 (奪魄) 魄は人の精爽なり、精神を喪ふをいふ、左傳に「原叔必有、大咎、天一之」矣

【白屋】 白茅にて屋をふきたる家にて、貧家をいふ、轉じて庶人の稱とす、韓詩外傳に「窮巷一之士、周公所先見者、四十九人」漢書蕭望之傳に「恐非、周公相成王、躬吐握之禮、致一之意、註に「一ハ賤人ノ居ル所、ロナリ」賈島の雪晴晚望の詩に「樵人歸一、寒日下危峰」

【白附】 白き、オビダマ「楚ハ一」を見よ、

【伯牙琴ヲ絶ツ】 (伯牙絶琴) 説苑、列子等に見ゆ、知音を見よ、

【伯顔】 元の人、世祖に仕へ中書左丞相に拜す、裁決流るるが如し、省中威服して曰く、眞の宰相なりと、自ら將とし、宋を伐ちて之を降す、累遷して太傅に至り、卒して淮南王に封じ、忠武と諡せらる、元史に「伯顔深略善斷將二十萬衆、若將一人、諸帥仰之如神明」

【白金】 銀なり、説文に「銀ハ一ナリ」爾雅に「一之ヲ銀トイフ、ソノ美ナル者之ヲ鍍トイフ」

【莫逆】 意氣投合して心に逆ふことなき交をいふ、莊子の大宗師篇に「四人相視而笑、莫逆於心、遂相與爲友」

【白居易】 字は樂天、香山居士と號す、その先は太原の人、後ち華州下邳に徙る、大曆七年七月生る、九歳にして聲律を暗識し、敏悟人に絶す、貞元十四年進士に擢んでられ、ついで翰林學士と爲る、事に因りて江州の司馬に貶せらる、その後諸官を歴て會昌の初め、刑部尙書を以て致仕す、大中元年卒す、年七十五、尙書右僕射を贈られ、文輿と諡す、白氏長慶集七十五卷の著あり、

【白魚跳リテ武王ノ舟ニ入ル】 太平記卷十七に見ゆ、史記の周本紀に「武王渡河、中流白魚躍入王舟中、武王曰、天不可及也、」

【白圭】 字は丹徒、魏の政治家、其の著書に「白圭論」あり、

【白華】 菅、白茅束ヌ、夫婦相須ちて用を爲すの義、詩の小雅に「白華菅兮、白茅束兮、之子之遠、俾我獨兮」

【白華】 菅とせば、白茅を以て之を束ぬ、二物至りて微なるも、亦必ず相須ちて用を爲すに、何ぞこの子は遠かりて、我をして獨り居らしむるやと、夫婦の離別を怨みたるなり、

【白圭】 大字をいふ、淵鑑類函一百九十五卷に「顔眞卿請乞御書題放生池碑額表曰、臣今謹據石壁竄大書一本隨表奏進」一解に篆文の一體なりと、

【伯兄】 「オホアニ」伯氏また長兄に同じ、孟子に「郷人長於一歳」

【白圭三復ス】 (三復白圭) 日に三たび白圭の詩を反復吟咏するは、言を謹まんと欲するなり、論語先進に「南容一詠三復、詩の大雅抑の篇に「白圭之玷、尚可磨也、斯言之玷、不可爲也」とあり、玷は音テン、缺なり(南容ハ)を參看せよ、

王簡取以祭、注に「馬融曰ク、魚ハ介鱗ノ物、兵ノ象ナリ、白ハ般ノ正色、王ノ舟ニ入ルハ般ノ命、周ニ歸スルノ象ナリ」この故事によりて敵國の我に歸服する兆とす、

【璞玉、渾金】 璞玉は、玉の未だ琢かざる者、渾金は、金の未だ煉らざる者、人の性質の美にして文飾なきに比す、晋書の山濤の傳に「山濤字ハ巨源、少有器量、介然不群(中略)王戎目濤如「一一」人皆欽其質、莫知名其器」

【白玉盤】 月の異名、李白の詩に「小時不識月、呼作白玉盤」

【白玉樓】 圓機活法に「李長吉將ニ卒セントス、夢ニ人ノ一版書ヲ持スルヲ見ル、曰ク、天上ノ白玉樓成ル君ヲ召シテ記ヲ爲ラシムト、シバラクアリテ氣絶ス」この事、書言故事にも見ゆ、長吉は唐の李賀の字、この故事によりて、文人の死を「一一」中の人となるといふ、

【白魚舟ニ入ル】 前の(白魚跳リテ)を見よ

【白駒ノ隙ヲ過グルガ如シ】 (如白駒之過隙) 人の一生は白駒の馳せ過ぐるを、壁の隙間より「チラリ」と見るが如くに、疾きものなるに喩ふ、莊子の知北遊篇に、

【白圭隣ヲ壑ニス】 壑は低くして水を受くる處なり、白圭といへる人水を治め堤を築きて之を隣國に注ぎ、以て自國の水害を免れたるなり、柳宗元の興州江運記に「白圭壑隣、孟子不與、また孟子告子下篇に「白圭曰、丹之治水也、愈於禹、孟子曰、子過矣、禹之治水、水之道也、是故禹以四海爲壑、今吾子以隣國爲壑、」

【白虹貫日】 (白虹貫日) 史記の鄒陽の上書に「昔者荆軻、慕燕丹之義、白虹貫日」の註に「燕ノ太子丹、秦ニ質タリ、始皇之ヲ遇シテ禮無シ、丹亡ゲテ去ル、故ニ厚ク荆軻ヲ養ヒ、秦王ヲ刺サシム、精誠天ニ感ジテ、白虹之ガ爲メニ日ヲ貫クナリ、又曰ク、白虹ハ兵ノ象、日ハ君ナリ」と、白虹は日傍の氣暈なり、「一一」は、國君兵を破るの兆なり、戰國策に「專諸之刺王僚也、彗星襲天、攝政之刺韓傀也、「一一」

【白黒】 清濁の義に用ふ、漢書薛宣傳に「所、貶退稱道、一一」分明、また王莽傳に「遞相賊賂、「一一」紛然」

【博古圖】 三十卷、宋の大觀中王黼等敕を奉じて撰す、書中收むるところの古器、眞贋雜糅して、辨證疎謬多しと雖も、銘字器形の存在して考古の資とす、べらものなきにあらず、この書具には宣和「一一」といふ、黼

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

ハクク—ハクク

字は將明、開封祥符の人

【白虎通義】(白虎通)を見よ、

【白滾水】「ニエタツタ湯、熱湯また滾湯に同じ、小説に用ふる語、

【藐姑射之山】仙人の棲めりといふ山、莊子逍遙游に「一一一、有神人居焉、肌膚若冰雪、淖約若處子、注に「藐ハ遠ナリ」山海經に「盧其山之南三百八十里、曰姑射之山、無草木、多氷」

【白藏】秋をいふ、爾雅に見ゆ、註に「氣白クシテ收メ藏ス」

【白粲】米を擇みて正白ならしむるをいふ、漢書惠帝紀「鬼薪一一」の字あり、死罪を犯す者は、之をして薪を取り宗廟に給せしむ、故に鬼薪といふ、女の罪人には、米を擇みて顆粒を缺かず端正なる者のみを取らしむ、かくすること三年にして、後に之を殺す

【博山】「カウロ」宋陶穀清異錄に「一一ハ香爐ナリ、海中ノ一一ニ象ル、下盤ニ湯ヲ貯ヘ、潤氣香ヲ薫ス、海水ノ四モニ環ルニ象ル」錦字箋に「長安ノ巧工丁設、九層一一香爐ヲ作り、鏤ムニ奇禽怪獸ヲ以テス、皆自然ニ能ク動ク云云、樂史の太平寰宇記に「華岳三峯アリ、直上數千仞、基廣クシテ峯峻シ、疊秀嶺表ニ迄ル、削成ス

【博山】「カウロ」宋陶穀清異錄に「一一ハ香爐ナリ、海中ノ一一ニ象ル、下盤ニ湯ヲ貯ヘ、潤氣香ヲ薫ス、海水ノ四モニ環ルニ象ル」錦字箋に「長安ノ巧工丁設、九層一一香爐ヲ作り、鏤ムニ奇禽怪獸ヲ以テス、皆自然ニ能ク動ク云云、樂史の太平寰宇記に「華岳三峯アリ、直上數千仞、基廣クシテ峯峻シ、疊秀嶺表ニ迄ル、削成ス

ルガ如キアリ、今ノ博山香爐、形實ニ之ニ象ル」

【白山黑水】長白山と、黒龍江とをいふ、金史世紀に「生女直地、有混同江、長白山、混同江亦號黒龍江、所謂一一一是也」

【伯氏】「いちばん年上の兄なり、下の(一一一ハ)壻」を見よ、

【麥秋】陰曆の四月をいふ、禮記の月令に「是ノ月(孟夏)ヤ麥秋至ル」註に「秋ハ百穀成熟ノ期、此レ時ニ於テハ夏ナリト雖モ、麥ニ於テハ即チ秋ナリ故ニ一一トイフ」白居易の詩に「洛下一一月、江南梅雨時」

【白獸樽】晉書禮志に「正月元會一一一殿庭ニ設ケ、樽蓋上ニ白獸ヲ施シ、若シ能ク直言ヲ獻ズル者アレバ、此ノ樽ヲ發シテ酒ヲ飲マシム」

【麥秀ノ歌】殷の箕子が故の殷の墟を過ぎて作りし歌なり、曰く「麥秀漸漸兮、禾黍油油兮、彼狡童兮、不與我好兮、史記殷紀に見ゆこれより故國の亡滅せしを歎ずるを「麥秀ノ歌」といふ、

【柏舟ノ操】寡婦の節操のすぐれたるを稱す、衛の太子共伯早く死す、その妻共姜義を守る、父母奪ひて之を嫁せんと欲す、共姜乃ち柏舟の詩を作り以て自ら誓ふ、詩は詩經に出づ、

【白氏長慶集】七十一卷、一名白氏文集、唐の白樂天の詩文集なり、その友元稹の序あり、長慶は、穆宗の朝の年號、樂天の詩は平易を旨とす、故に白俗の嘲あれども、平心に論ずれば、中唐以來の一大家たるを失はず、文も亦頗る駢儷に長じ、達意を主とせり、

わが國にては高野山西南院の舊藏本は、唐の會昌四年(仁明天皇承和十一年)の寫本なればその傳來の久しきを知るべし、佐世の目錄には白氏文集七十卷及び白氏長慶集二十九卷を著録せり、

【白日閑過スル莫レ】唐の林寛の少年行に「白日閑過青春不再來」とあり、少年の時は再び來らず、故に光陰を空しく過す勿れとの義、

【伯氏ハ壻ヲ吹キ、仲氏ハ壻ヲ吹ク】(伯氏吹壻、仲氏吹壻)兄弟の「ナカヨキ」をいふ、伯は兄、仲は弟なり、壻は土にて作りたる笛なり、大鶩子の如し、上を鏡にし、底を平にす、六孔あり、篋は竹にて作る、長一尺四寸、圍三寸、七孔あり、一の孔は上に出づ、徑三分、すべて八孔、横に之を吹く、壻篋は、その形異にして、聲音も別なれども、此を合吹するときは善く和調す、以て兄弟の體異なれども、その心相親愛するに喩ふ、詩の何人斯篇に「一一一、一一一、及爾如貫」とあり、如

貫とは兄弟は連屬して離れざるをいふ、

【白氏文集】(白氏長慶集)を見よ、

【白刃】刀の「スキミ」中庸に「一一可昭也」徐幹の法象論に「季路遭亂、正冠結纓、而後死一一之難」

【白刃ヲ冒ス】(冒白刃)敵の陣に勇み入る義、漢書司馬遷傳に「流涕沫血、飲泣張空、冒白刃北首爭死敵」

【白狀】自ら罪狀を懇ふるなり、白は告なり、漢書丙吉傳に「還歸府、見吉一一」

【柏上桑】古今注に「柏上ノ桑者ハ秦氏ノ女、邯鄲ノ人ナリ、名ハ羅敷、桑ヲ柏上ニ探ル、王、臺ニ登リ見テ之ヲ悦ビ、因リテ酒ヲ飲ミ、奪ハント欲ス、羅敷乃チ箏ヲ彈ジ、一一一ノ歌ヲ作ル、羅敷善、蠶桑採桑城南隅、使君從南來、五馬立踟躕、使君謝羅敷、寧可共載不、羅敷前致辭、使君一何愚、使君自有婦、羅敷自有夫、東方千餘騎、夫婿居上頭」

【白沙泥ニ在レバ之ト皆黒シ】(蓬麻中ニ)を見よ、

【柏酒】柏葉酒に同じ、邪氣をはらふといふ、荆楚歲時記に「正月一日、長幼悉ク衣冠ヲ正シ次ヲ以テ拜賀シ、椒柏酒ヲ進メ、桃湯ヲ飲ミ、屠蘇酒、膠牙餠ヲ進ム云云」

【白首北面】才徳は年の老少にはよらぬもの、白髮になりても不才者はなほ人に就き學ぶなり、賈瓊曰、夫

子十五爲人師(夫子は文中子)陳留王孝逸先達之傲者矣(陳留は郡の名その先達たるを以て文中子に傲慢なり)然白首北面豈年ヲ以テセンヤ(師たる者南に面して坐し、弟子北面して師に向ふ、年少者も才徳あれば、人の師となり、年老い頭白き者も、知る所ろなければ、就學す、年齢を以て論ずべきにあらず)

【藐諸孤】(一一一)を見よ。

【莫須有】宋の秦檜、岳飛の罪を誣いて之を殺さんとす、韓世忠檜に詣りて曰く、飛の罪明かならずと、檜曰く、明かならずと雖も、一一一云々と、世忠曰く、一一一の三字は何を以て天下を服せんと、一一一とは、有ルカモ知レヌといふ義なり、世に之を三字獄といふ、詳しくは宋史岳飛傳を見よ。

【白水真人】錢の異稱、漢書に「王莽、錢文ニ金刀アルヲ以テノ故ニ改メテ貨泉トナス、或ハ貨泉ノ字ヲ以テ、一一一トナス」とあり、卯金刀は即ち劉の字にて、漢の氏なり、故に之を改めたるなり。

【白哲】哲は容色の潔白なるをいふ、左傳昭二十六年に「一一一鬢鬚眉」また魏書崔浩傳に「纖妍一一一」哲は折に从ひ白に从ふ、説文に「人色白也」

【白石先生】葛洪神仙傳に「一一一常煮白石爲糧」

傳の「莫大諸侯」の註に「莫大トハ最大ヲイフ、其ノ國ヨリ大ナル者、有ルコト無キヲイフナリ」易經繫辭に「法象莫大乎天地」

【剝啄】客の「コッコツ」と戸を叩く音、またその足音にもいふ、輟耕錄に「門無一一一松影參差」韓愈の一一一行に「剝剝啄啄、有客至門、我不出應、客去而噴」また鳥の木を啄む音にもいふ。

【白癡】癡は説文に「不慧(ばか)也」左傳に「周子有兄不慧、不能辨菽麥、故不可立」の注に「菽麥ハ別チ易シ、故ニ以テ癡者ノ候(しる)ト爲ス、不慧ハ蓋シ世ニ所謂ノ白癡ナリ」

【白晝】「マヒル」漢書賈誼傳に「一一一大都之中」

【伯仲叔季】兄弟の順序なり、伯は長兄、仲はその次、叔は又その次、季は末弟なり、論語微子篇に「周有八士、伯達、伯适、仲突、仲忽、叔夜、叔夏、季隨、季騫」朱註に「或ハ曰ク宣王ノ時ノ人、蓋シ一母四乳シテ八子ヲ生ムナリ」

【伯仲之閒】兄弟の次第に喩へて甚だしき優劣の差なきにいふ、魏の文帝の典論に「傳毅之於班固、伯仲之閒耳」

【爆竹】昔時わが國にて正月十五日に清涼殿の庭にて

因就白石山居、時人故號曰一一一

【白雪】調の高き詩賦をいふ(陽春一一一)を見よ。

【白戰】徒手にて戰ふ義にて、詩人が互に才を闘はしめんとするなり、詩轍に「一一一ハ詩人オヲ闘ハシムルコトニテ歐陽永叔蘇子瞻ナド好ンデセシコトナリ、物ニ體スル語ヲ忌ムトテ、雪ノ詩ナレバ、玉月梨梅、練絮、鷺、鶴、皓、素、銀、鹽、袁、安、東、郭、ナドイフヤウノコトヲ禁ズルナリ云云」圓機活法に「蘇東坡汝陰ニ守タリ、雪ヲ得テ聚星堂ニ會飲ス、客ニ約シテ詩ヲ賦シ歐公ノ體ニ效ヒテ鹽玉鶴鷺等ヲ以テ比ト爲サズ、皓白素鮮等ノ字ヲ使ハズ、ソノ落句ニ云フ汝南先賢有故事、醉翁詩話誰續説、當時號令君聽取、一一一不許持寸鐵」

【搏戰】手にて對ひ戰ふなり、漢書李陵傳に「陵一一一攻之」

【漠然】ぼんやりとして心の空しき貌、淮南子に「聖人内修其本、而不外飾其末、一一一無爲而無不爲也、澹然無治而無不治也」

【藐然】藐は遠なり、及ぶべからざる貌、漢書嚴助傳に「一一一甚愆」

【莫大】大なること此の上なしと云ふ義、漢書の賈誼

行はせられし左義長の火はこれに本づく、荆楚歲時記に「正月一日、雞鳴而起、先於庭前一一一以辟山臊惡鬼」注に「神異經ニ、西方深山中ニ人アリ、ソノ長ケ尺餘、一足、性人ヲ畏レズ、之ヲ犯セバ人ヲシテ寒熱セシム、名ヅケテ山臊トイフ、竹ヲ以テ火中ニ著ケ焔燂聲アレバ、山臊驚懼ス」

【白著】彰明なり「イチシルシ」漢書馮奉世傳に「威功一一一爲世使表」

【白帝城】漢光武の時、公孫述成都に據り、自ら白帝と稱す、白は西方の色なればなり、因りて更に巴郡を名づけて一一一といふ。

【白鳥】鶴又は鷺の如き白羽の鳥をいふ、孟子梁惠王上に「一一一鷺鷥」

また蚊の異名、金樓子に「齊桓公臥柏寢、謂仲父曰、一一一營營、是必餓耳、開碧紗帳、進之、一一一蚊也」

【白田】畑なり、晉書傅玄傳に「白田ノ收、十餘斛ニ至リ、水田數十斛ニ至ル」畠の和字に符合す。

【白頭】馬の額に白毛あるをいふ、詩經秦風車鄰に「有車鄰鄰、有馬一一一後世はこれを的顛といふ、

【薄田】瘠せたる田地、三國志の蜀志諸葛亮傳に「成都有一桑八百株、一一一十五頃」

【幕天席地】 志氣の大いなるをいふ(天ヲ幕トシ)を見

【白徒】 白は空なり、一は軍隊の素養なき者、漢書鄒陽傳に「驅一之衆」の注に「素ヨリ軍旅ニ非ザリシ者ヲイフ、猶ホ白丁トイフガ如シ」と、邦語に事に經驗なき者を「シロウト」といふは一の義か、管子七法にも「以教卒練士擊敵衆一」とあり、

【白頭翁】 草の名、和名「オキナグサ」また「シラガ」の老人、劉廷芝の詩に「寄言全盛紅顔子、應憐半死一、此翁白頭眞可憐、伊昔紅顏美少年」また「ヒヨドリ」の一名、白頭鳥ともいふ、

【白頭新】 如ク、傾蓋故ノ如シ(白頭如新傾蓋如故)白頭如新とは幼時より白髪の人となるまで交りても、意気合はざるときは、昨今相識りたる人の如く冷淡なるをいふ、傾蓋如故とは、忽ち相逢ひ蓋を傾けて語るも、能く心を知り得れば故舊の友人の如く、親密となるをいふ、史記鄒陽の傳に出づ、下に「何則知與不知也」とあり(説苑に二の如字、皆而の字に作る古通用す(傾蓋)を見よ)

【白頭吟】 西京雜記に「司馬相如茂陵ノ女子ヲ聘シ、妾ト爲サント欲ス、卓文君一、一ヲ作り、以テ自ら絶

浣花老翁無爲君、酒滿眼酣(酣は買なり、蜀人竹筒もて酒を買ふ、筒上に、繩を穿つ、の眼あり、酒滿ちて筒眼に近づくと酒滴るといふ)與「奴白飯、馬青藜」と、藜は獨の俗字、馬にはまじむる草なり

【白賁】 賁は飾なり、白色のかざり、易經賁卦に「一一无咎」とあるは、質素なれば、過失の咎なきをいふ、

【白眉】 兄弟中の卓越する者をいふ、轉じて群を抜き、衆に超ゆるものをも稱す、蜀志に「馬良字季常、襄陽宜城人、兄弟五人、字皆用常字、並有才名、鄉里爲之諺曰、馬氏五常、一最良、良眉中有白毛、故以稱之」とあるに本づく、五常とは、兄弟五人、皆字に常の字を用ふ、故にいふ、良は、昭烈帝の時、侍中となる、

【薄氷ヲ履ムガ如シ】 (如履薄氷)春氷を涉るといふに同じ、極めて危きに喩ふ、詩經小雅小旻に「戰戰兢兢、如臨深淵、如」一「戰戰は恐るるなり、兢兢は戒しむるなり、深淵に臨むが如しとは、墜らんことを恐るるなり、薄氷を履むが如しとは、陥らんことを恐るるなり、

【白傳】 白樂天をいふ、唐書の傳に據るに、樂天は開成の初に、太子少傅となりたり、故にいふ、

【拍浮】 水をおよぐ、樂善錄に「少年恃其善一、解衣

ツ、皚如山上雪、皎若雲間月、良人有兩意、故與相訣別、ト、マタイフ、凄凄重凄凄、嫁娶不須啼、願得一人心、白頭不相離、ト、相如之ニ感ジテ乃チ止ム

【白波】 盜賊の異稱なり、後漢書に「靈帝中平元年ニ、張角反ス、皇甫嵩之ヲ討ズ、角ノ餘賊、西河ノ白波谷ニ在リ、時俗白波賊ト號ス」とあるに本づく、シラナミ

【藐藐】 人の教を受けて心に留めざる貌、詩經大雅抑篇に「誨爾諄諄、聽我一一」

【漠漠水田白鷺飛】 唐の王維の積雨輞川莊作(七律、唐詩別裁集卷ノ十三ニ出ヅ)の前聯の句、下に「陰陰夏木嘯黃鸝」の句あり、この句もと李嘉祐の五言の句に、漠漠陰陰の二疊字を冠したるのみなれどもこの疊字あるがために水田の廣き狀、夏木の深きありさまを寫して宛然目に在り、

【白白地】 「アキラカ」である、明白、また顯明の義、語錄又は小説等に用ふる俗語、

【白髮三千丈】 憂愁の餘、白髮の長ささまを誇張していへるなり、李白の照鏡見白髮詩に「一一一一、緣愁如箇長、不知明鏡裏、何處得秋霜」

【白飯青藜】 人に招かれて、己の僕や馬まで「モチナシ」を受けたるを辱「一一之與」といふ、杜詩に「肯訪

赴水」

【莫府】 莫は暮に通ず、次條を見よ、

【幕府】 漢書の李廣傳の註に「晉灼曰ク、衛青匈奴ヲ征シテ大ニ克ツ、就チ大將軍ニ幕中ニ拜セラル、故ニ幕府トイフ、史記の註に「大將軍ノ府ヲ幕府トイフ、軍ノ至ル所口幕ヲ以テ將軍ノ居處ヲ構へ、其ノ中ニ在リテ事ヲ治ムルガ故ナリ」

【薄福】 「フシアハセ」薄命に同じ、北史李諧傳に「諧子庶死、見夢于其妻曰、我一一、託劉氏爲女」

【博物志】 十卷、舊本晉の張華撰と題す、實は原本は散佚して傳はらず、後人華の遺文を探りて編を成し、又他説を雜取して之に附益せしなり、地理畧地・山水・山水總論より典禮考・樂考・服飾考・器名考・物名考・異聞・史補・雜説に至るまで凡數十目に分ち記せり、和版あり、

【博物新編】 三集、英國の醫士合信著す、一集には、地氣論・熱論・水質論・光論・電氣論を載せ、二集には、天文略論・地球論を載せ、三集には鳥獸略論を載す、

【博物君子】 博識の人をいふ、左傳昭元年に「晉公聞子產之言、曰一一也、史記の吳世家に「嗚呼又何其閔

覽、一一也」

ハクヒ—ハクブ

1005

【博文約禮】 論語の雍也篇に「子曰君子博學於文約

之以禮亦可」以弗畔矣」とあり、朱註に「君子ハ學ハソ

ノ博カラシムコトヲ欲ス、故ニ文ニ於テ考ヘザルナシ

守ハソノ要ナランコトヲ欲ス、故ニソノ動クヤ必ズ

禮ヲ以テス、此ノ如クナルキハ、以テ道ニ背カザルベ

シ、また同書子罕篇に「博我以文待我以禮」

【白描】 「スミガキ」の畫、遊生八牋に「設色(ふのぐ)をつ

ける)一各臻其極」と、水墨ともいふ。

【白璧ノ微瑕】 すべて事、大體完美にして些しの疵あ

るに喩ふ、梁の蕭統の陶淵明集序に「一惟在開

情一賦」史記龜策傳に「黃金有疵、白玉有瑕」

【白鳳】 晏殊の詩に「閑思北海銀宮畔、誰駕丹山白鳳凰

蘇軾の詩に「鵝毛垂馬駿、自佐騎」

【白鳳ヲ吐ク】 (吐白鳳)圓機活法に「前漢ノ揚雄、甘泉

賦ヲ作りテ成ル、白鳳ヲ吐クト夢ム」

【嚴霖】 (一一)を見よ。

【白麻】 詔書をいふ、翰林志に「唐ノ中書、黃白二麻ヲ

用ヒ、綸命ヲ爲ル、ソノ後チ翰林專ラ一掌リ、中

書獨リ黃麻ヲ用フ」唐會要に「凡ソ敕書、德音、立后、建

儲、大誅討、三公宰相ヲ拜免シ、將ヲ命ズルニハ、並ニ一

一ヲ用フ」と、白居易の詩「一紙上書、德音、京畿盡放

は蟲を捕へ食す。

【博浪沙】 地名、河南陽武縣の南に在り、韓人張良五世

韓に相たるを以て、韓亡びて後ち爲めに仇を報ぜん

とす、たましく秦の始皇東遊して一一中に至る、良

乃ち力士をして鐵槌を操りて始皇を狙撃せしむ、誤

りて副車の中つ、始皇驚き、求むれども得ず、天下に令

して大に索む、詳しくは史記を見よ。

博浪沙 陳 孚

一擊車中膽氣豪 祖龍社稷已驚搖 如何十二金人

外 猶有民間鐵未銷

陳孚は元人なり、十二金人は、始皇が天下の兵器を銷

して金人十二をつくりたること、史記に見ゆ、その典

を用ひたるなり。

【伯樂既没、驥ハタ馬クニ程ラン】 (伯樂既歿、今驥

將馬程今)伯樂は古の善く馬を相せし人なり、驥、驥伯

樂に遇はざれば其の才力を程り量る所るなきを云

ふ、賢相明君に遇はざれば、其の智能を施すこと能は

ざるの意、この語楚辭に出づ。

今年税

【薄命】 不幸の義、フシアハセ、列子に「北宮子厚於德

薄於命、汝厚於命、薄於德、汝は南宮子を斥す、北史に

「時人傷其」王昌齡の長信秋詞に「眞成一久尋

思、夢見君王覺後疑、蘇軾の「佳人」の詩に「自古佳

人多命薄」

【白面ノ書生】 年若くして事務に經驗なき者をいふ、

晉書に見ゆ、高陽王隆の語、また宋書沈慶之傳に「欲

伐國而與一謀之、事何由濟」

【莫邪】 昔の名劍の名、干將を見よ。

【怕痒樹】 百日紅の一名「サルスベリ」その枝の「マタ

を、クスグル」ときは各枝皆うごく、故に名づくといふ、

痒一に癢に作る「百日紅」を見よ。

【白榆】 「ニレ」の木、古樂府に「天上何所有、歷歷種一

一(榆)を參看せよ。

【伯樂】 古の善く馬を御せし人、莊子音義に「一姓ハ

孫、名ハ陽、善ク馬ヲ馭ス」石氏星經に「一ハ天ノ星

ノ名、天馬ヲ典ルコトヲ主トス、孫陽善ク馭ス、故ニ

以テ名ト爲ス」韓愈の雜說四に「世有一、然後有千

里馬、曹子建の求自試表に「驥驥長鳴、一昭其能」

【伯勞】 鳥の名、モズ、鳴に同じ、形、ツグミより小に、首

【伯樂ノ一顧】 賢人の知遇を辱うするに喩ふ、戰國策

に「蘇代曰ク、客伯樂ニ謂フモノアリ、曰ク、臣駿馬アリ

賣ラント欲ス、市ニ立ツコト三旦ナレドモ人與ニ言

フナシ、願クハ之ヲ一顧セヨ、請フ一朝ノ費ヲ獻ゼン

ト、伯樂乃チ之ヲ旋視シ、去リテ之ヲ顧ミル、一旦ニ

シテ馬價十倍ス(千里ノ馬ハ)を參看せよ。

【白樂天】 (白居易)を見よ。

【白樂天牡丹詩】 帝城春欲暮、喧喧車馬度、共道杜

丹時、相隨買花去、家家習爲俗、人人迷不悟、

有一田舍翁、偶來買花處、低頭獨長歎、此歎無人

悟、一叢深花色、十戶中人賦。

【博覽】 博く書を読み古今の事理を明むる義、漢書成

帝紀の贊に「一古今、容受直辭、公卿稱職、奏議可

述、晉書阮籍傳に「一羣籍、尤好莊老」

【柏梁體】 七言にして毎句韻を押しする詩の體をいふ、

三輔黃圖に「武帝嘗置酒其上(柏梁臺の上なり)詔群

臣和詩、詩は古詩源に出づ、滄浪詩話に「漢武帝與群

臣共賦、七言、毎句用韻、後人謂此體爲一」

【柏梁臺】 漢の武帝の築さし臺の名、柏を以て梁とな

すによりて名づく、漢書武帝紀に「元鼎二年春起一

一

【白龍 魚化豫且ニ制セラルル】(白龍化被豫且制) 貴人も微行をなすときは、賤者の爲めに辱めらるる義、化一に服に作る、說苑に「吳王欲從民飲、伍子胥諫曰、不可、昔白龍下、清冷之淵、化爲魚、漁者豫且射中、其目、白龍上訴、天帝、天帝曰、當是時、若安置、而形、白龍對曰、我下、清冷之淵、化爲魚、天帝曰、魚、固人所射也、若是、豫且何罪、夫白龍、天帝貴畜也、豫且、宋國賤臣也、白龍不化、豫且不射、今棄萬乘之位、而從布衣之士、飲酒、臣恐其有豫且之患矣、王乃止、」莊子外物篇に「神龍失水、陸居爲螻蟻所制」とあるも意同じ、

【白蓮社】(「一一」を見よ、)
 【白鹿洞書院】 南唐の時の學館にして朱熹之を再興せり、錦字箋に「廬山五老峰ノ下、唐李渤、兄涉トコノ洞中ニ隱ル、嘗テ一ノ白鹿ヲ養フ、故ニ名ヅク」玉海に「唐李渤與兄涉、俱隱白鹿洞、後爲江州刺史、即洞創臺榭、南唐昇元中、因洞建學館、置田以給諸生、學者大集、以李善道爲洞主、掌教授、」宋史の朱熹傳に「熹除知南康軍、訪白鹿洞書院遺址、奏復其舊、爲學規俾守之、」
 【白雲霜ト爲ル】 露が凝りて霜となるをいふ、詩經秦風兼葭に「兼葭蒼蒼、白露爲霜、」注に「兼葭ハ蘆ナリ」

楚辭に「皇天平分四時兮、竊獨悲此凜秋、」白雲降、百草今、奄離披此梧楸、
 【橋榭侏儒】 橋榭は梁上の短柱、マスカタナリ、橋一名は桁、榭一名は梁、禮記の雜記の注に「橋榭ニ山ヲ刻ムヲ山節トイフ、侏儒一に株橋に作る、一名は祝、ウツバリの上の短き柱、ウダチ、ツカバシラ、韓愈の進學解に「一一」欄閣店樓、
 【破瓜之年】 女子十六歳の稱とし、一説には男子六十歳の稱とす、孫綽情人碧玉歌に「碧玉破瓜時、郎爲情顛倒、感君不羞根、廻身就郎抱、」とあるは前の例なり、事文類聚に「呂洞賓、謁張洎、留詩云、功成當在破瓜年、治年六十四卒」とあるは、後の例なり、隨園詩話に「破瓜、或解以爲月事初來、如瓜破則見、紅潮者、非也、蓋瓜縱橫破之、成「二」八字」とありされば破瓜は八八の義にて、男女を論ぜず、十六歳と六十四歳とに通じて稱す可きが如し、
 【葩經】 詩經の異稱、韓愈の進學解に「詩正而葩」とあるに本づく、怡情小品に「載在「一一」可考、」
 【灞橋ニ柳ヲ折ルル】 人と離別するをいふ、三輔黃圖に「灞橋在長安東、跨水作橋、漢人送客至此、折柳贈別、」行添井井の棧雲峽雨日記にも「辰牌抵灞橋、古昔

長安送行者、至此折柳爲別、今猶存、老柳數株、其續栽者、亦鬱鬱可愛、河底皆白沙、水行其上、如鳴環、珮、古人云、詩思在灞橋、爐背、蓋不誣也」とあり、灞水は陝西省西安府藍田縣より出て北に折れて咸寧縣に至り、渭水に合す、羅鄴の鶯の詩に「何處離人不堪聽、灞橋斜日鼻垂楊、」

【灞橋ノ詩思】 全唐詩話に「相國鄭綯詩ヲ善クヌモヒト曰ク、相國近ゴロ新詩アリヤ否ヤト、對ヘテ曰ク、詩思在灞橋、風雪中、驢子背上、此何以得之、」綯字は蘊武、昭宗の乾寧の初に拜す、前條を參看せよ、
 【婆娑】 舞ふ貌、詩經陳風東門之枌に「子仲之子、一一其下、」また、フミマハル貌、杜甫の詩に「方知不才者、生長漫一一」
 【修、初服之一一】 また衣の揚る貌、張衡の思立賦に「修、初服之一一」また安坐なり、黃庭經に「金鈴朱帶坐一一」
 【紆餘一一】 また琴の聲の委曲なる貌、嵇康の琴賦に「紆餘一一」
 【破碎】 物をうち碎く義、史記義縱傳に「義縱自河內遷爲南陽太守、至郡、遂案寧氏、盡一一其家、」
 【禱祭】 「イクサノマツリ、師旅止まる所にて軍神をまつるなり、禮記王制に「禱於所征之地、」詩經大雅皇矣に「是類是禱、類は軍の止まるるところにて行ふ室内

の祭の名、
 【巴山】 隋の縣名、荊州清江郡に屬す、今の湖北宜昌府長陽縣の西に在り、
 【破産】 産業を失ふをいふ、李白の過下邳、圯上詩に「子房未虎嘯、一一不爲家、」また李白の詩に「昨日一一、今朝空、」
 【把子】 矢の「マ」明李昱菴の射經に「的、ハ箭ノ侯、世俗通ジテ呼ンデ一ト爲ス、」把一に靶に作る、同じ、
 【馬史】 司馬遷の史記をいふ、隋書に「遠覽一一班書、」班書とは、班固の漢書をいふ、
 【馬矢】 馬糞なり、廣韻に「屎、モト矢ニ作ル」とあり、左傳文公十八年に「埋、之、馬、矢、之、中、」
 【馬耳東風】 聖賢の教も、耳に入らざるに喩ふ、蘇軾の詩に「青山自是絶世、無人誰與爲容、說向市朝公子、何殊馬耳東風、」李白の詩に「世人聞之皆掉頭、有如東風吹馬耳、」
 【馬氏文通】 十卷、清の丹徒の人、馬建忠撰す、文通とは文章の通則といふ意にて、西洋の文典に倣ひて作る、その引据するところの例は、大抵周秦漢の經傳より撰し、編纂頗る整齊なり、
 【波臣】 鮭の異名、莊子の外物篇に「莊周顧視、車轍中、

有、鮒魚焉、周問之曰、鮒魚來、子何爲者邪、對曰、我東海波臣也、の註に「波臣ハ猶ホ水官トイフガ如シ」

【婆心】(老婆心)を見よ、

【巴人調】(巴調)を見よ、

【初アラザルナシ、克ク終リアルコト鮮シ】(靡不有初、鮮克有終)詩經大雅蕩に出づ、上に「天生烝民、其命匪誥」とあり、誥は信なり、天の衆民を生ずるや、その命信すべからざるものあり、蓋しその命を降すの初め不善あることなし、而るに人能く善道を以て自ら終ること少し是を以てこの大亂を致せりとの意、

【始有ル者ハ必ズ終有リ】(有始者必有終)揚子法言に「有生者必有死、有始者必有終、自然之道也」とあり、

【司馬光の註に「天常ニ春ニシテ、秋ナラズ、日常ニ朝ニシテ、暮レザレバ、則チ人長生シテ死セズ」】

【始メテ備ヲ作ル人、後ナカラシカ】太平記卷二十八に見ゆ、孟子の梁惠王上に「仲尼曰、始作俑者、其無後乎、爲其象人而用之也」とあるに本づく、俑は葬に從ふ木偶人なり、古の葬る者は、草を束ねて人をつくり以て從衛となす、之を芻靈といふ、略、人の形に似たるのみ、而るに中古之に易ふるに俑を以てす、面目はなはだ人に似たり、故に孔子はその不仁を惡んで、そ

の必ず後なからんと言はれしなり、

【霸者】孟子公孫丑上に「カヲ以テ仁ヲ假ル者ハ霸タリ、徳ヲ以テ仁ヲ行フ者ハ王タリ」註に「カハ土地甲兵ノカヲイフ、仁ヲ假ルトハ、本是ノ心無クシテ、其ノ事ヲ借り以テ功トスル者ナリ、齊桓、晉文ノ若キ是ナリ、云云」わが國にては源頼朝、徳川家康の如きこれなり、また孟子盡心上に「霸者之民、驩虞如(霸)を見よ、

【馬上殘夢ヲ續グ】朝早く出て立ち、馬上にてうとうとと眠りながら行くをいふ(早行)を見よ、

【馬上ニ之ヲ得タリ】(馬上得之)兵馬の力にて天下を得たる義(寧ロ馬上)を見よ、

【波句】法華音義に「此云惡者、謂常有惡意成就惡法也」名義集に「一ハ訛ナリ、正ニハ波卑夜トイフ、釋迦出世ノ時ノ魔王ノ名ナリ、秦ニハ殺者ト言フ、常ニ人ノ慧命ヲ斷セント欲ス、故ニ亦惡中ノ惡ト名ヅク」

【馬食】箸を用ひず、直ちに口を食器につけて食ふこと馬の如くするをいふ、史記范雎傳に「坐須賈於堂下、置莖豆其前、令兩鯨徒夾而一之、莖は莖を一寸ばかりに切りたるもの(スサ)」

【馬軾】明人、字は敬瞻、正統の間、天文生より漏刻博士に官す、軾書を讀み、氣節を負ひ尤も詩畫に工な

り、修撰岳正と友とし善し、天順の初、正は曹石の中つるところとなり、欽州に左遷せらる、舊知親友敢て別を餞する者なし、軾獨り詩を爲りて之を送る、その畫郭熙を宗とし、高古にして法あり、

【芭蕉】暖國産の草、莖の圓、尺に及び虚軟なること芋莖の如く、皮重りて之を包む、高五七尺、葉長大にして丈に及び幅一二尺、頂上に大なる一花を下垂す、實は食ふべし、廣志に「一曰芭蕉、或曰甘蕉、異物志に「一莖如芋、取鑊煮之、如絲可紡績爲綿、俗僧懷素本傳に「素貧ニシテ紙ノ書ス可キナシ、常ニ故里ニ於テ一萬餘株ヲ種エ以テ揮灑ニ供ス、ソノ所ヲ號シテ綠天ト曰フ」

夏日雜題 陸 游

午夢初回理舊琴、竹爐重炷海南沈、茅簷三日蕭蕭雨、又展芭蕉數尺心、

【皤然】「マシロ」なる貌、主に頭髮の白さに用ふ、皤皤とも連用す、南史范縝傳に「縝年二十九、髮白」また權徳輿の渭水詩に「呂叟年八十一、持釣鉤」

【馬前】騎馬の前なり、多く君主又は貴人に用ふ、禮記に「君車將、駕、則僕執策立於一、左傳に「楚師將去、宋、申犀稽首於王之」

ハセウーハダハ

【馬足ノ塵】馬の足にて蹴たつる塵をいふ、費昶の句に「飄飄一」とあり(朝ニハ富兒ノ門ヲ)を見よ、

【坡陀】爾雅釋地に「一不平」とあり、玉篇には險阻也」とあり、

【波蕩】心、波の如くにゆれ揺くをいふ、劉琨の表に「齊人一、無所繫心」

【播蕩】「サスラヒ」て所を失ふなり、播は適なり、遷なり、播越に同じ、左傳に「夏氏之亂、成公一」

【旗ヲ奉ル】(奉旗)奉は音ケン、拔き取るなり、李陵の答蘇武書に「然猶斬將、一追、奔逐北」

【旌ヲ萬里ノ外ニ懸ク】(懸旌萬里之外)縣は懸に同じ、遠くの外國に出征する義、漢書陳湯傳に「遂陷康居、屠五重城、塞、歙侯之旗、斬郵支之首、縣旌萬里之外、揚威昆山之西」

【肌香シク體輕シ】(仙姿玉質)を見よ、

【膚凝脂ノ如シ】(膚如凝脂)膚の白く美しきをいふ、凝脂は脂寒くして凝れるものなり、詩經衛風碩人に「手如柔荑、一、領如蝤蠐、齒如瓠犀、螺首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」すべて容貌の美なるを言ふ、

【茅の始めて生ずるを萋といふ、柔にして白きをいふ、

領は頸なり、蝤蠐は木蟲の白くして長者、瓠犀は瓠

中の子(ヒサゴノサネ)方正潔白にして比次整齊なるなり、蝶は蟬の如くにして小に、その額廣くして方正なり、蛾は蠶蛾なり、情は口輔の美なるなり、盼は黑白の分明なるなり、

【膚撓マズ】(不膚撓)太平記卷二十二に見ゆ、孟子公孫丑上に「北宮黝之養勇也、不膚撓、不目逃」とあり、膚撓とは、肌膚刺されて撓み屈するをいふ、目逃とは、目刺されて睛を轉じ、逃避するをいふ、

【破膽】驚さ怖るるなり、韓非子存韓に「趙民一、荆人狐疑(膽ヲ破ル)を見よ、

【馬端臨】字は貴與、江西樂平の人、廷鸞の子、年十九、心を學問に潛め、博く羣書を極む、蔭を以て承事郎に補す、咸淳中進士第一なり、宋亡、郷里に隱居教授す、遠近之を師とす、人と言論するに聲響として倦まず、著すところ大學集傳・多識錄・文獻通考等あり、世に行はる

【蜂】格物論に「蜜蜂三種アリ、皆一日ニ兩衙ス、一種林木ノ上ニ在リテ房ヲ作ル、一種人家ニ在リテ窠ヲ作ル、ソノ蜂甚ダ小ニシテ微黃蜜皆濃美ナリ、一種ハ黑色、房ヲ作リテ巖崖高峻ノ處ニ在リ、人跡ノ到ル可キニアラズ、ソノ蜜ヲ石蜜トイフ、土蜂ハ即チ穴居ス

ル者、最モ大ナリ、亦蠶ト名ツク、皆蠶尾、能ク人ヲ螫ス、二種ハ細腰、蝶ト名ツク、又蒲葦ト名ツク、又蠟蟻ト曰フ、ソノ負フ所ヲ觀ルニ、但蟻蛤ノミナラズ或ハ蟻子、蝶シテ之ヲ斃シ、因リテ一小卵ヲソノ上ニ産シ、ソノ卵ノ化シテ成ルヲ俟チ、漸ク負フ所ノ蟲ヲ食フ、久ウシテ乃チ寢大ニ、翼ヲ生ジテ飛ビ去ル、ソノ聲類我類我ト云フ者ニ似タリ、關尹子に「聖人師、蜂立、君臣、師、蜘蛛、立、網罟、揚萬里の蜂兒、詩に「蜜蜂不食人閉倉、玉露爲酒、花爲糧、作蜜不忙採花忙、蜜成猶帶百花香」

【把持】手に「シカ」と持つこと、白虎通に「霸ハ迫ナリ、把ナリ、諸侯ヲ迫脅シテ、其ノ政ヲ一ニス」

【八佾】佾は舞列なり、天子は八、諸侯は六、大夫は四、士は二、佾毎に人數は其の佾の數の如し、或はいふ、すべて佾毎に八人なりと、論語八佾篇に「八佾舞於庭」

【八音】金石絲竹匏土革木なり、金を鐘とし、石を磬とし、絲を絃とし、竹を管とし、匏を笙とし、土を埙とし、革を鼓とし、木を祝敵とす、次條を參看せよ、また法界次第に、如來所出の音聲に、八種あることを説く、一、極好音、二、柔輭音、三、和適音、四、尊慧音、五、不女音、六、不誤音、七、深遠音、八、不竭音是れなり

【八音ヲ遏密ス】(遏密八音)遏は絶、密は靜なり、天子の喪の爲めに、音樂を絶ち止めて靜かならしむるをいふ、書經舜典に「三載四海一」ことあり、堯の徳を思慕して、此の如くせしなり、八音の解は前條を見よ、

【八葉宰相】唐書蕭瑀傳贊に「自瑀逮、凡一、名徳相望、與唐盛衰、世家之盛、古未有也」

【八埏】埏は地の極まるところ、ハチ一は國土の、カギリ、淮南子に「九州之外乃有、一、亦八千里、正韻に「埏ハ地ノ際ナリ、一ハ地ノ八際ナリ」

【八殫】淮南子地形訓に「九州ノ外、乃チ八殫アリ、八殫ノ外、而シテ八紘アリ、八紘ノ外、乃チ八極アリ」註に「殫ハ猶ホ遠ノゴトキナリ」

【蜂ヲ師トス】(師蜂)張仲才文始真經に「聖人、立、君臣、師、蜘蛛、立、網罟、師、拱鼠、制、禮、師、戰、蠅、制、兵、蠅は蟻なり、

【蜂ヲ擬ル】(擬蜂)誰カ知ラン僞言を見よ、

【八垓】垓は界なり、國のはて、一、は、八方の國のはて、王安石の句に「書成、不得斷國論、但此空語傳」

【八議】唐律に「議親、議故、議賢、議能、議功、議貴、議勳、議實」とあり、これ元來周禮の秋官の八辟に本づくもの

にて、この八の中にあたる者、罪あるときは、常人は罰をうくるも、この八の中にあたる者は之を議して宥免せらるることあるをいふ、潘翰譜駿河大納言の條に「八議のうちその二つを重ねさせ給ふ御身」とある、二つは親と貴とを斥す、

一解に議は誹謗、罵詈して侮蔑を加ふるなりと、周禮小司寇に「以八辟、麗、邦法、附、刑罰、一曰議親之辟、二曰議故之辟、三曰議賢之辟、四曰議能之辟、五曰議功之辟、六曰議貴之辟、七曰議勳之辟、八曰議實之辟、鄭註に「麗ハ附ナリ、親ハ宗室罪アレバ先ヅ請フナリ、故ハ舊知ナリ、功ハ大勳アル者ナリ、云云」

【八功德水】彌陀如來の報土に在る池中の水に八の功德あり、一は澄淨二は、清冷、三は甘美、四は輕輭、五は潤澤、六は安和、七は除患八は増益なり、无量壽經に「一一、湛然盈滿、清淨香潔、味甘露」

【破竹ノ勢】(破竹勢)積威の加はる所ろは力を勞せずして容易に敵を破るをいふ、晉書杜預の傳に「今兵威已振、譬如破竹、數節之後、皆迎刃而解」

【八關齋戒】關は八惡を禁閉して諸の罪過を生ぜしめざるをいふ、一に入支齋法ともいふ、八戒とは、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、不坐高廣大牀(高

一尺六寸闊四尺長八寸を過ぐる牀に坐せず不著華鬘瓔珞不習歌舞妓樂是れなり菩薩處胎經に「八關齋是諸佛父母」

【八元八愷】 史記の五帝本紀に「昔高陽氏ニ才子八人アリ、世其ノ利ヲ得タリ、之ヲ八愷ト謂フ、高辛氏ニ才子八人アリ、世ニ之ヲ八元トイフ、此ノ十六族ノ者ハ、世其ノ美ヲ濟シ、其ノ名ヲ隕サズ」註に「愷ハ和ラグナリ、元ハ善ナリ、元愷各親族アリ故ニ族ト稱スルナリ、濟ハ成スナリ」又左傳の文十八年には、八元の名を伯翳・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季狸・八愷の名を蒼舒・隕・檮・大臨・危・庭堅・仲容・叔達とせり、

【八又手】 事文類聚に「唐ノ温庭筠才思艷麗小賦ニ工ナリ（中略）凡ソ八タビ手ヲ又シテ八韻成ル」とあり、この事は拙言にも見ゆ、轉じて詩才の敏なるを稱するに用ふ、温八又ともいふ、温庭筠を見よ、

【八十ノ三歳兒】 俚諺なり、老人の心は再び幼兒の如くなるをいふ、漢書文帝紀に「七八十翁嘻戲如小兒」とあるに同じ、

【八儒】 韓非子顯學に「孔子之後、儒分爲八」とあり、一とは子張氏・子思氏・顔氏・孟氏・漆雕氏・仲良氏・孫氏・樂正氏なり、

【八不淨物】 僧家にて貯ふべからざる八種の財物をいふ、即ち田宅を持し、草木を種植し、稻穀を刈り貯へ、奴婢雞犬を畜へ、藏を建てて財寶を貯へ、什具を備へ、屏障を畫彩し、鐵銅の釜鍋を用ひて自ら煮爨するにいふ、大藏法數に「佛在世ノ時、諸弟子ヲ誡メ、乞食自活シ少欲知足ニシテ此等ノ物ヲ畜フルヲ許サズ云云」末法燈明記に「彼時比丘漸貪畜一」云云

【破陣樂】 (七徳ノ舞)を見よ、

【八王日】 佛教の説、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の日をいふ、人間の事を司る諸神の交代する日なりといふ、大藏法數に「春秋一者、是天地陰陽交代日也、此之八日、帝釋輔臣案行天下、比校善惡、定生注死、増減罪福、樂善者若能避禁持齋致生善處也」

【閱】 文體の名(題跋)を見よ、

【閱】 伐は功を積むなり、閱は經歷なり、貴族を稱す、漢書の車千秋傳に「無他材能術學、又無伐閱功勞」とあり、伐は閱に同じ、史記の功臣年表に「明其等曰、伐、積日曰閱」

【髮ヲ斷チ身ヲ文ル】 (斷髮)を見よ、

ハチフーバツカ

【蓮】 (荷花)を見よ、

【八代】 東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋をいふ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「文起八代衰、道濟天下之溺」また五帝三王の世をいふ又は八世といふと小學紺珠の註に見ゆ、

【八大地獄】 一に等活、二に黑繩、三に衆合、四に叫喚、五に大叫喚、六に焦熱、七に大焦熱、八に無間、また八熱地獄ともいふ、

【八道】 朝鮮國は、京畿・江原・咸鏡・平安・黃海・忠清・慶尙・全羅の八道に分つ、

【八陣圖】 諸葛孔明の作りし陣形の名、三國志蜀志諸葛亮傳に「亮長于巧思、損益連弩木牛流馬皆出其意、推演兵法、作一、咸得其要云」また水經注に「諸葛亮所造一、東跨故壘、皆累細石爲之、自壘西去、聚石八行、行相去二丈、因曰八陣」(吳子ガ八陣)を參看せよ、

【八方天】 佛教の説、東方帝釋天、東北伊舍那天、南方閻魔天、東南火天、西方水天、西南羅刹天、北方毘沙門天、西北風天、

【八疊】 疊は南夷の名、一は爾雅の疏に「天竺、咳首、焦僂、跛踵、穿胸、儻耳、狗軛、旁脊」また書經旅獒に「通于九夷」一解に八とは多きの稱、一に非るなりと、

【伐柯】 柯は斧の柄なり、斧の柄を伐る者は、その柯を伐るために執れるところの柄の寸法を標準として之を伐るなり、以て人の則るべきものは目前に在りと、の意、詩經幽風伐柯篇に「伐柯伐柯、其則不遠」また國語に「先人有言伐柯者、其則不遠、今君王不納其忘、會稽之恥乎」

また右の伐柯篇に「伐柯如何、匪斧不克、取妻如何、匪媒不得」とあるによりて、婚姻の媒人(ナカウド)を伐柯といふ、

【拔河】 「ツナヒキ」の戲をいふ、唐封演聞見錄に「古、之を牽鉤襄といふ、漢の風俗、常に正月望日を以て之を爲す、相傳ふ、楚將に吳を伐たんとす、以て戰を教ふるを爲す、古は篋纜を用ふ、今の民は則ち大麻繩の長さ四五十丈なるを以て、兩頭に小索數百條を繋ぎ前に掛け、二朋を分ち兩勾齊しく挽く、大組の中に當りて、大旗を立て界となし、震鼓叫口すれば便ち相牽引す、却く者を以て輸と爲す、名つけて一といふと、錦字箋に景龍文館記を引きて「唐ノ中宗景龍四年、清明ノ日、梨園ニ幸シ、三品以上ニ命ジ、拋球拔河セシム、僕射韋巨源、少師唐休璟、唐一に康に作る、衰老シテ組ニ隨ヒテ地ニ踣レ與ツト能ハズ、上及ビ皇后

妃主臨ミ觀テ大ニ笑フ

【八戒】 優婆塞信士ト譯ス(優婆夷信女ト譯ス)が月の六齋日(八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日)に持ツ戒法をいふ、即ち一に不殺生戒、二に不偷盜戒、三に不邪淫戒、四に不妄語戒、五に不飲酒戒(以上五戒ニ同ジ)六に不坐高廣大牀、戒七に不著花鬘瓔珞、戒八に不習歌舞戲樂、戒これなり、一は具には八關齋戒といふ、關は禁なり、八罪を禁閉して犯さしめざる義なり(八關齋)を見よ。

【廿日草】 わが國にて牡丹の異名とす、詞花集に、關白

前太政大臣の歌、咲きしより散り果つるまで見し程に、花のもとにて二十日經にけり、白樂天の牡丹芳と題する詩に「花開花落二十日、一城之人皆如狂」とあるに本づく。

【八家文】 (唐宋—)を見よ、

【髮冠ヲ衝ク】 (髮衝冠) (怒髮冠)を見よ、

【發揮】 易の乾卦文言に「六爻—旁通情也」の疏に「發越揮散旁通萬物之情也」と、情義を通じて發明する所ろあらしむるなり、李德裕の易州候臺記に「博采舊史—新意」

【發鳩ノ山ニ精衛ト申ス人】 太平記卷三十四に見ゆ、

されども誤れり、精衛は鳥の名なり人にあらず(精衛海ヲ填ム)を見よ。

【八旗兵】 清の兵制、太祖の時、始めて八旗の制を立つ(滿洲八旗、蒙古八旗、漢軍八旗ノ三種アリ、實ハ二十四旗ナリ)每三百人に一佐領を置き、五佐領に一參領を置き、五參領に一都統を置く、即ち七千五百人を領す、各都統に一旗を授く、旗は各、その色を異にす、鑲黃旗、正白旗、鑲白旗、正藍旗、正黃旗、正紅旗、鑲紅旗、鑲藍旗、是れなり。

【八區】 八方の場所なり、天下の義晉書の樂歌に「勁格、宇宙、化動—」

【八苦】 涅槃經に「一ニ生苦、二ニ老苦、三ニ病苦、四ニ死苦、五ニ愛別離苦、六ニ怨憎會苦、七ニ求不得苦、八ニ五陰盛苦」

【拔羣】 「ムレ」を抜きて「スグレタル」義、絕羣、超羣、冠羣、等皆同じ、梁書劉顯傳に「聰明特達出類—」

【八荒】 八方の荒忽極遠の地なり、賈誼の過秦論に「併吞八荒之心」また八方なり、天下といふ如し、杜詩に「—開壽域」

【八紘】 類書纂要に「八紘ハ八方ノ綱維ナリ」天地を維きて之が綱紀となるの義なり、淮南子の地形訓に「九

州之外、乃有、八殯、八殯之外、而有、八紘、八紘之外、乃有、八極

【八卦】 卦一音、クワイ、易の「ウラナヒ」の算木の面にあ

らはれたる兆象をいふ、乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の八をいふ、伏羲氏造りしのところ、易の繫辭に「四象生—」

三乾 三兌 三離 三震

三巽 三坎 三艮 三坤

【八景】 瀟湘—は今の湖南省に在り、夢溪筆談に「度

支員外郎宋迪、工畫尤善爲平遠山水、其得意者、有平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村夕陽、謂之—、好事者多傳之、瀟湘—を參看せよ、わが近江八景、金澤八景などはこれに擬へて定めたるなり。

【八股】 明代以後今日まで舉業に應ずる者の用ふる文章の體の名なり、對句を用ひて八股に説き廣ぐるに

よりて名づく、顧炎武の日知錄に「經義ノ文、流俗之ヲ—ト謂フ、蓋シ成化以後ニ始マル、股トハ對偶ノ名ナリ、天順以前ハ、經義ノ文ハ、傳註ヲ敷衍スルニ過ギズ、或ハ對、或ハ散、初ヨリ定格ナシ、其ノ單句ノ題モ亦甚ダ少シ、成化二十三年ノ會試、樂天者保天下ノ文、

起講先ヅ三句ヲ提ゲ、即チ樂天ヲ講ズ、四股、過接四句、復保天下ヲ講ズ、四股、復四句ヲ收メテ大結ヲ作ス、弘治九年ノ會試、責難於君、謂之恭ノ文、亦然リ、每四股中、一反一正、一虛一實、一淺一深、ソノ兩對題、扇扇格ヲ立テ、則チ每扇ノ中、各、四股アリ、次第スルノ法、亦復之ノ如シ、故ニ今人相傳ヘテ之ヲ—ト謂フ、

【跋胡】 進退に窮する義、詩經の豳風狼跋篇に「狼跋、其胡、載、其尾、胡、是、領、下、の、た、れ、肉、なり、注に「老狼ニ胡アリ、進メバ則チソノ胡ヲ躡ミ、退カバ則チ其ノ尾ニ踏ク、進退自由ヲ得ザルヲイフ」説文に「胡ハ牛、領垂也」

【跋扈】 權勢を恣にして上を陵ぐ貌、後漢書梁冀傳の註に「扈ハ離ナリ、水未ダ至ラザルニ先ダテテ離ヲ作リ、魚ノ入ルヲ候フ、水退キ小魚獨リ留ル、大ナル者ハ離ヲ跳躐シテ出ヅルヲ以テ、驕橫上ヲ犯スニ喻フ」通鑑五十三の後漢質帝紀に「帝梁冀ヲ目シテ曰ク、此レ跋扈將軍也」とありて、註に「跋扈ハ猶ホ疆梁ノ如シ、按ズルニ爾雅ニ山阜ニシテ大、扈跋スル者、蹊隧ニ由ラズシテ行ク、言フ心ハ疆梁ノ人、正路ニ由ラズ、山阜ニシテ大ナレバ、跋ンデ之ヲ踰エント欲ス、故ニ跋扈トイフ」

【八穀】黍稷稻粱禾麻菽麥をいふ。

【跋扈將軍】暴風の異名、南部烟花記に「隋ノ煬帝、舟ヲ泛ブ、忽チ陰風頗ル緊シ、歎ジテ曰ク、此ノ風——」

【發作】風雨などの起るをいふ、韓愈の南海神廟碑に「盲風怪雨、——無節」

【八彩重瞳】春秋元命包に、堯の眉は、八彩、舜の目は、重瞳とあり、劉峻相經序に「八彩ノ光眉、四瞳ノ麗目、斯レ實ニ天時ノ特達、聖人ノ符表ナリ」

【八相】佛教にて應身の如來、世閉に出づるに八種の相を現すをいふ、祖庭事苑に「——受胎、二降生、三處宮、四出家、五成佛、六降魔、七說法、八涅槃、一解に、住胎嬰孩、愛欲樂苦、行降魔成道轉法輪の——をいふ、

【拔山ノ力】山をも抜く大力をいふ、項羽垓下に敗れし時、歌ひて曰く「力拔、山兮氣蓋、世、時不利兮、不逝兮、雖不逝兮、可奈何、虞兮虞兮奈若何」史記項羽本紀に見ゆ。

【八宗】古く我が國に弘通せし教門なり、即ち俱舍、成實、律法相三論華嚴天台真言これなり、この中華嚴までの六宗は奈良朝に起り、天台真言の二宗は平安

朝に起る、

【八史經籍志】三十卷、漢書隋書、唐書新舊以下宋遼金元明の八史中の藝文志若くは經籍志を集めて合刻せしもの、目錄の學を研究するには極めて便なり、

【發軔】發車に同じ、軔(テコ)は車を止むる物、將に行かんとするときは之を發す、故に始めて啓行するを、發軔といふ、楚辭の離騷に「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃」とあり、蒼梧は舜を葬りし處なり、縣圃は神山なり、崑崙の上に在り、轉じてすべて事の端を發するに用ふ、沈德潛の唐宋八大家文讀本の序に「既因門弟子請、出、向時讀本、粗加點定、俾讀者視為入門軌途、志——也」

【帕首】帕は布にて額をまくもの、ハチマキ、幪に同じ、二儀實錄に「禹會塗山之夕、大風雷震、有甲步卒千餘人、其不被甲者、以紅絹帕、抹其額、自此遂爲軍容之服、韓文の送鄭尚書序に「——袴鞞」とあり、また同人の元和聖德詩に「以錦纏股、以紅——」とあり、帕の字音ハのときは「ハラオビ」

【八駭】(周ノ穆王ノ)を見よ、

【發蹤指示】史記蕭相國世家に「夫獵、追殺獸兔者、狗也、——者、人也」と、按ずるに、漢書には「蹤を繼に作

る、顔師古曰く「繼ヲ解キテ狗ヲ放ツヲイフ」指示とは獸の所在を指示するをいふ、説文を按ずるに「蹤字なし、古は皆繼を以て蹤となす、

【發燭】「ツケギ」をいふ、輟耕錄に「杭人松木ヲ削リテ、小片トナス、其ノ薄キコト紙ノ如シ、硫黃ヲ鎔シテ木片ノ頂ニ塗ルコト分許、名ヅケテ發燭トイヒ、又燂見トイフ、蓋シ以テ火ヲ發シ、及ビ燭燈ノ用ニ代フルナ

【拔萃】拔は特起なり、萃は聚なり、衆中より特に抜き出づるなり、孟子公孫丑に「出於其類、拔乎其萃」とあるに本づく、韓文の與崔杼書に「出群——」

【八政】書經の洪範に「三八政、一曰食、二曰貨、三曰祀、四曰司空、五曰司徒、六曰司寇、七曰賓、八曰師」とあり、食貨は民の生を養ふ所、祭祀は本に報ずる所以、司空は土を掌りて其の居を安んじ、司徒は教を掌りて其の性を成す、司寇は禁を掌りて其の姦を治め、賓は諸侯遠人を禮し、往來交際する所以、師は殘を除き暴を禁ずる所以なり、

【伐性之斧】女色の人心を蕩してその性命を害ふに喩ふ、枚乘の七發に「皓齒蛾眉命、曰「——」と、また呂氏春秋本性に「出則以車入則以輦、務以自佚、命之曰

招懸之機、肥肉厚酒、務以相強、命之曰「——」腸之食、靡曼皓齒、鄭衛之音、務以自樂、命之曰「伐性之斧、三患者富貴之所致也」

【發夕】夕は猶ほ宿の如し、宿る所ろの舍を離るるをいふ、詩經齊風に「齊子——」一解に、發は朝なりと、

【椽棟】農夫の雨具なり、管子に「身服——唐韻に「——蓑、雨衣也」

【八節】一年中の氣候の變り目八つあるなり、立春春分立夏夏至立秋秋分立冬冬至これなり、史記律書の「八正之氣」の注に「八正者八節」とあり、圓機活法に「立春、條風至、春分明庶風至、立夏、清明風至、夏至、景風至、立秋、涼風至、秋分、閭闔風至、立冬、不周風至、冬至、廣莫風至」

【末節】(末節)を見よ、

【跋涉】詩經の邶風載馳に「大夫跋涉、我心則憂」の註に「草行ヲ跋トイヒ、水行ヲ涉トイフ」とあり、——は行路の艱難なるをいふ、左傳の襄二十八年に「——山川、蒙犯霜露」

【跋前疐後】(前ヲ跋ミ)また(跋)を見よ、

【八體】圓機活法に「秦ノ書ニ——アリ」二曰ク、大篆、三曰ク、小篆、四曰ク、刻符、五曰ク、蟲書、五

ニ曰ク、摹印、六ニ曰ク、署書、七ニ曰ク、爰書、八ニ曰ク、隸書

【拔提河】西域記卷六拘尸那揭羅國の下に「城西北三四里、波阿持多伐底河、唐ニ無勝ト言フ、舊譯ニ阿利羅拔提河トイフハ訛ナリ」西岸不遠、至沙羅林、其樹類櫛、而皮青白、葉甚光潤、四樹特高、如來寂滅之所也とあり。

【拔擢】衆中より抜き出して用ふる義、漢書孔光傳に「今復一備内朝臣」

【八達】晉書の光逸傳に「胡毋輔之與謝鯤、阮放、畢卓、羊曼、桓彝、阮孚、散髮裸袒、閉室酣飲、已累日、逸將排戶入、守者不聽、逸便于戶外、脫衣露頭于狗竇中、窺之而大叫、輔之驚曰、他人決不能爾、必我孟祖也、遽呼入、遂與飲、不捨晝夜、時人謂之「一」孟祖は逸の字、宋の范質(魯公)の曉從子文に「南朝稱「一」、千古穢青史」とあるは、これをいふなり。

【跋蹇】進退に窮する義、跋胡を見よ。

【跋地倚天】(地ヲ跋キ)を見よ。

【八秩】年八十をいふ(一秩)を見よ。

【八音】(八音)を見よ。

【八珍】八の珍珠なり、正字通に「食ノ美ナル者ヲ珍

トイフ」周禮天官膳夫の「凡王之饋、珍用八物」の註に「淳熬、淳母、炮豚、炮脾、膾珍、漬熬、肝膏也」また陸佃曰く「珍用八物、牛羊、麋、鹿、麇、家、狗、狼ナリ」張蘊古の大寶箴に「羅八珍於前、所食不過適口」また張九韶の群書拾唾に「後世八珍則曰、龍肝、鳳髓、兔胎、鯉尾、鵝炙、猩唇、熊掌、酥酪」また酥酪の代りに豹蹄を入る説もあり。

【發擿】人の罪をあばき出す義、漢書趙廣漢傳に「其發姦、穢伏如神」

【發動】振ひ起る義、莊子天運篇に「人固有戸居而龍見、雷聲而淵默、一一如天地者乎」

【八斗ノ才】(八斗才)才思の富贍なるをいふ、南史に「謝靈運云、天下才、共有「一石」、子建獨得「八斗」、我得「一斗」、自古及今、同用「一斗」、奇才博敏、安有繼之、子建は曹植の字なり、李商隱の詩に「宓妃愁坐芝田館、用盡陳王「一斗」」

【發發】疾き貌、詩經小雅蓼莪に「飄風「一」」箋に「寒クシテ疾キナリ」

【八法】(八風)を見よ。

【伐冰之家】卿大夫以上の家を稱す、卿大夫以上は、其の喪祭に冰を用ふるによりていふ、大學に「伐冰之家

ルガ故ナリトモイヒ、又八體ノ後ニ於テ此ノ方ヲ分ツガ故ナリトモイフ、ソノ説マタ同ジカラズ、又佩鱗集ニハ、斂、八ノ字ノ如クニシテ偃波ノ文アレバナリトモ見エタリ」

【發憤】憤を發して道を求むるなり、奮發すること、論語述而篇に「子曰(中略)其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾」

【伐木丁丁山更幽】杜甫の題張氏隱居といふ七律中の第二句なり、唐詩別裁集卷の十三に出づ、丁丁は伐木の聲なり、伐木丁丁は、詩經小雅に出づ、

【拔本塞原】本源にさかのぼりて正しく處置する義、左傳昭九年に「伯父若裂冠毀冕、見「一」、專弁、謀主、雖戎狄、其何有、余一人、原は源に同じ、

【發明】開發し彰明する義、文選の宋玉の風賦に「一、耳目、寧體便人」

【發蒙】たやすき義なり、漢書の淮南王安の傳に「丞相弘ヲ説イテ之ヲ下サンコト、蒙ヲ發ク如キ耳」の註に「物上ノ蒙おほひヲ發去(とりのける)スルガ如シ、直チニ其ノ易キニ取ルナリ」史記汲鄭傳にも「至如説、丞相弘、如發蒙振落耳」とあり、弘は公孫弘なり、

【撥刺】弓を十分に張りたる貌、文選張衡の思玄賦に

不畜牛羊」

【八風】佛地絶論に「一利、二衰、三毀、四譽、五稱、六譏、七苦、八樂、コノ八法ハ世間ノ愛スルトコロ、憎ムトコロニシテ能ク人心ヲ扇動ス、之ヲ名ヅケテ風トナス、苟モ心ニ主アリテ正法ニ安住シ、愛憎ノ爲メニ惑亂セラレザレバ、即チ「一」モ動スコト能ハズ」一に八法ともいふ、

また八方の風なり、淮南子地形訓に「何謂八風、東北曰炎風、東方曰條風、東南曰景風、南方曰巨風、西南曰涼風、西方曰飂風、西北曰麗風、北方曰寒風」(八節)を參看せよ、

【八分】書の一體なり、書斷に「上谷ノ王次中ノ作、八分篆法、二分隸文」とあり、同文通考に「書苑ニイフ、李陽

氷ガ説ニ、秦ノ始皇ノ時、上谷ノ王次仲、八分ノ書ヲ製スト見エ、郭忠恕ガ説ニ、小篆散シテ八分生ジ、八分破レテ隸書出ヅト見エタレバ、此ノ體ハ李斯小篆ノ後、程邈ガ隸書ノ先ニ始リシナルベシ、サラバ秦ノ代ヨリ始レリトイフベシヤ、シカハアレド水經ノ註ヲ見レバ、秦ノ王次仲ガ作レル所ハ隸書ニシテ八分ノ書ニハアラズ、此ノ體ハ前漢ノ末ニヤ起リヌラン、又八分ト名ヅクルモ、或ハ八分ノ篆、二分ノ隸ヲ取

【鷲】威弧之一一兮射驪嶽之封狐一撥一本に抜に作る、

【撥刺】魚の飛び跳ねる貌、杜甫の詩に「船尾跳魚一

一鳴」次條に同じ、

【鰓刺】「ビチビチ」と魚の跳る聲なり、李白詩に「双鯉呀

呷鱗鬣振、一銀盤欲飛去」一に跋に作る、同じ

【撥亂反正】亂世を治め、正道に復するなり、公羊傳哀

十四年に「撥亂世反諸正、莫近於春秋」撥は治なり、

除なり、また漢書高祖紀に「帝起細微、撥亂世、反之

正平、定天下」

【巴調】巴人の調、田舎調といふ如く詩句の拙きとい

ふ、陳基の題玉山艸堂詩に「竹枝已聽巴人調、桂樹仍

聞楚客歌、俚調、俗調、下調皆同じ、

【破天荒】初めて人才の輻起するをいふ、事類全書に

「唐ノ荊州、每解舉人、多ク名ヲ成サズ、號シテ天荒ト

イフ、劉蛻舍人荊州ノ解ヲ以テ及第スルニ至リテ、破

天荒トナス」轉じて前人未發の事を率先して爲し得

たるをいふ、

【鳩】禽經に「拙者莫如鳩、不能爲巢、古語に「鶴巧而

危、鳩拙而安」鶴は「ミンサザイ」巢を作るに巧なるに

よりに巧婦鳥ともいふ、方言に「鳩ハ蜀之ヲ拙鳥トイ

フ善ク巢ヲ營マズ、鵲巢ヲ占メテ之ニ居ル」詩經召南

に「維鵲有巢、維鳩居之」坤雅に「鷦鳩ハ陰レバ則チ其

匹ヲ屏逐シ、晴ルレバ則チ之ヲ呼ブ、語ニ曰ク「天將

ニ雨フラントスレバ鳩婦ヲ逐フ」(布穀)を見よ、

【鳩】鳩の屬、イハバト陸佃いふ、鳩ハ性合ヲ喜ブ一名

雪衣、蘇軾の詩に「記得金籠放雪衣」正字通に「唐鄭復

禮言、波斯船上、多養鴿、鴿能飛行數千里、放一隻、至

家以爲平安信」(飛奴)を參看せよ、

【巴東】郡名、晉隋は梁州に屬し、南宋は荊州に屬す、今

の四川夔州府奉節縣の東北、また縣名、隋は梁州巴東

郡に屬し、唐は山南道歸州に屬す、今の湖北宜昌府巴

東縣の西北、また宋元明の巴東縣は共に歸州に屬し、

今の湖北宜昌府巴東縣治これなり、

【馬頭】「ミナト」なり、埠に同じ「ハトバ」俗に碼頭に作

る、天香樓偶得に「都會ノ處之ヲ一トイフ地ノ水陸

衝要ニ當ルヲ以テ蓋シ商旅ノ聚集スル所、馬ヲ擧ゲ

以テ車船ヲ繫シ且ツ一ヲ擧ゲ以テ馬ノ全體ヲ繫ス

ルナリ、

【馬頭米囊花ノ歌】艱難を経て目的の處に達したる

「ヨロコビ」をいふ、三體詩に載する張籍の詩に「行過

險棧、出褒斜、出盡平川、似到家、無限客愁今日散、馬

頭初見米囊花」とあるに本づく、詩意米囊花を見るに

【花ヲ鋪キ細トナス】(鋪花爲細)學士許慎親友と花圃

中に宴し、落花を聚めて鋪き坐して曰く、吾自ら花圃

あり、何ぞ坐具を消ひんと、天寶遺事に見ゆ、

【花ヲ鬪ハス】(鬪花)天寶遺事に「長安ノ士女、春時花

ヲ鬪ハシ、戴挿シ、奇花ノ多キ者ヲ以テ勝ト爲ス、皆千

金ヲ用ヒ、名花ヲ市ヒ、中庭ニ植エ、以テ春時ノ鬪ニ

備フ、

【花ヲ呑ミ酒ニ臥ス】(呑花臥酒)花を賞し酒を愛する

ことの甚しきにいふ、雲仙雜記に「虞松方、春以謂握

月擔、風且留、後日、呑花臥酒、不可過時、

【花ヲ吹キ柳ヲ撃ク】(吹花撃柳)春の暴風をいふ、遜

齋閑覽に「河朔ノ地、春時ニ大風多シ、塵ヲ飛バシ、不

ヲ拔キ、惡ヲ作ス、三日ニシテ方ニ止ム以テ左右ニ訪

フ、對ヘテ曰ク、名ツケテ花ヲ吹キ柳ヲ撃クト爲ス、草

木百穀皆之レニ藉ル、韻府に「河朔春時疾風數日、一作

三日乃止、曰「一一一風」

【花ニ傍ヒ柳ニ隨フ】(傍花隨柳)書言故事に「時令ヲ

彼スルヲ傍花隨柳トイフ」程明道の詩に「雲淡風輕

近午天、一一一過前川、時人不識予心樂、將謂偷

閑學少年、

【花之君子】蓮の異名、周茂叔の愛蓮說に「菊花之隱逸

よりに蜀を離れて故郷に近づきし歡を鼓したるな

り、米囊花は罌粟(ケシ)なり、夏初に莖の高サ三四尺

となり、葉は互生し「アザミ」に似て、刺なく、白みあり、

花は四瓣にして二は大に、二は小なり、色は紅白紫等

あり、また一種八重なるは美なること牡丹の如し、中

に罌の形の如きものあり、上に菊紋の蓋あり、葉罌を

めぐる、罌の中に粟の如き子滿つ、阿片を作るべし、こ

の詩、津阪孝綽の絶句類選には西歸出斜谷と題し、雍

陶の作とす、陶は蜀の成都の人、

【鳩ノ杖】(鳩杖)を見よ、

【花】正字通に「草木ノ葩ナリ」歐陽修花品序に「洛陽ノ

人花ヲ稱シテ某花某花トイフ、牡丹ニ至リテハ則チ

名イハズ、直チニ花トイフ」花は俗字なり、また華に通

用す、後漢書李膺傳に「草迎歲而發花」曹植の

句に「朱華冒綠池」白氏文集十三春興の詩に「花下忘

歸因美景、樽前勸醉是春風、また同じく春夜の詩に

「背燭共憐深夜月、踏花同惜少年春」二十四番を見よ、

【鼻ヲ掩フ】(掩鼻)誰カ知ラン僞言を見よ、

【鼻ヲ驗シテ殺賊ノ多少ヲ表ス】舊唐書羅士信傳に

「士信逐北、每殺一人、輒割其鼻而懷之、及還、則驗鼻

以表殺賊之多少也」

者也、牡丹花之富貴者也、蓮花之君子者也

【馬乳】 葡萄の異名(葡萄)を見よ、

【齒ハ瓠犀ノ如シ】 (齒如瓠犀)瓠は「ユフガホ」ヒサゴ、齒ならびの美しさ義、膚、凝脂を見よ、

【馬班】 班馬に同じ、司馬遷と班固となり、後漢書班固傳論に「司馬遷班固父子、其言史官、載籍之作、大義粲然著矣、議者咸稱二子有良史之才、司馬遷の史記を著し、班固の漢書を著ししをいふ、また後漢の馬援と班超とを併稱してもいふ、この二人は並に功を邊陲に立てたるに由る、

【法印】 佛法を世に行ひて印象する義、法華經に「我此

一、爲欲利益世間、我が國にて僧位の稱(僧正

ニ相當シ、法眼ノ上ニ在リ)とするはこの義に本づく、

【乏ラ承ク】 (承乏)を見よ、

【法界】 佛法の區域なり、金剛經新注に「一混然」

【馬伏波】 (馬援)を見よ、

【乏月】 四時纂要に「四月之ヲ一トイフ、冬穀既ニ盡

キ、夏麥未ダ登ラズ、宜シク乏絶ヲ賑シ、飢窮ヲ救フ

ベシ」

【法言】 (揚子一)を見よ、

【法眼】 佛法にて悟道せし義、金剛經の注に「聞、法自

悟名一トわが國にて僧位の稱とするは、この義に本づく、

【法顯】 名義集に「姓ハ龔、宋(六朝)ノ平陽ノ武陽ノ人

ナリ、常ニ經律ノ舛缺ヲ翫ンデ、志ヲ誓ヒ尋求ス、晉ノ

安帝ノ隆安三年歲次己亥ニ於テ、印度ニ游ビ三十餘

國ヲ歴テ義熙元年歲次乙巳ニ海ニ汎ビテ還リ、佛國

記一卷ヲ著シ、楊都ニシテ經ヲ譯ス、年八十六寂す、

【法故】 法則故事なり、禮記月令に「輔職文章、必以

一、李觀の袁州學記に「殿堂門廡、黝堊丹漆、舉以

一、

【法語之言】 嚴正に説き論す言なり、論語子罕に「一

一、能無從乎、改之爲貴、法語は人の敬み憚る所

ろ、故に必ず之に従へども、改めざるときは、面從に

して益なし、故に改むるを貴ぶとなり、

【法藏】 經藏に同じ、一切經を納めたる藏をいふ、

【法相宗】 萬法の性相を究め明かす宗なる故に名づ

く、さればこの宗の學をなすを性相學をなすといふ、

又唯識論によりて萬法唯識の理を明かすによりて唯

識宗とも名づく、支那にては玄奘之を傳へ、その弟子

慈恩之を大成せり、奈良の興福寺は藤原氏の建立に

て一トなり

【法師】 僧をいふ、法華文句に「法トハ軌則ナリ、師ト

ハ訓匠ナリ、師妙法ニ於テ自行成就シ、又能ク妙法ヲ

以テ他ヲ訓導ス、故ニ一ト稱ス」十住婆沙論に「應ニ

四法ヲ行ズルヲ一ト名ヅク、一ニハ廣博多學ニシ

テ能ク一切ノ言辭章句ヲ持ス、二ニハ決定シテ善ク

世間出世間ノ諸法、生滅ノ相ヲ知ル、三ニハ禪定智ヲ

得テ諸ノ經法ニ於テ、隨順シテ諍フコトナシ、四ニハ

増サズ損セズシテ所説ノ如ク行ズ、また法華經に「常

修梵行、皆爲一トニ

【法常】 唐の高僧、鄭氏、襄陽の人、法を馬祖に嗣ぐ、開

成四年九月十九日寂す、年八十八、

また宋の畫僧、牧溪と號す、畫史會要に「龍虎猿鶴山水

人物ヲ畫クニ皆筆ニ隨ヒテ墨ヲ點シテ之ヲ成ス、意

思簡當、粧飾ヲ費サズ、但麤惡ニシテ古法ナシ、誠ニ雅

玩ニ非ズ」とあり、性英爽にして、酒を嗜む、寒暑風雨に

も常に酔ひ、酔へば即ち熟寢し、覺ひれば即ち朗吟す

【法則】 「キンク」ノリとす、べき「サダメ」周禮大宰に「一

一以馭其官

【破釜沈船】 (船ヲ沈メ)を見よ、

【法帖】 筆蹟の法則とす、べき「帖子をいふ、一譜系に

「此歷代一之祖」

【法度】 法則制度の義、書經に「敬、戒無虞、罔失一トニ

管子に「一者、萬民之儀表也」

【法燈】 正法の迷執を破すること、恰も燈光の暗中を

燭すが如し、さてその燈燭も、油薪を要する如く、教經

を傳へて世の迷を照すべきなり、康熙字典に「釋書以

燈喻法、有傳燈錄、劉孝綽の栖隱寺碑に「欲使一ト

永傳、勝因長久、轉じて一宗の高僧をもいふ、徒然草

に「宗の一ト」とあり、

【馬舞之災】 火災をいふ、晉書の藝術傳に「黃平、索統

ニ問ヒテ曰ク、我レ昨夜舍中ノ馬舞數十人、馬ニ向ヒ

テ手ヲ拍ツト夢ミル、此レ何ノ祥ゾヤト、統曰ク、馬

ハ火ナリ、舞フハ火起ルト爲スナリ、馬ニ向ヒテ手ヲ

拍ツハ、火ヲ救フ人ナリト、平未ダ歸ラズ而シテ火起

【法螺】 寶螺とも書く、和訓「ホラ」貝の名、形「バイ」に似

て甚だ大なり、殼は黃白にして淡紫の虎斑あり、海中

に産じ、肉は食ふべし、古は陣中に用ひて進退を示す、

又佛事にも用ふ、眞俗佛事編に「法事ニ一ト吹クハ

何ノ爲メソ答ヘテ曰ク、佛ノ說法ノ音聲ノ標識ナリ、

大悲經に「呼、召、一切諸天善神、求、寶螺手、法華經に

「吹、大、一、擊、大法鼓、演、大法義、表、大乘法雄猛、

【法律】法度に同じ、陸倕の石關銘に「正六樂、治五禮、改章程、創法律、莊子徐無鬼に「一之土廣治、淮南子主術訓に「一一度量者、人主之所以執下」

【蠅】格物論に「蠅ハ好んでソノ足ヲ交フ、絞繩ノ象アリ、故ニ以テ名ヅクトイフ、ソノ聲ハ翼ニ在リソノ糞ハ善ク物ヲ敗ル、玉ト雖モ免カレズ、所謂蠅糞玉ヲ點ストイフハ是レナリ、或ハ水ニ墜チテ溺死セントスルモ、以テ灰中ニ置クハ復活ク、蒼蠅ハ夏の初陽地に集りて飛ぶ、色蒼黒にして大さ四分許、聲高し、青蠅は、青緑にして光り、聲高し、糞上にあつまる、歐陽修の憎蒼蠅賦に「尤忌赤頭、號爲景跡云、また詩經の青蠅は、小人の讒を刺りたるなり、曰く「營營青蠅、止于樊、愷悌君子、無信讒言、(朝蠅)(落筆)を見よ、馬癖」馬ずきのクセ、東坡集に「杜預有、左傳癖、王濟有、一王福時、譽兒癖、晉書杜預傳に「王濟馬ヲ相スルヲ解シ、又甚ダ之ヲ愛ス、和嶠頗ル聚斂ス、預常ニ稱ス、濟ニ一アリ、嶠ニ錢癖アリト」

【齒亡舌存ス】(齒墜舌)を見よ、

【班】位または列の義、左傳文六年に「班在、九人」注に「班ハ位ナリ、朝班は朝廷にて百官の整列する位、同班は同等の位、末班下班は卑下なる位をいふ、

【翻雲覆雨】人情の反覆定りなきに喩ふ、杜甫の貧交行に「翻手作雲覆手雨、紛紛輕薄何須數、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土」

【范曄】字は蔚宗、劉宋順陽の人、少より學を好み文を善くす、文帝元嘉二十二年反を謀りて誅に伏す、年四十八、著すところ後漢書九十卷あり、

【呼援】呼は道に違ひて叛き去るなり、援は引なり、攀援の義、一は此を含めて彼を取るをいふ、詩經の大雅に「無然一、無然歆羨」

【樊於期ハ荆軻ニ首ヲ借ス】十訓抄第六に見ゆ、史記の荆軻傳に「燕ノ太子丹、秦ニ質タリ、秦王政禮セズ、怒リテ亡歸ス、秦ヲ怨ンデ之ニ報ゼント欲ス、秦ノ將軍樊於期、罪ヲ得テ亡ゲテ燕ニ之ヲ、丹受ケテ之ヲ含ス、丹、衛人荆軻ノ賢ヲ聞キ、軻ヲ遣ラント欲ス、軻樊將軍ノ首及ビ督亢ノ地圖ヲ得テ以テ秦ニ獻ゼント請フ、丹於期ヲ殺スニ忍ビズ、軻自ラ意ヲ以テ之ニ諷シテ曰ク、願クハ將軍ノ首ヲ得テ以テ秦王ニ獻ゼバ、必ズ

【翻案】古人の詩文の作意を、翻していひ替ふるをいふ、例へば、杜甫の重陽の詩に「明年此會知誰健、醉取茱萸子細看」とあるを、劉浚が詩に「不用茱萸子細看、管取明年各強健」と作れるが如し

【班位】「クラキ」晉書に「諸侯恃恩、各爭一、班位」

【範圍】「カタ」に入る義、易の繫辭上傳に「範圍天地之化、而不過」の本義に「範ハ、金ヲ鑄ルノ模(いかだ)アルガ如シ、範圍ハ、匡郭ナリ、天地ノ化、无窮ニシテ、而シテ聖人之ガ範圍ヲ爲クリテ、中道ヲ過ゴサシメズ」

【盤盥】「タラヒ」の類、盥は柄に水を通はす道ありて水を盛りて物に注ぐ器「ハンザフ」一は儀禮既夕の字面

【蠻夷】「エビス」をいふ(四夷)を見よ、

【班衣之戲】高士傳に「老萊子、孝奉二親、行年七十、作嬰兒戲、身著五色斑爛之衣」とあるに本づき、老親の心を慰め孝養する義とす、

【槃盥】槃は盤に同じ、物を盛る器、また浴器、盥は飯器、また酒をも入る、轉じては古代の法戒の書の名、黃帝の史官孔甲の作る所ろの銘凡二十六篇を、槃盥の中に書し、朝夕見て戒とせる者、漢書田蚡傳に「蚡辯有喜ビテ臣ヲ見シ、臣左手ニ其ノ袖ヲ把リ、右手ニ其ノ臂ヲ摠サバ、則チ將軍ノ仇報ジテ燕ノ恥雪ガレント、於期慨然トシテ遂ニ自ラ刎ヌ」

【挽歌】挽は引くなり、葬る時に柩の車の縛を執る者の歌なり、搜神記に「一者、葬家之樂、執紼者、相和聲也、有薤露蒿里二章、漢田橫門人作、橫自殺、傷之悲歌」と、薤露の歌に曰く「薤上露何易晞、露晞明朝更復落、人死一去何時歸」と、蒿里の歌に曰く「蒿里誰家地、聚歛魂魄無賢愚、鬼伯一何相催促、人命不得少踟躕」成語考に「一ハ田橫ニ始マル」明の劉基の薤露歌に曰く「人生無百歲、百歲復如何、古來英雄士、各已歸山阿」

挽歌の起原は漢の田橫より始まるといへども、その由来は極めて古し、左傳哀十一年に「公孫夏曰、二子必死、將戰、公孫夏命其徒歌、虞殯」注に「虞殯ハ葬ヲ送ルノ歌曲ナリ、必死ヲ示スナリ、また曰く「虞殯ハ將ニ虞セントスルノ歌ナリ、即チ今ノ一ナリ」

【挽歌】挽歌に同じ、前條を見よ、

【晚學】年長じて學に志すをいふ、鶴林玉露に「高適五十二ニシテ始メテ詩ヲ爲ル、少陵ガ爲メニ推サル、老蘇三十三ニシテ、始メテ書ヲ讀ム、歐公ノ爲メニ許サル、功

深ク力到ルコト早晩ナキナリ、聖賢ノ學モ亦然リ。東坡ノ詩ニイフ、貧家淨掃地、貧女巧梳頭、下士晚聞道、聊以拙自修ト、朱文公每ニ此ノ句ヲ借リテ話頭ト作シ、窮郷晩學ノ士ヲ接引ス。少陵は杜甫なり、陳書儒林傳に「沈不害上書曰、後生敦悅不見函丈之儀、晚學鑽仰、徒深倚席之歎」

【潘岳】 字は安仁、滎陽中牟の人、郷邑號して奇童となす、才名世に冠たり、晉に仕へて中書令に至る、西征閉居等の賦あり、姿容に美なり、少時常に彈を挟みて洛陽の道を出づ、婦人々に遇ふ者、皆手を連ねて縈繞し、皆之に投ずるに果を以てし、車に滿ちて歸る、時に張載甚だ醜し、行く毎に小兒瓦石を以て之に擲ち、委頓して反ると、潘岳は晩年人の爲めに誣告せられて市に誅せらる、詳しくは晉書の傳を見よ、なほ花縣を參看せよ、

【反汗】 言を出して復た反すをいふ、劉向の封事に「號令ハ汗ノ如シ、汗出テテ反ラザルナリ、今令ヲ出シテ、未ダ時ヲ踰ユル能ハズシテ之ヲ反スハ、是レ反汗ナリ」と、號令を汗に比すること、易の渙卦に見ゆ(繪言汗ノ如シ)を見よ、

【蕃翰】 蕃は蔽なり、翰は翰なり、國家の楨幹屏蔽たるふ、中庸に「射有似乎君子、失諸正鵠、一諸其身、孟子子公孫丑上に「行有不得者、皆一諸己」

【汗宮】 次の(類宮)を見よ、

【類宮】 諸侯の學宮なり、類は半なり、辟雍(天子の學宮)に半ばするの義、また東西門以南は水を通じ、北は水なし、故にいふと、一解に、類の言たる班なり、政教を班つ所以なりと、禮記の王制に「大學在郊、天子曰辟雍、諸侯曰一、また汗宮に作る、詩經魯頌泂水篇に「既作汗宮、淮夷攸服」

【飯牛ノ歌】 (牛角ノ歌)を見よ、

【班姬ガ團扇】 (班婕妤ガ)を見よ、

【泛菊會】 風土記に「俗説ニ九重ヲ以テ相會シ、山ニ登リ菊花ノ酒ヲ飲ム、之ヲ登高會トイヒ、又之ヲ一一ト謂フ」

【反錦】 他人の「オクリモノ」を返す義、反壁に同じ、左傳昭十三年に「叔向受義反錦」

【盤曲】 山の「ウネリクネリ」と曲れる義、宋書謝靈運傳に「石參差、山一一」

【伴奩】 「ヒマ」ありて「タノシム」暇豫の貌、詩の大雅に「爾游矣、優游爾休矣」

【范寛】 宋の畫人、圖繪寶鑑に「一一名ハ中正、字ハ仲

を言ふ、詩經大雅崧高に「維申及甫、爲周之翰、四國于蕃」と、蕃は藩に通ず、

【半漢雕梁】 太平記卷十三に見ゆ、半漢は文選に「天馬半漢」とありて、半漢は天馬の貌と注す、「イサメリ」と訓む、雕は蓋し跳の誤りならん、跳梁は、莊子に「東西跳梁、不避高下」注に「跳梁ハ猶ホ走躑ノ如シ」とあり、

【反閉ノ計】 敵の來りて我を閉する者を求め、いつはりて知らざるまねして、示すに僞情を以てす、かくて彼れ歸りて見る所を以て、其の將に告ぐるときは、即ち反りて我の閉と爲るなり、或は厚く賄して之を誘ひ、利用して我が用を爲さしむべきなり、孫子の用閉篇に「閉ヲ用ヒルニ五アリ、郷閉アリ、内閉アリ、反閉アリ、死閉アリ、生閉アリ」とあり、また史記の陳丞相世家に「陳平既ニ多ク金ヲ以テ、反閉ヲ楚ノ軍ニ縱ツ」とあり、

【萬幾】 萬づの政事をいふ、其の機の發する所ろ極めて多し、故にいふ、書經の皋陶謨に「兢兢業業トシテ一日二日一一」と、傳に「當ニ萬事ノ微ヲ戒懼スベキライフ」幾一に機に作る、同じ、機は樞機の機なり、

【萬機】 前條を見よ、

【反求】 かへりて我に在りて盡すべき者を求むるをい

立、温厚ニシテ大度アリ、畫山水ハ始メ李成ヲ師トシ、又荆浩ヲ師トス、山頂ニ好シ、密林ヲ作り、水際ニ突兀セル大石ヲ作ル、既ニシテ歎ジテ曰ク、ソノ人ヲ師トセンヨリハ造化ヲ師トスルニ如カズト、乃チ舊習ヲ捨テテ、終南太華ニト居シ、徧ク奇勝ヲ觀ル、落筆雄偉老硬真ニ山骨ヲ得タリ、而シテ關李ト並馳方駕セ

【畔換】 強恣の貌、畔一に叛に作る、左思の魏都賦に「雲徹叛換、席卷虔劉」

【般還】 進み難き貌、盤桓に同じ、禮記に「一一而避」

【盤桓】 「タチモトホル」をいふ、易經屯卦に「初九盤桓、利居貞」の本義に「一一ハ進ミ難キ貌」文選班固の幽通賦に「佇一一而且俟」また陶淵明の歸去來辭に「撫一一孤松以一一」

【範型】 模型なり、手本の義、凡そ鑄式土を以てするを型、木を以てするを模、金を以てするを範といふ、

【藩臬】 明の世に布政司按察司を稱していふ、藩は藩屏の義、臬は法なり、すべて物事を正す準法の義、雜事大全に「布政司曰藩、按察司曰臬」

【繁絃】 「ヤカマシキ」絃聲、蔡邕の琴賦に「一一既挹雅韻乃揚」また文賦に「炳若綉繡、悽若一一錢起の瑪

【槃珊】 前條を見よ。

【半子】 女(ムスメ)の婿をいふ、一は半箇の子に當る

の義、書言故事に「書ヲ以テ外舅姑ニ與フルニ、辱在
半子之列」トイフ、劉禹錫祭楊庶子文ニ、乃命長嗣
爲君半子ニとあり、唐書回紇傳に「咸安公主下嫁可汗、
可汗上書曰「一」」

【班資】 班は位、資は俸給なり、韓愈の進學解に「商財
賄之有無、計一之崇庫」

【班師】 軍隊をひきかへす義(師ヲ班ス)を見よ、

【萬死一生ヲ顧ミズ】 (萬死不顧一生) 必死を期する
義、史記張耳陳餘傳に「將軍賊目張膽出、一」

【萬死ヲ出デテ一生ニ遇フ】 (出萬死而遇一生) 貞觀
政要一に「太宗曰、玄齡昔從我定天下、備嘗艱苦、出
萬死而遇一生、また後漢書耿恭傳に「出於萬死、無一
生之望」

【盤涉調】 音樂ハ調の一なり、歌舞品目に「按ズルニ盤
モト般ニ作ル、又二十八調ノ一ナリ、朱子語類云、般涉
調、胡樂之名也、般如般若之般、管絃音義云、此羽音者、
即一、一者、水音也、所以名盤涉者、經云、一
切江河必有回曲、入於海、故水音名盤涉」とあり、

南北ノ郊路ニソングトイフコトアレバ畢嵐ガ製スル
トコロナラン、未ダイヅレノ説ヲヨシトスルコトヲ
知ラズと馬鈞の翻車を作りし事は、魏志杜襲傳の注
にも見ゆ、

【反掌】 (掌ヲ反ス)を見よ、

【萬象】 象は形なり、萬物に同じ、淮南子に「天地未剖、
陰陽未判、四時未分、一未生、寂然澄清、莫見其形、
阪上ニ丸ヲ走ラス」(阪上走丸勢に乗じて極めて便
易なるに喩ふ、漢書鞠通傳に「范陽令先下、而身富貴、
必相率而降、猶若一也」)

【反手】 反掌に同じ、事の易きに喩ふ、孟子公孫丑上に
「以齊王、由反手也」由は猶と通ず

【萬殊】 殊は異なり、色色に異なる義、王羲之蘭亭集序に
「趣舍一、靜躁不同」

【萬壽疆ナシ】 壽長くして限りなきを祝する語、詩經
小雅天保に「君曰「爾、萬壽無疆」君は先公先王を通
じていふ、トは猶ほ期の如し、

【萬壽山】 (頤和園)を見よ、

【萬鍾】 左傳襄公二十九年に「館國人粟、一鍾」とあ
りて、註に「六斛四斗曰鍾」とあり、漢書食貨志の註に
「鍾ハ十斛」

【范質】 字は文素、宗城の人、性明悟、九歳にして能く文
を屬す、後唐の時の進士、仕に従ひてより未だ嘗て卷
を釋かず、宋の太祖の世に及び魯國公に封ぜらる、質
廉慎にして法を守る、太祖稱して眞宰相となす、文集
及び五代通錄共に九十餘卷あり、

【半日村】 樂史太平寰宇記に「一、此村山高蔽虧
陽影、常照其一半、山高くして村の半分は常に日蔭と
なれる地をいふ、

【萬事ハ夢】 俚諺なり、昔公の太宰府へ左遷せられし
時の詩に「離家三四月、落淚百千行、萬事皆如夢、時時
仰彼蒼」とあると同意

【反唇】 唇を反すとは心に然りとせずして諍るをい
ふ、史記平準書に「客語、初令下有不便者、異不應、微
一」漢書賈誼傳にも見ゆ、

【翻車】 「ミツグルマ」漢事始に「魏略ニイフ、扶風ノ、馬
鈞京都ニ居ル、城内ニ地アリ、園トナスベシト雖モ、コ
レニソングベキ水ナシ、故ニ翻車ヲ作り童兒ヲシテ
コレヲ轉ゼシム、水ヲソングバ自ラ覆ル、今、田家ニ
水車アリ天旱スル時水ヲ引イテ田ニソング器ナリ
ト、コレニヨレバ水車ハ魏ノ馬鈞ヨリ起レリ、シカレ
ドモ漢ノ靈帝畢嵐ヲシテ翻車ヲ作ラシメ水ヲ引イテ

【萬乘之尊】 天子の尊をいふ、孟子梁惠王上の註に「兵
車萬乘ハ、天子ヲ謂フナリ」書言故事に「古ノ天子大國
ニ居リ、萬乘ノ國トナス、諸侯ヲ封シテ小國ニ居ラ
シム、千乘百乘トナス」天子は兵車萬乗を出すべき畿
内方千里の地を領するに由る、

【范式】 (千里ノ結言)を見よ、

【繁殖】 多く増殖するをいふ、孟子滕文公上に「草木
暢茂、禽獸一」

【伴食】 職に在りて爲す所るなきをいふ、舊唐書の盧
懷慎傳に「開元三年、懷慎與紫微令姚崇對掌樞密、懷
慎自以爲吏道不及崇、每事皆推讓之、時人謂之伴食
宰相」とあるに本づく、胡銓の上高宗封事に「伴食
中書、漫不可否事」

【蠻觸ノ争】 莊子雜篇則陽に「有國於蝸之左角者、曰
觸氏、有國於蝸之右角者、曰蠻氏、時相與争地而戰、
伏尸數萬云云」注に「蝸蝸牛也、蝸至小而角尤爲小、以
俗眼一觀之、無小不大、以道眼一觀之、無大不小、天下
一蝸也、梁國一蠻也、何以辨哉云云」天下の英雄互に
争ふも、達觀するときは、猶ほ蝸角上蠻觸二氏の争の
如しとの意、

【晚食以テ肉ニ當ツ】 (善ク窮ニ)を見よ、

【晚翠】草木の歳寒に至りてもその色を變ぜざるをいふ。宋文鑑の范質が戒、從子景詩に「遲遲澗畔松、鬱鬱含——千字文に「枇杷——梧桐早凋。」

【輓推】前より牽くを輓といひ、後より送るを推といふ。左傳襄十四年に「或輓之或推之」推輓を見よ。

【范成大】字は正能、石湖と號す。宋の吳縣の人。紹興二十四年の進士、隆興中金國に出使し、節を竭し忠を盡す。諸官に歴任してその職に稱ふ。成大素より文名あり、尤も詩に工なり。紹興四年卒す。年六十八。著すところ石湖集、攬轡錄、騷鸞錄、虞衡志、吳船錄あり。

【萬姓統譜】一百四十六卷、附氏族博考十四卷、明の吳興の人、凌迪知の編する所。上古より明の中葉までの、上帝王より下士庶に至る略傳を、二十一史の列傳通志等より抄出す。四聲一百六韻を以て姓を分ちて類編す。萬曆己卯王世貞の序あり。今日の所謂人名辭書の類なり。延寶九年の和版あり。

【萬世ノ功】永世不朽の功をいふ。漢書蕭何傳に「曹參ハ野戰略地ノ功アリト雖モ、此レ特ニ一時ノ事ナリ、蕭何ハ關中ニ轉漕シ、食ヲ給シテ乏シカラザラシム陛下數ト山東ニ亡スト雖モ、蕭何常ニ關中ヲ全ラシ陸下ヲ待ツ、コレ萬世ノ功ナリ、奈何ゾ一旦ノ功ヲ以テ」

韻の「エ」と相約まりて「テ」となり、さて「テン」となるが如し、その上なる字を字頭(父字)といひ、下なるを字母又は母韻字(母字)といふ。餘は類推すべし。夢溪筆談に「切韻之學出于西域、漢人訓字止曰讀如某字、未用反切、然古語已有二聲合爲一者、如不可爲巨、何不爲盍、如是爲爾、而已爲耳、之乎爲諸之類、以西域二合之音、蓋切字之原也、如輓字、文從而大、亦切韻也。徐鉉の重修說文序に「許慎注解、詞簡義奧、臣等粗爲訓釋、以成一家之學、時未有反切、後人附益、互有異同。」

【反接】兩手を背に反へして縛するをいふ。ウシロデニシバル。史記陳丞相世家に「武士——之。」

【晚節】節は時期なり、——は猶ほ末時といふが如し、晩年に同じ。杜甫の遺悶の詩に「晚節漸於詩律細」品字箋に「——ハ末後ノ一節ヲイフ」漢書石顯傳に「元帝——寝疾」韓琦邪曲ナシを參看せよ。

【班婕妤ガ團雪ノ扇】東關紀行に見ゆ、班婕妤は漢の孝成帝の宮人にて、才華あり詩賦に巧なり、團雪の扇とはその作なる怨歌行に「新裂齊紈素、皎潔如霜雪、裁成合歡扇、團圓似明月、出入君懷袖、動搖微風發、常恐秋節至、涼颺奪炎熱、棄捐篋笥中、恩情中道絕」とあるを斥すなるべし、和漢朗詠集納涼に、大江匡衡の班婕

テ萬世ノ功ニ加ヘントスルヤ、蕭何ハ當ニ第一ニスベク、曹參ハ之ニ次グベシト」

【半生半熟】技藝の未だ熟達せざるをいふ。拊掌錄に「北都有妓、舉止生硬、士人謂生張八、乞詩魏野、野贈詩云、君爲北道生張八、我是西州熟魏三、莫怪尊前無笑語、——未相諳。」

【萬世不易】永世變ることなき義、荀子に「百姓以爲成俗、萬世不能易也。」

【萬世不刊】不刊は削除すべからざる義、揚雄の酈商銘に「金紫襲表、——とあり(不刊ノ書)を見よ。」

【磐石】大石なり(安キコト磐石)を見よ。

【范石湖詩集】三十五卷、畧して石湖詩集といふ。宋の范成大撰す。簡明目録にいふ「ソノ才調ノ富健ハ、楊萬里ニ及バザルモ、萬里ノ粗豪ナク、氣象ノ廣博ハ、陸游ニ及バザルモ、亦游ノ窺日ナシ、大抵早年ハ晚唐ニ沿湖シ、新安ノ掾ニ官シテ、後ハ、乃チ蘇黃ノ遺法ヲ規取シ、變ズルニ婉婉ヲ以テシ、自ラ一家ヲ爲ス(范成大)を參看せよ。」

【反切】一に翻切とも書、翻に「カヘシ」といふ、二字の音相摩して一音を成、例へば天字の音、他前ノ反(反又ハ切ニ作ル)とす、その他の發聲と、前の「ゼ」の

好團雪之扇、代岸風兮長忘、燕昭王招涼之珠、當沙月兮自得」とあり。

【范冉】字は史雲(箇中塵)を見よ。

【幡然】幡は反なり、翻に通じて用ふ「サラリ」と改まる貌、孟子に「既而——改」

【萬全】事を計るに善を盡して一失なきなり、韓非子に「懸衡而知平、設規而知圓、——之道也」また史記淮南王傳に「聖人萬舉——」

【阪泉ノ三戰】史記の五帝紀に「軒轅乃チ徳ヲ修メ兵ヲ振ヒ、熊羆貔貅虎ヲ教ヘ以テ炎帝ト阪泉ノ野ニ戰ヒ、三戰シテ然ル後チニソノ志ヲ得タリ」括地志に「阪泉ハ今黄帝泉ト名ヅク、媯州懷戎縣ノ東五十六里ニ在リ」

【樊素】白樂天の妾の名、圓機活法に「白樂天ニ、歌妓——アリ、善ク歌フ、既ニ老イテ將ニ之ヲ放タントス、素慘然トシテ去ルニ忍ビズ、遂ニ不能忘、情歌ヲ作ル(——小蠻)を參看せよ。」

【販縑】「キヌウリ」漢書灌嬰傳に「睢陽——者也」註に「縑ハ帛ノ別名」

【范祖禹】字は淳父、宋の華陽の人、嘉祐八年の進士、司馬光に従ひ通鑑を修め、また唐鑑十二卷、仁宗政典六

卷を著す、官は翰林學士に至る、元符元年卒す、年五十

八、
【范增罪セラレテ楚王滅ブ】 太平記卷十三に見ゆ、范增は居巢の人、年七十、家に居て奇計を好む、項羽を助けて諸侯に霸たらしむ、史記項羽本紀に「項王乃ち范增ト急ニ榮陽ヲ圍ム、漢王之ヲ患フ、乃チ陳平ノ計ヲ用ヒテ項王ヲ閉セントス、項王ノ使者來ル、大牢ノ具ヲツクリ之ヲ進メント欲シ、使者ヲ見テ伴リ驚愕シテ曰ク、吾以テ亞父即ち范增ノ使者トオモヒシニ、乃チ反リテ項王ノ使者ナリシカト、更ニ持チ去リ、惡食ヲ以テ項王ノ使者ニ食ハシム、使者歸リテ項王ニ報ズ、項王乃チ范增ノ漢ト私アルカト疑ヒ、稍之ガ權ヲ奪フ、范增大ニ怒リテ曰ク、天下ノ事大ニ定リス、君王自ラ之ヲ爲セ、願クバ骸骨ヲ賜ヒ、卒伍ニ歸セント、項王之ヲ許ス、行キテ未ダ彭城ニ至ラザルニ、疽背ニ發シテ死セリ」蘇軾の范增論に「增高帝之所畏也、増不去、項羽不亡、嗚呼増亦人傑也哉」
【反側】 反覆して正直ならざる者をいふ、一解に、叛黨をいふといふと、後漢書光武紀に「使—子自安—」
【班足王】 太平記鈔に「—ノ事、仁王經賢愚經並ニ大論ニ出デタリ、此ノ王ハ身ニ羽翼生ジ、脚ハ鹿足ノゴ

トクアリテ、飛行自在ノ人ナリ、惡人ノ教ニヨリテ一切ノ血肉ヲ食ス、中ニモ人ノ血肉ヲ專トセシ程ニ、朝暮ノ供膳ニモ備フベキ由、勅アレドモ、左ヤウニ人ノ血肉ヲ上ルニ足ラズ、厨ノ者モ調法ニ及バザル間、手ヅカラ自ラ飛行シテ人ヲ捕ヘテ食ヘリ云云」とあり、
【樊素小蠻】 敘小志に「白樂天ニ二妾アリ、樊素ハ善ク歌ヒ、小蠻ハ善ク舞フ」また白詩に「櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰」とあり、櫻桃は果の名、小にして紅なり、樊素が口は櫻桃の若さをいふ、楊柳は軟かにして小なり、小蠻が腰は、楊柳に似たるをいふ、
【番代】 順番に交代するをいふ、唐律疏義に「軍防令、防人—、皆十月一日交代」更番（バンガハリ）に同じ、
【潘大臨】 字は邠老、黃岡の人、弟大觀と皆詩名あり、蘇軾黃庭堅張來と遊ぶ、冷齋夜話にいふ「黃州潘邠老、詩工ニシテ佳句アリ、然レドモ貧甚シ、東坡山谷尤モ之ヲ喜ブ」
【板蕩】 政事のみだれ敗るるをいふ、詩の序に「天下—、無綱紀文章、詩經大雅に、板の詩、蕩の詩あり、共に厲王無道にして周室大に壞れ、下民はなほだ苦めるを傷みて作れるによる、後漢書楊震傳に「不念—之作、虺蜴之戒、唐書蕭瑀傳に「疾風知勁草、—識誠

臣、
【晚唐】 唐代の詩を、初唐、盛唐、中唐、晚唐の四に分つ、唐初より玄宗開元の初に至る凡百餘年間を初唐とし、開元より代宗太暦の初に至る凡五十餘年を盛唐とし、太暦より文宗の太和年間に至る、凡七十餘年を中唐とし、以後唐末に至る凡八十餘年を晚唐とす、晚唐の作者には、杜牧、李商隱、溫庭筠等あり、中唐の作者には、錢起、韋應物、劉長卿、孟郊、賈島、白居易、元稹、劉禹錫、韓退之、柳宗元等あり、盛唐の作者は李白、杜甫を首として、孟浩然、王昌齡、王維、岑參、高適、儲光羲、李頎、常建等あり、初唐の作者には、王勃、楊炯、盧照隣、駱賓王の四傑をはじめとして、陳子昂、張九齡、沈佺期、宋之問等あり、
【蟠桃】 大なる桃の實、上壽を祝するに用ふる語、漢武故事に「西王母降出桃七枚、自啖二枚、五枚與帝、帝留核欲種、母曰、此桃三千年一開花、三千年一結實、指東方朔曰、此桃三熟、此兒已三偷」雞を見よ、
【萬端】 色色と力を用ひる義、萬方に同じ、史記禮書に「人道經緯、—規矩、無所不貫、また信陵君傳に「賓客辯士、說王—」
【萬雉】 王城なり、西都賦に「建金城之—」百雉を

見よ、
【范仲淹】 字は希文、宋の吳縣の人、刻苦して書を讀み、六經の旨に通ず、大中祥符の間、進士に第し、慨然として當世に志あり、嘗て曰く、士は當に天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂むべしと、仁宗の時右司諫となり、時政を極論す、數州に歴任し、至る所、惠政あり、龍圖學士を以て、延州に知たり、西賊大に懼る、召して樞密副使に拜し、參知政事に進む、未だ施す所を竟へずして卒す、文正と謚し、楚國公に追封せらる（范文正公集、また胸中ノ甲兵を見よ、
【版築】 版は牆板、築は杵なり、板と板との間に土を入れて、杵にてつきかたむるをいふ、孟子に「傅說舉子—之閉、また漢書英布傳に「項王伐齊、身負—、以爲士卒先」
【藩鎮】 唐の玄宗の時、邊要の地に節度使を置きしが、安祿山の亂後、内地久しく安からず、加ふるに邊塞の地は、回紇吐蕃の入寇頻頻たるを以て、節度使の數は、次第に増加するに至れり、節度使はもと武官なれども、内地の節度使は、多く數州を統べて一鎮となし、其の地の按察使を兼ねしを以て、遂に兵政の兩大權を、一身に握り、自ら所部の文武官を置き、勢力に強く

して宛然諸侯王の如く、父死するも子其の兵を領して、肯て代らず、士卒も亦自ら將帥を擧げて留後となし、朝廷の命を請ふ、朝廷之を制する能はざるが故に、一益驕る、中に就きて尤も朝廷の患をなせし者は、河北の諸鎮なり、代宗の初、安祿山の餘黨の平定するや、賊將張忠志・田承嗣・李懷仙等皆降る、朝廷無事を冀ひ、忠志を成德(直隸正定府)の節度使に、承嗣を魏博(直隸大名府)の節度使に、懷仙を盧龍(直隸北京)の節度使に任ず、而るにこの三鎮相結びて婚を通じ、互に相助けて兵を募り城を固くし、遂に貢賦を供せず、しかれども代宗制する能はず、皇紀千四百四十年、德宗代宗に弱き、精を勵まして治を求む、玄宗の末年、内亂外寇相踵ぎ、田畝荒廢し、丁口は亡散し、戶籍の制壞れて、天下浮浪多く徵稅の法漸く廢して、國庫空乏を告ぐるに至る、德宗乃ち楊炎を擧げて新に兩稅の法を行ふ、其の法、每戶主客を問はず、凡て現住者を籍に載せ、各人其の貧富に應じて一定の稅を夏、秋兩期に納めしめ、行商者は其の所在の州縣にて之に課稅するに在り、これによりて國庫稍豊なるに至れり、かくて德宗此の機に乗じて、藩鎮の勢を殺がんとせしが、たまく成德の節度使、張忠志死し、子惟岳留後

たらんことを請ひしも朝廷許さず、遂に叛す、魏博盧龍の諸鎮之に應じ、當時盧龍の節度使たりし、朱滔を擧げて盟主となす、淮西(河南汝寧府)の節度使、李希烈も亦之に應ず、官軍之を征し、軍費多くして府庫支へず、時に盧杞相たり、帝に勸めて閉架、除陌の令を出さしむ、閉架は民屋の廣狹を計りて稅を課し、除陌は公私の賣買、百毎に其の五を官に納めしむるの法なり、されども天下厚斂に苦み、遠近嗟怨す、會、涇原の兵、關東の叛を討ぜんが爲めに、京師を過ぎしに朝廷の待遇頗る薄かりしかば、怒りて亂をなし、朱泚を奉じて主となし、閉架除陌を除くを以て名となす、帝出て奉天(陝西乾州)に奔りしが、渾瑊・李晟等の援によりて、長安に歸るを得たり、帝治を求むるの志ありて、賢臣に任ずるを知らず、李泌・陸贄の諸名臣ありと雖も多くは其の終を善くせず、晩年頗る失政多し、德宗の後、順宗を経て憲宗に至る、英武にして賢相、杜黃裳・李絳に任じて内政を正し、また名將、武元衡・裴度を用ひて外鎮を制す、淮西先づ破れ、河北の諸鎮も亦尋て降る、是に於て藩鎮始めて稍朝威を憚る、然れども帝是より意滿ち漸く驕奢に流れ、宦官を信任せしかば、賢臣多く朝を去り、國政日に亂れ、外は藩鎮復叛きて

終に朝命を奉ぜず、内は宦官の跋扈甚しく、遂に唐室の滅亡を招くに至る、

【班超】字は仲升、彪の次子、固の弟、少くして大志あり、家貧にして傭書して母を養ふ、嘗て筆を投じて歎じて曰く、大丈夫當に功を異域に立て以て封侯を取るべし、安を能く久しく筆硯を事とせんやと、明章兩朝に仕へ、出でて西域を征し、五十餘國を安集し、定遠侯に封ぜらる、

【反坫】坫は、土や壁をつみかさねてつくる、兩楹の間に在り、兩君獻酬して畢れば、爵を其の上に反し置くなり、論語八佾に「邦君爲兩君之好、有反坫、管氏亦有反坫、邦君は諸侯なり、管仲が大夫の身分を以て諸侯の禮を僭せしをしるなり、

【版圖】戶籍領地の義、周禮の冢宰治官之職の鄭玄の註に「版ハ戶籍ナリ、圖ハ土地ノ形象、田地ノ廣狹ナリ」周禮釋文に「版ハ名籍、圖ハ地圖ナリ」

【萬一ヲ失ハズ】(萬不失一)少しも違はざる義、史記淮陰侯傳に「蒯通曰、貴賤在于骨法、憂喜在于容色、成敗在于決斷、以此參之、一萬一」

【般若】智慧と譯す、梵語、分別妄想を離れたる智慧をいふ、一切の諸法に通達するをいふ、

【般若湯】僧家にて酒をいふ、東坡志林に「僧謂酒爲般若、魚爲水、梭花、雞爲鑽雞菜、人有爲不義而文之以美名、與此何異、寺にては酒魚鳥等は禁物なれども、破戒僧はひそかに之を用ふるによりて異名をつけてかくはいふなり、なほわが國の寺にても魚を亡者、鮎をカミノリ、鯛を首座、鰯を惣身とも天蓋ともいふが如し、

【萬年青】「オモト」大本の義といふ、一解に琉球の石垣島の表岳に多しといへば「オモト」蘭などいへるに起れるならんと、致富全書に「蓋ハ即チ千年蓋、葉闊ク叢生シ、深綠色ニシテ冬夏枯レズ、マター一ト名ツク」

【晩年定論】明の王守仁陽明撰す、守仁、致良知の説は朱熹の格物致知の説とその趣を異にするを以て、當時學者の異議を招けり、守仁乃ち朱熹晩年の説の己の説と近き者三十餘條を抄して朱子一と名づけ、以て信を世に取らんとせり、されど却りて世儒の讒を招き、舞文の書と評せらるるに至れり、

【班馬】班固と、司馬遷となり、固は漢書を著し、遷は史記を著す、共に史才に長ぜり(馬班を見よ、また班は別なり、馬の別るるをいふ、左傳襄十八年に

「齊師夜遁、邢伯告中行伯曰、有—之聲、齊師其遁」注に「夜遁レテ馬相見ズ、故ニ鳴キテ班別ス」

【萬方】 色色と心をくばり、力を用ふる義、史記周紀に「褒姒不好笑、幽王欲其笑、—、故不笑、また外戚世家に「欲其生子、—終無子」

【范滂ノ傳ヲ讀ム】 (讀范滂傳) 宋史蘇軾傳に「生十年父洵遊學四方、母程氏親授以書、程氏讀東漢范滂傳、慨然太息、軾請曰、軾若爲滂、母許之否乎、程氏曰、汝能爲滂、吾願不能爲滂母耶」

【班白】 禮記の王制に「—之者、不提挈、韓非子に「—者多、徒行、白髮、マジリ」の老人をいふ、次條を見よ、

【頽白】 頽は班と同じ、老人の頭、半白黒なる者なり、孟子の梁惠王上篇に「—者不負、戴於道路、(二毛)を見よ、

【槃礴】 箕踞なり、兩足を前に出して箕の如くに坐するをいふ、莊子の田子方に「公使人視之、則解衣、—、槃一に般に作る、

【晚泊】 「クレガタ」に舟の「イカリ」をゑろす、孟浩然の句に「河橋晚泊船」

【盤箱】 「エビス」蠻は南蠻、箱は北狄なり、書經武成に「華夏—」論語衛靈公篇に「子曰、言忠信、行篤敬、雖—」

【潘屏】 四方の藩籬と爲りて、本家を屏蔽する義に取り、諸侯の稱とす、左傳僖二十四年に「封建親戚、以—」

【反壁】 人の贈遺を辭退するをいふ、左傳僖二十三年に「晉公子重耳及曹、倍負羈、乃饋盤飧、實璧焉、公子受—」

【反哺】 恩に報いて親に食はしむる義、本草に「慈鳥一名ハ孝鳥、コノ鳥初メテ生ルル、母哺スルヲ六十日長ズレバ、則チ—スル六十日、慈孝トイフベシ」哺は口中の食なり、

【泛蒲ノ酒】 荆楚歲時記に「端午ニ菖蒲ヲ以テ、或ハ縷ニシ、或ハ屑ニシ、酒ニ泛ブ」戴履古の詩「自切菖蒲泛—」

【反命】 使し歸りて、ヘンジするをいふ、復命に同じ、儀禮の士昏禮篇に「凡使者歸、反命曰、某既得、將、事矣」と、註に「反命ハ、使者還リテ報ズルヲイフ」

「—之邦、行矣」中庸に「聲名洋溢乎中國、施及—」

【汎汎】 泛泛に同じ、浮ぶ貌、楚辭に「將—若、水中之舟乎」

【班彪】 稚の子、沈重にして古を好む、初め竇融に事へ融に勸めて漢に歸せしむ、光武の初め、茂才に擧げられ、徐令に拜す、著す所、賦論奏事、凡そ九篇あり、

【凡百】 凡は皆なり、括なり、之を總ぶるの辭なり、國語に「—箴諫、吾盡聞之」

【販夫】 周禮地官の字面、販は「フリウリ」商人なり、

【反覆】 言行を「ヒルガヘシ」て一貫せざる義、漢書韓信傳に「齊、多變—之國、また反復に同じく、幾度も「クリカヘス」をいふ、—丁寧と連用す、

【反覆手】 手の「ウラ」オモテを反すことにて、事の易きに喩ふ、漢書陸賈傳に「殺王降漢、如反覆手耳」

【萬物一齊】 萬物皆同等なるの義、莊子に「—、孰短孰長」

【萬物ノ靈】 (人ハ萬物)を見よ、

【萬夫之望】 萬人仰ぎ望むをいふ、易に「君子知微、知彰、知柔知剛、—」圓機活法に「何充字ハ次道、王導、庾亮ト、成帝ニ言ヒテ曰ク、何充ハ、器局方、萬夫之望アリ、宜シク老臣ノ副トナスベシ、則チ社稷虞ナケ

【半面ノ識】 かつて少しく相識れるをいふ、書言故事に「後漢ノ應奉嘗テ袁賀ニ詣ル、賀時ニ出デテ門ヲ閉ヅ、造車匠アリ内ニ於テ扇戸ヲ開キ、半面ヲ出シテ奉ヲ視ル、奉即チ去ル、後數年ニシテ、路ニテ車匠ヲ見ル、識リテ而シテ之ヲ呼ブ」この故事もと東觀漢記に出づ、

【反目】 目をそばめて、にらみ合ふなり、易の小畜の卦に「夫妻反目」とありて、象に曰く「夫妻目ヲ反ムトハ、室ヲ正スコト能ハザルナリ」とあり、室を正すとは、其室家を正しく齊ふるをいふ、

【范陽】 西漢の涿郡—縣、東漢の侯國(幽州涿郡ニ屬ス)晉の—國、北魏の幽州—郡—縣は今の直隸保定府定興縣の南四十清里に在り、唐以後の—縣は、今の直隸順天府涿州治これなり、

【潘岳ノ好】 婚姻を重ねたる好みをいふ、晉書に「楊經字仲武、潘岳云、藉三葉世親之恩、子之姑、予之伉儷、潘楊之睦、有自來矣云云」

【班輸之雲梯】 班輸は魯人、公輸般なり、巧に機械を作る、雲梯は攻城に用ふる具なり、列子に「—、墨翟之飛鳶、自謂能之極也(雲梯また魯般ガ)を參看せよ、

【萬籟】萬物の聲なり、姚察の詩に「含風一響、哀露百花鮮」(天籟)を參看せよ。

【般樂】般も亦樂なり、大いに樂む義、孟子公孫丑上に「今國家閒暇、及是時、一怠放、是自求禍也」また同書盡心下に「一飲酒、驅騁田獵」

【汎濫】大水横流の貌、孟子滕文公上に「洪水横流、一於天下」

【斑斕】色純ならざるなり、爛斑に同じ、拾遺記に「玉梁之側有、一自然雲霞龍鳳之狀、また爛爛に作る同じ、元稹の詩に「文章甚爛爛」

【藩籬】易の大壯の九三に「羝羊觸藩、註に「藩、籬ナリ」左傳哀十二年に「吳ノ人衛人ノ舍ニ藩ス」とあれば則ち藩籬を設けて室家を固くすること、三代の制なり、また學問の門戸の義にも用ふ、史通に「憑衍許砌、不足窺、班范之、一」

【萬里侯】京師より遠く隔りたる邊塞などの大名をいふ、かかる大名は朝廷より牽制せらるること少く、わが思ふままに政を施すことを得るなり、後漢書班超傳に「燕領虎頭、飛而食肉、一之相也」

【萬里同風】遠方の地まで、風俗を同くするをいふ、漢書終軍傳に「天下爲一、一」

【藩籬之鷓】鷓は小禽なり、鷓に同じ、フナシウヅラ「マガキ」に巢くら鷓とは、見識狹隘なる小人物に喩ふ、宋玉對楚王問に「鳥有鳳而魚有鯤、鳳上擊九千里、絶雲霓、負青天、翔翔乎杳冥之上、夫一、豈能與之料天地之高哉」

【萬里ノ長城】秦の始皇三十二年に、蒙恬を遣り、兵三十萬人を發して北のかた匈奴を伐たしめ、長城を築く、臨洮甘肅鞏昌府ノ岷州)に起り、遼東に至る、延袤萬餘里、威匈奴に振ひぬ、詳しくは史記蒙恬傳に見ゆ、長城は始皇帝に始まりしに、ならず、戰國の際、既にその一部を作れるを始皇の増築したるにて漢の武帝の如きも亦之を延長せり、日知錄三十一を參看せよ、

また轉じてすぐれたる猛將に喩ふ、劉宋の檀道濟、文帝の時司空となり、威名あり、讒を以て收めらるるに及び、道濟目光炬の如くにして曰く、乃ち汝が一を壊ると、魏人之を聞きて喜びて曰く、吳子輩また憚るに足らずと、是に至りて長驅す、吳の軍能く禦く者なかりき、

【萬里モ比隣ノ如シ】萬里の遠さも隣家の如く思ふ義、魏の曹植の贈白馬王彪の詩に「丈夫志四海、萬里猶比隣」

湖、圖、且贊曰、賢哉陶朱、伯、越、平、吳、名遂身退、扁舟五湖、公即日納節、明年乞致仕、

【樊籠ノ累】樊も亦籠なり、共に禽鳥を入るる「カゴ」以て身の束縛せらるるに喩ふ、世事に牽かるるを、一といふ、北史に「楊休之謂人曰、此官清華但煩劇妨、我賞適真是樊籠」唐詩に「二遺一」

【范魯公】(范質)を見よ、

【鄱陽】兩漢の豫章郡一縣、晉の揚州一郡、一縣以後歷朝の縣名、今の江西饒州府一縣治これなり

【箴】箴にて糠粃を颺げ去るなり、晉書習鑿齒傳に「一之、糠粃在前、一に揚に作る、詩の小雅に「維南有箕、不可箴揚、轉じて舟などの波にゆりあげらるるさまにも用ふ、

【林深ケレバ鳥棲ム】(林深則鳥棲)林深ケレバ鳥棲ム)を見よ、

【馬融】字は季長、後漢の茂陵の人、辭貌に美にして俊才あり、博く經籍に通ず、永初の間、校書郎に拜す、鄧氏に忤ふを以て東觀に滞ること十年、調せらるるを得ず、後ち召されて郎中に拜し、桓帝の時、南郡の太守となる、融才高く博洽にして世の通儒たり、諸生を教養する常に千數あり、著述甚だ富む、高堂に坐し、絳

【攀龍附鳳】(龍、鳳)を見よ、

【萬緑叢中紅一點】多くのつまらぬ物の中に、一つのすぐれたるものあるにいふ、書言故事花木類に「王荆公石榴詩ニ、一、一、一、一、一、一、動人春色不須多、この詩、逐齋閑覽には、此唐人詩、不記作者姓氏、曾見王介甫介甫は安石の字、親書于所持扇、或以爲介甫自作、非也」とあれども、その何に據れるかを知らず、

【凡例】凡は大旨なり、例は例條なり、書中の大體の條目例則をいふ、杜預の春秋左氏傳序に「其發凡以言例、皆經國之常制、周公垂法、史書之舊章、仲尼從而修之、以成一經之通體」

【范蠡】周の吳の人、文種と同じく、越王勾踐に事へ大夫となる、士民を拊循し、兵革を訓治す、吳を滅して越を霸たらしめ、功名天下に顯はる、遂に姓名を變匿し、扁舟五湖に泛ぶ、鴟夷子皮と號す、齊に之を自陶朱公と稱し、貨巨萬を累ぬ、徐州先賢傳に「勾踐吳ヲ滅シ、一ニ謂ヒテ曰ク、吾將ニ子ト國ヲ分チ、而シテ之ヲ有タントス、一曰ク君ハ令ヲ行ヒ臣ハ意ヲ行ハント、乃チ扁舟ニ乗ジテ五湖ニ浮ビ終ニ返ラズ」

【范蠡ノ圖ヲ獻ズ】(獻范蠡圖)倦遊錄に「陳恭公判、亳州遇生日、親戚多獻老人星圖、姪世修獨獻范蠡遊五

帳を施す、前は生徒に授け、後は女樂を列す、次を以て相傳へ、その室に入る有る者鮮し、盧縮鄭玄はその徒なり、少女あり、名は倫、少くして才辯あり、家世世豊富、汝南の袁隗に適く、資送甚だ厚し、既に禮を成す、隗之に問ひて曰く、婦は箕帚を奉ずるのみ、何ぞ乃ち珍麗なると、對へて曰く、慈親愛重し、敢て命に違はず、君若し鮑宣梁鴻の高を慕はば、妾亦少君孟光の事に效はんと。

【巴渝ノ舞】 巴は地名、渝は水名、その地方に行はるる舞なり、漢書高帝紀の注に「渝水猿人居、其人剛勇、好舞、高祖慕此以平三秦、後使樂府習之、因名」一、竹枝を參看せよ。

【腹ヲ剖テ珠ヲ藏ス】 (剖腹藏珠) 財を愛して、命を重んぜざるをいふ、唐書に「太宗曰ク、西域ノ賈胡、美珠ヲ得テ腹ヲ剖キテ而シテ之ヲ藏ム、珠ヲ愛シテ而シテ其ノ身ヲ愛セザルナリ」

【破落戸】 良民の害をなすもの、ナラズモノ、咸淳臨安志に「紹興二十三年上謂大臣曰、近今臨安府收捕一、一、編置外州、本爲民閉除害」

【爬羅剔抉】 韓愈の進學解に見ゆ、爬は把に同じ、爪にてかきあつむるなり、羅は網にて鳥を捕ふる義、剔は

【跋立箕坐】 跋は一足に偏任して立つ、カタアシダチ、箕坐は兩足を展ばして、その狀箕舌の如くするをいふ、禮記に「立母跋、坐母箕」

【張リテ弛ベザルハ文武モ能ハズ】 禮記の雜記に出づ、(一張一弛を見よ、)

【針ノ穴カラ天ノヅク】 俚諺なり、智見の小なるに喩ふ、莊子秋水に「用管闕天、用錐指地、不亦小乎、說苑に「以管窺天、以針刺地、所窺者甚大、所見者甚少」

【馬倫】 (馬融)を見よ、

【霸陵ノ風云云】 太平記卷二十一に見ゆ、霸陵は漢の文帝を葬りし地、秦の莊陽以て帝陵の義とす、

【瀾陵ノ舊將軍】 漢の李廣をいふ、瀾陵は長安城の東七十里に在り、李廣匈奴を撃ち、亡失するところ多し、斬に當す、贖ひて庶人となり、藍田の南山中に屏居す、文帝曰く、廣は時に遇はず、高祖の世に當らしめば、萬戶侯何ぞ道ふに足らんやと、史記李將軍傳に「嘗夜從一騎、出從人田、飲還至霸陵亭、霸陵尉醉呵止廣、騎曰、故李將軍、尉曰、今將軍、尚不得夜行、何乃故也、止廣宿亭下、林逋の退筆の詩、神功雖缺力猶存、架卓珊瑚缺、策勳日暮閑窓何所似、瀾陵憔悴舊將軍、(李廣)を見よ、

【春】 漢書律歷志に「春ハ陽ナリ、萬物始メテ生ズルナ

骨を解くなり、抉は挑なり、くじり出す義、四字にて廣く人才を探し用ふるをいふ、

【波羅蜜多】 煩惱を去りて解脱する義、心經の註に「一、此云、到彼岸、また波羅蜜を度彼岸とも譯す、生死を此岸とし、涅槃を彼岸とし、煩惱を中流とす、華嚴經に「以波羅蜜船、於生死流中、不依此岸、不著彼岸、不住中流、而度衆生、无有休息」

【波瀾】 水細紋を生ずるを波といひ、大波を瀾といふ、范仲淹の岳陽樓記に「春和景明、一不驚、また文勢の動盪絢爛、猶ほ水の波有るが如きをいふ、杜甫の詩に「毫髮無遺憾、波瀾獨老成」

【婆羅門】 淨行と譯す、天竺の四姓の一にして貴族なり、梵天の口より生ぜりと稱す、故に梵士といひ、淨裔と譯す、

【玻璃】 梵語、水晶の屬、酉陽雜俎に「千歲積冰結爲一、一梅堯臣の詩に「銀瓶索酒傾一、一、頗黎とも書く、水玉と譯す、七寶の一、法華經に「金銀及頗黎、阿彌陀經に「金銀瑠璃一、一、磲磔」

【頗黎】 前條を見よ、

【罵詈】 人を、ノノシルをいふ、韻會に「正斥ヲ罵トイヒ、旁及ヲ罵トイフ、史記魏豹傳に「漢王一、諸侯群臣」

リと、禮記の月令に「東風解凍、魚上冰、獺祭魚、天氣下降、地氣上騰、天地和同、草木萌動、また梁武帝纂要に「春ヲ青陽トイヒ、マタ芳春、青春、三春、九春トイフ、天ヲ蒼天トイヒ、風ヲ陽風、柔風、惠風トイヒ、寒ヲ料峭トイフ、景ヲ媚景、和景、韶景トイヒ、時ヲ良時、芳時トイヒ、辰ヲ良辰、芳辰トイヒ、草ヲ弱草、芳草トイヒ、塵ヲ香塵トイヒ、日ヲ遲日トイフ、易緯に「立春ニ條風至リ、春分ニ明庶風至ル、爾雅に「東風之ヲ谷風ト謂ヒ、春晴レテ風フクヲ光風トイフ、律歷志に「春ハ蠢ナリ、物蠢生シテ乃チ運動ス」と、鵬冠子に「斗柄東ヲ指シテ天下春ヲ知ル」と、纂要に「正月ヲ孟陽、孟陽、端月トナス」白氏文集二十一の落花古調の詩に「留春春不駐、春歸人寂寞、厭風風不定、風起花蕭索」

【春祈り秋報ユ】 周禮の疏に「春社ヲ祭ルハ、以テ膏雨ヲ祈リ、五穀ノ豐熟ヲ望ム、秋社ヲ祭ルハ、百穀ノ豐稔ナルヲ以テ、功ニ報ズル所以ナリ」

【春ヲ送ル】 (送春) 春の去るを送る、白氏文集二十八、酬皇甫賓客詩に「竹院君閑、銷永日、花亭我醉、送殘春、同書十三、三月三十日題、慈恩寺詩に「惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黃昏、昔公の送春詩に「送春不用動舟車、唯別殘鶯與落花、若使韶光知我意、今宵

旅宿在詩家

【春ヲ探ル】(探春)天寶遺事に都人士女、正月ノ半ニ、車ニ乗ジ、馬ニ跨リ、郊野ノ中ニ探春ノ宴ヲ爲ス。また蘇軾の詩に「東郊欲探春、未見鶯花迹、春風在流水、鳥鴈先拍拍、孤帆信、浴漾弄此半篙碧」

【春ヲ迎フ】(迎春)禮記月令に「立春ニ盛徳木ニ在リ、天子乃齋ス、立春ノ日、天子親ヲ王公九卿諸侯大夫ヲ帥キ以テ春ヲ東郊ニ迎フ」註に「春ヲ迎フルハ蒼帝ノ靈威ヲ祭リ、東郊ノ兆ヲ仰グナリ蒼帝とは、東方蒼龍の帝をいふ、一解に太皞句芒を祭るなりと、沈佺期の詩に「東郊暫轉迎春仗」

【遙ニ知ル兄弟高ニ登ル處】唐の王維の九月九日憶山東兄弟に「獨在異郷爲異客、每逢佳節倍思親、遙知兄弟登高處、遍插茱萸少一人」この詩は九日に客中より故郷の兄弟が登高の景況を想ひやりて作りたるなり、旅にて佳節に逢へば益、親類のことが思はるるが、今日兄弟どもが高きに登り、茱萸を挿んで、我が一人缺けたることを言ふならむと、我が思ふとはいはず、兄弟どもが我が一人不足せることを沙汰し居るならんと作りて眞情掬すべし(茱萸)を參看せよ【春ハ枝頭ニ在リテ已ニ十分】(道ハ邇キ)を見よ、

馬鬣封

馬の「タテガミ」の如く土を封じたる墳墓をいふ、禮記檀弓上に「子夏曰、昔夫子言之曰、吾見封之若堂者矣、見若坊者矣、見若覆夏屋者矣、見若斧者矣、一之謂也」

【霸王之資】「ハタガシラ」となる「モトデ」春秋後語に「蘇秦南說楚威王曰、楚天下之強國也、西有黔中郡、東有夏州海陽、南有洞庭蒼梧、北有汾陰、地方五千里、帶甲百萬、車千乘、騎萬匹、粟支十年、此霸王之資也」

有女懷春、吉士誘之(詩經)

萬物不如酒、四時惟愛春(韋莊)

造化如痴春、又隨明日雨(舒頌)

紙窓明曉曉、布被暖知春(白居易)

花濃春寺靜、竹細野池幽(杜甫)

日

【日】音ジツ説文に「日ハ實ナリ、太陽ノ精虧ケズ」博雅に「日ハ君ノ象ナリ」釋名に「日ハ實ナリ、光明盛實ナリ」易の説卦に「離ヲ火ト爲シ、日ト爲ス」禮記の祭義に「日ハ東ヨリ出ヅ」史記天官書の注に「日ハ陽精ノ宗、後漢書荀爽傳に「在地爲火、在天爲日」淮南子天文訓に「火氣ノ精ナル者ヲ日ト爲ス」淮南子に「日出、陽谷入、於咸池、拂於扶桑、是謂晨明、登於扶桑之上、爰始將行、是謂朏明、臻於衡陽、是謂禺中、對昆吾、是謂正中、經於泉隅、是謂高春、薄於虞泉、是謂黃昏、淪於蒙谷、是謂定昏、日西垂景在樹端、謂之桑榆、廣雅に「日ヲ耀靈ト名ツケ、一ニ朱明ト名ツケ、大明、陽鳥ト名ツケ、日御ヲ羲和ト曰フ」纂要に「日光ヲ景ト曰ヒ、日影ヲ晷ト曰ヒ、日氣ヲ暉ト曰ヒ、初メテ出ヅルヲ旭ト曰ヒ、日昕ヲ晞ト曰ヒ、日ノ温カナルヲ煦ト曰ヒ、午ニ在ルヲ亭ト曰ヒ、未ニ在ルヲ暎ト曰ヒ、日晩ルヲ晡ト曰ヒ、日將ニ落チントスルヲ薄暮ト曰ヒ、日西ニ落チテ光、東ニ返照スルヲ之ヲ反景、倒景ト曰フ、又日ノ已ニ出

ヅルヲ朝陽ト曰ヒ、日暮ヲ夕陽ト曰ヒ、春ヲ暉日ト曰ヒ、夏ヲ畏日ト曰ヒ、秋ヲ凄日ト曰ヒ、冬ヲ愛日ト曰フ、六帖に「日中有陽鳥三足」漢書魏豹傳に「人生如白駒過隙」注に「白駒ハ日景ナリ」易に「日月麗乎天、百穀草木麗乎土」唐書の天文志に「日者太陽之宗、人君之象、列子に「夸父力ヲ量ラズ、日影ヲ逐ハント欲シ、之ヲ暘谷ノ際ニ逐フ、渴シテ飲ヲ得ント欲シ、河ニ赴キテ飲ム、足ラズ、將ニ北ニ走リ大澤ノ中ニ飲マントス、未ダ至ラズ、道ニ渴シテ死ス云云」杜詩に「羲和鞭白日、使天、山頭落日半輪明」杜荀鶴の詩に「風煖鳥聲碎、日高花影重」

【碑】説文に「堅石(たていし)ナリ」古者廟門の内に立てて牲を繫ぐに用ふ、禮記の祭義に「君牽牲既入、廟門、麗於碑」疏に「君、牲ヲ牽キテ廟門ニ入レバ中庭ノ碑ニ繫著スルナリ」

また古者諸侯士大夫の家には皆碑あり、日影を計りて時の早晚を知るに用ふ、儀禮士昏禮に「入門當碑」また棹の前後の四角に樹て輓轆を設けて緯を繞らし棺を下すに用ふるもの、王莽の時設くる所にして、臣子、君父の功德を追述してその上に書す、これ後人

碑文を建つるの始とす、禮記檀弓に「公室視豐碑」初學記に「碑ハ以テ往事ヲ悲ムナリ、今宮室廟屋墓隧ノ碣ニ文ヲ石ニ鐫スル皆碑ト曰フ」樹碑は碑を立つるをいひ、昔碑は「コケ」のむしたる、「イシブミ」斷碑は、クダケ損したる碑(墓碑)を參看せよ。

【轡】馬韁(タヅナ)なり、詩經秦風小戎篇に「四牡孔阜、六轡在手、我が國にて馬銜(クツワ)の義とするは誤りなり、

【未央宮】漢書に「高祖ノ七年蕭何一ノヲ造ル、上其ノ壯麗ナルヲ見、怒リテ曰ク、天下洵洵勞苦スルコト數歲、成敗未ダ知ルベカラズ、何ソ宮室ヲ治ムルノ度ニ過グルヤト、對ヘテ曰ク且ツ天子ハ四海ヲ以テ家トナス、壯麗ニアラザレバ以テ威ヲ重ズルナシ、且ツ後世ヲシテ以テ加フルナカラシメント上悦ブ」

【靡有子遺】(子遺アルナシ)を見よ、

【日出テ三竿】日三竿の高さに上ぼるなり、朝日の高く懸かれるをいふ、今の午前八時頃、南齊書天文志に「日出三竿、春霧消、江頭蜀客繫蘭橈、欲寄狂夫書一紙、家住成都萬里橋」逸士傳に「堯ノ時、八九日出テテ作シ、日入リテ息ス」

十ノ老人アリ、壤ヲ擊テテ歌ヒテ曰ク、日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力何有、於我、哉ト、擊壤歌とはこれをいふ、壤は木にてつくる、狀履の如し、一壤を三四十歩の外に置き、一壤を以て之を擊ち中るを以て工となす、帝堯の時、君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり、聖神功化の極、一物もその所を得ざることをなさは、この歌を見ても知らるべし、

【庇蔭】庇は「ヒサシ」蔭は樹蔭なり、陰に通ず、一は「カバフ」といふ意、左傳文九年に「本根無所、一爾雅釋言に「庇、庇蔭也」と見え、また「庇、庇蔭也」とありて、註に「今俗呼樹蔭爲庇」と見ゆ、人を回護すること、樹蔭の衆鳥を息はしむるが如きを取る、荀子の勸學篇に「樹成、蔭而衆鳥息焉」とあり、俗に人の力に頼ることを「御蔭を蒙る」といふは蓋し此に本づくならん、

【碑陰】碑の背をいふ、碣陰ともいふ、典籍便覽に「凡ソ碑碣ソノ背ニ題スルモノ」とあり、碑陽、碣陽ハ、ソノ面ニ題スルモノヲイフ、

【備員】(員ニ備フ)と讀む、員は數なり、その定まれる數に備はるのみなる義、史記秦始皇紀に「博士雖七十人、特備員、費用、また平原君傳に「毛遂曰、願君即以遂一、行矣」

【微陰】陰曆五月をいふ、後漢書魯恭傳の注に「五月陰氣始メテ生ズ、故ニ一トイフ」また「ウスグモリ」

【眉宇】眉の面に於けるは、猶ほ屋の宇(ノキ)あるが如し、故にいふ、文選に載する枚乘の七發に「陽氣見於一之閉」

【謬悠之說】「トリトメナキ」説をいふ、虛遠の言なり、莊子に「以、謬悠之說荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不」

【繆戾】悖戾に同じ、漢書劉向傳に「朝臣舛午、一乖刺」

【飛英會】曲洧舊聞に「范蜀公許ニ居リ、長嘯堂ヲ造ル、前ニ芬糜架アリ、春時花盛ナル時、客ヲ宴ス、花酒杯中ニ墮ツレバ、飲マシムルニ、大白ヲ以テシ、舉座遺ス無シ、之ヲ一ト謂フ」

【披抉】披は發なり、抉は挑なり、エグル人の陰秘を挑發するをいふ、漢書薛宣傳に「一其閨門」

【火ヲ改ム】(改火)六帖に「春ハ榆柳ノ火ヲ取り以テ陽氣ニ順フ、マター一辰トイフ」春明退朝錄に「唐ノ時、清明ニ榆柳ノ火ヲ取り以テ近臣戚里ニ賜フ、本朝モ之ニ因ル」

【髀ヲ拊ツ】(拊髀)髀は股(モモ)なり、髀をうつは喜び勇む貌、莊子在宥篇に「鴻蒙一、而雀躍不輟」李斯の

諫逐客書に「彈箏搏髀、搏髀、拍髀、義皆同じ、日ヲ同ジクシテ論ゼズ」(不同、日論)兩者甚しく懸隔すれば一様に對比して論ずべからずとの義、史記游俠傳に「誠使、鄉曲之俠、予季次、原憲、比、權量、力、効、功、於當世、不同、日論、矣、季次は公皙、哀、孔子の弟子の字、麋、逐、フ、狗、ハ、兎、ヲ、顧、ミ、ズ」(逐、麋、之、狗、不、顧、兎)求むる所、大なる者は、小なる者を顧みざるの意、漢書外戚傳に見ゆ、

【日ヲ擣ス】(擣、日)擣は揮に通ず、日を「サシマネク」(魯陽)を見よ、

【比屋】比は列なり、「カドナミ」の義、漢書王莽傳に「堯舜之世、一可封」と、一に屋比に作る、同じ、

【火ヲ乞フハ、燧ヲ取ルニ若カズ】(乞、火、不、若、取、燧)人に求むるは、自ら修むるに若かざるに喩ふ、淮南子に「一、燧、ヲ、乞、フ、ハ、燧、ヲ、取、ル、ニ、若、カ、ズ」燧とは火を取る具、ヒウチ石の類なり、

【火ヲ救フニ薪ヲ投ズ】(救、火、投、薪)本を治めずして末を務むるときは、その害却りて甚しきに至るに喩ふ、鄧析子に「令煩、則、民、詐、政擾、則、民、不、定、不、治、其、本、而、務、其、末、譬、如、拯、溺、鍾、之、以、石、救、火、投、之、以、薪」

【日ヲ倍シ行ヲ并ス】(倍、日、并、行)晝夜疾く走る義、史

記孫子傳に棄其步軍與其輕銳一遂之。また孫子には卷甲而趨、日夜不處、倍道兼行、百里而爭利、則擒三將軍。

【日ヲ視テ眩セズ】(視日不眩) 爛爛トシテを見よ。【日ヲ曠シクシテ久シキニ彌ル】(曠日彌久) 曠は空なり、廢なり、空しく時日を廢するをいふ、漢書賈山傳に曠日十年、彌久は、久しきにわたる義、史記の刺客列傳に太傅之計一有商。

【美ヲ專ニス】(專美獨にて美名を占むる義、書經說命に爾尙明保予、罔俾阿衡一有商)。

【坤雅】二十卷、宋の陸佃撰す、その子宰の序に曰く、佃神宗ノ時召對セラレ、言物性ニ及ブ、因リテ說魚說木二篇ヲ進ム、後チ乃チ並ニ筆削ヲ加フ、初メ物性門類ト名ヅク、後チ爾雅ヲ注シ終リ、更ニ此ノ書ヲ修メ、名ヲ一ト易フ、爾雅ノ補タル言フナリ、この書釋魚、釋獸、釋鳥、釋蟲、釋馬、釋木、釋草、釋天に分ち、字義を明かにせり、明牛衷の一廣要四十二卷あり、參考すべし。

【比校】比は、タクラブルなり、校は考へ合すなり、彼と此とを比べ合せて優劣を考へ判つなり、國語齊語に「一民之有、道者一校一に較に作る、

ツ、是ノ月宋泌ヲ以テ一ニ直セシム、此レ蓋シ官ヲ置クノ始ナリ、書言故事に「淳化三年一成一、李至乞賜、新額、宋太宗御書飛白書一二字以賜、李至、飛蛾ノ火ニ赴クガ如シ」(如飛蛾之赴火、自ら死地に就くに喩ふ、飛んで火に入る夏の蟲)といふ、俚諺の本づく所、梁書到溉傳に「高祖賜連珠一、一、豈焚身之可鄰、

また衆の慕ひ歸するに喩ふ、魏書崔浩傳に「慕容垂乘祖父之資、同類歸之、若夜蛾之赴火」(蛾トイフ)を參看せよ、

【彼岸】佛家の語、煩惱の苦を脱して菩提の果を得る義、即ち生死を海に喩へ、煩惱を脱せずして人間に迷ふを此岸といひ、證果を得るを一と謂ふ、无量壽經の疏に「涅槃名一」。

また佛家にて春分と秋分との日を中日といひ、その前後三日を合せて七日を一會といひ、佛事を修し、諸佛に詣て亡靈に供養す、冬夏の兩時を取らずして春秋の二節を取る所以は、仲春(陰曆二月)仲秋(陰曆八月)は正東より日出でて真西に没す、而して彌陀佛の國は直西日没する處に當れり、故に彌陀の在所を衆生に正しく指示して往生の願を遂げさしむるに取るといふ、

【卑行】目下の親類、鶴林玉露に「此簡蓋與其親戚一也」とあり(尊行)を參看せよ、

【設行】偏頗の行なり、孟子滕文公下に「我亦欲正人心息邪說、距一、放淫辭、以承三聖者」と、ネデケタル行なり、

【微行】小徑(コミチ)をいふ、詩經に「遵彼一、また貴人の、シノビアルキをいふ、即ち隱行なり、史記秦紀に「始皇一咸陽」とあり、一説に微賤の所爲の如くする義とあり、漢書武帝紀にも「帝嘗輕服一」とあり、

【悲歌慷慨】「ウレタミ」慨さて悲壯なる歌を詠ふをいふ、史記項羽本紀の垓下之戰の條に「項王乃悲歌慷慨、自爲詩曰云云、十八史略には抗を慷慨に作る、字相通ず、韓愈の送董昌南序には「燕趙古稱多感慨悲歌之士」とあり、

【皮革】周禮天官に「毛アルヲ皮ト爲シ、毛ヲ去ルヲ革ト爲ス」説文に「革ヲ柔スルヲ韋トイフ」。

【否隔】否は閉なり、閉ち隔つる義、漢書薛宣傳に「人道不通、則陰陽一」。

【祕閣】天子の圖書を藏する處をいふ、宋朝會要に「端拱元年五月詔シテ崇文院中堂ニ就キテ一ヲ建

詳しくは眞俗佛事編を見よ、

【肥甘】肉の「コエテ」味「ウマキ」をいふ、孟子梁惠王上に「爲一不足于口與肥甜に同じ、

【辟寒香】述異記に「一ハ丹丹國ノ出ス所、漢武ノ時、入貢ス、大寒ニ至ル毎ニ、室ニ於テ之ヲ焚ケバ、暖氣外ヨリ入り、皆衣ヲ減ズ」。

【辟寒丸】「サムサ」を避くる丸藥、宋史眞宗紀に「賜從官一」。

【辟寒犀】開元遺事に「開元二年冬、交趾國犀一株ヲ進ム、色黄ニシテ金ノ如シ、使者請ヒテ金盤ヲ以テ殿中ニ置ク、温温然暖氣ノ人ヲ襲フアリ、上其ノ故ヲ問フ、使者對ヘテ曰ク、此レ一ナリ、隋ノ文帝ノ時本國會テ一株ヲ進ム、直チニ今日ニ至ルト、上甚ダ悦ビ、厚ク之ニ賜フ」。

【非幾】幾は機なり、不善の機をいふ、書經顧命に「爾無以劍冒貢于一貢は進なり、幾は動の微にして善惡の由りて分るる所なり、劍は晋セウ康王の名、

【菲儀】自ら人に贈る品物を謙していふ、非は薄なり、成語考に「自謙禮薄、曰一」。

【最員】力を用ふることの壮大なる貌、左思の吳都賦に「巨鼉一、首冠靈山、一解に力を作す貌、員は一本

負に作るは非なり、邦語「ヒイキ」と讀みて援引の意に用ふるも作力の義に本づく、張衡西京賦に「巨靈最風」巨靈は河神なり、眞は風の省字、本草に「大龜好ンデ重ヲ負フ、今石碑下ノ龜、其ノ形ニ象ル」

【豺狄】 猛獸なり、史記五帝紀に「教熊羆——羆虎以與炎帝戰於阪泉之野」註に「此ノ六者ハ猛獸、以テ戰ヲ教フベシ」また旌旗の名、禮記の曲禮に「前有擊獸則載——註に「兵車ノ旌ニ——ヲ畫クハ形象威猛ニシテ衆ヲシテ警備スルコトヲ知ラシム」貌は爾雅釋獸に「白狐ナリ」説文に「豹ノ屬ナリ」

【鬪宮】 鬪は幽深なり、また神なり、靈廟をいふ、詩の魯頌に「——有恤」とあり、恤は音ケキ靜かに寂しき義、

【彌久】 久しきに彌るなり（日ヲ曠シク）を見よ、

【被裘公遺金ヲ顧ミズ】（被裘公不顧遺金）劉氏人譜に「春秋ノ時、吳ニ被裘公トイフモノアリ、夏月ニ當リテ、敝裘ヲ衣テ、薪ヲ道上ニ賣ル、道上ニ遺金一錠アリ、公顧ミズシテ過グ、延陵ノ季子見テ之ヲ憫ミテ曰ク、薪ヲ負フ者、彼ノ金ヲ取レト、公笑ヒテ曰ク、五月ニ裘ヲ被テ薪ヲ負フ、豈金ヲ取ル者ナランヤト、季子驚キ拜シテ姓名ヲ問フ、公曰ク何ゾ與ニ姓名ヲ言フニ足ラント、答ヘズシテ去ル」

【飛黃】 名馬の名、背に角あり、千年の壽を保つといふ、淮南子覽冥訓に「——伏皐」韓愈の符讀書城南の詩に「——騰踏去」註に「——ハ龍馬」

【秘館】 天子の圖書を藏するところ、賈逵傳に「左氏傳國語ニ明カナリ、之ガ解詁ヲ爲リ、之ヲ獻ズ、顯宗其ノ書ヲ重シク寫シテ——ニ藏ス」

【美冠玉ノ如シ】（美如冠玉）（冠玉ノ）を見よ、

【被徑】 「コミチ」に「オホヒ」カブサルをいふ、楚辭招魂に「皋蘭——兮」

【鬚ヲ染ム】（染鬚）年老いて壯者に伍せんためにするなり、造邦賢勳錄に「武臣袁義入朝ス、帝其ノ老ヲ惜ミ、大醫院ニ命ジテ、其ノ鬚ヲ染メシメ、以テ壯者ニ伍ス

【匪躬之節】 一身の利害を顧みずして、君主の爲めに忠節を盡すをいふ、易の蹇卦の六二に「王臣蹇蹇、匪躬之故」とあるに本づく、韓愈の争臣論に「居無用之地、而致——」蹇蹇は艱難の甚しきをいふ、註に「忠貞ノ貌」とあり、

【日晷ヲ移サズ】（日不移晷）晷は日影なり、多く時を經ざる義、漢書王莽傳に「人不還——」還は旋なり、

【否極マレバ泰ニ反ル】（否極反泰）否塞の運もその極に達すれば泰平に反るをいふ、梁宣帝の賦に「望否極而反泰、何杳杳而無津」吳越春秋句踐入臣傳に「時過于期、否終則泰（否泰）を參看せよ、

【非據】 己の居るべき所に非ざる處に居るをいふ、易經繫辭下傳に「非所據而據焉、身必危」

【比丘】 僧をいふ、釋氏要覽に「梵語、比丘トイヒ、秦ニハ乞士ト言フ、上ハ諸佛ニ法ヲ乞ヒ、以テ慧命ヲ資益シ、下ハ施主ニ食ヲ乞ヒ以テ色身ヲ資益スルヲイフ」魏書釋老志に「桑門爲息心、——爲行乞、——に苾芻ともいふ、苾芻は雪山の香草の名、草に五義あり、以て僧の五徳に喩ふ苾芻）を見よ、

【比丘尼】 「アマ」大藏法數に「梵語、尼華言、女佛初不度、

ルコトヲ得シム、また輟耕錄に「中書丞相、史忠武王名ハ天澤、髭髯已ニ白シ、一朝忽チ盡ク黒シ、世皇之ヲ見テ驚キ問ヒテ曰ク、史拔都、汝ノ髭何ゾ乃チ更ニ黒キヤト、對ヘテ曰ク、臣藥ヲ用ヒテ之ヲ染ムルガ故ナリト、上曰ク、之ヲ染メテ如何セント欲スト、曰ク、臣鏡ヲ覽テ、髭髯ノ白キヲ見、竊ニ年且ツ暮レテ、忠ヲ陛下ニ盡スノ日短キヲ傷ム、因リテ之ヲ染メテ、玄クシテ報效ノ心、疇昔ニ異ナラザラシムルノミト、上大ニ喜ブ、人皆王ヲ以テ奏對ニ捷ナリトス」

【鬚ヲ拂フ】（拂鬚）俚言に、貴人に「コヒヘツラフ」ことを「鬚の塵を拂ふ」といふ、韻府に「寇萊公宰相トナル丁謂參知政事タリ、嘗テ都堂ニ會食ス、羹あつもの公ノ鬚ヲ染ム、謂起チテ之ヲ拂フ、公色ヲ正シテ曰ク、身執政タリ、何ゾ自ラ宰相ノ爲ニ鬚ヲ拂ハンヤト、謂慙ヅ、この事は、宋史寇準傳に出づ、丁謂は準の門に出てて參政に至りし人なり、

【髻ヲ然ク】（然鬚）度量の寛弘なるにいふ、宋史に「韓魏公、夜、書ヲ作ル、侍兵燭ヲ傍ニ執ル、燭、公ノ鬚ヲ然ク、袖ヲ以テ之ヲ揮シ、書ヲ作ルコト故ノ如シ」

【碑碣】 石碑（イシヅミ）なり、康熙字典に「方ナル者ヲ碑ト爲シ、圓ナル者ヲ碣ト爲ス、李斯ノ造ル所（碑）を見

女人、出家成道之後、因、姨母摩訶波闍提、懇求出家、佛乃度之、故名——智度論に「尼得无量律儀、故應次比丘（比丘）を見よ、

【日暮道遠シ】（日暮道遠）史記の伍子胥傳に「吾日暮途遠、吾故倒行而逆施之」とあり、人の行く、前途尙ほ遠くして、日已に暮る、故に顛倒疾行して、理に逆ひ、事を施すをいふ、唐書の白居易傳に「日暮道遠、吾生已蹉跎、年すてに老いて、期するところの前途尙ほ遠きに喩ふ、

【飛黃】 名馬の名、背に角あり、千年の壽を保つといふ、淮南子覽冥訓に「——伏皐」韓愈の符讀書城南の詩に「——騰踏去」註に「——ハ龍馬」

【秘館】 天子の圖書を藏するところ、賈逵傳に「左氏傳國語ニ明カナリ、之ガ解詁ヲ爲リ、之ヲ獻ズ、顯宗其ノ書ヲ重シク寫シテ——ニ藏ス」

【美冠玉ノ如シ】（美如冠玉）（冠玉ノ）を見よ、

【被徑】 「コミチ」に「オホヒ」カブサルをいふ、楚辭招魂に「皋蘭——兮」

【鬚ヲ染ム】（染鬚）年老いて壯者に伍せんためにするなり、造邦賢勳錄に「武臣袁義入朝ス、帝其ノ老ヲ惜ミ、大醫院ニ命ジテ、其ノ鬚ヲ染メシメ、以テ壯者ニ伍ス

【皮軒】 虎の皮にて飾りたる車、獨斷下に出づ、

【疲倦】 體のウミツカルル義、三國志蜀志張裔傳に「晝夜接、賓不得寧息、張君嗣—欲死、疲倦に同じ、

【罷倦】 前條に同じ、東觀漢記に「上擊莽、還汝水上、以手飲、水深、臨塵垢、謂傅俊曰、今日—甚」

【微言】 微妙の言をいふ、漢書藝文志に「仲尼沒而—絶、七十子喪而大義乖、と陸游の詩「—入孤夢、悅與屈宋遊」屈宋は屈原と宋玉となり、

【被堅執銳】 戰國策に「吾—、赴強敵、而死、此猶—乎、

【比肩隨踵】 肩を並べて立ち「カカト」に續ぎて至るをいふ、隔離せざるの義、戰國策に「千里而—士、是比肩而立、百世而—聖、若隨踵而至也、また韓非子に「堯舜桀紂千世而—出、是比肩隨踵而生也、

【微顯聞幽】 顯ヲ微ニシ幽ヲ聞ス」と讀む、その顯なる者を微にして以て其の妙を究め、その幽なる者を顯さして之をして明かならしむるをいふ、周易本義ニ「微顯當ニ顯微ニ作ルベシトセリ」サレドモ倒語トシテ

【非想天】 欲界の六欲天を打ち過ぎて色界に十八の天あり、その上に無色界の四空所とて四天ある、その最上の極天の名なり、
【皮相ノ士】 外貌のみを見て、内實を察すること能はざる士をいふ、韓詩外傳に「季札齊ニ遊ビ、遺金ヲ見テ牧者ヲ呼ビテ、之ヲ取ラシム、牧者ノイハク、子居ルコトノ高ク、視ルコトノ下ク、貌ノ君子ニシテ、而シテ言ノ野ナルヤ、吾君アルモ君トセズ、友アルモ友トセズ、暑ニ當リテ裘ヲ衣ル、君、金ヲ取ル者ト疑フカト、延陵子其ノ賢者タルヲ知リ、姓ヲ請ヒ問フ、牧者ノイハク、子ハ乃チ皮相ノ士ナリ、何ソ姓ヲ語ルニ足ランヤト、遂ニ去ル」史記陸賈傳に「足下以目皮相、恐失天下之能士」

【膝ヲ容ル】 (容膝)を見よ、
【飛棧】 「タカクケハシキ」カケハシ」雲棧に同じ、陸游の句に「—連雲是坦途」
【眉山】 隋の郡名、梁州に屬す、今の四川嘉定府樂山縣治、また宋の縣名、成都府路眉州に屬す、今の四川眉州治、

【糜散】 猶ほ消滅の如し、楚辭に「名—而不彰」
【非三非一】 太平記卷八に「號神山王、須有—」

コノ儘ニシテ微ヲ顯ニスト讀ムモ可ナリ、易經繫辭下傳に「夫易彰、往而察來、—」

【飛語】 誰の言ひしとも知れざる無根の語をいふ、漢書灌夫傳に「迺有—、爲惡言、聞上」上は武帝、

【貔虎】 貔は一名執夷、虎の屬、—は猛勇の士に喩ふ、書經牧誓に「尙桓桓如虎、如貔、如熊、如羆」

【靡盬】 (盬コト)を見よ、
【蜚鴻】 蟻蟻(カツラムシ)なり、「ヌカガ」といふ小蟲の類、史記周本紀に「—滿野」

【避穀】 避—に辟に作る、穀食を避けて仙を學ぶなり、(穀ヲ避ク)を見よ、

【糜、虎皮ヲ蒙ル】 (糜蒙虎皮)糜は鹿の一種「ナレシカ」諸侯にして天子の名器を收むるに喩ふ、史記楚世家に「若使、澤中之麋、蒙虎之皮、人之攻之、必萬、之於虎」

【彼蒼】 蒼天をいふ、蒼は深青色なり、詩經に「—者天」とあるに本づく、杜甫の詩に「餘力浮于海、端憂問—」韓愈の祭十二郎文に「—者天、曷其有極」

【秘藏】 「ヒメカクス」隠を秘とし、隱覆を藏とす、佛經の語、圓覺經に「爲諸菩薩、開秘密藏、涅槃經に「愚人不解、謂之—」智者了達、則不名藏、轉じて俗に珍重する義に用ふ、「—の品」「—娘」の如し、

之深理矣」とあり、山王の二字を佛法にあてていふ時、山の字は豎三畫横一畫なり、王の字は豎一畫横三畫なり、法華圓實の極説の三諦はつまり一諦にして、三の異を立てざるの義に同じ、譬へば、鏡と明と像との三は、その差あれども、しかも暫くも離るる時なきが如し、三にもあらず、又—にもあらず、これを—の深理といふ、三諦とは空(眞諦)假俗諦(中諦)なり

【丕子】 丕は元なり、元子の義、書經金縢に「是有—之責于天、以旦、代某之身」史記には丕を負に作る、索隱には、鄭説を引き、丕を讀んで負となす、且は周公の名に、披緇、緇は黒色の帛なり、墨染の衣を被て僧となるをいふ、高啓の句に「—別家人」

【諛辭】 諛は偏駁なり、孟子に「—知其所蔽」

【婢子】 婦人自ら卑めて稱する辭、左傳僖二十二年に「使—侍執巾櫛」

【罷士】 「ツカレ」クタビレ」たる男、國語の齊語に「—無伍、罷女無家」

【臂使】 臂で指を使ふ如く、わが思ふままに人を使役する義、賈誼の文に「如身之使、臂臂之使、指莫不制從」

【美士】 身體の美くしき士をいふ(肥白)を見よ、

【比周】 比はかたよりて黨するなり、周は徧くゆきわたるなり、皆人と親厚するの意なれども、周は公にして、比は私なり、論語爲政篇に「君子周而不比、小人比而不周」註に「忠信ヲ周トシ、阿黨ヲ比トナス」また公私の別なく、ただ親む義に用ふるにあり、左傳に「頑嚚不友是與」あるの類、

【眉州】 唐は劍南道に、宋は成都府路に、元は四川省嘉定府路に、明は四川省に屬す、今の四川省一治これなり、

【微子去リテ般ノ代傾ク】 太平記卷十三に見ゆ、紂王愈淫亂にして止まず、微子數諫むれども聽かず、乃ち大師少師と謀りて遂に去る、やがて周の武王の爲めに亡ぼさる、事は史記の般本紀に出てたり

【飛耳長目】 飛耳は、能く遠きを聞き、長目は能く遠きを視るをいふ、管子に「一曰長目、二曰飛耳、三曰樹明、明知千里之外、隱微之中、樹は立なり、

【皮日休】 字は襲美、唐の襄陽の人、文を能くし進士に擧げられ、孟浩然と鹿門山に隱れ、自ら醉吟先生と號し、また酒民といふ、酒箴食箴を作る、陸龜蒙と友たり、松陵倡和詩集あり、官太常博士に至る、著すところ皮

子文數十卷あり、孫の文榮も亦詩文を能くし、官鴻臚少卿に至る

【鄙事ニ多能】 (多能鄙事) 論語子罕篇に「子曰、吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也、鄙事とは、釣弋獵較の如き藝能をいふ、

【匪兇匪虎】 (兇ニ匪ズ、虎ニ匪ズ) 賢人が災厄に遇ひて其の不幸を嘆ずるを「一—」之歎といふ、史記孔子世家に孔子が將に楚に之きたまはんとて陳蔡の間にて厄せられたまひし事を敘して曰く「楚人ヲシテ孔子ヲ聘セシム、陳蔡ノ大夫謀リテ曰ク、孔子ハ賢者ナリ(中略)孔子楚ニ用ヒラルレバ、陳蔡ノ事ヲ用フル大夫危シト、是ニ於テ乃チ相與ニ徒役ヲ發シ、孔子ヲ野ニ圍ム、行クコトヲ得ズ、糧ヲ絶ツ、從者病ミテ能ク興ツ莫シ、孔子講誦弦歌シテ衰ヘズ、子路慍リ見エテ曰ク、君子亦有窮乎ト、孔子曰ク、君子固窮、小人窮ス濫矣ト(中略)孔子、弟子ノ慍色アルヲ知リ、乃チ子路ヲ召シテ問ヒテ曰ク、詩云、匪兇匪虎、率彼曠野、吾道非耶、吾何爲於此云云」とあるに本づく、詩は、小雅何草不黃篇に出づ

【皮子文藪】 十卷唐の皮日休撰す、その文大抵經術に原本す、その孟子を以て學科に立てんと請ふ如き尤辭ヲ唱フレバ即チ寂然トシテ動かズ、學圃餘疏に「一—」一名ハ滿園春、千葉ノ者佳ナリ、花鏡に「一—」花葉罌粟ニ類シテ小ニ一本數十花アリ、

も卓見となす、詩は陸魯望と名を齊うす、この書收むるところの詩、僅に一巻なるは、蓋し已に松陵集に入れる者は重ねて載せざるに由る、

【非心】 非は不是なり、非僻の心をいふ、書經罔命に「格其—」俾克紹先烈、また孟子離婁上に「惟大人能格君心之非、

【鄙人】 「イヤシキ」人、小人に同じ、淮南子修務訓に「一—」有得玉璞者、

【美人】 容貌の美しき婦女をいふ、李白の詩に「一—」捲珠簾、深坐懸蟬眉、

また吾が君に比していふこと、王逸の離騷の序に見ゆ、楚辭九歌に「望—」兮未來、

また賢人君子に比していふ、詩經の誰之思、西方—」の鄭箋に「周室ノ賢者ヲ思フナリ、蘇軾の赤壁賦に「渺渺兮吾懷望—」兮天一方、

また女官の稱、事物紀原に「漢ノ光武、—」ヲ置ク、歴代多ク之レアリ、國初モ亦之ヲ置ク、正四品ナリ、通典ニ前漢内命婦ニ—」アリ、

【虞美人】 賈氏談錄に「褒斜山中ニ—」草アリ、行路ノ人、見ル者或ハ—」ヲ唱フレバ、即チ兩葉漸ク搖動シ、人ノ撫掌ノ狀ノ如ク、頗ル節拍ニ應ズ、或ハ他ノ

【美人蕉】 琉球に多く産す、寒を畏れ湿地を忌む、芭蕉に似て小く、葉も狭く短し、花は朱色にて、メウガの花の如く、瓣狭く三寸許、左右に互生すること四五寸なり、一に紅蕉ともいふ、伊藤圭介曰く、美人蕉ハ、ヒメバセウト訓ム、天和年中琉球ヨリ渡リ、薩摩日向ニ多ク播殖ス、錦字箋に「福州ニ産スル者、佳ナリ、冬春ヲ歴テ凋マズ、花ハ紅黄色ニシテ瓣ハ蓮ヨリモ大ナリ、金蓮實相ト號ス、

【非常】 事變の義、漢書燕王傳に「修武備、備—」

【飛將】 猶ほ鳥將の如し、漢書李廣傳に「廣在郡、匈奴號曰漢—」軍、避之、

【非常ノ事アリテ然ル後チニ非常ノ功ヲ立ツ】 (有、非常之事、然後立、非常之功) 太平の世に於ては、大功を立て難きをいふ、司馬相如の難蜀父老檄に「蓋世必有非常之人、然後有非常之事、—」

【飛錫】 釋氏要覽に「今僧ノ遊行スルヲ飛錫ト嘉稱ス、コレ高僧隱峰ノ五臺ニ遊ビ、淮西ニ出ヅルニ錫ヲ擲

チ空ニ翻リテ往キシニ因ル」とあり、また、今、僧ノ止リテ住スル所ノ處ヲ掛錫ト名ツクルハ、凡ソ西天ノ比丘、行クキハ必ズ錫杖ヲ持ツ、錫ヲ持ツニ二十五ノ威儀アリ、凡ソ室中ニ至レバ地ニ著クルヲ得ズ、必ズ壁牙ノ上ニ掛ク、故ニ掛錫トイフ、高僧傳に、有神僧飛錫凌雲而行

【毘沙門】梵語多聞と譯す、福德の名、四方に開ゆ、須彌山の半第四層の水精埵に居す、北方の天王にして无量百千の藥叉を統領し、北方を守護す、一説に恒に佛の道場を護り、説法を聞くと以て多聞といふ、法華經科注に、此云多聞、居須彌北面即護世四天王

【匕首】鏑なき短刀、アヒクチ、其の頭ヒに類する故に、一といふ、史記吳世家に、使專諸置匕首於炙魚之中、以進食、また刺客傳に、圖窮匕首見

【眉壽】眉秀てて命長きをいふ、詩經幽風に、爲此春酒、以介眉壽、また小雅南山有臺篇に、樂只君子、遐不作、一【美珠ヲ得レバ身ヲ剖キテ之ヲ藏ス】(得美珠、剖身藏之)(宅ヲ徙シテ)を見よ、【美須豪眉】ウツクシキ口鬚と、大いなる眉、後漢書趙壹傳に、趙壹字ハ元叔、漢陽西縣ノ人、體貌魁梧、身ノ長

九尺、一—之ヲ望ムニ甚ダ偉ナリ、而シテオヲ特ミテ倨傲郷黨ノ爲メニ擯ケラル

【批】臣下より上つる所ろの表奏の尾に、天子自ら答敎を書せらるるを批といふ、准は準の俗字にて、許スの義、谷響集に、客曰御批或ハ勅批トイフ、批ノ字ノ意如何、答、凡ソ書尾ニ署ス、之ヲ批ト謂フナリ、批本撓ニ作ル、説文ニ云フ、反手擊也ト、帝皇ノ詔答之ヲ批ト謂フハ、之ヲ上ル所ノ表奏ノ尾ニ批スルナリ

【秘書】天子の藏書をいふ、夢溪筆談に、後漢之時、藏書東觀、在禁中、至桓帝之時、始置一—監、支配一切、一—之名始此

【秘書監】初學記に、按ズルニ一—ハ後漢ノ桓帝置ク、圖書秘記ヲ掌ドル、故ニ秘書トイフ、後之ヲ省ク、獻帝ノ建安中ニ至リ、曹操魏王トナリ、秘書令ヲ置キ、尙書ノ奏事ヲ典ル、即チ中書ノ任ナリ、また圖書秘記ノ事ヲ兼ネ掌ル、魏文、黃初ノ初、秘書ヲ分チ、中書ヲ立テ、中書自ラ令ヲ置キ、尙書ノ奏事ヲ典リ、而シテ秘書ハ

令ヲ改メ監トナシ、別ニ文籍ヲ掌ル、初メ漢制ニ、尙書中書ハ、少府ニ屬シ、秘書ハ中書ノ官ニ本ヅク、故ニ魏ノ秘書ハ、即チ漢ノ東觀ノ職ナリ、安シテ復タ少府ニ屬スベケント、此ヨリ復セズ、晉武ニ至リ、マタ秘書ヲ以テ并セテ中書省ニ入レ、其ノ監ヲ省ク、晉惠復タ別ニ一—一人ヲ置ク、後世之ニ因ル、龍朔二年、秘書省ヲ改メ蘭臺トイヒ、其ノ監ヲ改メ太史ト名ヅク、咸亨元年復タ一—トナス、天授ノ初、秘書ヲ改メ麟臺トイヒ、其ノ監ハ改メズ、神龍ノ初、舊ニ復ス

【避暑會】開元遺事に、長安富家ノ子ハ、暑伏中ニ至ル毎ニ、各林亭内ニ於テ畫柱ヲ植テ、錦綺ヲ以テ結ビ涼棚ヲ爲リ坐具ヲ設ケ、避暑ノ會ヲ爲ス

【翡翠】カハセミナリ、格物論に、一—ハ形小ニシテ握ニ盈タズ、一種ニシテ二色ナリ、翡ハ赤羽、翠ハ青羽、鶴ノ羽モ亦翠、鸚鵡モ亦翠、紫縷大サ、鳥ノ如シ、皆珍禽ナリ、翠雀一名ハ魚狗、爾雅ニマタ翠鶴ト名ヅク

【淝水ノ戰】秦王苻堅大舉して晉を攻めんことを議す、或人曰く、晉には長江の險あり、未だ容易にこれを攻むべからずと、堅曰く、吾が衆を以て鞭を江に投ぜば、其の流を斷つべしと、戎卒六十萬、騎二十七萬を發して水陸齊しく進む、晉謝安の弟石と兄の子玄とに

命じてこれを防がしむ、堅、壽陽城に登り、晉兵の部伍整然たるを見て、始めて懼るる色あり、秦兵進みて淝水に陣す、玄人をして謂はしめて曰く、請ふ陣を移して少しく卻き、我が兵をして渡るを得しめ、以つて勝負を決せんと、堅、晉兵の半渡るを俟ち、これを覺めんと欲し、兵を麾きて却かしむ、是より先、晉の襄陽の刺史朱序執へられて、秦の陣後により呼びて曰く、秦兵敗ると、秦兵これを聞き、秦兵の走るもの、八甲山の草木を見て皆兵なりとなし、狼狽して逃げ歸れり

【批政】批は穀の實のらざるもの、シヒナ、轉じて惡の義とす、一—は、惡しき政なり、弊政に同じ、國語の晉語に、軍無一—、また批は糝に同じ、晉書に、朝無批政、入無謗言

【微生高】微生は姓、高は名、魯國の人、素より正直の名あり、論語公冶長篇に、子曰、孰謂一—直、或乞醢焉、乞諸其隣、而與之醢、醢は醢スなり、是を是とし、非を非とし、有を有とし、無を無とするを直といふ、高の或人に無を以て告げずして、之が爲めに代りて鄰に乞ひて與へたるは、人の美を掠めて吾の恩を市る者なれば、正直者とはいふべからずとの意

尾生之信

約束を固執して、變通を知らざるをいふ、史記の蘇秦傳に「尾生、女子ト梁下ニ期ス、女子來ラズ、水至レドモ去ラズ、柱ヲ抱イテ而シテ死ス、信此ノ如キアリ」また蘇秦燕王に見えて曰く「今孝ナルコト曾參ノ如ク、廉ナルコト伯夷ノ如ク、信ナルコト尾生ノ如クナルコトアラン、此ノ三人ノ者ヲ得テ以テ大王ニ事ヘシメバ何若ト、王曰ク、是リナント」莊子の盜跖篇に「尾生ノ溺死セシハ信ノ患ナリ」

微小

すべて形の小ささをいふ、荀子非相に「一短瘠」

不積

不は大なり、積は功勳なり、大功に同じ、書經大禹謨に「予懋乃德、嘉乃一」

匪石ノ心

堅くして動かすべからざる心をいふ、詩經邶風柏舟篇に「我心匪石、不可轉」本づく、晉書王導傳に「實頼元宰、固懷匪石之心、潛運忠謀、竟剪吞沙之寇」

眉尖刀

「ナギナタ」武備志に見ゆ

斐然トシテ章ヲ成ス

論語公冶長篇に「子在陳、曰、歸與歸與、吾黨之小子、狂簡斐然成章」とあり、斐然とは文ある貌、成章とはその爲る所、文理ありて觀るべきをいふ

比疎

櫛なり、金にて作る、匈奴の單于の辮髪の裝飾

絶其乳哺、立可餓殺

また鼻息は、ハナイキの義、宋史王韶傳に「侍者往往股栗、而韶一自如」

陂池

地平かならざるなり、司馬相如の子虛賦に「罷池——下屬江河」陂は陀の俗字、一に池に作る、陂一音ハ

飛蛇

霧にのりて飛ぶといふ蛇、山海經中山經に「柴桑之山多——鰐蛇に同じ、

否泰

周易の二の卦の名、否は塞なり、泰は通なり、程傳に「天地隔絶不相交、所以爲否也、天地陰陽之氣相交而和、則萬物生成故爲通泰」

天地否

天地泰

尾大ナレバ掉ハズ

(尾大不掉) 獸の尾、大なれば掉かすこと能はざるの義にて、上弱く下強ければ、制御すること能はざるに喩ふ、左傳昭十一年に「末大必折、

國語に「邊境者國之尾也、譬之如牛馬處暑之既至、蛇蟻之既多、而不能掉其尾、淮南子に「禽獸之性、大者爲首、而小者爲尾、末大于本、則折、尾大于要、則不掉」

【獐多】 次第に平かになる貌、史記司馬相如傳に「陂池——文選の李善の註に「一ハ漸ク平カナル貌」

となすもの、疎は梳に通ず、一説に櫛の大にして齧髪を理むる者を疎といふ、その齒の稀疏なるをいふ、小にして細、齧齒を去る所以の者を比といふ、その齒の密比せるをいふと、詩經商頌良耜に「其比如櫛、比余」を參看せよ、

【飛鼠】 蝙蝠(カハホリ)の異名、揚子方言に「蝙蝠自關而東、或謂之——」

【鼻祖】 人の始祖をいふ、揚子方言に「鼻ハ始ナリ、獸ノ初生、之ヲ鼻トイヒ、人ノ初生、之ヲ首トイフ、梁益ノ閉」ニテハ鼻ヲ謂ヒテ初トナシ、或ハ之ヲ祖ト謂フ、野客

觀反離騷の註に「一ハ始祖ナリ(中略)鼻ト祖ト皆始」ノ別名、凡ソ人孕胎スルヤ必ず先ヅ鼻アリ、然ル後ニ

耳目ノ屬アリ、今、人ヲ畫クモ亦然リ、必ず先ヅ鼻ヲ畫ク」正字通にも「人之胚胎鼻先受形、故謂始祖爲——」

【卑阪】 阪一音スウ——は愧怍(ハヅル)の貌、莊子天地篇に「子貢——失色、項頊然、不自得」

【飛走】 禽獸をいふ、吳都賦に「窮——之棲宿」

【卑屬】 目下の親類、家禮儀節に「一——謂兄弟子孫」とあり(尊屬)を參看せよ、

【鼻息ヲ仰グ】 (仰鼻息) 人の喜怒を伺ふをいふ、後漢書袁紹傳に「孤客窮軍、仰我鼻息、譬嬰兒在股掌之上、

【日中スレバ則於キ、月盈ツレハ則食ク】 (日中則於月滿則食) 物は盛の極るときは衰ふる義、易の豐卦に「一——天地盈虛、與時消息、而況於人乎、況於鬼神乎」と盈虛は盛衰をいひ、消息は進退をいふ、天地の運も亦時に隨ひて進退するをいふ、史記蔡澤傳に「日中則移、月滿則虧、物盛則衰、天之常數也」とあるも、

【指ヲ使フガ如シ】 (如指使指) 意の如くならざる

【美疾ハ惡石ニ如カズ】 (美疾不如惡石) 疾疾は美なりと雖も身を害ふ、藥石は惡なりと雖、病を治す、以て

【石也】 一事に——矣、夫石猶生我疾、疾之美、其毒滋多、

【比箸】 食事に用ふる、(サジ) 飯匙なり、三國志蜀志劉先主傳に「曹公從容謂曰、今天下英雄、惟使君與操耳、本初

【美女ハ醜婦ノ仇ナリ】 說苑尊賢篇の語(盛徳ノ士)を

見よ、

【筆築】(感築)を見よ、

【楨ヲ買ヒ珠ヲ還ス】(楨ヲ買ヒ)を見よ、

【筆耕】書を寫して生活するをいふ、筆を以て農耕に、

代ふる義、東觀漢記に「班超家貧シ、官ノ爲メニ備ハレ

書ヲ寫ス、筆ヲ投ジテ歎ジテ曰ク、丈夫獨リ傳介子ニ

効ヒテ、功ヲ絶域ノ地ニ立テズ、安ゾ久シク筆耕セン

乎」とあり、また事文類聚にも「王勃文ヲ能クス、請フ者

甚ダ多ク、金帛盈積ス、人謂フ、心織リテ衣、筆耕シテ

食フト文選任昇彦薦士表に「既一而爲養」

【筆格】フデカケ、楊文公談苑に「宋錢思公有「珊瑚

一、子弟竊之、公以「十千購之、筆架、筆牀皆同じ」

【筆諫】唐書柳公權傳に「穆宗柳公權ニ書法ヲ問フ、公

權曰ク、心正則筆正ト上容ヲ改メソノ筆ヲ以テ諫

ムルヲ知ルナリ、筆法に託して諫めたる義、

【畢竟】結局の義、ツマルトコロ、宋文鑑に載する、范

質の戒從子景詩に「勢位難久居、一何足恃、註に「一

ハ終ナリ」

【畢沅】字は、績衡、秋帆と號す、江南鎮洋の人、乾隆二十

五年第一人に及第す、官兵部尚書湖廣總督に至る、才

を愛する渴するが如く、一時の名士多くその門に遊

ぶ、嘉慶二年卒す、年六十八、續資治通鑑二百二十卷史籍考、經訓堂法帖を輯め、墨子に註す、自ら靈巖山人と號す、靈巖山人集あり、

【筆硯ヲ燒カント欲ス】(欲燒筆硯)文を作ることを廢せんと欲する意、事文類聚卷五に「陸雲與兄機書曰、君苗見兄文、輒欲燒其筆硯、君苗は雲の小字、兄は陸機を斥す、

【筆削】筆すべき事は筆し、削るべき事は削る義、削とは削刀にて文字を削り去るなり、史記孔子世家に孔子が春秋を作られし事を述べて、孔子在位、聽訟、文辭有可與人共者、弗獨有也、至爲春秋、筆則筆、削則削、子夏之徒、不能贊一辭、

【必死】死力を盡すをいふ、漢書朱博傳に「且喜且懼、對曰、一死」

【匹似】匹は餘冬序錄に「匹讀ミテ譬ノ如クス」とあり、譬ハ何何ノ如シといふ意、詩に多く用ふ、黃庭堅の詩に「田多殺少、無人會、一無田過一生、匹如に作る同じ、元稹の酬樂天醉別に「前同一去五年別、此別又知何日同、好住樂天休、恨望匹如元不到京來、

【拂士】拂は弼に通ず、輔弼の賢士をいふ、孟子告子篇下に「入則無法家、一、出則無敵國外患者、國恒亡、

【羊ヲ亡ヒ牢ヲ補フ】(亡羊補牢)牢は羊を閉ぢ養ふ所の圍なり、過ちて而して後に悔い改むるの意、戰國策に「見兔而顧犬、未爲晚也、亡羊而補牢、未爲遲也」

【羊ヲシテ狼ニ將タラ使ム】(使羊將狼)柔弱の人をして、强悍の卒を率ゐしむるに喩ふ、漢書の張良傳に「太子ノ與ニ俱ニスル所、諸將ハ皆上ト天下ヲ定メタル梟將ナリ、今適チ太子ヲシテ之ニ將タラシム、此レ羊ヲシテ狼ニ將タラシムルニ異ルナシ、皆肯テ用フ爲サズ、其ノ功ナキヤ必セリ、

【羊ヲ烹ル】(烹羊)を見よ、

【羊ノ歩】人命の日日死に近づくに喩ふ、摩耶經の偈に「譬如旃陀羅驅羊、就屠所、步步近死地、人命亦如是」とあるに本づく、旃陀羅とは梵語にて屠手の義、羊は至りて愚なる者なれば人の心に譬へしなり、

【匹如】(匹似)を見よ、

【苾芻】「ヒチシユ」とも讀む、比丘に同じ、舊譯に比丘といひ、新譯に苾芻といふ、釋氏要覽に「苾芻ハ西天ノ草ノ名、五徳ヲ具フ、故ニ將テ出家ノ人ニ喩フ(中畧)ニハ體性柔軟、二ニハ蔓ヲ引キテ旁ク布ク、三ニハ馨香遠ク聞ユ、四ニハ能ク疼痛ヲ療ス、五ニハ日光ニ背

カズ(比丘)を参考せよ、

【畢卓酒ヲ盜ム】成語考に「畢卓爲吏部、而盜酒、逸興太豪、晉書に「畢卓吏部郎トナル、比舍ニ酒ヲ釀シテ熟セリ、卓夜往キテ盜ミ飲ム、因リテ甕邊ニ醉臥ス、旦ニ之ヲ視レバ、乃チ畢卓吏部ナリ、

【筆塚】尙書故實に「僧ノ智永ハ王逸少(羲之)ノ子孫ナリ、書ヲ學ブコト年ヲ積メリ、秃筆ささのされたる筆ヲ千甕ニ入ル、一甕皆數石ヲ容ル、ベシ、後チニ之ヲ地ニウヅメ號シテ退一トイフ、

【筆頭花ヲ生ズト夢ミル】(夢筆頭生花)天寶遺事に「李白少時夢筆頭生花、自是才思贍逸、また南史に「江淹少時夢人授五色筆、由是文藻日新、後宿於冶亭、夢一丈夫自稱郭璞、謂淹曰、吾有筆在卿處多年、可以見還、乃探懷中得五色筆、以授之、自後爲詩、絕無美句、時人謂之才盡、

【畢ニ離ル雲】(離畢雲)七命に「將ニ雨フラントスルノ雲ヲ一トイフ、畢は二十八宿の一、アメフリボシ、

【匹馬隻輪】一匹の馬、一片の車輪をいふ、公羊傳僖二十三年に「一匹無還」とあり、大敗の狀をいへるなり、春秋の世は車戰を用ふ、故に隻輪といふ、

【感發】風寒さなり、詩經豳風七月篇に「一之日」

【匹夫匹婦】一夫一婦といふが如し、庶人の夫婦をいふ、左傳桓公十年の正義に、庶人夫妻相匹、其名既定、雖單亦曰匹、故通謂匹夫匹婦、蘇軾の荀卿論に「一匹一婦之所共知」

【盛沸】泉の湧き出づる貌、詩經小雅采芣に「一檻泉言采其芹」

【匹夫罪ナシ】璧ヲ懷キテ其罪アリ（匹夫無罪、懷璧其罪）もと罪なき者も、玉を懷くがために、禍を招くをいふ、左傳桓公十年に「初虞叔有玉、虞公求旃、弗獻、既而悔之曰、周諺有之、匹夫無罪、懷璧其罪、吾焉用此、其以買害也、乃獻之」

【匹夫之勇】匹は偶なり、配なり、合なり、匹夫匹婦は、庶人は夫妻相匹す、其の名既に定まる、單（ヒトリ）と雖も亦通ずと、賤しき人の血氣にはやる小勇をいふ、孟子梁惠王下に「王請フ小勇ヲ好ムナカレ、夫レ劔ヲ撫シ疾視シテ曰ク、彼レ惡ソゾ敢テ我ニ當ランヤト、此レ匹夫ノ勇、一人ニ敵スル者ナリ、王請フ之ヲ大ニセヨ」史記淮陰侯傳に「韓信曰項王啗啞叱、千人皆廢、然不能任屬賢相、此特一匹夫之勇耳」

【匹夫志ヲ奪フベカラズ】（匹夫不可奪志）論語子罕に「子曰三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也」註に「三

なるをいふ、左傳宣十二年に「訓之以若敖、勦冒一以啓山林、箴之曰、民生在勤、勤則不置、云々」

【飛鳥盡キテ良弓藏メラル】（狡兔死シテを見よ、批點）詩文などを評して、點を附くるをいふ、四庫全書總目經部禮類存目に「一檀弓二卷、舊本題宋謝枋得撰」

【悲田】貧民に施しするをいふ、通俗編に「釋典以供父母田爲恩田、供佛爲敬田、施貧窮爲一、後世謂養濟院曰一院取此」

【飛奴】鶴（ハト）の異名、事文類聚に天寶遺事を引きて「張九齡少時、群鶴ヲ養フ、親知ニ書ヲ與フル、每ニ鶴ノ足ニ繫ゲバ、教フル所、口ノ處ニ依リテ、往キテ之ヲ投ズ、目シテ飛奴トナス（鶴）を參看せよ」

【人ヲ繪ク者ハ、其情ヲ繪ク能ハズ】（繪人者不能繪其情）鶴林玉露に「繪雪者不能繪其清、繪月者不能繪其明、繪花者不能繪其馨、繪泉者不能繪其聲、繪人者不能繪其情、然則言語文字、固不足以盡道也」

【人ヲ誨ヘテ倦マズ】（誨人不倦）論語の述而篇に「子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉、人を教へてその能く知り能く行はんことを欲し、己の知

軍ノ勇ハ、人ニ在リ、匹夫ノ志ハ、己ニアリ、故ニ帥ハ奪フ可キモ、志ハ奪フベカラズ、若シ奪フベクンバ、亦之ヲ志トイフニ足ラズ（匹夫）を參看せよ、

【筆門圭竅】禮記の儒行篇に「一蓬戸甕牖」とあり、筆門は、荆竹を以て門を織るなり、圭竅は、牆を穿ちて之を爲る、門旁の小戸なり、上銳に下方にして、其の状圭の如しと、貧賤なる者の住む所の門牆なり、また左傳襄公十年に「筆門閭竇之人而陵其上、其難爲上矣」とあり、閭竅は、圭竅と同じ、

【盛築】「ヒチリキ」説文に「一筵管ナリ、蘆葉ヲ卷キ頭トナシ、竹ヲ截リ管トナス、胡地ニ出ヅ」また玉芝堂談薈に「悲慄ハ筆築、本ト悲栗ト名ヅク、胡中ニ出ヅ、其ノ聲悲ム、胡人吹キ以テ馬ヲ驚カス、一名ハ葭管、蘆ヲ以テ首ト爲シ、竹ヲ管ト爲ス、頭管ともいふ、九竅ありて皆角音、故に字角に从ふ、俗に筆に作る、

【筆力鼎ヲ扛グ】（筆力扛鼎）文章の力の強健なるを稱す、韓愈の詩に「龍文百斛鼎、筆力可獨扛、扛は擧なり、

【筆路藍縷】筆路は柴車なり、一説に荆竹にて編みたる車なりと、藍縷は敝衣なり、藍縷に同じ、揚子方言に「南楚凡人貧衣被醜弊謂之藍縷」一は事に勤儉

り得たることを盡して諄諄としてをしへて倦み怠ることなきなり、夫子實にこの三者を能くせざるにあらず、蓋し自ら謙して人の此に従事せんことをすすめたまひしなり、

【人ヲ鏡トス】（兼人）人に勝つをいふ、一解に、一人にして二人分を併すをいふ、論語に「求也退、故進之、由也一、故退之、また漢書韓信傳に「受辱於胯下、無一之勇、また荀子に「凡一者有三術、有以德一者、有以力一者、有以富一者」

【人ヲ罪スル學マデニセズ】（罪人不孥）孥は妻子なり、人を刑すると其の身に止めて、妻子にまで及ぼさざるなり、孟子に「關市譏而不征、澤梁無禁、一」また史記孝文紀に「一不誅無罪」

【人各能アリ不能アリ】（人各有能、有不能）人事は、萬事に兼通すること能はず、彼に長ずれば、此に短なるをいふ、左傳に「一」一とあり、

【人衆キトキハ天ニ勝ツ、天定マリテ亦能ク人ニ勝ツ】史記の伍子胥傳に「申包胥人ヲシテ子胥ニ謂ハシメテ曰ク、子ガ讎ヲ報ユルコト其レ甚シキカナ、吾レ之ヲ聞ケリ人衆者勝天、天定亦能勝人」とあり、註に

得たることを盡して諄諄としてをしへて倦み怠ることなきなり、夫子實にこの三者を能くせざるにあらず、蓋し自ら謙して人の此に従事せんことをすすめたまひしなり、

「人衆キ者ハ、一時ノ凶暴、天ニ勝ツト雖モ、天其ノ凶ヲ降スニ及ンデ、亦強暴ノ人ヲ破ル」

【人ヲ用フル瓜ヲ市フニ似タリ】（用人似市瓜）その人の實力を問はず、只その言貌を以て之を任用するに喩ふ、北史楊愔傳に「選ラ典ルコト二十年、人物ヲ獎擢シ、以テ己ノ任ト爲ス、然レドモ士ヲ取ルニ多ク言貌ヲ以テス、時ニ謗言ヲ致ス、以爲ラク倍ノ人ヲ用フルハ、貧士ノ瓜ヲ市フニ似タリ、其ノ大ナルヲ取ルト、倍聞キテ以テ意トナサズ」

【人ヲ以テ鏡ト爲ス】（以人爲鏡）人の行を見て、わが戒とする義、書經に「人無於水鑑、當於民鑑」とあり、墨子に「君子ハ水ニ鏡セズシテ、人ニ鏡ス、水ニ鏡スレバ、則チ容ノ面ヲ見ル、人ニ鏡スレバ、則チ其ノ吉凶ヲ知ル」とあり、唐書に「魏徵薨ズ、太宗朝ニ臨ミテ歎ジテ曰ク、銅ヲ以テ鑑トナセバ、衣冠ヲ正スベク、古ヲ以テ鑑トナセバ、興替ヲ知ルベク、人ヲ以テ鑑ト爲セバ、得失ヲ明カニスベシ、朕常ニ此ノ三鑑ヲ保チテ、内己ガ過ヲ防グ、今魏徵逝ク、一鑑亡ビヌト」

【人ヲ以テ言ヲ廢セズ】（不以人廢言）論語の衛靈公篇に「子曰君子不以言舉人、不以人廢言」とあり、上の句は德行を重んじ、下の句は名言を重んずるなり、

【人其ノ子ノ惡ヲ知ルナシ】（人莫知其子之惡）愛に溺るる者は、其の視る所も明かならざるをいふ、大學に「一タビ鳴カバ人ヲ驚カス」（一鳴驚人）一たび手を出せば人を驚怖せしむるをいふ、史記の滑稽傳に「齊ノ威王好シテ淫樂長夜ノ飲ヲ爲ス、百官荒亂シテ、諸侯竝ビ侵ス、國且ニ危亡セントスルモ、左右敢テ諫ムルナシ、淳于髡之ヲ説クニ、隱（いん）（ご）ヲ以テシテ曰ク、國中大鳥アリテ、王ノ庭ニ止マル、三年、飛バズ又鳴カズ、王此ノ鳥ノ何ト云フコトヲ知ルカト、王曰ク、此ノ鳥飛バズンバ則チ已マン、一タビ飛ババ天ニ冲ラン、鳴カズンバ則チ已マン、一タビ鳴カバ人ヲ驚カサント、是ニ於テ乃チ諸縣ノ令長七十二人ヲ朝セシメ、一人ヲ賞シ、一人ヲ誅シ、兵ヲ奮ヒテ出ヅ、諸侯振驚シテ、皆齊ノ侵地ヲ還ヘス、威行ハルルコト三十六年」

【人常ニ菜根ヲ咬ミ得バ則チ百事做スベシ】（人常咬得菜根則百事可做）宋の汪信民の語、呂氏師友雜誌に出づ、胡康侯この語を聞き節を撃ちて嘆賞せしといふ、人人寒素に耐へて奮勵せば、天下何事か成らざらむ、この語洵に味あり（咬菜）を見よ、

ヒトソ—ヒトニ

【人トシテ禮無クンバ胡ゾ過ク死セザル】（人而無禮

【人ヲ以テ鳥ニ如カザル可ケンヤ】（可以人而不如鳥乎）萬物の靈たる人と生れて微微たる鳥にだにも如かずして可ならんや、可ならずとの義、大學に「詩云緇黃鳥、止于丘隅、子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎、緇黃は黃鳥の聲、

【否徳】薄き徳なり、一解に不徳なり、書經堯典に「一忝（カシ）帝位」

【人古今ニ通ゼザレバ、馬牛ニシテ襟裾ス】（人として古今の道理に通ぜざるは、馬牛が襟裾ある衣服を著けたる如しと譏れるなり）燈火稍親ムベシを見よ、

【齊シカラシコトヲ思フ】（思齊）を見よ、

【日トシテ之ヲ忘ルルナシ】（無日忘之）一日も忘れざるをいふ、左傳に「余一人トシテ」余一人は、天子の自稱、

【人再冉トシテ行キ暮レヌ】（人再冉而行暮）十訓抄第十に引用せり、文選四の陸士衡の歎逝賦に「川闊水以成、川水滔滔而日度、世閱人而爲世、一」註に「関ハ總ナリ、滔滔ハ水ノ流ルル貌、衆水ヲ總ベテ其ノ川ヲ成シ、終日流去シテ水相續グヲ言フナリ、冉冉ハ人老ユル貌、衆人ヲ總ベテ世ヲ成ス、終日老謝シテ後人相繼グヲ言フナリ」

【人ニ逢ヒテ項斯ヲ説ク】（逢人説項斯）成語考に「逢人説項斯、表揚善行」註に「楊敬ガ項斯ニ贈ル詩ニイフ、幾度見君詩盡好、及觀標格、過于詩、平生不解藏、人善到處逢、人説項斯、尙書故實には、楊敬之愛、才公正、知江表士有項斯贈詩云（中略）斯因此名逢、長安、遂登科第」

【人ニ狂藥ヲ飲マセテ、人ニ正禮ヲ責ム】（飲人狂藥責人正禮）世説に「石季倫、嘗テ長水校尉孫季舒ト酣宴ス、孫、慢傲禮ニ過グ、季倫表シテ之ヲ免セント欲ス、妻叔則聞イテ之ニ謂ヒテ曰ク、季舒ノ酒狂ハ、四海ノ知ル所ナリ、足下人ニ狂藥ヲ飲セテ、人ニ正禮ヲ責ム、亦乖カズヤト」

【人ニ三怨アリ】（人有三怨）十訓抄第二に見ゆ、列子の説符に「狐丘謂孫叔敖曰、人有三怨、子知之乎、曰何

謂乎、對曰爵高者人妬之、官大者主惡之、祿厚者怨逮之、說苑の敬慎篇に「孫叔敖楚ノ令尹タリ一老父アリ、來リ弔シテ曰ク、身已ニ貴クシテ人ニ驕ル者ハ、民之ヲ去ル、位已ニ高クシテ權ヲ擅ニスル者ハ、君之ヲ惡ム、祿已ニ厚クシテ足ルコトヲ知ラザル者ハ、患之ニ處ルト、孫叔敖再拜シテ曰ク、敬ンデ命ヲ受ク、願クハ餘教ヲ聞カント、父曰ク、位スデニ高クシテ意益下リ、官益大ニシテ心益小ニ、祿スデニ厚クシテ、慎ンデ敢テ取ラズ、君謹ンデコノ三者ヲ守ラバ、以テ楚ヲ治ムルニ足ラント」

【人ニシテ不仁ナル之ヲ疾ム已甚シケレバ亂ス】（人而不仁疾之已甚亂也）孔子の語、論語に出づ、鄭玄の註に云ふ「不仁之人當以風化之若疾之甚是益使爲亂也」也。
 【人ニ施シテハ慎ンデ念フ勿レ】（施人慎勿念）崔子玉の座右銘中の句、下に「受施慎勿忘」とあり、註に「李善曰ク、戰國策ニ唐睢信陵君ニ謂ヒテ曰ク、人之有德於我、不可忘也、吾之有德於人、不可不忘也」とあり、（人ノ短ヲ）を參看せよ。
 【人ニ適ク】（適人）女子の嫁するをいふ、適は「ユク」なり、儀禮喪服の注に「凡、女行於大夫以上、曰、嫁、行於庶

人ニ曰「適人」
 【人ノ過、ヤ各其ノ黨ニ於テス】（人之過也、各於其黨、過とは無心にして道理に「ソムク」をいふ、仁者は常に厚に失し、不仁者は常に薄に失する如く、その黨類によりて異なるをいふ、論語里仁篇に見ゆ、過ヲ觀テ）を見よ。
 【人ノ己ヲ知ラザルヲ患ヘズ】（不患人之不己知）人の我が才徳を知りて呉れざるを患へざるをいふ、論語學而篇に見ゆ、孔子の語、下に「患、不己知人也」とあり、人の善惡邪正を知らざれば、交りて損あり益なきことありて、我が徳を進むるの助とならざる故なり、憲問篇にもこの語出づ、下に「患、其不能也」とあり、

【人ノ食物ヲ嫌フコトアレバ、其ノ身必ズ瘦ス】 十訓抄第一に見ゆ、孝經諫諍章の孔安國註に「凡ソ諫ハ上ヲ安ズル所以、猶ホ食ノ體ヲ肥スガ如シ、主ニシテ諫ニ從ハザレバ、則チ國亡ビ、人ニシテ食ヲ嘔ヘバ、則チ體瘠ス、嘔は音シ食を嫌ふなり、
 【人ノ心ノ濁レルヲウラミテ、ツヒニ滄浪ノ水ニ沈ム】 十訓抄第二に見ゆ、史記屈賈列傳に「屈原者名平、楚之同姓也、爲楚懷王左徒、博聞強志、明於治亂、嫺於辭令、入則與王圖議國事、以出號令、出則接遇賓客、應對諸

侯、王甚任之、上官大夫與之同列、爭寵、而心害其能、中略、頃襄王時、遇讒遷、於江南、屈原至、於江濱、被髮行吟、澤畔、顏色憔悴、形容枯槁、漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟、何故而至此、屈原曰、舉世混濁而我獨清、衆人皆醉而我獨醒、是以見放、中略、乃作懷沙之賦、中略、懷石遂自投汨羅、以死、孟子離婁に「孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓、云云、屈原の漁父辭にも亦この俚語を引けり、故に滄浪の水に沈むと書きたるならん（滄浪ノ水）を參看せよ、

【人ノ神智ヲ益スハ書籍ニ若クハナシ】（益人神智、莫如讀書）魏主、博士李先に問ひて曰く「天下何物可以益人神智、對曰、莫若書籍」大和俗訓に「古人も人の智惠を益すは書に若くはなしといへり」とあるは蓋しこの語を引きたるなり、
 【人之準繩】 人の「テホン」子華子に「仲尼人之準繩也」
 【人之水鏡】 世説に「衛伯玉尙書令トナルトキ、樂廣ガ中朝ノ名士ト談議スルヲ見テ、之ヲ奇トシテ曰ク、昔ノ諸人没シテヨリ已來、嘗ニ微言將ニ絶エントスルヲ恐レシニ、今乃チ復タ斯言ヲ君ニ聞ケリト、子弟ニ命ジテ之ニ造ラシム、曰ク此人、人之水鏡也、見之若披雲霧、觀青天ト」

【人ノ短ヲ道フナカレ、己ノ長ヲ説クナカレ】（無道人之短、無説己之長）文選の崔子玉の座右銘に「人ノ短ヲ道フナカレ、己ノ長ヲ説クナカレ、人ニ施シテハ、慎ンデ念フナカレ、施ヲ受ケテハ、慎ンデ忘ルルナカレ」
 【人ノ爲メニ謀リテ忠ナラザルカ】（爲人謀而不忠乎）論語學而篇に「曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎、曾子名は參、字は子輿、孔子の門人なり、忠は眞心を盡すをいふ、
 【人ノ知惠ヲ益スハ書ニ若クハナシ】（人ノ神智を見よ）
 【人ノ雞子ヲ食フ】（食人雞子）資治通鑑「子思諫衛侯、條に見ゆ、雞子は雞卵なり、顧炎武日知錄に「賦於民、而食者、取之於民也、人ニ雞子者、每人令出ニ雞子也」とあり、
 【人ノ將ニ死セントスル、ソノ言フヤ善シ】（鳥ノ將ニを見よ）
 【人ノ離下ニ寄ル】（寄人離下）人の「マネ」をするをいふ、事文類聚に「齊ノ張融ノ自序ニ云フ（中略）大丈夫當ニ詩書ヲ刪リ、禮樂ヲ制スベシ、何ソ因循シテ人ノ離下ニ寄ルニ至ラン」
 【人ハ刀俎タリ我ハ魚肉タリ】（人爲刀俎、我爲魚肉）

【人ノ離下ニ寄ル】（寄人離下）人の「マネ」をするをいふ、事文類聚に「齊ノ張融ノ自序ニ云フ（中略）大丈夫當ニ詩書ヲ刪リ、禮樂ヲ制スベシ、何ソ因循シテ人ノ離下ニ寄ルニ至ラン」
 【人ハ刀俎タリ我ハ魚肉タリ】（人爲刀俎、我爲魚肉）

玉葉、柯疊黃金丸

【琵琶】 樂器ノ名、廣韻に「手ヲ推スヲ琵琶トナシ、手ヲ引クヲ琶トナス、ソノ鼓スル時ノサマニ取リテ名トナス」と胡地より出づ、多く馬上にて之を鼓せしといふ、木製にして、體を甲といふ、楢扁にして二尺餘あり、棹の頭轉手のある處背に折れたり、四絃四柱、抱きて撥にて彈ず、和名「ヨツノヲ」に批把に作る風俗通に「一ハ近代樂家ノ作ル所、起ル所ロヲ知ラズ、長サ三尺五寸、天地人ト五行トニ法リ、四絃ハ四時ニ象

【鄧倍】 鄧は凡鄧、倍は背に同じ、凡鄧にして理に背くをいふ、論語泰伯篇に「出辭氣斯遠」一矣一説に、倍は俗の誤りならんと

【未萌】 變故の未だ生ぜざる前をいふ、漢書張安世傳に「所以安社稷絶一也」

【彌望】 彌は遠なり、互なり、眺望遠く互るをいふ、文選潘岳の西征賦に「黃壤千里、沃野一」

【未亡人】 寡婦の自稱なり、左傳の莊二十八年に見ゆ、註に「婦人既ニ寡ニシテ、自ラ未亡人ト稱ス」婦人は夫死すれば從つて死すべしに未だ死せずして世に存在せりとの意にて寡婦の謙して自ら稱する語となるな

浮陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟、主人下馬客在船、舉酒欲飲無管絃、醉不成歡慘將別、別時茫茫江浸月、忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發、尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲、移船相近邀相見、添酒回燈重開宴、千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面、轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情、絃絃掩抑聲聲思、似訴平生不得志、(志、一本作意)低眉信手續續彈、說盡心中無限事、輕攏慢捻撥復挑、初為霓裳後六么、(撥、一本作抹)霓裳六么共曲名、大絃嘈嘈如急雨、小絃切切如私語、嘈嘈切切錯雜彈、大珠小珠落玉盤、閉關鶯語花底滑、幽咽泉流水下灘、水泉冷澌絃凝絕、凝絕不通聲暫歇、別有幽愁暗恨生、此時無聲勝有聲、銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀槍鳴、曲終收撥當心畫、(收、一本作抽)四絃一聲如裂帛、東船西舫悄無言、唯見江心秋月白、(沉吟放撥)絃中放、一本作收、整頓衣裳起斂容、自言本是京城女、家在蝦蟇陵下住、十三學得琵琶成、名屬教坊第一部、曲罷常教善才服、常、一本作長、高齋詩話、元和中、曹保有子善才、善才有子綱、皆執琵琶、妝成每被秋娘妬、五陵年少爭纏頭、一曲紅綃不知數、鈿頭雲篋擊節碎、血色

り、左傳成九年に「穆姜出于房、再拜曰、大夫勤勞不忘先君、以及嗣君、施及一、これ魯の穆姜自ら稱して一」といへるなり、同十四年にも衛の定姜自ら一」と稱せし事見ゆ、されば他人の寡婦を稱して一」といふは無禮なり、

【誹謗之木】 帝堯の時、木を橋梁の上に建て、政治の過失を書せしめ以て反省せられたるをいふ、史記孝文紀に「古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、また淮南子に「堯置敢諫之鼓、舜立誹謗之木(諫鼓)また(登聞鼓)を見よ、

【琵琶行】 唐の白居易字は樂天の作れる詩、竝に序あり左に録す、

琵琶行并序

元和十年、予左遷九江郡司馬、(九江郡は今の江西省の楊子江の南、明年秋、送客湓浦口、聞船中夜彈琵琶者、聽其音、錚錚然有京都聲、問其人、本長安娼女、嘗學琵琶於穆曹二善才、年長色衰、委身爲賈人婦、遂命酒、使快彈數曲、曲罷憫然、自敘少小時歡樂事、今漂淪憔悴、轉徙於江湖間、予出官二年、恬然自安、感斯人言、是夕始覺有遷謫意、因爲長句歌以贈之、凡六百一十六言、命曰琵琶行、

羅裙繡酒污、今年歡笑復明年、秋月春風等閑度、弟走從軍阿嬈死、暮去朝來顏色故、(故、一本作改)門前冷落鞍馬稀、老大嫁作商人婦、商人重利輕別離、前月浮梁買茶去、饒州浮梁縣、乃產茶之地、去來江口守空船、遠上船月明江水寒、夜深忽夢少年事、夢啼妝淚紅闌干、我聞琵琶已歎息、又聞此語重唧唧、同是天涯淪落人、相逢何必曾相識、我從去年辭帝京、謫居臥病滄陽城、滄陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲、住近湓江地低濕、黃蘆苦竹遶宅生、其間旦暮聞何物、杜鵑啼血猿哀鳴、春江花朝秋月夜、往往取酒還獨傾、豈無山歌與村笛、嘔啞嗚咽難爲聽、嘔啞嗚咽言其聲韻粗俗也、今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明、莫辭更坐彈一曲、爲君翻作琵琶行、感我此言、良久立、卻坐促絃絃轉急、淒淒不似向前聲、滿座重聞皆掩泣、(重聞、一本作聞之)就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕、

【琵琶魚】 (一)一)を見よ

【肥白】 體肥えて色白し、史記張丞相傳に「蒼坐法當斬解衣伏質、身長大一、如狐、時王陵見而怪其美士、乃言沛公、赦勿斬、

【飛白】 書の一體にして、カスリガキの文字なり、書斷

に「飛白ノ書ハ、後漢ノ蔡邕ノ作ル所ノナリ、王隱、王愔
竝ニイフ、飛白ハ楷制ヲ變ズルナリ、本是レ宮殿ノ題
署、勢亦勁大字宜シク輕微ニシテ滿タザルベシ、名ツ
ケテ飛白トナス、王僧虔云フ、一ハ八分ノ輕キ者ナ
リト、此ノ説アリト雖モ、按ズルニ漢ノ靈帝嘉平、蔡邕
ニ詔シテ聖皇篇ヲ作ラシム、篇成リテ鴻都門ニ詣リ
テ上ル、時ニ方ニ鴻都門ヲ修飾ス、伯喈門下ニ待詔シ
テ役人ノ聖帚ヲ以テ字ヲ成ヌヲ見、心ニ悅ブアリ、歸
リテ一ノ書ヲ爲ル、漢末魏初竝ニ以テ宮闕ニ題署
ス、其ノ體ニアリ、法ヲ八分ニ糶メ、微ヲ小篆ニ窮ム、蔡
公ノ妙ヲ設クルニ非ルヨリハ豈能ク此ニ詣ラン勝奇
莫通縹渺神仙ノ事ト謂フ可キナリ」

【肥馬ノ塵ヲ望ム】 太平記資朝俊基關東下向の條に見
ゆ、富貴の者に追從する義、杜甫の詩に「朝扣富兒門、暮
隨肥馬塵、殘盃與冷炙、到處潛悲辛」とあるに本づく、
【疲馬ハ鞭董ヲ畏レズ】 (疲馬不畏鞭董) 人貧しく疲
るとときは生を輕んじて、刑罰を畏れざるに至るに
喩ふ、鹽鐵論に「一ノ一ノ弊民不畏刑法」
【比比】 頻頻といふに同じ、漢書成帝紀に「郡國一」地
動」
【披披】 長くなびく貌、楚辭大司命に「靈衣兮一」楚辭
思古に「髮一」
【披靡】 震ひ伏す貌、草が風に吹き倒されてなびき伏
せる様をいふ、史記項羽本紀に「漢軍皆一」廉蘭傳に
「相如張、目此之、左右皆靡」
【狃狃】 禽獸の群がり走る貌、柳宗元の封建論に「艸木
榛榛鹿豕一」
【菲菲】 芳香の貌、楚辭に「芳一」其彌章、また雜なり、
後漢書梁鴻傳に「志一」于升降、註に「高下定ラザルナ
雪一、行道遲遲、註に「一ハ雪甚シキ貌」
また雲の起る貌、漢書揚雄傳に「雲一而來迎」
【駢駢】 馬の行きて止まらざる貌、詩經小雅四牡篇に

四牡一、周道倭遲、周道は大道、倭遲は回遠の貌、
【靡靡】 相隨從する貌、書經畢命に「商俗一、利口惟賢」
また遲遲といふが如し、詩經王風に「行邁一」
【瀾瀾】 水の盛なる貌、詩經邶風新臺篇に「新臺有、泚、
河水一」

【豐豐】 倦まざる貌、易の繫辭上傳に「成、天下之、
また強勉なり、詩經大雅文王篇に「一」文王、令聞不
已、釋常談に「事相續クルアル一トイフ」
【紕繆】 舛戾(タガヒモトル)なり、大雅の傳に「猶、錯也」
禮記に「五者一物一、民莫得、其死」漢書于定國傳に
は錯繆に作る、

【響ヲ聞キテ欣然タリ】 (聞響欣然) 圓機活法に「陶弘
景、特ニ松風ヲ愛シ、庭院皆松ヲ植ウ、毎ニ其ノ響ヲ聞
キテ欣然トシテ自ラ樂ミ、獨リ其ノ下ニ遊ブ、人以テ
仙ト爲ス」

【響行雲ヲ過ム】 (響過行雲) 歌聲の美妙なるを稱する
語なり、列子に「薛譚謳フコトヲ秦青ニ學ブ、未ダ青ノ
技ヲ窮メズ、自ラ謂ヘラク之ヲ盡セリト、遂ニ辭シテ
歸ル、秦青止メズ、郊衢ニ饒シ節ヲ撫デ悲歌ス、聲林木
ニ振ヒ、響行雲ヲ過ム、薛譚乃チ謝シテ反ルヲ求メ、終
身敢テ歸ライハズ」とあり、類書纂要にも「秦青善歌、響

過行雲」とあり、
【日畢ニ在リ】 (日在畢) 禮記月令に「孟夏之月一」
また仲夏之月、日在東井、また季夏之月、日在柳、畢
東井、柳は皆星宿の名、
【妃嬪】 初學記に「周禮ニ天子ノ后、六宮ヲ立ツ、三夫人、
九嬪ニ二十七世婦、八十一御妻アリ、以テ婦順ヲ明章ニ
ス、故ニ天下内和ギテ家理マルト(以上禮記昏義の文
も同じ)漢ハ秦ノ制ニ因リ、正嫡ヲ皇后ト曰ヒ、ソノ餘
ハ内職ニ夫人、美人、良人、八子、七子、長使、少使ノ號ア
リ、武帝ハ婕妤、姃娥、容華、充衣ヲ加フ、元帝ハ昭儀ヲ
加フ(中略)光武中興シ竝ニ前制ヲ省キ、正嫡ノ外惟貴
人、美人、綵女ノ號ヲ立ツ、魏ノ武帝ハ西漢ニ因リ、夫
人、昭儀、婕妤、容華、美人ヲ置ク、文帝ハ貴嬪、淑媛、脩容、
順成、良人ヲ増シ、明帝ハ淑妃、昭華、脩儀ヲ増シ、晉武
ハ漢魏ノ號ヲ採リ、以テ周ノ六宮ニ擬シ、貴嬪、夫人、貴
人ヲ置キ、是ヲ三夫人ト爲シ、淑妃、淑媛、淑儀、脩容、脩
華、脩儀、婕妤、容華、充華是ヲ九嬪ト爲シ、又美人、才人、
中才人ヲ置キ以テ散職ト爲ス、宋齊ノ後、大抵多クハ
晉制ニ依ル、其ノ開増損因革或ハ小異アリ」
【皮傳】 表面のみを見て説をなすをいふ、後漢書張衡
傳に「方言非其事、曰一、言皮膚淺近強相傳會也」

【鄙夫】庸愚にして陋劣なる男をいふ、論語陽貨篇に「子曰、一可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣」

【媚嫵】「ナマメキコブル」義、元好問の句に「意態工一皮膚漆ノ若シ」(皮膚若漆、南史焦度傳に「度、容貌壯醜」)

【蚍蜉蟻子之援】極めて少しの援助に譬ふ、韓愈の張中丞傳後敘に「當其圍守時、外無一蚍蜉蟻子之援、蚍蜉蟻子は大なる蟻をいふ、

【微服】服装を變じて人目に觸れざるやうにするなり、孟子萬章上に「孔子不悅於魯衛、遭宋桓司馬將要而殺之、一而過宋」

【蚍蜉大樹ヲ動かス】(蚍蜉動大樹)韓愈の詩に「蚍蜉撼大樹、可笑自不量、動を撼に作る、自ら力を量らざるに譬ふ、爾雅の注に「郭璞曰、俗呼爲馬蚍蜉、疏に「蟻通名也、其大者別名蚍蜉」とあり、李杜文章在を

【麀沸蟻動】蟻は蟻に同じ、紛亂するをいふ、淮南子に「天下爲之」

【碑文】文の一體なり、文體明辨に「按ズルニ劉勰イフ、

【彌縫】釋文に「彌縫ハ、補ヒ合ハスルナリ」左傳の桓五年に「爲魚麗之陳、先偏後伍、伍承一」の註に「司馬法ニ、車戰二十五乘ヲ偏トナシ、車ヲ以テ前ニ居キ、伍ヲ以テ之ニ次ギ、偏ノ隙ヲ承ケテ、闕漏ヲ彌縫スルナリ、類書纂要に「一トハ、其ノ缺漏ヲ補フ、人ノ過ヲ掩ヒ、トツクロフニ喻フ」左傳僖二十六年に「桓公是以糾合諸侯、而謀其不協、一其闕、而匡救其災、昭舊職也、昭二年の「敢拜子之一」の註に「猶補合也」

【非梵行】(不淨行)を見よ

【披麻】畫家の用語、石の皴を畫くに麻の葉を披きたる如きをいふ、大斧劈、小斧劈、荷葉、一等等す、べて十六皴法あり、芥子園畫傳、妮古録等に見ゆ、

【隙アリ】(有隙)隙は閑(スキマ)なり、ナカタガヒ史記樊噲傳に「大王今日、至聽、小人之言、與沛公有隙」

【靡曼】柔弱なり、また細好なり、また美色なり、列子に「簡、鄭衛之處子、娥媚、一者、淮南子に「齊、一之色」

【隙ユク駒ノ足ハヤミ】太平記卷二、俊基下向の條に見ゆ、光陰の速なるをいふ、史記、魏豹列傳第三十に「酈生說豹、豹謝曰、人生一世、閒、如白駒過隙、耳」とあり、その註に「索隱曰、莊子云、無異、騏驎馳過隙、則謂馬也」

碑ハ坤ナリ、上古ノ帝皇、始メテ封禪ト號シテ、石ヲ埤岳ニ樹ツ、故ニ碑トイフ、周穆跡ヲ崑山ノ石ニ紀シ、秦始銘ヲ嶧山ノ巔ニ刻ス、此レ碑ノ從テ始マル所ロナリ、後漢以來作者漸ク盛ナリ、故ニ山川城池宮室橋道壇井神廟家廟古跡土風災祥功德墓道寺觀託物ノ碑アリ(中略)又碑ノ體ハ、事ヲ敘スルヲ主トス、其ノ後漸ク議論ヲ以テ之ニ雜ユルハ、則チ非ナリ、其ノ事ヲ敘スルヲ主トスル者ヲ、正體トイヒ、議論ヲ主トスル者ヲ變體トイフ、事ヲ敘シテ、之ニ參フルニ議論ヲ以テスル者ヲ、變ジテ其ノ正ヲ失ハズトイフ、云云、唐彪の讀書作文譜に「碑文事實多キ者ハ止須ク事ヲ敘ス可シ、若シ故意ニ議論ヲ攬入セバ、便チ贅瘤ヲ成ス、事實寡キ者ハ之ニ參スルニ議論ヲ以テセザレバ、必ズ寂寞ニシテ文字ヲ成サズ云云(碑)を參看せよ、

【皮幣】貨幣に同じ、史記平準書に「以白鹿皮方尺、緣以、漢續爲、一、直四十萬、

【靡散】禮記の少儀篇に「國家一、疏に「靡ハ糜トナス、財物糜散凋散スルヲイフ、散ハ弊と通ず、

【皮弁】鹿皮にて作れる、カンムリ、説文に「弁ハ冕ナリ、象形シテ或ハ弁ニ作ル」一は儀禮士冠禮に出づ、

【飛變】急變の意、漢書張湯傳に「使人上、一、告文、茲

小顔曰、白駒、謂日影也、隙、壁隙也、以言、速疾若、日影過壁隙也」とあり、

【秘密】「ヒメテヒソカニスル」佛經の語、涅槃經に「此經名、如來、一、藏、大日經義釋に「若已成、就利根智慧、即當演暢、一、而開示之、

【嬪】爾雅釋親に「一ハ婦ナリ、禮記の曲禮に「生ニ妻トイヒ、死ニ嬪トイフ」註に「一ハ婦人ノ美稱、妻死スレバ、ソノ夫美號ヲ以テ之ニ名ヅク、故ニ一ト稱ス(妃嬪)を見よ、

【賓ノ至ル歸スル如シ】(賓至如歸)賓客の來る者、己の家に歸りたる如く、安心して少しも憂なきをいふ、左傳襄三十一年に「一、一、無寧、當患、

【閩粵】閩は福建省、粵は廣東省の異名、粵は越に同じ、

【摺介】主客の間に立ちて周旋する者、儀禮士冠禮の註に「摺者有司佐禮者、在、主人曰摺、在、客曰介、

【瀕海】海に臨む地をいふ、海邊なり、漢書賈山傳に「江湖之上、一、之觀畢、至、

【貧交行】杜甫の作なり、曰く「翻、手作、雲覆、手雨、紛紛、輕薄何須數、君不見、管鮑貧時交、此道今人棄、如土翻、手作、雲云、云は變態常なきの謂なり、以て人情の輕薄なるに比す、管鮑云云は、史記に「管仲少時與鮑叔牙、

游、鮑叔終善遇之。管仲曰、生我者父母、知我者鮑子也。鮑叔既進、管仲以身下之。天下不多管仲之賢、而多鮑叔之知人。此道今人云云は、人ただ市道の交を爲す、復管鮑の情なきを嘆ず、杜甫、賦を獻せし時、京華の故人之を念ふ者あることなし、故にこの詩を賦し、今人の交、古人は如かざることを言ひ、以て薄俗を警む。

【擯棄】「シリゾケ」スツル。擯は斥なり、棄なり、崔寔の政論に「寡不勝衆、遂見一擯斥、擯卻に同じ、

【擯卻】擯斥に同じ、漢書中山王傳に「使夫宗室一骨肉冰釋、

【頻伽羅】大論七十八に「如歌羅頻伽鳥、在殼中、未發聲、已能勝諸鳥、法華文句十に「好堅處、地芽已百圍、頻伽在殼聲勝衆鳥、

【閔凶】父母の喪をいふ、左傳宣十二年に「寡君少遭一不能文、不能文とは其の辭を文飾すること能はざるなり、閔は憂なり、

【貧窶】貧しくして「ヤツルル」窶は財乏しくして禮を具ふること能はざる義、詩經邶風北門篇に「出自北門、憂心殷殷、終窶且貧、莫知我艱、註に「衛ノ賢者亂世ニ處リ、暗君ニ事ヘテ其ノ志ヲ得ズ、故ニ北門ノ陽ニ背キ陰ニ向ム」ヲ出ヅルニ因リテ賦シテ以テ自ラ比ス

又ツノ一ニシテ人ノ之ヲ知ルナキヲ歎ズ云云、

【牝雞之晨】妻夫の權を奪ふをいふ、書經の牧誓に「武王曰、古人有言曰、牝雞無晨、牝雞之晨、惟家之索、今商王受、惟婦言是用、牝雞にして晨を告ぐるときは、即ち陰陽常に反して、家道衰へ盡くるなり、

【品藻】品評の義、漢書揚雄傳に「稱述一註に「其ノ差品及ビ文質ヲ定ムルナリ、

【岷山】四川省と甘肅省との境なる山脈を總稱していふ、この一の地方を後魏の世には岷州と名づく、廣雅に「蜀山謂之一」

【賓從】賓もまた服なり、一は服從の義、史記五帝紀に「諸侯咸來一」

【鬢絲茶烟之感】少年の頃豪遊に耽りし人が老後に至りて淡泊なる生活に晩年を樂む感をいふ、杜牧の題禪院詩に「船船一棹百分空、十歲青春不負公、今日鬢絲禪榻畔、茶烟輕颺落花風、鬢絲は鬢の白髮なり

【擯相】賓客應對の事を司る者、入りて禮を告ぐるを相といひ、出て賓に接するを擯といふ、儀禮に同じ、禮記に「可以一」

【嬪嬙】二字共に宮中に仕ふる女官の稱、轉じてひろく官女の義にも用ふ、左傳昭三年に「以備一寡人之

望也、杜牧の阿房宮賦に「妃嬪媵嬙王子皇孫(嬙)を參看せよ、

【貧者ノ一燈】眞俗佛事編に「阿闍世王經曰ク、時ニ老母アリ、見王供養佛、自ラ念ズラク、我レ今世如此貧苦ナリ、後世云何セン、生レテ値佛不能供養、コトヲ歎キ、路行ク人ニ乞ヒテ一日ニ二錢ヲ以テ油ヲ沽フ、賣油者怪ミテ問其故、老母曰ク、供養佛、賣油者コレヲ感ミ、其ノ價ヨリ益シテ油ヲ與フ、老母持之、佛ノ所ニ至リテ然シ供スルニ油盡クレドモ不滅、增明シ、於是佛授記シタマフ、

【頻願】聲聲に同じ、安んぜざる貌、面を「シカムル」義、孟子滕文公下に「一曰惡用是說說者、爲說說は鵝の聲、

【稟性】天よりうけ得たる、ウマレツキ、宣和畫譜に「一通雅、

【擯斥】斥け退くる義、劉峻の辯命論に「一於當年、珉石」珉は玉に次げる美石、説文に「一ハ石ノ美ナル者ナリ、

【緇錢】緇は緇なり、また錢を貫く絲をいふ、漢書武帝紀に「初算一註に「緇ハ絲ナリ、以テ錢ヲ貫クナリ、一は絲にて貫きたる錢、

【貧賤ナレバ親戚モ離ル】(富貴ナレバ)を見よ、

【貧賤ノ交ハ忘ル可カラズ】貧賤の時、親しく交りし友は富貴になりても忘るることはできずとの義(宋弘)を見よ、

【貧賤モ移ス能ハズ】(貧賤不能移)窮して益志の堅きをいふ、孟子滕文公下に「富貴不能淫、一移すとはその節を變ずるをいふ、威武不能屈、此之謂大丈夫、

【閔損純孝】蒙求に「周ノ閔子騫名ハ損、早ク母ヲ喪フ、父後妻ヲ娶リ、二子ヲ生ム、衣スルニ綿絮ヲ以テシ、損ヲ妬ミテ衣スルニ蘆花ヲ以テス、父損ヲシテ車ヲ御セシム、體寒クシテ鞠ヲ失フ、父其ノ故ヲ察知シ、後母ヲ出サント欲ス、損曰ク、母在レバ一子寒シ、母去ラバ三子單ナラント、母聞キテ悔イ改ム、損孔門に在りて德行の科に居る、大夫の家に仕へず、

【貧道】僧の自ら謙する語、智度論に「貧ニ二種アリ、一ニハ財貧、二ニハ功德法貧、佛道を修することの淺薄なる義、世説に「支道林嘗養數馬、曰、一重其神駿、石林燕語に「晉宋間佛教初行、未有僧稱、通曰道人、自稱則曰一、今以名相稱、蓋自唐已然、而一之名廢矣、

【獮獪】「カハヲソ」韓愈の文に「爲一之笑、

【閩中】今の福建省の地をいふ、説文に「東南越ノ種分レテ七トナル、故ニ七閩トイフ」とあり、周禮の夏官に「職方氏辨其邦國都鄙四夷八蠻七閩」

【賓頭盧】十六羅漢の第一の尊者、白頭長眉の像を作り、寺院の食堂に安んず、具には「不動ト譯ス、頤羅墮」姓ナリ、提疾マタ利相ト譯ス」といふ、佛勅を受けテ涅槃に入らず、つねに天竺摩利支山に住し、末世の供に應じ、大福田となるといへり、

【晏天】秋の天をいふ、爾雅の釋天に「秋爲一」註に「晏ハ猶惑ノ如シ、萬物ノ凋落を惑ムノ義ナリ」されど秋天のみに限らず、廣く天の意にも用ふ、書經大禹謨に「日號泣于晏天于父母」と天の仁にして、下を惑むの義なり、

【昊天極マリナシ】昊天罔極、天の極りなきが如く、父母の恩の大なるをいふ、罔極の恩ともいふ、父母を見よ、

【貧ニシテ樂ム】貧而樂貧乏に安んじて道を樂むをいふ、論語學而篇に「子貢曰、貧而無諂富而無驕、何如子曰、可也、未若一富而好禮者也、子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與、子曰、賜也、始可與言、詩已矣、告諸往而知來者、」

【柔順ニシテ貞ナリ、牝馬ハ柔順ニシテ健行、故ニ其ノ象ヲ取リテ一トイフ】象傳に「牝馬、地類行、地无疆、柔順利貞、君子攸行、」

【頻繁】「イッガハシ」忙劇なり、庾亮の表に「沐浴玄風、一省闔杜甫の蜀相の詩に「三顧一天下、計、兩朝開濟老臣心、」

【髮吟】「ピン」の「ハエギハ」郷谷の句に「年來一未垂白、」

【蘋蘩蕪藻】蘋は大萍なり、ウキクサ、白花を開く、蘩は蓬蒿、シロヨモギ、春生ず、食ふべし、蕪も水草、藻は「モ」なり、皆清潔のものなれば、微物なれども、神に薦むべし、左傳隱三年に「苟有明信、澗澨沼沚之毛、一之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公、」解に蕪藻は、聚藻なりとあれども、穩當ならず、

【彬彬】文と質と兩ながらそなはる貌、論語雍也に「文質一」

【斌斌】文と質との相雜はりて、ウルハシキ貌、禮記の王制の注に「並行一然、蔡邕の句に「一頌人」彬彬に通ず、

いふ易の坤卦に「坤元亨、利一傳に「坤ハ則チ柔順ニシテ貞ナリ、牝馬ハ柔順ニシテ健行、故ニ其ノ象ヲ取リテ一トイフ」象傳に「牝馬、地類行、地无疆、柔順利貞、君子攸行、」

【擧ニ效フ】「效擧」己の醜きをかへりみずして、強ひて人の美を模倣するをいふ、傲擧とも用ふ、莊子の天運篇に「西施心ヲ病ンデ而シテ其ノ里ニ曠ス（かほしかめる其ノ里ノ醜人之ヲ美トシ、歸リテ亦心ヲ捧ゲテ而シテ其ノ里ニ曠ス、其ノ里ノ富人之ヲ見テ、堅ク門ヲ閉テテ而シテ出デズ、貧人之ヲ見テ、妻子ヲ挈ヘテ而シテ之ヲ去テテ走ル、彼レ曠ヲ美トスルヲ知リテ而シテ曠ノ美ナル所以ヲ知ラズ」とあり、曠ハ嘔なり、眉を嘔するなり、古に法る者は、只だ古の善を知りて、古の善は固より別に在ること有るを知らざるに喩ふ、西施は美人の名、

【賓ニ禮アレバ主則チ之ヲ擇ブ】（賓有禮主則擇之、左傳の隱十一年に「周諺有之曰、山有木工則度之、賓有禮主則擇之」とあり、註に「宜シキ所ヲ擇ビテ之ヲ行フ」と見ゆ、

【貧ノ盜】但諺なり、漢書に「民貧、則姦邪生、潛夫論に「禮義、生於富足、盜竊起於貧窮、」

【貧者士之常】士は常に道を講じて、貨利を殖せず、故に貧しきは士の常なり、列子天瑞に「榮啓期曰、貧者士之常也、死者人之終也、」

【牝馬之貞】柔順の徳あり、能く事に堪へて成功するを

【閔】閔は病なり、憂ふる貌、左傳昭三十二年に「一焉、如農夫之望歲、懼以待時、」

【函風七月篇】函は國の名、禹貢雍州岐山の北、原濕の野に在り、今ノ陝西省ニ屬ス、一詩經に載す、農桑の事を述べたる詩なり、すべて八章あり、序にいふ、七月ハ王業ヲ陳ブルナリ、周公變ニ遭ヒ、后稷先公ノ風化ノ由ル所、王業ヲ致スノ艱難ヲ陳ブルナリ、左にその一章を録す、

七月流火、九月授衣、一之日宵發、二之日栗烈、無衣無褐、何以卒歲、三之日于耜、四之日舉趾、同我婦子、饁彼南畝、田畯至喜、

【賓服】爾雅釋詁に「賓ハ服ナリ、疏に「賓ハ徳ニ懷キテ服スルナリ、禮記の樂記に「諸侯一賓從に同じ、」

【繽紛】盛なる貌、家語に「旌旗一下蟠于地、また雜亂なり、屈原の離騷に「佩一其繁飾兮、また花などの亂れ散る貌、陶潛の桃花源記に「落英一」

【黽勉】黽は勉むるなり、一詩緝に「力堪ヘザル所、心欲セザル所、勉強シテ之ヲ爲スヲ黽ト曰フ、孫季昭の示兒編に「黽ハ蛙ノ屬、蛙黽ノ行クヤ、勉強シテ自ラカム、故ニ一ト曰フ、猶ノ獸タル其ノ行クヤ、趨起ス、故ニ猶豫ト曰フガ如シ、」黽の字蛙の義の時、音

【閔】閔は病なり、憂ふる貌、左傳昭三十二年に「一焉、如農夫之望歲、懼以待時、」

猛(バウ)示兒編の説によれば「バウベン」と讀むべきに似たり、されども普通の説にはあらず。

【貧骨ニ到ル】(貧)骨極めて貧しきをいふ、赤貧の義、杜甫の呈吳郎詩に「已訴徵求」一、更思「戎馬」涙沾巾。

【牝牡驪黃ノ外ニ求ム】善く馬を相するものは、その馬の神に通じて、形色などの外に於て見分くるをいふ(九方墨)を見よ。

【碑銘】鶴林玉露に「古人碑ヲ立ツルニ、廟ニハ以テ性ヲ繫ギ、墓ニハ以テ棺ヲ下ス、厥ノ後、乃チ歲月ヲ刻ミ、或ハ事ノ始末ヲ識ス、蓋シ亦因リテ之ヲ文ニスル耳、湯ノ盤ノ銘、太公ガ丹書ニ載スル所、諸銘ノ若キ、亦用フル所、器物ニ因リテ、辭ヲ著シテ以テ自ラ警ム、未ダ嘗テ徒文ト爲サザルナリ、後世特ニ石ヲ立テテ以テ事ヲ紀シ言ヲ述ベテ而シテ之ヲ一ト謂フ、古ト異リ、杜元凱功ヲ二石ニ銘シ、一ハ峴山ノ上ニ置キ、一ハ漢水ノ中ニ沈ム、韓退之、張攄ニ謂ヒテ曰ク我ニ一片石ヲ丐ヘヨ、二妃ノ廟ノ事ヲ載セ、且ツ後世ヲシテ子ガ名アルヲ知ラシメント、後世名ヲ好ムノ弊此ノ如クナルニ至ル(墓誌銘)を參看せよ。

【比目】鱧(カレヒ)の類の魚、爾雅釋地の九府に「東方」

を作るに二四不同二六對、孤仄・孤仄・平三連・仄三連など、それぞれ平仄の規則あり(韻)を參看せよ。

【平等】平かに均しき義、不同なきをいふ、佛經の語、親疎怨恩を別たさざる心を——心といふ、涅槃經に「悉皆——無有差別」

【屏風】風をふせぐ具なり、史記孟嘗君傳に「——後、常有侍史、晉書王秀之傳に「王遠如——屈曲從俗、能蔽風露」遠は秀之の父なり、

【百憂】多くの「シン」バイ詩經無將大車篇に「無思——」漢の張衡の思玄賦に「思百憂以自珍」歐陽修の秋聲賦に「——感其心、萬事勞其形」

【百家姓】諸家の姓氏を集め村塾にて幼童の讀本に用ひしもの、わが國の名頭源平藤橘ヲ始メトシテ多クノ姓氏ヲ集メタルモノノ類、先づ宋の姓趙を首として趙錢孫李、周吳鄭王の如く、單姓四百八、複姓三十を收めたり、宋の世吳越王錢氏の時民間にて作りし書なりといふ、陸放翁の詩「兒童冬學鬧、比隣——案愚儒却自珍、授罷村書閉門睡、終年不著面看人」の自注に「農家十月ニ乃チ子ヲ遣シ入學セシム之ヲ冬學トイフ、讀ム所口雜字——ノ類、之ヲ村書トイフ」

【百揆】庶政を授り度る官なり、書經舜典に「納于——」

有「——魚焉、不比不行、其名謂之鱧」註に「狀牛脾ニ似テ鱗細ク紫黑色、一眼ナリ、兩片相合メレバ乃チ行クヲ得、今水中所在ニ之レ有り、江東又呼ビテ王餘魚ト爲ス」比翼鳥と同じく男女の「チギリ」の濃かなるに比していふ。

【眉目畫クガ如シ】(眉目)如畫、姿容の秀麗なるをいふ、後漢書馬援傳に「爲人明鬚髮、——」

【美目盼タリ】美人の目の美しくしきをいふ、盼は黑白分明なるをいふ、膚凝脂を見よ。

【疔瘍】疔は頭瘡、カシラノカサ、瘡は頭または、カラダのかさ、周禮に「——者造焉」

【簸揚】箕にて「サビル」小雅大東に見ゆ、晉書孫綽傳に「簸之颺之」注に「糠粃ヲ去ルナリ、揚は颺と通ず、

【病根】病漢音ヘイ人の身に病を受くることの深さをいふ、後漢書華佗傳に「有疾詣佗、佗曰、君——深、應當剖腹」

また心に悪しき念の浸みこむにいふ、橫渠語錄に「甚則至於徇私意、義理都喪也、唯爲——不去、隨所居所接而長」

【平仄】漢字には平上去入の四聲あり、平は上平下平に分る、上去入の三聲は、平韻に對して、仄韻といふ、詩

百揆時敘、舜をこの官に納れて、百事を授り度らしむる義、後漢書百官志の註に「——ハ、堯初メテ別ニ置ク、周、名ヲ冢宰トアラタム」

【百卉英ヲ含ム】多くの花が美しく開く、後漢書馮衍傳に「開歲發春兮、百卉含英」また後漢書張衡傳に「——天地網羅、百卉含葩」

【百金之士】能く敵を破り將を擒にして百金の賞を受くる士をいふ、史記に「——五萬人、殺者十萬人」

【百果ノ宗】すべての果物の長にて梨をいふ(梨花)を見よ。

【百花王】牡丹の異名、合璧事類備要に「北山集云、既全國色與天香、底用人家紫與黃、却喜騷人稱第一、至今喚作百花王、(花王)を參看せよ、

【百官冢宰ニ任ス】太平記卷二十一に見ゆ、冢宰とは大宰なり、王治を輔くること、總理大臣の如き者なり、論語憲問に「子張曰、書云、高宗諒陰三年不言、何謂也、子曰、何必高宗、古之人皆然、君薨、百官總己以聽於冢宰、三年云云、百官悉く冢宰に諸職の事をささきて政を行ひ、天子は三年の間、政をささたまはずとの義、

【百結衣】「ツヅレ」をいふ、晉書隱逸傳に「董威洛陽ニ在リ、白社ニ隱居シ、殘絮敗繒ヲ得テ以テ自ラ覆フ、

【百孔千瘡】

聖人の道の多く缺けて明かならざるに喩ふ、韓愈の與孟尚書書に「漢氏以來、羣儒區區、修補一——隨亂隨失、陳好道の詩には、昔日剜瘡、今補肉百孔千窓容一罅」

【百穀】

多くの穀物をいふ、爾雅翼には、梁ハ黍稷ノ總名、稻ハ概種ノ總名、菽ハ衆豆ノ總名、三穀各二十種アリ、合セテ六十ト爲ス、蔬ト果トノ屬、穀ヲ助クル者、各二十種凡テ百穀とあれども百の字は多數の義にして定數とせざるも可なり、詩豳風七月篇に「晝爾于茅、宵爾索綯、亟其乘屋、其始播——」

【百谷王】

江海をいふ、老子に「江海ノ能ク百谷ノ王タル所以ノ者ハ、其ノ善ク之ニ下ルヲ以テナリ、故ニ能ク百谷ノ王トナル」

【白虎通】

四卷、白虎通義の略稱、後漢の肅宗諸儒に詔して五經の同異を北宮白虎觀に考定せしめ、班固に命じ、その議を撰録してこの書を成さしむ、その説兼ねて織緯に涉ると雖も、多く古義を傳ふるを以て、今に至るまで學者の依據するところとなれり、

【百歲ノ後】

人壽百歲を過ぐる者は少し、故に死後の義とす、詩經唐風葛生に「冬之夜夏之日、——歸、

【百日之勞、一日之樂】

孔子家語觀鄉射に「子貢觀於蜡、孔子曰、賜也樂乎、對曰、一國之人皆若狂、賜未知其爲樂也、孔子曰、——、一日之澤、非爾所知也、註に「民皆稼穡ニ勤苦ス、百日ノ勞アリトハ久シキニ喩フ、今一日之ラシテ酒ヲ飲マシメ、之ヲ燕樂センムルハ是レ君ノ恩澤ナリ」と、蜡の祭は、禮記郊特性に「蜡也者索也、歲十二月、合聚萬物、而索饗之也、陳註には「索求、索其神也」とあり、

【百枝ノ燈】

開元遺事に「韓國夫人、百枝ノ燈樹ヲ置キ、之ヲ高山ニ豎テ、上元ノ夜、之ヲ點スレバ、光明月色ヲ奪フ」

【百尺竿頭一步ヲ進ム】

百尺の竿頭に達するは既に至り盡せるなり、又一步を進むるは、更に工夫を増し加へて、上に向ふの義、傳燈錄に「招賢大師示一偈曰、百丈竿頭不動人、一人に身に作る、雖然得入、未爲眞、百丈竿頭須進步、十方世界是全身、僧問、只如百丈竿頭、如何進步、師云、朗州山、澧州水、秉燭譚には、この偈を引きて百丈を百尺に作れり、

【百姓】

民庶をいふ、書經堯典に「平章——孟子梁惠王篇に「誠有——者、また百官の著姓をいふ、同書君爽に「百姓王人、罔不秉德明恤」と、王人とは王臣の

其室ニ室は城なり、史記高祖紀に「陛下——蕭相國即死令誰代之」

【百草ヲ鬪ハス】

鬪百草、荆楚歲時記に「五月五日四民並鬪百草、又有鬪百草之戲」

【百草ヲ鞭ツ】

鞭百草、干寶搜神記に「神農以——盡知其平毒寒溫之性、臭味所主、以播百穀、故天下號神農也」

【百獸ノ率舞】

尙書益稷篇に「蕭韶九成、鳳凰來儀、擊石拊石、百獸率舞」とあり、音曲の妙なるに、獸までが感動するをいふ、太平記卷二に引けり、

【百子全書】

湖北崇文書局にて刊行す、儒家・兵家・法家・農家・雜家・小説家・雜事・異聞ニ分ツ、道家の八類に分ちてその主要なる者百種を彙編す、

【百事大吉】

何事も宜しといふ義、遊覽志餘に「杭俗元旦發、相枝柿餅、以大橘承之、謂之——」

【百日紅】

和名、サルスベリ、陳湜子に「百日紅、一名紫薇、其花紅紫之外有白者、曰銀薇、又有紫帶藍色者、曰翠薇、俗呼爲怕癢樹、其木光滑無皮、人若搔之、則枝幹無風而自動、亦其性使然也、葉對生、一枝數穎、一類數花、六月始花、其蓋開謝相接續、可至九月、約有百日之紅、故有是名」

【百姓ヲ平章ス】

平は均、章は明なり、善く庶民を治むるをいふ、書經堯典に「——、百姓昭明」

【百世之師】

百世の後までも人の師法となるをいふ、孟子盡心下に「聖人百世之師也、伯夷柳下惠是也、蘇軾の韓文公廟碑に「匹夫而爲——、一言而爲天下法」

【百川ノ海ヲ學ビテ海ニ至ル】

揚子法言に「百川ノ海而至、子海、丘陵學山而不、至于山、註に「百川モ亦海ノ類ニシテ小ナリ、故ニ海ヲ學ブトイフ、百川ハ動キテ息マズ、故ニ海ニ至ル、丘陵ハ止マリテ進マズ、故ニ山ニ至ラズ、學者モ亦猶ホ是ノコトシ」

【百戰百勝ハ善ノ善ナル者ニアラズ】

百戰百勝非善之善者、孫子ノ謀攻篇に「凡ソ兵ヲ用ヒルノ法ハ、國ヲ全ウスルヲ上ト爲ス、國ヲ破ルハ之ニ次グ、旅もろもろヲ全ウスルヲ上ト爲ス、旅ヲ破ルハ之ニ次グ、卒ヲ全ウスルヲ上ト爲ス、卒ヲ破ルハ之ニ次グ、伍ヲ全ウスルヲ上ト爲ス、伍ヲ破ルハ之ニ次グ、是ノ故ニ百戰百勝ハ、善ノ善ナル者ニアラザルナリ、戰ハズシテ、而シテ人ノ兵ヲ屈スルハ、善ノ善ナル者ナリ」

【百足ノ蟲死ニ至ルマデ儼レズ】扶助する者多ければ、容易に亡びざるに喩ふ、文選曹問の六代論に「語ニ曰ク百足之蟲、至死不僵、扶之者衆也、此言雖小可、以譬大」の註に「蟲ハ帝室ニ喩ヘ、足ハ諸侯ニ喩フ」

【百雉】城の大サをいふ、方丈を堵といひ、三堵を雉といふ、一雉の堵は、長さ三丈、高さ一丈なり、清の魏禮いふ、雉飛ぶこと三丈にして墮つ、故に三丈を雉といふと、左傳隱元年に「都城過一雉、國之害也」とあるは、侯伯の城は方五里なれば、徑三百雉なり、故にその大夫の都城にして三分の一、即ち百雉を過ぐることを得ず、之を過るときは害を爲すとなり、史記仲尼世家に「臣無藏甲、大夫毋一雉之城」

【白朮】「ヲケラ」といふ藥草者、朮を見よ、

【百一ノ失ハズ】「百不失一」す、べての事一も目的とするところを失ふことなき義、論衡須頌篇に「從門庭聽堂室之言、什而失九、如登堂闚室、一見一」

【百一ノ險】二萬の兵を以て、百萬の敵に當るに足る、要害險固の地をいふ、史記高祖紀に「秦形勝之國、帶河山之險、懸隔千里、持戟百萬、秦得百一焉、地勢便利、其以下兵於諸侯、譬猶居高屋之上、建瓴水也、日知錄に「古人倍ヲ謂ヒテ一ト爲ス、百二ハ百倍ナリ」これによ

【百朋】多くの「タカラ」古者貝を貨とす、兩貝を朋と爲す、一解ニ五貝ヲイフ、詩經小雅菁菁者莪に「既見君子、錫我朋」

【百步楊ヲ穿ツ】「百步穿楊」圓機活法に、史記を引きて、楚ノ養由基善ク射ル、楊葉ヲ去ル百步ニシテ、之レヲ射ル、百發百中ス

【百味ノ飲食】多種の「ウマキ」飲食物、佛經の語、因果經に「常作人王、一隨念而至、孟蘭盆經疏に「云百者大數、非定一百」

【百藥ノ長】「百藥之長」酒の異稱なり、酒ハを見よ、

【百六掾】掾、音はケン、官屬をいふ、六書故に「掾ハ乃チ屬官ノ通稱ナリ、漢書蕭何傳に「爲沛主吏掾、一」ハ司馬晉の時の官吏をいふ、晉書元帝紀に「辟掾屬百餘人、時人謂之「一」

【百六會】厄運の歲に出會ふ義、漢書谷永傳に「遭无妄之卦、運直百六之災厄、漢書音義に「四千五百歲ヲ一元ト爲ス、一元ノ中ニ九厄アリ、陽厄五、陰厄四、陽ハ早ト爲リ、陰ハ水ト爲ル、一百六歲ニシテ陽厄アリ、故ニ「一」ト曰フ

【百里奚】もと虞の大夫たり、晉の獻公虞を滅し、百里奚を虜にし、以て秦の繆公のために秦に賤す、百里奚

ヒヤク—ヒヤク

れば秦は諸侯に比して百倍の險ありとの義なり、【百年三萬六千日】百年の總日數をいふ、李白の詩に「聖君三萬六千日、歲歲年年奈樂何」杜牧の詩に「一」

【百拜以テ禮トナス】「百拜以爲禮」柳文の序飲の句、百拜は「シバシバ」拜するをいふ、禮記の樂記に「先王因爲酒禮、一獻之禮、賓主百拜、終日飲酒而不得醉焉、此先王之所以備酒禍也」とあるに本づく、

【百發百中】「弓の巧手をいふ、史記の周本紀に「楚有養由基者、善射者也、去柳葉百步而射之、百發而百中」とあり、轉じて謀計の悉く適中するにもいふ、

【百福莊嚴】佛經の語、三十二相を具するをいふ、百福を積みて一相を得るといふに因りていふ、法華經に「彩畫作佛、像一相」

【百聞ハ一見ニ如カズ】「百聞不如一見」多くの言を聞くよりは、自ら一見するの確實なるに如かざるをいふ、漢書の趙充國傳に「充國曰ク、百聞ハ一見ニ如カズ、兵險ニ度リ難シ、臣願クハ馳セテ金城ニ至リテ、圖シテ方略ヲ上ラント」險は音エウ遙に同じ、

【百計】「モロモロ」の君の義、諸侯をいふ、詩經に「一」

秦を亡げて宛に走る、楚の鄧人之を執ふ、繆公（穆公）ニ作ル同ジ、百里奚の賢を聞き、重く之を贖はんと欲す、楚人の與へざるを恐れて、乃ち人をして楚に謂はしめて曰く、吾が媵臣百里奚在り、請ふ五羖羊の皮を以て之を贖はんと、楚人遂に許して之を與ふ、この時に當りて、百里奚年已に七十餘、繆公に國事を語りて大によろこび、之に國政を授く、號して五羖大夫といふ、詳しくは史記の秦本紀を見よ、

【百里米ヲ負フ】「子路米」を見よ、

【百里ニ行ク者ハ、九十二半バズ】「行百里者半於九十二」百里の路を行くに、九十里を行き、適にその半はの五十里と爲すに足るとの義にて、事を爲すに、始めの易く、終りの難きに喩ふ、戰國策に「一」

【百里才】百里を縣といふ、縣を治むる長官たるのをいふ、三國志蜀志に「劉備以「龐統」爲「涪陽令」、魯肅曰、士元非「一」使爲「治中」、別駕、乃得展「其驥足」、士元は「統」の字、

【百里之命】百里は諸侯の國なり、命は民命、一國の政事をいふ、託孤を見よ、

【百診】診は妖氣なり、説文に「水不利也」漢書孔光傳

「六沝之作」の註に「沝ハ悪氣ナリ」は多くの妖氣なり、文天祥の正氣歌に「如此再暑寒、一一自辟易」陵亂（ミダレ）の義のときは音ラン、莊子大宗師に「陰陽之氣有沝」

【百禮ノ會】酒ニアラザレバ行ハレズ（百禮之會非酒不行）吉凶の百禮は、酒なくては行はれざる義、漢書の食貨志に「酒者天之美祿、帝王所以饗天下、享祀祈福、扶養養疾、百禮之會、非酒不行」

【百僚】百官なり、僚は朋なり、官僚をいふ、寮に通ず、書經皋陶謨に「一一師師」と「モロモロ」の官吏が、相師とするをいふ、

【百鍊剛】百度も鍛鍊せし鐵の剛なる如く志氣の堅確なるをいふ、事類全書に「晉劉琨爲段匹磾所拘、自知必死、爲五言詩、贈其故吏盧諶、末云、何意一一化爲繞指柔」

【白蓮社】圓機活法に「晉ノ惠遠、白蓮社ヲ結ビ、書ヲ以テ陶淵明ヲ招ク、陶曰ク、弟子酒ヲ嗜ム、若シ飲ヲ許サバ、即チ往カント、遠之ヲ許ス、遂ニコレニ造ル、勉メテ社ニ入ラシム、陶眉ヲ攢メテ去ル、佛祖統紀二十七に「謝靈運、廬山ニ到リ、惠遠ヲ見テ心服ス、乃チ寺ニ就キ臺ヲ築キ、池ヲ鑿チ白蓮ヲ植ウ、時ニ惠遠諸賢ト淨

士ノ業ヲ修メ、一一ト號ス（蓮社）を見よ、

【百祿是荷】天の多福を受くるをいふ、詩經商頌玄鳥篇に「般受命、咸宜、百祿是何」と、何は春秋傳に荷に作る、任なり、百祿は多くの幸福、同長發篇にも、敷政優優、百祿是適

【比余】櫛（クシ）なり、匈奴單于（王ノ義）の用ふるもの、史記匈奴傳に、漢の文帝が冒頓單于に物を贈ることを敘して「一一、黃金飾具帶一一」とあり、一一に疏比に作る、漢書の匈奴傳には比疎に作る（比疎）を參看せよ、

【冰夷】河の神、山海經、海内北經に「一一、即河伯也、馮夷に同じ、

【馮夷】水神なり、莊子に「一一得之、以遊大川」注に「一一ハ河伯ナリ、また淮南子に「一一服八石、而水仙、後赤壁賦に「俯一一之幽宮、山海經には冰夷に作る、同じ、

【馮河】河を徒歩にて渉るをいふ、極めて危きことに喩ふ、暴虎一一を見よ、

【冰肌】「ハダ」の美なるをいふ、莊子逍遙遊に「藐姑射之山、有神人、肌膚如冰雪」

【冰肌玉骨】梅の異名、豊袁之、梅を評していふ、「一一物外佳人、但恨無傾城之笑、耳竹坡詩話に「一一

「一清無汗、水殿風來暗香滿、此詩爲「花蕊夫人」作」

【冰換】換は散るなり、釋くるなり、一一は冰のときて散る義、閩丘沖の句に「一一川盈」

【冰純】齊の國より出づる潔白にして光ある絹をいふ、釋名に「純ハ煥ナリ、細澤ニシテ光ノ煥煥然タルアリ、急就篇の註に「純ハ即チ素ノ輕キモノ」漢書地理志に「織作一一綺純純麗之物」

【冰語】書言故事に「媒ヲ冰人トイヒ、媒ノ言ヲ一一トイフ（冰人）を參看せよ、

【冰壺玉鑑】極めて潔白なる心に比す、杜詩に「冰壺玉鑑懸清秋」の句あり、また姚元崇、冰壺誠を作りて云ふ、冰壺ハ清潔ノ至ナリ、夫レ洞徹瑕ナク、澄空ニシテ底ヲ見ル、官ニ當リテ明白ナル者、是ニ類スルアリ」

【冰壺秋月】圓機活法に「宋ノ李侗、延平先生ト號ス、鄧勉曰ク、李延平ハ一一ノ如シ、瑩徹瑕無シ」

【冰壺ノ心】心の清潔なること、冰を玉壺の中に容れしが如きをいふ、鮑照の詩に「清如玉壺冰」また姚崇の冰壺誠に「冰壺者清潔之至也、君子對之不忘乎清」

【冰山】權勢の盡き易きに喩ふ、天寶遺事に「楊國忠ガ權、天下ヲ傾ク、四方ノ士爭ヒテ其ノ門ニ詣ル、進士張象トイフ者ハ、陝州ノ人ナリ、力學シテ大名アリ、志氣

高大ニシテ、未ダ嘗テ人ニ低折セズ、人家ニ勸メテ謁ヲ國忠ニ修シ、顯榮ヲ圖ルベシトイフ者アリ、象曰ク、爾ガ輩以テ楊公ノ勢、倚靠スベキヲ太山ノ如シト謂ハン、吾ガ見ル所、ロヲ以テスレバ、乃チ冰山ナリ、或ハ皎日大イニ明カナルノ際ニハ、則チ此ノ山、當ニ人ヲ誤ルベキノミト、後チ果シテ其ノ言ノ如クナリキ」

【冰人】媒妁人をいふ、事類全書に「晉ノ索統、字ハ叔徹世、通儒タリ、術數ニ明カナリ、令狐策、冰上ニ立チテ、冰下ノ人ト語ルト夢ミル、統曰ク、冰上ハ陽ナリ、冰下ハ陰ナリ、陰陽ノ事ナリ、士如シ妻ヲ歸ババ、氷ノ未ダ泮ケザルニ迫ベト、婚姻ノ事ナリ、君冰上ニ在リテ、冰下ノ人ト語ル、陽、陰ト語ルト爲ス、媒介ノ事ナリ、君當ニ人ノ爲ニ媒ヲ爲シ、氷泮ケテ婚成ルベシト、策曰ク、老夫耄タリ、媒トナラザルナリト、會、大守田豹、策ニ因リテ子ノ爲メニ郷人張公、徵ガ女ヲ求ム、仲春ニシテ、而シテ婚ヲナス」詳しくは晉書索統傳を見よ、書言故事に「媒ヲ冰人トイヒ、媒ノ言ヲ冰語トイフ」

【冰釋】釋一音、セキ消なり、散なり、消散して痕を留めざるをいふ、老子に「儼、兮若客、渙、兮若冰、將釋、客一本容に作る、漢書中山王傳に「使、夫宗室、擯卻骨肉、一一

【冰炭相容レズ】(冰炭不相容)楚辭七諫に「冰炭不可

以相並兮」の註に「冰火ヲ見レバ則チ消エ、火冰ヲ得レ

バ則チ滅ユ、以テ忠佞並ビ處ルベカラザルニ喩フ」と

あり、炭は火なり、また後漢書傅燮傳に「邪正之人不宜

共國、亦猶冰炭之不可同器、鹽鐵論に「冰炭不同器、

日月不並明、蘇轍の乞責降韓續第七狀にも「冰炭不

可以一器

【冰炭器ヲ同クセズ】前條を見よ、

【馮怒】馮は盛なり、滿なり、また大なり、怒の甚しきを

いふ、左傳昭五年に「今君奮焉震電、一虐執使臣將

以震鼓」列子に「帝一侵、滅龍伯之國」帝は上帝な

り、

【冰輪】月の異名、蘇軾の詩に「夜半老僧呼客起、雲峯

缺處湧一冰」

【馮陵】勢を待みて迫り陵ぐをいふ、左傳襄二十五

年に「介恃楚衆、以一我敵邑」李華の弔古戰場文に

「當此苦寒、天假強胡一殺氣、以相剪屠」馮一に憑に

作る、相通す、

【膺臆】廣韻に「意泄レザルナリ」ムネフサガリて泄

れざる貌、唐の李華の弔古戰場文に「地闊天長、不知

歸路、寄身鋒刃、誰訴」

【糜爛】米または肉をただらかす如く、疲弊する義、孟

子盡心下篇に「梁惠王以土地之故、一其民而戰、之

大敗、方苞の左忠毅公逸事に「國家之事、一至此」

【仇離】人の離別するをいふ、詩經王風中谷有蓀篇に

「有女一」

【罷癘】腰曲り脊高き病、セムシ、史記平原君傳に「臣不

幸有一之病、癘一に瘥に作る、

【彌留】病の重さをいふ、書經顧命に「嗚呼疾大漸惟幾、

病日臻既一」と、註に「疾危殆ニシテ彌甚ダシクシテ

留連スルナリ」

【皮裏陽秋】心にて可否するをいふ、書言故事に「胷中

ノ褒貶ヲ、皮裏ノ陽秋トイフ、晉ノ褚裒字ハ季野、桓彝

之ヲ目シテ曰ク、季野ハ皮裏ノ陽秋ト、其ノ外ニ臧否

スル所口無クシテ、内ニ褒貶スル所アラフイフ也」

とあり、陽は春なり、晉は簡文后の諱、阿春なるを以て

春を諱ひ、故に陽秋といふ、春は萬物を發生す、褒に喩

ふ、秋は萬物を肅殺す、貶に喩ふるなり、一解に春秋は

孔子の筆削に係り、褒貶甚だ嚴なるをいふと、從ふべ

し、唐庚の詩に見説胸中卷「雲夢、莫將皮裏貯陽秋、

【比倫】「チカマ」トモガラ「クラベモノ」仁宗皇帝の勸

學文に「朕觀無學人、無物堪一」

【膺膊】雞が將に鳴かんとして「バタバタ」と兩翼を

「ハウツ」聲をいふ、古兩頭織詩に「膺膊膊雞初鳴、

磊磊落落向曙星」

【溷浴】溷は「ユドノ」ユドノにてゆあみする、禮記内

則に「外内不共一」

【比翼連理ノ契】比翼とは、羽を比べて飛ぶ鳥なり、連

理とは、木理を連ぬる枝なり、夫妻の契淺からざるに

喩ふ、白樂天の長恨歌に「在天作比翼鳥、在地願爲

連理枝」是れは唐の玄宗皇帝、楊貴妃と天寶十年七月

七日、牛女の事に感じて、夫婦の誓をせし時の詞を敍

せしなり、爾雅の釋地篇に「南方有比翼鳥焉、不比不

飛、其名謂之鷦鷯」註に「鷦ニ似テ青赤色、一目一翼相

得テ乃チ飛ブ」山海經に「崇吾之山有鳥焉、其狀如鳧、

而一翼一目、相得乃飛、名曰蠻蠻、晉書元帝紀に「一角

之獸、連理之木、以爲休徵者、蓋有百數」

【賁來】賁臨に同じ、賁は飾なり、人我が家に來りて爲

めに光彩を生ずるの意、詩經少雅白駒に「賁然來思、

是助語、

【毗嵐】瑜伽論音義に「舊經中或作毗嵐婆、或作鞞藍、

亦作隨藍、此云迅猛風」と、世界の太風にて水輪もこ

の風の力なりと、

【比鄰】近く接近する義、王勃の句に「天涯若一」

【飛輪】日の異名、許堯佐の詩に「流星珥節一頓勢」

【鄙吝】吝は格に同じ、イヤシキ心をいふ通鑑に「陳蕃

周舉等曰、時月之闇、不見黃生、黃憲をいふ則一之

萌、復存乎心矣」

【彌綸】徧く理むる義、易の繫辭上傳に「易與天地準、

故能一天地之道」一解に、彌は彌縫補闕なり、綸は

選擇條理の意あり、

【飛龍天ニ在リ】(飛龍在天)聖人が帝位に在るに喩ふ、

易經乾卦に「一利見大人」聖人位に在る時は、

大徳の人を見て共に天下の事を成すに利ありとな

り、史記蔡澤傳に「國有道則仕、國無道則隱、聖人曰、

一利見大人」

【尾閭洩セドモ乾カズ】太平記卷二十四に見ゆ、莊子

秋水に「天下之水、莫大於海、川歸之、不知何時止、而

不盈、尾閭泄之、不知何時已、而不虛」尾閭は海水を

泄すの處、碧海の東に在りと、

【晝ヲトシ未ダ夜ヲトセズ】(ト晝未ト夜)晝閉の善

きことはトひて知りたるも、夜閉の吉凶は如何なるべ

き、未だトひ知らずとの義、左傳莊公二十二年に「飲桓

公酒、樂公曰、以火繼之、辭曰、臣卜其晝、未ト其夜、

不敬、君子曰、酒以成禮、不繼以淫義也、以君成禮、弗納於淫、仁也、敬仲即ち陳の公子完の語、桓公は齊侯なり、

【非類ニ歎ケズ】(不歎非類)鬼神はその族類にあらざる者の祭享を受けざる義、左傳僖十年に「晉狐突對曰、臣聞之、神一、民不祀、非族、君祀無乃殄乎」、歎は饗なり、

【毘盧遮那】(盧遮那)を見よ、

【美麗】容貌の「ウツクシク」ウルハシキなり、戰國策に「城北徐公、齊國之「一」者也、また、すべて物の「キレイ」なる義に用ふ、

【非禮視ル勿レ】(非禮勿視非禮とは己の私欲なり、論語顔淵篇に「顔淵問、仁、子曰、克己復禮、爲仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、爲仁由己、而由人乎哉、顔淵曰、請問、其目、子曰、「一」非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、顔淵曰、回雖不敏、請事斯語矣、程伊川の視聽言動の四箴、小學外篇嘉言篇に抄出せり、參看せよ、

【披瀝】心に思へることを少しも隠さず披き出すをいふ、瀝は浚(サラヘル)なり、また酒を飲みて餘滴の盃に残れるをいふ、上官儀盧岐州請致仕表に「一」丹慙諒、非矯飾、

「一」行有餘力、則以學文とあり、汎愛は偏私なく博く愛するなり、衆は多くの人をいふ、親は親み近づくなり、人に接するには誰彼の差別なく、廣く衆人を愛し、その中にて仁徳ある人は己より近づき親むときは益を得るものなり、
【博ク學ビテ篤ク志ス】論語子張篇に「博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣、朱註に「四者皆學問思辨之事耳、未及乎力行而爲仁也、然從事於此、則心不外馳、而所存自熟、故曰仁在其中矣、蘇氏曰く「博ク學ベドモ志篤カラザルトキハ、大ニシテ成ルコトナク、泛ク問ヒ遠ク思フトキハ、勞シテ功ナシ」

【飛廉】風伯をいふ、カゼノカミ、呂氏春秋に「一」風伯名廣雅釋天に「一」ハ風師、また殷の紂王の諛臣、孟子滕文公下に「驅「一」於海隅、而戮之」、また毛長くして翼ある怪獸、淮南子俶眞訓に「騎「一」而從、敦園」、またよく風を起すといふ神禽の名、後漢書班彪傳の注に「一」ハ神禽、能ク風氣ヲ致ス、身鹿ニ似、頭雀ノ如ク、角アリテ蛇尾、文ハ豹文ノ如シ、

【美祿】酒の異名、漢書食貨志に「酒者天之「一」帝王所以頤養天下、享祀福、扶養養疾、百禮之會、非酒不行、

【麋鹿】麋は鹿の大なるもの、「ナレシカ」孟子梁惠王上篇に「願、鴻雁「一」ニ」、
【博ク愛スル之ヲ仁トイフ】(博愛を見よ、
【博ク經籍ニ通ズ】(博通經籍)事文類聚後集十三卷に「後漢馬融、有俊才、初京兆、學儒術、教授、隱于南山、不應徵聘、名重關西、融從其遊、學「一」「一」恂奇、融才、以女妻之、

【汎ク衆ヲ愛シテ仁ニ親ヅク】(汎愛衆而親仁)論語學而篇に「子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、「一」「一」

格言十則

火炎「崑崙」ニ、玉石俱焚、(商書風征)

火則不レ鑽不レ生、不レ扇不レ熾、(抱朴子)

火形嚴、故人鮮レ灼、水形懦、故人多溺、(韓非子)

火含レ煙而煙妨レ火、桂懷レ蠹而蠹殘レ桂、然火勝則煙滅、蠹盛則桂折、(顏延之、連珠)

美食方丈、目不能レ徧視、口不能レ徧味、(墨子)

美酒嘉肴以相饗、卑禮縮辭以接レ之、以合レ歡、(淮南子、)

貧者不レ以「貨財」爲レ禮、(禮記)

貧富之道、莫ニ「子奪」、而巧者有レ餘、拙者不レ足、(史記貨殖傳)

貧人好レ遊、而富人守レ節者、貧人不足、而富人饒多、(論衡)

貧賤可ニ以「賤」人、志不レ得則投レ履而適、秦楚安往、而不レ得ニ貧賤ニ乎、(韓詩外傳、田子方語)

フ

【賦】もと詩の一體にして韻語を用ひ、直ちにその事を賦敘するものなり、されども司馬相如が上林子虚の二賦、揚雄が甘泉賦、班固が兩都賦より、張衡が兩京賦、左思が三都賦の如き、歴代の作家多く力を此に用ひ、遂に文の一體となるに至れり、文選に載する所ろを見て、その盛を推知すべし、藝文志にいふ、「不歌而誦、謂之賦、登高能賦、可以爲大夫、言感物造端、材知深美、可與圖事、故可以爲列大夫也」と、蓋し古昔周の盛時に當りては諸侯卿大夫以下皆微言を以て相感し、詩を誦してその志を諭せしが、その衰ふるに及び、聘問歌咏の事、列國に行はれず、詩を學ぶの士は、隠れて民間に在り、而して賢人志を失ふの賦由りて作るあり、楚の屈原忠を含み潔を履みて世に容れられず、耿介の志、遺るところなく、之を辭に發し、竟に後世賦體の法門を開き、その弟子宋玉の徒、その遺響を嗣ぎて賦體全く成るに至れり、我が國に在りても、貞觀延喜の盛時の如き、苟も文章を作る者は、皆賦を以て

主要とせざるはなし、所謂駢儷體の文は蓋し亦賦より轉じ來れる者に似たり、後世清の沈德潛が唐宋八家文を選するに當り、賦を以て古詩の流と爲してその選本に采入せざりしは、頗る古義に合せりといへども、之を古今に通觀するときは、稍偏執に失するの憾なき能はず、されども爾來八家の文世に盛行するに隨ひ、賦體の文は漸く衰微に歸するに至れり、
【賻】死者ある家族に貨財を贈りて喪を助くるをいふ、またその貨財をいふ、北史に「故贈賻有加」とあり、賞賻は死者の功を賞してその家に贈るなり、荀子大畧篇に「貨財ヲ賻トイヒ、與馬ヲ贈トイヒ、衣服ヲ襚ト曰フ」
【不意】不慮に同じ、戰國策に「卒起、一、盡失其度」
【布衣】布衣は、庶人の服なり、故に官位なき庶人（ヘイミン）をいふ、史記の田單傳に「王嬭ハ布衣ナリ、義、燕ニ北面セズ、況ヤ位ニ在リテ祿ヲ食ム者ヲヤ」同書蘇秦傳に「蘇秦謂趙肅公曰、天下卿相人臣及一之士、皆高賢君之行義、鹽鐵論に「古者庶人耄老シテ後、絲（さぬ）ヲ衣ル、其ノ餘ハ則チ麻索ノミ、故ニ命ジテ一ト曰フ」
國語にて布衣といふは狩衣の無文のものをいふ、古

ハ布製ナリキ延べて「ホウイ」といふ、無文の狩衣は六位以下の人の服するところなれば、轉じて六位以下の官人をも稱す、

【巫醫】「カンナギ」と「クスシ」と、論語に「人而無恒、不可作、一、汲冢の周書に「武王既勝、殷、鄉立、一、具百藥以備疾災」

【斧展】あか色の質に斧をゑがける、ツイタテ屏風、天子が諸侯に對する時に、これを後にして、南面するもの、高さ八尺あり、禮記に「天子一、南鄉而立、淮南子に「負辰而朝、諸侯、斧の柄なきを畫けるは設けて用ひざる義なり、

【負展】（斧展）を見よ、

【布衣章帶之士】布の衣を衣、單章を帶とす、貧賤の人の稱、漢書賈山傳に「布衣章帶之士、修身於内、成名於外、帶一に佩に作る、

【孚佑】孚は允なり、信なり、佑は「タスクル」なり、「アツク」恵み助くる義、書經湯誥に「上天孚佑下民、罪人黜伏、

【蜉蝣】小さき蟲、朝に生じ暮に死すといふ、爾雅の疏に「一名渠略、似蝸、身狹而長、有角、黃黑色、叢生、糞土中、朝生暮死」とあり、和名「カゲロフ」、「イサゴムシ」の羽

化せるもの、秋の半に水邊に多く飛ぶ、長さ六七分、首は蜻蛉に似て甚だ小さく、翅薄くして四翅一處に重なる、身は狹長にして多くは淡黃なり、尾は甚だ長く、細くして絲の如し、詩の曹風一一篇に「一之羽、衣裳楚楚、淮南子の説林訓に「鶴壽千歲、以極其遊、一朝生而暮死、而盡其樂、徒然艸にも「かげろふの夕をまぢ、夏の蟬の春秋を知らぬとあるぞかし」と見ゆ
【蜉蝣ノ一期】人生の短きに喩ふ、蜉蝣は、短命の蟲なり、一期とは、一生涯なり、白樂天の詩に「長生無得者、舉世如蜉蝣、」また蘇東坡の赤壁賦に「寄蜉蝣於天地、前條を見よ、

【武夷九曲】武夷山は、今の福建省建寧府崇安縣に在り、山に九曲溪あり、風景絶佳なり、朱熹に「一、一、歌あり、事類統編卷二十一、地輿部福建省の條、武夷千載神棲」の註に「武夷山、在崇安縣南三十里、道書以此爲第十六洞化元之天、相傳昔有、神人曰、武夷君者、居此故名、漢武嘗祀之、」また九曲縈廻の註に「九曲溪在武夷山中、

【覆育】「オホヒ」て育つる義、淮南子に「响諭一、萬物群生、詩經小雅の「長我育我、箋に「育トハ一、ナリ」
【罽】火を吹き起す具、音「ハイ」裳、籜、皮排、鼓、鞀、風箱皆

【不乙】 凡そ書を讀み、筆を以て其の止まる處を誌す

【不壹】 終始徳を一にせざる者をいふ、左傳に「不穀惡其無成徳、是以宣之懲」

【無逸】 書經の篇名(一)を見よ、

【布衣之交】 貧賤の交をいふ、史記蕭相如傳に「一、尚不相欺、況大國乎、戰國策に「衛君與文一一」文は孟嘗君の名(布衣)を見よ、

【訃音】 死去の報知をいふ、訃一に赴きた報に作る、喪を告ぐるなり、左傳隱七年に「凡諸侯同盟、薨則赴以名、赴訃報三字古、竝に通ず、

【舞雩】 夏日雨を天に祈る祭「アマガヒ」禮記の月令に「仲夏大雩」とあり、また天を祭り雨を祈る處にして壇、埤樹木等ある地をもいふ、論語先進篇に「風乎一一詠而歸」

【馮夷】 (馮夷)を見よ、

【馮異】 字は公孫、潁川父城の人、左氏春秋孫子の兵法に通ず、光武に事へて主簿となる、光武河北を徇ふ、王

郎の兵起るに値ふ、乃ち馳せて饒陽蕪蕪亭に至る、天寒く衆飢う、異、豆粥を進む、南宮に至る、又麥飯を進む、信都に至り、偏將軍に拜す、異人と爲り、謙退なり、諸將功を論ずるに、異、獨り大樹の下に坐す、軍中號して大樹將軍と爲す、後、陽夏侯に封ぜらる、

【風雨ヲ避ケズ】 (不避風雨) 艱苦を避けざる義、漢書朱博傳に「隨從士大夫一一」

【風雲月露】 文章の浮薄にして、はてやかに、實質の乏しきをいふ、連編累牘を見よ、

【風雲之會】 明主賢臣の遭合するをいふ、易經乾卦の文言に「雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩」とあるに由る、また龍が風雲を得て上天する如く、豪傑が時機に投じて志を達するをいふ、後漢書馬武傳に「威能感會、風雲奮其智力」

【風鶯】 「イカノボリ」タコ、唐書田悅傳に「以紙爲一一」(風箏)を見よ、

【風雅】 詩の國風と、大小雅となり、轉じて詞章の義とし、また「ミヤビヤカ」なる義とす、文選の序に「一一之道、粲然可觀」

【風槩】 風格節槩の義、人品の高雅なるをいふ、晉書桓

温傳に「温豪爽有風槩、姿貌甚偉」とあり、また風景勝槩の義にも用ふ、槩は趣致の義、オモムキ

【風雅頌賦比興】 (六義ノ)を見よ、

【風漢】 「キチガヒ」風は瘋なり、玉泉子に「奈何放此一及第」

【風岸】 人となり、カドカドシクして、タクマシキをいふ、唐書宦者傳に「稜稜有一一」

【諷諫】 遠まはしに物にたとへて異見するをいふ、舊唐書職官志に「凡諫有五、一曰一一、二曰順諫、三曰規諫、四曰致諫、五曰直諫」史記滑稽傳に「優孟常以談笑一一」

【風儀】 「ミメカタチ」五代史劉煦傳に「煦爲人美一一」

【舞雩歸詠】 論語の先進篇に出づ、曾點の語に「暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸」とあり、註に「舞雩ハ、天ヲ祭り、雨ヲ禱ル處、壇、埤樹木アリ」朱熹の四時讀書樂の詩に「一一春花香」

【富貴花】 牡丹の異名、周茂叔の愛蓮說に「牡丹花之富貴者也」

【富貴草頭露】 太平記卷三十八に見ゆ、杜甫の句に「富貴何如草頭露」とあり、又東坡の詩にも「生前富貴草頭露、身後風流陌上花」

【富貴他人合ス】 晉の曹摅の感舊詩に「一一」貧賤親戚離」とあり、人情の輕薄にして、炎に就き涼に背く態を嘆ぜしなり、續晉陽秋に「殷浩雖廢黜、夷神委命、雅詠不輟、外甥韓生始隨至、徒所、周年還都、浩送至水側、乃詠曹顔遠詩曰「一一」因泣下、其悲見于外者、惟此一事而已」

【富貴天ニ在リ】 人の富み貴くなるのは天命によるものなれば、強ひて求めて得べきにあらずとの義、論語の顔淵篇に「司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在天云云」死生富貴皆天命あり、人はこの天命に安んじ順に受けて辭せざれば必ずしも憂ふべきにあらずと慰めたるなり

【富貴ナレバ驕奢ヲ生ズ】 (富貴生驕奢) 富貴の身となれば心弛みて、オゴリ「の心起るをいふ、寶鑑に「一一」驕奢生淫亂、淫亂生貧賤、貧賤生勤儉、勤儉生富貴」

【富貴ナレバ他人モ合ヒ、貧賤ナレバ親戚モ離ル】 文選卷八の晉の曹顔遠の感舊詩に「富貴、他人合、貧賤親戚離」とあり、驕冠子に「家富疎族聚、居貧、兄弟離」とあるも、意同じ、

【富貴ノ三患】 富貴の人の通患三つある義、呂氏春秋本性篇に「出ヅルトキハ車ヲ以テシ、入ルトキハ輦ヲ以テシ、務メテ以テ自ラ佚ス、之ヲ命ケテ招麾ノ機ト云フ、肥肉厚酒、務メテ以テ相強フ、之ヲ命ケテ爛腸ノ食ト云フ、靡曼皓齒鄭衛ノ音、務メテ自ラ樂ム、之ヲ命ケテ伐性ノ斧斤トイフ、コノ三患ハ富貴ノ致ストコロナリ」

【富貴ノ人ヲ畏ルルハ貧賤ノ志ヲ肆マニスルニ若カズ】 高士傳に紫芝歌(四皓)作トイフあり曰く、莫莫高山、深谷逶迤、曄曄紫芝、可以療飢、唐虞世遠、吾將何歸、駟馬高蓋、其憂甚大、富貴之畏人兮、不若貧賤之肆志

【富貴ハ浮雲ノ如シ】 (不義ノ富貴)を見よ、

【富貴モ淫スル能ハズ】 (貧賤モ)を見よ、

【風魚之災】 韓愈の送鄭尚書序に見ゆ、颶風と鰐魚との災をいふ、同人の潮州謝上表にも「颶風鰐魚患禍不測」とあり、

【風化】 風は諷なり、人を諷導きて、善に化せしむる義、風教に同じ、卜商の詩経序に「關雎后妃之德也、風之始也、所以一天下而正夫婦也」

【風花香シ】 宋史樂志に「陽春白日一」

【風花雪月】 四時のすぐれたる景物をいふ、鄭谷の寄趙大諫詩に「雪風花月好、中夜便招延」

【風教】 風は諷なり、民の「ナラハシ」によりて諷誡教化するをいふ、ラシへ「詩経の序に「風風也、教也、風以動之、教以化之」風化に同じ、

【楓橋ノ夜ノ泊】 太平記卷十八に見ゆ、唐の張繼の詩「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」とある詩の題なり、

【風穴】 任昉の述異記に「列禦冠、鄭人、御風而行、常以立春日歸乎入荒、立秋日遊於一」是風至即草木皆生、去則草木皆落、謂之離合風」

【風月主人】 風光の美なる地に就任するを「一」といふ、五代蜀史に「歐陽彬文辭ヲ善クセリ、蜀主昶以テ嘉州ノ太守トナス、彬大ニ喜ンデ曰ク青山綠水中ニ二千石トナリ、詩ヲ作り酒ヲ飲ンデ風月ノ主人トナル、豈誠ニ喜バシカラサヤト、忻然トシテ任ニ就ケリ」

【風月ノ本主】 太平記卷十二に見ゆ、黃山谷の詩に「試問淮南風月主の注に「江山風月本無常主、閑者便是主人」と、嘯月吟風の盟主たるの義なり、

【楓吳江ニ落ツ】 (楓落吳江)見るところ聞くとともに及ばざるに用ふ、唐書崔信明傳に「鄭世翼遇信明江中、

謂曰、聞公有「楓落吳江」冷願見其餘、信明欣然多出衆篇、世翼覽未終曰、所見不逮、所聞、引舟去」

【風采】 風儀文采をいふ、また威風光采の義にも用ふ、漢書霍光傳に「天下想聞其一一韓愈の詩に「寤寐想一一於今已三年」

【風箏】 「イカノボリ」タコ、詢菟録に「一一ハ即チ紙鳶マタ風鳶ト名ヅク(中略)鳶首ニ竹ヲ以テ笛ヲ作ル風入りテ聲ヲナサシム、箏ノ如シ、故ニ名ヅク」と、楊升菴集には「古人殿閣簷稜ノ間、風琴一一アリ、皆風ニ因リ、動イテ音ヲ成シ、自ラ宮商ニ諧フ」と、されば風鈴、簫馬の類なるべし、杜詩に「一一吟玉桂、露井凍銀牀」

【風霜ノ氣】 文章のつよきはげしき義、世説に「淮南王安、著書二十篇、號淮南子、自云、字中皆挾風霜之氣」西京雜記にも見ゆ、文字の烈しきこと風霜の氣、人の肌に感ずる如きをいふ、

【風草ノ德】 君子の徳を風に比し、小人の徳を草の風に比し、従ふに比するなり(君子ノ徳)を見よ、

【夫子】 先生長者をいふ、史記孔子世家の贊に「中國言六藝者、折中于一、可謂至聖、矣、論語憲問篇に「信乎一一不言不笑不取乎」夫子は衛の大夫公叔文子を斥す、

また古は將士を斥してもいふ、書經牧誓に「勗哉一一」またすべて男子の稱、禮記緇衣篇に「一一凶疏に「一一ハ男子ナリ」

【風姿】 「スガタ」姿は形貌なり、晉書王衍傳に「王衍字夷甫、神清、明秀、一一諄雅」

【風刺】 遠まはしに上の政などの非を、ソシルをいふ、詩経關雎の序に「詩有六義焉、一曰風、上以風化下、下以一一上、主文而諷諫、言之者無罪、聞之者足戒、故曰風、註に「風化一一ハ皆譬諭シテ直言セザルヲ謂フナリ」

【風師】 風の神、風俗通の祀典に「一一者箕星也、箕星は二十八宿の一、次條を見よ、

【觀師】 風の神、風伯に同じ、觀は風の古文、周禮春官に「配一一」

【封事】 (一一)を見よ、

【風字硯】 風の字の形につくりたる硯、硯譜に「會稽有老叟云、右軍(王羲之)之後、持一一、大尺餘、色正赤、用之不減、端石云、右軍所用石」

【風疾】 「キチガヒ」ランシン「唐六典に見ゆ、失心、心疾、心風、喪心、病狂皆同じ、

【夫子自道】 自分の事を自分で言ふの義、道は言なり、

論語憲問篇に「子曰君子道者三我無能焉仁者不憂知者不惑勇者不懼子貢曰一也」

【丰】 丰は草の盛なる貌轉じて顔の圓く肥えて「ミメヨキ」なり詩經鄭風丰篇に「子之兮」註に「容色美好ノ貌」

【楓宸】 朝廷をいふ説文に「楓木厚葉弱枝善ク搖ク漢ノ宮殿中ニ多ク之ヲ植ウ霜後ニ至リ葉丹クシテ愛スベシ故ニ一ト稱ス」成語考に「一乃天子所蒞」註に「帝居ヲ宸トイフ何晏の景福殿賦に「槐楓被宸」

【風樹之歎】 (風木ノ)を見よ

【風色】 風の色なり天氣の義にも用ふ何遜の詩に「一極天淨」盧照鄰の詩に「今朝一好」

【風水】 陰陽家の説にて墳墓を相する術なり風水宜しきを得れば子孫繁昌すといふ張子全書に「葬法有「一山岡之説此全無義理」司馬溫公葬論に「孝經云「ト其宅兆非若今陰陽家相其山岡一也」朱子語録に「古今建都之地莫過于冀所謂無風以散之有水以界之也」

【風スル馬牛不相及】 (風馬牛不相及)左傳の僖四年に「齊侯諸侯ノ師ヲ以キテ蔡ヲ侵ス蔡潰ユ遂ニ楚ヲ伐ツ楚子師ト言ハシメテ曰ク君處北海寡人處南

海唯是風馬牛不相及也「不虞君之涉吾地也」とあり風は放なり馬牛の牝牡相誘ふをいふ兩地遠く隔るを以て牝牡相誘ひて遠く放逸する馬牛も兩地の界に入るに能はざる義なり書經の費誓に「馬牛其風臣妾逋逃勿敢越逐」また陸游の詩に「醉自醉倒愁自愁愁與酒如風馬牛」

【風聲】 土地風俗に因りて爲めに聲教の法を立つるなり書經畢命に「旌別淑慝表厥宅里彰善癉惡樹之「一」註に「淑ハ善慝ハ惡癉ハ病ナリ」左傳文六年に「竝建聖哲樹之「一」分之采物」

また人の消息を聞く義三國志蜀志許靖傳の注に「王朗與靖書曰消息于「一」托舊情于思想」

【風聲鶴唳】 つまらぬ事に感して痛く驚き怖るる義に用ふ晉書謝玄傳に「苻堅衆號百萬列陣臨淝水幼度以精銳八千涉水堅衆奔潰棄甲宵遁聞「一」皆以爲王師」幼度は玄の字なり平維盛の水禽の聲に驚きて走りたるも此に似たり唳は鶴の鳴聲なり

【馮昭儀熊ニ當ル】 漢書外戚傳に「元帝ノ馮昭儀ハ左將軍奉世ノ女ニシテ平帝ノ祖母ナリ僖仔ニ拜ス内寵傳昭儀ト等シ上虎圈ニ幸シ獸ヲ闘ハシム後宮皆

坐ス熊逸シテ圈ヲ出デ檻ヲ攀デ殿ニ上ラント欲ス、

左右貴人傅昭儀等皆驚走ス僖仔直チニ前ニ當リテ立ツ左右熊ヲ格殺ス上問フ人情驚懼スルニ何ガ故ニ前ニ當レ熊ニ當レルゾト對ヘテ曰ク猛獸ハ人ヲ得テ止マル妾熊ノ御座ニ至ランコト恐ル故ニ身ヲ以テ之ニ當リシナリト上嗟嘆シテ倍々敬重シタマヒキ昭儀僖仔は共に漢代女官の名昭儀は我が朝の女御僖仔は一に健好に作る更衣に當る

【風俗】 上の化する所を風といひ下の習ふ所を俗といふ孝經に「移風易俗莫善於樂」禮記樂記に「移風易俗天下皆寧」漢書の地理志には「民ノ剛柔緩急音聲ノ不同ハ水土ノ風氣ニ係ル故ニ風トイヒ好惡取舍動靜常ナク君上ノ情欲ニ隨フ故ニ之ヲ俗トイフ」朱熹の大學序に「教化陵夷「一」頹廢」

【風俗通義】 十卷後漢の應劭撰す略して風俗通といふ巻毎に總題あり題毎に散目あり總題にその大意を陳べ散目には先づその事を詳かにし案語を附してその得失を辨正す之を風俗通義といふは流俗の誤謬を通じて之を義理に合せしむるの義この書物類の名號を辨ずるは白虎通に似流俗を糾正せるは略王充論衡に似たり讀みて博洽を資くべし萬治

フウゾ—フウヂ

三年の和版明ノ鍾惺ノ評本あり

【風刀】 正法念經に「命終ルノ時刀風皆動ク千尖ノ刀ソノ身上ヲ刺スガ如シ(中略)若シ善業アルルハ則チ多ク苦惱セズ」

【風中ノ燭】 風の中の燭火は消え易し以て人生の「ハカチキ」に喩ふ古樂府怨詩行に「百年未幾時奄若「一」杜詩の注に「晉阮瞻九日會親友曰人生如「一」不知明年此日再開此會誰是強健」

【風塵】 濁世の義庚翼の書に「兄弟自不能拔於「一」之外「一」表物」を見よ

また世累俗累塵累の義陸機の詩に「京洛多「一」素衣化爲「一」

また官途また吏務をいふ晉書虞喜傳に「處靜味道無「一」之志」杜甫の詩に「悲君隨燕雀薄官走「一」」また汚濁の義より轉じて花柳の巷をいふ雜説に「妾失身「一」

また兵亂をいふ杜甫の詩に「一三尺劍社稷一戎衣」

【風塵之警】 兵亂をいふ漢書終軍傳に「邊境時有「一」晉書陶瑣傳に「風塵之變出於非常」

【風塵表物】 世俗の外に超出せる人を稱す晉書王衍傳に「王戎謂王衍曰神姿高徹如瑤林瓊樹自然是一

【風土】世説には表を外に作る、同じ。氣候と土地との「アリサマ」晉書周處傳に「有」

【風貌】「ヲトコブ」北夢瑣言に「路侍中山殿」之美爲世所聞」と同書に「表度」一不揚」とあり、不揚とは醜にして「ヒキタヌ」貌。

【風伯】風の神をいふ、觀師に同じ、韓非子に「一進掃雨師灑道」淮南子原道訓に「使」一掃塵。

【風旛ノ論】僧の疎闊を殺するに「疎奉」風旛之論といふ、傳燈錄に「六祖惠能初寓法性寺、風旛旛動有二僧爭論、一云風動、一云旛動、六祖曰、風旛旛動、動自心耳、言ふところは、風の動くにあらず、亦旛の動くにあらず、乃ち汝が心の動く所なり、修行者は、ただ其の心を正しくすべし、必ずしも風旛を論ぜずとの義。

【風靡】風の草木を「ナビカス」如く従ふをいふ、史記淮陰侯傳に「燕從風靡」。

【夫婦】「オット」と妻と、「メウト」易の序卦傳に「有天地然後有萬物、有萬物、然後有男女、有男女、然後有」一、有」一、然後有父子、同家人に「女正位乎内、男正

位乎外、父子、兄弟、夫婦、夫夫、夫婦、而家道正矣、禮記禮運に「一一家之肥也、中庸に「君子之道造、端乎」一、及其至也、察乎天地、孟子滕文公篇に「一有別同萬章篇に「男女居室、人之大倫也」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風流】「フウ」は一音バウ豊満なり一解に、美好の貌、風姿の美はしきをいふ、詩經鄭風丰篇に「子之丰兮、俟我於巷」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

【風聞】「ホノカ」に聞く義之を聞くも據る所ろなきなり、漢書南越傳に「一老夫父母墳墓已壞削、兄弟宗族已誅論」。

アルニヨレバ、風俗通ノ、笛ハ武帝ノ時、丘仲作ルトイフハ誤レリといへり、事類統編卷四十四に甘澤謠を引きて「許雲封曰、落梅流韻、感金谷之游人、折柳傳情、悲玉關之戍客、落梅折柳は笛曲の名なり、馬融に長笛賦あり文選卷五に出づ、隣笛を參看せよ、

【浮築】 うきたる世俗の「サカエ」王融の句に「一未龍拾」

【扶搖】 「アラシ」暴風をいふ、爾雅釋天に「一謂之焱」フエウの合音ヘウなるによりて、焱の字の義とす、また曰く「暴風從下上亦曰一風」莊子逍遙遊篇に「搏一羊角而上者、九萬里」

また勢よく發動する義、淮南子覽冥訓に「一而登之」また扶桑の義、莊子在宥篇に「雲將東遊、過一之枝而適遭鴻蒙」音義に「扶マタ夫ニ作ル一ハ神木ナリ、東海ニ生ズ」扶桑を參看せよ、

【斧鉞】 「ヲノ」マサカリ連文釋義に「成爲斧揚爲鉞斧小于鉞、鉞大于斧、轉じて「ヲノ」にて斬らるる重き刑をいふ、國語の周語の注に「一ハ大刑ナリ」

【鉄鉞】 「マサカリ」禮記王制に「諸侯賜弓矢而後征、賜鉄鉞然後殺」また春秋繁露に「公侯賢者、爲州方伯、錫鉄鉞置虎賁百人」とあり、説文に「鉄ハ、莖斫刀」左傳昭

セヨ、兒ヲ教フルハ嬰孩ニセヨト、誠ナル哉、此ノ語トあり、

【斧ヲ掲ゲテ淵ニ入ル】 (掲斧入淵) 斧ヲ掲ゲテ見よ【符ヲ割ク】 (割符符節を割ち與へて、諸侯に封せし驗とするをいふ、史記高祖紀に「論功與諸列侯、一一行封符は瑞信、はじめて封を賜はるとき、その半を分ちて之に與へ、半を朝廷に留めて信となすもの、割は分なり

【武ヲ接ユ】 (接武) 武は足跡なり、後者の足、前者の跡の半を踏む、故に接ゆといふ、禮記に「君與戸行一、大夫繼武、士中武、徐趨皆用之」

【武ヲ用フルノ國】 (用武之國) 兵を用ひて敵を制するに宜しき地をいふ、史記留侯世家に「維陽雖有此固、其中小不過數百里、田地薄、四面受敵、非用武之國也」

【不佳】 體中少しく佳ならざる義にて、輕き疾をいふ、資治通鑑漢桓帝延熹七年郭泰の條の字面、

【負荷】 父の業を受けつぎて、その任にたふる義、左傳昭七年に「古人有言曰、其父析薪、其子弗克、一」とあるに本づく、轉じて師の學を受けつぎ、若くはひろくその負はされたる任にたふる義とす(析薪ヲを參

公十五年の疏に「鉄大而斧小」とあり、白虎通攷黜に「一所以斷、大刑」

また征討主將の威信を表するため執るものなり唐書百官志に「凡將出征、告廟授一」

【傳説】 殷の相、賢徳あり、傅巖の下、水、道を壞る常に胥靡をして之を築かしむ、説胥靡のために代りて築き、以て食を供す、殷の高宗恭默して道を思ふ、帝良弼を寶ふと夢む、象を以て之を求め、遂に立てて相となす、孟子の告子下篇に「孟子曰、舜發於畎畝之中、一舉於版築之間」

【傳説列星ト爲ル】 (傳説爲列星) 蘇軾の潮州韓文公廟碑の句、莊子の大宗師に「傳説得之、以相武丁、奄有天下、乘東維、騎箕尾、而比於列星」注に「東維ハ箕斗ノ間、天漢津ノ東維ナリ」

【敷衍】 「ノベヒロガ」文選の張衡の西京賦に「篠蕩一編町成筵」

【附炎棄寒】 (炎ニ附キ寒ヲ棄ツ) (炎ニシテ附キ) を見よ、

【婦ヲ教フルハ初來ニス】 (教婦初來) 婦を教ふるには、初めて來りし時に、篤と教へよ、慣れて後は、教へ難しとなり、顔氏家訓に「俗諺ニ曰ク、婦ヲ教フルハ初來ニ

看せよ【浮誇】 浮華誇大をいふ、韓愈の進學解に「春秋謹嚴、左氏一」

【布告】 あまねく敷きて示す義、史記呂后紀に「事已一天下」

【俯仰】 俯は俯に同じ、俯したり、仰いだりする義、升降に同じ、淮南子に「與道沈浮一」世につれて忤ふことなきをいふ、

【俯仰天地ニ愧テズ】 (俯仰不愧天地) 能く身を修め、内に省みて疚しき所なくば、仰いて上天に對し、俯して下地に對し、毫も愧づるとなきをいふ、孟子盡心上篇に「仰不愧於天、俯不作於人、三樂を參看せよ、

【不孝ニ二アリ後ナキヲ大ト爲ス】 (不孝有三、無後爲大) 孟子の語、註に「禮ニ於テ不孝ノ者三事アリ、意ニ阿リ曲グ從ヒテ、親ヲ不義ニ陷イル一ナリ、家貧シク親老イテ、祿仕ヲ爲サズ、二ナリ、娶ラズシテ子無ク、先祖ノ祀ヲ絶ツ、三ナリ、三者ノ中後チ無キヲ大ナリトス」

【不恪】 恪は敬なり、「ツツシマザル」者をいふ、左傳に「以懲一」

【婦學】 一卷、清の章學誠字ハ實齋、少巖ト號ス、乾隆四

十三年ノ進士撰す、女子に關する教訓學術文藝等を

【不學無術】學術の素養なきをいふ、漢書霍光傳に「光

爲師保雖明公阿衡何以加此然光一不讀書云云

宋史寇準傳に「張郊謂準曰、霍公傳不可不讀準歸

取其傳讀之至一不笑曰、此張公謂我也

【不可思議】「ハカリ」知るべからざる義、略しては不思議ともいふ、法苑珠林に「佛變化無量三昧力、一

【夫家之征】周の制にて、民の常業なき者に罰金として、出さしむるをいふ、周禮に「凡民無職事者出」

一注に「民常業ナキ者之ヲ罰シテ一家力役ノ征ヲ出サシム」征は税(カカリモノ)なり

【富家女易嫁】「議婚」ノ詩を見よ、

【膚合】切れ切れの少しの雲のあつまり合ふ義(膚寸ニシテ)を見よ、

【巫峽ノ水ノミ何ゾ舟ヲ覆サムヤ】源光行の海道記の語、白氏文集の太行路と題する詩に「太行之路能摧車

若比、君心是坦途、巫峽之水能覆舟、若比、君心是安流」とあるによれり、巫峽は四川省より湖北省に流る

河の兩岸の名、ここに明月、巫山、廣澤の三峽あり、そ

の水至りて險なり、荊州記に「信陵縣西二十里有巫

峽、またその漁者歌に「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾

裳、巫峽は今の四川夔州府巫山縣の東に在り、

【浮家泛宅】舟中に住居するをいふ、新唐書隱逸傳に

「張志和、自稱烟波釣徒、顏真卿爲湖州刺史、欲館之、

以舟蔽漏、請更之、志和曰、願爲一往來、嘗嘗

聞、(張志和)を參看せよ、王漁洋の詩に「便可泛宅仍

【不刊之書】刊は削なり、猶ほ不朽の如し、永く銷滅せ

ざる書なり、劉歆答揚雄書に「懸諸日月、一左

傳の杜預の序に「左丘明受經於仲尼、以爲經者一也

【不軌】軌は法なり、則なり、一は國家の法を守らざる

なり、漢書賈山傳に「軌事之大者也」の註に「軌ハ法度

ヲイフ、故ニ凡ソ法度ニ循ハザル者ハ、之ヲ一トイフ、史記漢興以來諸侯年表に「大者叛逆、小者不軌、于

法、以危其命、漢書卜式傳に「一之臣」

【不器】(君子ハ器ナラズ)を見よ、

【不諱】死をいふ、死は人の諱み避くる能はざる所

なればなり、戰國策に「公叔病、即不可諱、將奈社稷

何、一は不可諱の略なり、

【不朽之盛事】文章の功盛にして永久に朽つることな

きを稱へていふ、魏の文帝曰く「文章者經國之大業、一

期未若文章之無窮」とあるに本づく、

【不龜手】(不龜手ノ)を見よ、

【傳璣之珥】傳は附るなり、璣は珠の圓ならざるもの、

珥は「ミミダマ」璣を以て珥に附著するなり、李斯の逐

客上書に「宛珠之簪、一」

【不義ノ富貴ハ浮雲ノ如シ】論語述而篇に「子曰ク疏

食ヲ飯ヒ、水ヲ飲ミ、脰ヲ曲ゲテ而シテ之ヲ枕トス、樂

亦其ノ中ニ在リ、不義ニシテ而シテ富ミ且ツ貴キハ、

我ニ於テ浮雲ノ如シ」註に「聖人ノ心、渾然タル天理、困

極ニ處ルト雖モ、而モ樂亦在ラザルコト無シ、其ノ不

義ノ富貴ヲ視ルコト、浮雲ノ有ルコト無キガ如シ、漢

然トシテ其ノ中ニ動ク所無キナリ」

【附驥尾】(驥尾ニ)を見よ、

【負笈】遊學するをいふ、漢書の蘇章傳の「負笈追師

不遠千里」の註に「笈ハ書箱ナリ、追ハ尋求ムルナ

リ、章字は游卿、北海の人、官を去りて王莽に仕へず

【不急官】急務ならざる官職をいふ、漢書昭帝紀に「日

者省用罷一」

また直諫をいふ、楚辭卜居に「寧正言一以危一身乎」

また君父の名を諱み避けざる義、禮記に「詩書一」

【不羈】羈は、ツナグ絆なり、一は其の材質高遠にし

て、羈繫(ツナグ)すべからざるをいふ、一説には放達

にして禮法の爲めに束縛せられざるをいふと、漢書

の司馬遷傳に「少負一之才、鄴陽の獄中上梁王書

に「使一之士與牛驥同皂、韓愈の詩「惠師、浮屠者

乃是一人」

【傳毅】字は武仲、漢の扶風茂陵の人、博學能文、明帝賢

を求むる篤からざるを以て、士多く隱處す、嘗て七激

を作り以て諷す、章帝以て蘭臺の令史と爲し、郎中に

拜す、班固、賈逵等と共に校書を典らしむ、顯宗の頌十

篇を作り、之を奏す、是に由りて文雅朝廷に顯はる、毅

早く卒す、詩賦誄頌連珠凡そ二十八篇を著す、

【賻儀】「カウデン」珠璣數に「財物ヲ以テ喪家ヲ資助ス

ルヲ一トイフ」

【不朽】死すとも長く朽ちざる義、左傳襄二十四年に

「太上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、

此之謂一」と穆叔の語なり、註に「立德ハ黃帝堯舜、

立功ハ禹稷、立言ハ史佚、周任、臧文仲」とあり、

【不急之察、無用之辯】 駿臺雜話の「扁鵲藥匙をすつ」の條に見ゆ、荀子の天論に「無用之辨、不急之察、棄而不治若、夫君臣之義、父子之親、夫婦之別、則日切磋而不舎也」

【不龜手之藥】 手の「コゴエ」て「ヒビワレヌ」藥なり、莊子の逍遙遊篇に「莊子曰、宋人有善爲不龜手之藥者、世世以泝泝、統爲事、客聞之、請買其方百金、聚族而謀曰、我世世爲泝泝、統不過數金、今一朝而鬻技百金、請與之、客得之以說吳王、越有難、吳王使之將、冬與越人水戰、大敗、越人裂地而封之、能「不龜手」一也、或以封、或不免於泝泝、統、則所用之異也」

【布衾鐵ノ如シ】 布の「フスマ」の冷かなるをいふ、杜甫の茅屋爲秋風所破歌に「布衾多年冷似鐵、嬌兒惡臥踏裏裂」

【不享】 諸侯の朝享せざるをいふ、不庭に同じ、史記五帝紀に「習用干戈以征」

【武舉】 武藝に習熟せるものを舉げ用ひる義、唐書の選舉志に「一ハ、則天武后ノ時ヨリ始マル」と、唐會要に「長安武后の年號三年正月十七日天下ノ諸州ニ詔シテ、武藝ヲ教ヘシメ、毎年明經進士ニ準ジテ貢舉セシム」

【福禱】 「サイハヒ」苑鎮の詩に「同心仰」

【福釐】 「サイハヒ」釐も福なり、沈約の詩に「其德不爽、受」

【伏羲氏】 庖犧氏ともいふ、上古の三皇の一人、風姓、燧人氏に代りて王たり、母を華胥と曰ふ、大人の迹を雷澤に履みて庖犧を成紀に生む、蛇身人首なり、聖徳あり、仰ぎては象を天に觀、伏しては法を地に觀、旁ら鳥獸の文と地の宜きとを觀、近く諸を身に取、遠く諸を物に取り、始めて八卦を畫し、以て神明の徳を通じ、以て萬物の情を通じ、書契を造りて以て結繩の政に代ふ、始めて嫁娶を制し、儼皮を以て禮と爲す、網罟を結び以て佃漁を教ふ、故に宓犧氏と曰ふ、犧性を養ふに庖廚を以てす、故に庖犧と曰ふ、三十五絃の瑟を作る、木徳の王たり、陳に都す、史記の注に「宓一ニ伏ニ作ル」

【鰾魚】 「アハヒ」なり、一名石決明、後漢伏隆傳に「詣闕上言獻」の註に「鰾似蛤、偏著石」一説に、海魚の名なりと、また「トコブシ」石決明に似て稍小なり、

【福惠全書】 三十二卷、清の黃六鴻（思潮）著す、地方施政者の心得べき諸件を彙説す、康熙甲戌の自序に曰く、夫是書也、乃政事之事也、而願之福惠、何居曰福者、

【不虞】 虞は慮なり、測なり、「ハカラザル」禍なり、左傳桓十七年に「疆場之事慎守其」而備其「詩經に「用戒」

【伏陰】 夏時に入りても猶ほ陰氣の滯り伏し、發して霜雹となる類、國語に「天無」地無散陽

【不遇】 不仕合なり、不耦に通用す、時ニ遇ハズを見よ

【不耦】 命隻にして、耦合せざるなり、不幸に同じ、漢書霍去病傳に「諸宿將常留落」

【負隅ノ勢】 猛虎が山に依れる勢をいふ、虎嶋を見よ、

【幅員】 幅は邊幅なり、員は圓也、周圍の義、詩經商頌長發篇に「幅隕既長」註に「隕ハ讀ミテ員トナス、周ライフ」

【腹案】 胸中にて文案を立つるなり、事文類聚に「王勃碑頌ヲ作ル毎ニ先ヅ墨數升ヲ磨リテ被ヲ引キ首ヲ覆ヒテ臥ス、寤ムルニ及ビ、忽チ起キテ一筆ニ書ス、文點ヲ加ヘズ、時ノ人之ヲ一トイフ」詳しくは唐書王勃傳に出づ、蘇軾の詩に「袖手獨不言、默稿已在腹稿、藁同じ、

【吹ク風モ枝ヲ鳴ラサズ】 太平の世を稱する語（五風十雨）を見よ、

【福基】 幸福の基、漢書枚乘傳に「福生有基、南史に「顔延之曰、恭敬樽節、福之基也」

言乎造福之心也、惠者、言乎施惠之事也、夫人有是心、而後有是事、無是心而即無是事、故在上者、必先存有造福地方之心、而後能有施惠百姓之事、事者心之推、而惠者福之實也、云云とあり、六鴻は時に知郟城東光兩縣事より、遷りて工科掌印給事中たり、この書小畑行簡の校せし和版あり、

【伏戎】 禍心を伏藏するの義、易經に「一于莽升、其高陵三歲不興」とは、禍心を伏藏すること、兵戎を林莽の中に伏せて顯はに發せざる如く、高きに昇り願望して、三年の久しき、敢て發せざるをいふ、

【服從】 服し從ふなり、禮記に「明君在上、諸臣一」

【伏日】 盛夏三伏の日なり、漢書東方朔傳に「一詔賜從官肉三伏」を見よ、

【腹心】 心を同くし、徳を同くする臣をいふ、詩經周南兔置篇に「赴赴武夫、公侯一」

【腹心ヲ布ク】 「布腹心」己の懐ふ所を敷き陳べて、隱はざる義、左傳に「非所敢望也、敢一」

【腹心ヲ披ク】 「披腹心」隠し蔽ふ所なきなり、史記淮陰侯傳に「願一輸肝膽效愚計」漢書鄒陽傳に「披腹見情素」とあり、

【腹笥虚シ】 腹の中の本箱が空であるといふ義、學識

【腹心之臣】 詩經の周南兔置篇に「赴赴武夫、公侯腹心」註に「腹心トハ心ヲ同クシ、徳ヲ同クスルノ謂」胡銓の上高宗封事に「秦檜以腹心大臣而亦爲之」

【副車】 「カヘグルマ」貳車また副乘に同じ、史記の留侯世家に「良擊、秦皇帝博浪車中、誤中」

【覆車ノ戒】 前人の失敗を見て自ら戒むる義（前車ノ覆ル）を見よ、

【福聚海无量】 幸福の聚まれること大海の水の計量すべからざる如きをいふ、法華經に「一一一一一是故應頂禮」

【復初】 初の本性に復る義、莊子繕性篇に「繕性於俗、學以求復、其初滑欲於俗、思以求致、其明謂之蔽蒙之民、また曰く「民始惑亂、無以反其性情、而復其初」（復性）を參看せよ、

【伏勝】 濟南の人、秦の博士たり、漢の文帝の時、能く尙書を治むる者を求め、伏生を得たり、而かも年九十餘、老いて行く能はず、乃ち太常掌故晁錯をして其の家に来て之を受けしめ、二十九篇を得たり、今文尙書これなり、詳しくは初學記を見よ、

【覆水盆ニ歸ラズ】 婦、一度夫の家を去らば、再びかへ

【復性書】 三篇、唐の李翱（字ハ習之）著す、曰く「誠者聖人性之也、復其性者、聖人修之、又曰く「情者妄也、邪也、妄與邪、則無所滅矣、妄情滅息、本性清明、周流六虛、所以謂之能復其性也」歐陽修は、この書を評して「中庸ノ義疏ノミ」と貶し、蒙齋筆談には「秦漢以下諸儒ニ於テ略、襲フ所ロナシ、獨リ超然トシテ顔子ノ用心ヲ知レリ」と褒す、支那の性説を研究せんとする者は宜しく一讀すべし、

【輻湊】 人のあつまると、輻（クルマノヤ）の轂（コシキ）にあつまる如きをいふ、湊一に輳に作る、戰國策に「地四平、諸侯四通、條達」漢書の地理志に「通魚鹽之利、而人物輻湊」註に「湊ハ聚あつまるナリ」淮南子に「百官修同、群臣一一」

【不俱戴天】 父の讐とは、俱に天を戴かざる義（父ノ讐を見よ、

【復道】 復は復なり、上下に道あるによりていふ、一解に、閣道に同じと、史記留侯世家に「從一一望見諸將」

【復道】 前の復道に同じ、史記秦始皇紀に「殿屋一一周閣相屬」

【腹中ノ書ヲ曝ス】 （曝、腹中書、事類全書に「郝隆七月七日、鄰人ノ皆衣物ヲ曝曬スルヲ見テ、隆乃チ仰ギ臥

ること能はざるに喩ふ、五燈會元に「落花難上枝、破鏡不重照」また故事成語考に「怪ムベキハ買臣ノ妻貧ニ因リテ去ルコトヲ求メテ、覆水ノ收メ難キヲ思ハズ、拾遺記に「太公初娶馬氏、讀書不事産、馬求去、太公封齊、馬求再合、太公取水一盆、傾于地、令婦收水、惟得其泥、太公曰、若能離更合、覆水定難收、鶴冠子の注にも亦この故事を引けり、轉じて一旦爲し終りしことは「トリカヘシ」の「ツカザル」義にも用ふ、後漢書に「國家之事、亦何容易、覆水不收、宜深思之」李白の詩に「雨落不上天、覆水難再收」

【復性】 本性に復る義、復初に同じ、宋儒に一一説あり、人性は至善にして、堯舜も凡人も最初は少しも異ることなければども、堯舜は、私欲に蔽はるることなくして、能くその性を充て、凡人は氣稟前に拘し、物欲後に蔽ひて最初の性を味ましむ、故に學問の力にて本性に復るべしとの義なり、論語朱註に「人性皆善、而覺有先後、後覺者必微先覺之所爲、乃可以明善而復其初也」孟子集註に「程子曰、性即理也、理則堯舜至於塗人一也、才稟於氣、氣有清濁、稟其清者爲賢、稟其濁者爲愚、學而知之、則氣無清濁、皆可至於善、而復性之本、湯武身之是也」（復初）を參看せよ、

【不届】 容易に人に届し下らざる義、唐書に「田承嗣據有魏地、郭子儀遣使至魏、承嗣西望拜曰、茲膝不届於人久矣、今爲公拜」

【鵬鳥】 「フクロフ」の類、韻會に「鵬ニ似テ不祥ノ鳥ナリ、史記賈誼傳に「有鵬飛入、賈生舍止於坐隅、楚人命鵬曰服、許渾の詩に「碧水鱸魚怨、青山一一悲」

【覆轍】 車のクツガハリシ「アト」以て事の敗亡の跡に喩ふ、新論に「立法者、譬如善御、察馬之力、揣途之數、齊其銜轡、以從其勢、故能登阪赴險、無一一之敗、乘危涉遠、無越軌之患、また文選左思の吳都賦に「喪亂之丘墟、顛覆之軌轍、また劉長卿の歸陸州詩に「羊腸留一一虎口、脫餘生」

【福田】 佛經の語、三寶の徳を敬ふを敬田といひ、君父の恩に報ゆるを恩田といひ、貧者を憐むを悲田といふ、之を三種の福田といひ、この無上の功德は、無上の福德を生ずと、一一とは農の力を田畝に盡して、秋成の利あるに喩へていふ（佛法僧）を參看せよ、

【復土】 墓穴を掘りて棺を下したる後、土をその上に掩ふをいふ、史記秦始皇紀に「營阿房宮、爲室堂、未就、

【會】上崩罷其作者、一、鄭山ニ

【服匿】匈奴の語、岳ホトギをいふなるべし、漢書蘇武傳に、賜武馬畜一穹廬ニ

【不虞譽】偶然に得たる譽をいふ、虞ラザルを見よ、伏波將軍、後漢の光武に仕へし三傑の一人なる馬援をいふ、馬援を見よ

【宓妃】(洛浦ノ)を見よ、腹誹之法、口には言はざるも、心に非としてそしる者を罪する法なり、史記平準書に、顔異當九卿見令不便、不入言、而腹誹論死、自是之後有、一、一

【服不】不服の獸を服することを掌る者周禮に、一、氏、掌養猛獸而教擾之

【伏兵】「フセゼイ」孫子に、鳥起者伏也、史記淮陰侯傳に「陳船欲渡臨晉、而一、從夏陽以木罌瓶渡軍」

【復辟】辟は君なり、君の位に復するをいふ、書經咸有一德に、伊尹既復政厥辟、文獻經籍考に、唐ノ中宗甲申武后之ヲ廢ス、後二十二年乙一

【不君】君たるの道を失ふをいふ、左傳宣二年に、晉靈公一、論語顔淵篇に、君不君、臣不臣

【不羣】高く羣類に出づるをいふ、出羣に同じ、漢書十三王傳贊、夫惟大雅卓爾一、河間獻王近之矣、また

す、塊をなすと拳の如く、皮は黒くして皺あり、肉は白きあり、赤きあり、或は外白く内赤きあり、黒松には白一、多く、赤松には赤一あり、輕虚なるあり堅實なるあり、藥用とす、一名は不死麴、淮南子説山訓に、千年之松、下有、一、

【福祿綏】身の「サイハイ」の安きなり、詩經に、君子萬年、一、之

【鳥】ハ松桂ノ枝ニ鳴キ、狐ハ蘭菊ノ叢ニ藏ル、(鳥鳴松桂之枝、狐藏蘭菊之叢)白氏文集の凶宅と題する詩中の句

【浮華】「ハナヤカ」にして浮薄なる義、漢書司馬相如傳に、滂行無節、但有、一、之辭、不周于用

【不快】疾あるをいふ、輟耕錄に「世謂有疾、曰、一、」また後漢書華佗傳に「體有、一、」また心に「ココロヨシ」とせざる義、戰國策に「蔡澤入、揖、應侯、應侯不快」

【附會】正理を知らずして、事の宜しきに因りて、附著合會するをいふ、漢書の爰盎傳の贊に「爰盎雖不好學、亦善傳會、傳は音フ、附に同じ、歐陽修の、蘇君墓誌銘に「易之道深矣、汨、而不明者、諸儒以附會之説亂之也」

また一篇の文、首尾全く整へるをいふ、後漢書張衡傳

フクローフケイ

曹植の詩に「懷此王佐才、慷慨獨一」

【夫君】「ラット」をいふ、唐晉統鑑に「高駢ノ閩怨ノ詩、人世悲歡不可知、一、初破黑山歸、如今又獻征南策、早晚催縫帶號衣」

【府君】亡父を「タフトビ」て稱す、朱子語類に「無爵曰、一、夫人、漢人碑已有、只是尊神之辭、一、如官府之君、或謂之明府、今人亦謂父爲家府君」

もと漢の時、太守を稱して「一」といふより轉用せしなり、後漢書に「廣陵太守陳登忠胸中煩懣、華佗脈之、曰、一、胃中有蟲」

【撫軍】左傳閔二年に「太子(中略)君行則守、有守則從、從曰、一、守曰、監國、古之制也」とあり(監國)を見よ、

【復命】命を受けて行ひ、終りて「ヘンジ」を申しあぐるなり、論語鄉黨に「賓退必、一、曰、賓不願矣」

【服膺】膺は背なり、背につけて忘れざるをいふ(拳拳)を見よ、

【福履】履は祿なり、福祿に同じ、詩經周南樛木篇に「樂只君子、一、綏之綏は安なり」

【伏流】水の地下を「クグリ」流るるをいふ、錢起の句に「藥井通、一、」

【茯苓】寓生の植物、黒松の舊根株の邊の土中に自生

に「作二京賦、精思傳會、十年乃成、文心雕龍附會篇に「何謂附會、謂總文理、統首尾、彌綸一篇、使雜而不越者、也」

【傳會】附會に同じ、前條を見よ、

【薄光】字は元暉、雪窓と號す、元の畫僧、大同の人、俗姓は李氏、趙孟頫之を朝に薦む、特に昭文館大學士に封ぜられ、號を玄悟大師と賜ふ、山水は關仝を學び、墨竹は文同を學ぶ、俱に趣を成す、詩を爲る冲淡粹美、眞行草書を善くし、尤も大字に工なり、凡そ禁扁は皆その書する所なり、

【郭郭】連文釋義に「城外小城曰郭、城外曰郭」

【負郭二頃之田】負は背なり、郭は城郭なり、負郭は城に近き地をいふ、その田は沃潤にして膏腴なれば、收穫他より多し、一頃は百畝なり、史記蘇秦傳に「使我有雒陽負郭田二頃、吾豈能佩六國相印乎、良田二頃もありて衣食に窮せざれば、奮發心生ぜず、故にいへり、

【浮瓜沉李】(瓜ヲ浮ベ)を見よ、

【不經】經は常法なり、一、は常法を用ひざる義、左傳襄二十六年に「夏書曰、與其殺不辜、寧失、一、」權

【負荆】己の罪を謝するをいふ(刎頸ノ)を見よ、

一一三

【腐刑】 宮刑なり、腐臭なる故にいふ、一解には、男兒勢を割き復た子を生むこと能はず、腐木の實を生ぜざる如し、司馬遷の報任安書に「最下—極矣」

【武藝十八事】 讀書記數畧に「二弓、二弩、三槍、四刀、五劍、六矛、七盾、八斧、九鉞、十戟、十一鞭、十二簡、十三槌、十四叉、十五叉、十六柶頭、十七綿繩套索、十八白打」

【身脛短ト雖モ之ヲ續ガバ憂ヘン】 (身ノ脛)を見よ、【不繫ノ舟】 (繫ガザル舟)を見よ、

【膚毛ヲ生ゼス】 (膚不生毛)勞役して皮膚の毛の摩り切れて生ぜざるをいふ、司馬相如の難蜀父老文中の語、

【巫覡】 女の「カンナギ」を巫といひ、男のを覡といふ、「カンナギ」とは神を齋き祀り、又は神樂を奏する人をいふ、國語の楚語に「—見鬼者」周禮に「司巫ハ群巫ノ政令ヲ掌ル、若シ國ニ大旱アレバ、巫ヲ帥キテ舞雩」

【不潔】 穢れたる物なり、孟子離婁下篇に「西子蒙—則人皆掩鼻而過之」西子は、西施なり、越國の美女、

【浮言】 無根の説なり、浮辭に同じ、書經に「胥動以—【負劔】 (劔ヲ負フ)古者劔を帶ぶるに、上長くして之を

抜くに室を出てず、故に之を背に推して負ふ如くし、以て前を短くして抜き易からしむるをいふ、史記刺客傳荆軻秦王を刺す條に「秦王方環柱走、卒惶急、不知所爲、左右乃曰、王負劔、劔、劔、遂拔以擊荆軻」

【婦言】 婦人の言葉、ヅカヒの上の心得なり、(四行)また(婦德)を參看せよ、

【普賢】 菩薩の名、普とは徳利周遍をいひ、賢とは仁慈慧悟をいふ、常に白象に騎る所を圖す、一に賢首ともいふ、大日經疏に「普是遍一切處、賢最勝妙善義」

【傳玄】 字は休奕、北地泥陽の人、少くして孤貧、博學にして善く文を屬す、性剛直峻急、人の短を容るること能はず、晉に事へて侍中と爲る、卒する時年六十二(或ハイフ六十)諡して剛といふ、玄少き時、難を河内に避けて、心を詞學に專にす、後ち顯貴に至ると雖も、著述を廢せず、嘗て傳子數千萬言を著す、玄また能く樂府歌章を作る、晉代宗廟朝廷の樂章、多くはその手を経て成る、郊祀歌、宗廟歌、鼓吹曲等の如き、概ね皆是なり、(傳子)を參看せよ、

【婦言是用】 書經周書の牧誓に「今商王受、惟—【侯王自稱孤寡】—禮記曲禮に「自稱曰—【布告】 告—音カウ—は敷き示す義、史記呂后紀に「事已—天下」

【布穀】 鳴鳩の一名、ハトの屬、爾雅の註に「鳴鳩一名ハ、鵲、鵲即今—也、農事方起、此鳥飛鳴於桑間、若云、五穀可布種、故云—」杜甫の詩に「—催春種」方言八に「—今江東呼爲稷穀、一に戴勝ともいふ、

【富國】 國を富ます義、唐書李適之傳に「華山生金采之、可以富國、韓偓の詩に「孜孜莫患勞心力、—安民理道長」

【負債】 人の財物を假りて未だ返さざるをいふ、漢書淮陽王傳に「博言—數百萬、願王爲償」博は張博なり、

【覆載】 天の覆ひ地の載するをいふ、轉じて天地の義とす、禮記に「天之所覆、地之所載、また中庸に「譬如天地之無不持載、無不覆幬、また左傳に「如天之無不幬也、如地之無不載也、幬は覆なり、

【附祭】 合祭なり、説文に「後死者合食於先祖」とあり、【夫妻反目】 夫婦目を反して相争ふ義、易の小畜卦に「九三、輿說輻、—」

【扶桑】 東海の中に在りといふ神木をいふ、二樹根を

【不言之教】 老莊の無爲恬淡の教をいふ、老子の四十三章に「天下之至柔、馳騁天下之至堅、中略—」無爲之益、天下希及之、

【不言之花】 桃李をいふ、桃李言ハザレドモを見よ、

【不辜】 罪なき者、書經の大禹謨に「與、殺其—、辜失、不經、また孟子公孫丑上篇に「行、一不義、殺—、而得、天下、皆不爲也、無辜に同じ、

【巫蠱】 連文釋義に「女能ク舞ヲ以テ神ヲ降スヲ巫トイヒ、左道ヲ執リテ以テ人ヲ惑スヲ蠱トイフ」

【武庫】 博學の人を稱す、晉書に「杜預尙書トナル、萬機ヲ損益スルコト、勝ゲテ數フベカラズ、朝野稱美シテ號シテ、杜武庫トイフ、其ノ有ラザル所ロナキヲイフナリ」

【婦功】 女子の仕事をいふ、周禮の春官に「教婦徳婦言、婦容、—」註に「—ハ絲泉ヲイフ」とあり、(婦徳)また(四行)を參看せよ、

【膚公】 詩經に「以奏—」註に「大功ナリ、膚功に同じ、

【膚功】 前の膚公に同じ、膚は大なり、功公通ず、

【婦功成ル】 家語に「霜降り而シテ—、嫁娶行ハル、注に「季秋ニ霜降り嫁娶スル者此レヨリ始マル」

【不穀】 諸侯の自稱、穀は善なり、不善の義に取る、老子

同じく相扶けて生ず、故に名づく、東方朔の十洲三島記に「一在碧海之中、地多林木、葉皆如桑、又有椹子、樹長者數千丈、徑三千圍、樹兩兩同根、偶生、更相依倚、是名扶桑、支那人が我國を「一」と稱するは、此に本づく、齋藤拙堂曰く、上古有扶桑樹、考其所在、蓋當豫之地、傳言其高不知幾百仞、其大陰翳數州、屹然爲大八洲之鎮、西土之人尙能言之、散見淮南山海諸書、遂爲我邦別號、云云、夜航詩話に「古所謂「一」樹者、蓋在伊豫海濱、洪荒時物、云、按、史景行天皇西巡時、履僵臥巨木、度海抵火州、此其是矣、其大且長、何如哉、所謂其未僵之時、當朝日則隱、杵島山、及夕日則覆阿蘇山者、理或然也、故西土之人稱「一」國者、指筑紫地方也、王維送晁監、鄉國「一」外、主人孤島中、韋莊送僧敬龍、「一」已在渺茫中、家在「一」東更東、言日本去「一」更遠也、

山海經の海外東經に「湯谷之上、有「一」、十日所浴、在黑齒北、居水中、有大木、九日居下枝、一日居上枝、淮南子地形訓に「扶木在陽州、日之所出、注に「扶木ハ「一」ナリ、扶搖を參看せよ、

梁書扶桑國傳に「一國者、齊永元元年、其國有沙門慧深、來至荊州、說云、「一」在大漢國東二萬餘里、地在中山海經の海外東經に「湯谷之上、有「一」、十日所浴、在黑齒北、居水中、有大木、九日居下枝、一日居上枝、淮南子地形訓に「扶木在陽州、日之所出、注に「扶木ハ「一」ナリ、扶搖を參看せよ、

國之東、其土多「一」、故以爲名、「一」葉似桐而初生如笋、國人食之、實如梨、而赤、績其皮爲布、以爲衣、亦以爲綿、作板屋、無城郭、有文字、以「一」皮爲紙、無兵甲、不攻戰、

【斧藻】 斧は斲削なり、藻は文飾なり、彫琢して「カザル」をいふ、揚子法言に「吾未見好斧藻其德者、斧藻其德者、歟、の註に「斧藻ハ猶ホ柄（たるき）ヲ刻ミ、楹（はしら）ヲ丹ニスルノ飾ノ如シ、染ハ音セツ楹（ます）ガナリ、

【撫箏】 「コトヲヒク」彈箏、鼓箏に同じ、事文類聚續集に「桓伊「一」」

【扶桑豈影ナカランヤ、浮雲掩ヒテ忽チ昏シ】（扶桑豈無影乎、浮雲掩而忽昏、前中書王兼明親王之苑裘賦中の語、下に「叢蘭豈不芳乎、秋風吹而先敗」とあり、扶桑は日の出づる處なるより、直ちに日を斥していふ、以て天子の明に喩ふ、浮雲は佞臣に喩ふ、この語、和漢明詠集の蘭の條下にも引けり、

【腐索】 「クサリナハ」朽索に同じ、家語に「凍凍焉、若持「一」扞馬、

【部索】 手を分ちて搜索する、漢書許后傳に「「一」罪人、注に「罪人ヲ部分シテ搜索スルナリ、

【斧鑿痕】 詩文などを作るに、徒に雕斲を加へて、その

痕迹のあらはるるをいふ、宣和畫譜に「邊鸞長于花鳥、精于設色、如良工之無「一」韓愈の調張籍詩に「徒觀「一」、不屬治水航、

【巫山】 縣名、隋の梁州巴東郡、唐の山南道夔州、今の四川省夔州府「一」縣治、

【武三思ガ妾狄仁傑ニアフ】 駁臺雜話「妖は人より起る」に見ゆ、性理字義に「昔武三思置「一」妾、絶色、士大夫皆訪觀、狄梁公亦往焉、妾逃避不見、三思搜之、在壁隙中、語曰、我乃花月之妖、天遣我奉「一」君談笑、梁公時之正人、我不可見、

【巫山之夢】 楚の襄王、夢に巫山の神女と會せし故事に由りて、男女の密會するに用ふ、文選の宋玉の高唐賦に「昔者先王、嘗テ高唐ニ游ビ、怠リテ而シテ晝寢ス、夢ニ一婦人ヲ見ル、曰ク妾ハ巫山ノ女ナリ、高唐ノ客タリ、聞ク君高唐ニ游ブト、願クハ枕席ヲ薦メント、王因リテ之ヲ幸ス、去ルトキニ辭シテ曰ク、妾ハ巫山ノ陽、高丘ノ岨ニ在リ、旦ニ朝雲トナリ、暮ニ行雨ト爲ル、朝朝暮暮陽臺ノ下ニスト、旦朝之ヲ視レバ、言ノ如シ、故ニ爲メニ廟ヲ立テ、號シテ朝雲トイフ、願クハ枕席を薦めんとは、親しく枕席を進め親昵を求めんと欲するなり、劉廷芝の公子行に「爲雲爲雨楚襄王、李白

の清平調詞に「一枝濃艷露凝香、雲雨巫山枉斷腸、皆この故事を用ひたるなり、江淹の詩に「神女色旖旎、乃出巫山湄、

【不死】 山海經に「「一」民、在其東、其爲人、黑色、壽不死、一曰在穿匈國東、

【不嘗】 資財多くして、ハカラレザル義、漢書貨殖傳に「家亦「一」、

また嘗は思なり、禮記の少儀に「「一」重器」とある、「一」は、思はざる義なり、

【不齒】（齒セズ）齒の列なれる如く、人と列を同くせざる義、左傳隱十一年に「寡人若朝於薛、不敢與諸任齒、註に「齒ハ列ナリ、禮記に「出郷不與士齒、

【父子】 釋名に「父ハ甫ナリ、始メテ己ヲ生ム者ナリ、また父死スレバ考ト爲ス、増韻に「子ハ嗣ナリ、易の序卦傳に「男女アリ、然後ニ夫婦アリ、夫婦アリ、然後ニ「一」アリ、白虎通に「王者ハ天ヲ父トシ、地ヲ母トシテ、天子トイフ、天子ノ子ヲ元子トイフ、

【布施】 人に物を施すをいふ、周語に「享祀時至、「一」優裕文字自然篇に「爲惠者「一」也、敷施を參看せよ、また佛經にては布施と讀む、清淨の心を以て資財を捨てて他に施し、吝惜の意なきをいふ、法界次第に「檀

那秦言「一」に財寶を施すと、世間出世間の善法を説きて他を導くとの二あり、

【扶枝】「カタヘ」の枝、ソバの枝、淮南子人閒訓に「去高木而巢一」

【浮辭】流言また浮言に同じ、無根の説なり、また浮薄の言なり、鄒陽の獄中上、梁王書に「兩主二臣、剖心析肝、相信、豈移於一哉」

【采思】屏なり、釋名に「一」ハ門外ニ在リ、采ハ復ナリ、思ハ思ナリ、臣將ニ入りテ事ヲ請フントスレバ、此ニ於テ復重ネテ之ヲ思フナリ、漢書文帝紀に「未央宮東闕一災」の師古の注に「一」ハ闕ニ連ル曲閣ナリ、王珪の詩に「宮花千樹襯一」

【傅子】一卷、晉の傅玄撰す、諸子中に在りて儒家類に屬す、もと一、四十卷ありしが、宋に至りて僅に二十三篇を存するのみ、後ち遂に散佚せしが、幸に永樂大典によりて重輯して十二篇を得たり、即ち百子全書に收むる者は是れなり、清の紀昀曰く「此ノ書論ズル所、皆治道ニ關切ニシテ儒風ヲ闡啓シ、精意名言、往往ニシテ在リ、實貴トスベキナリ」と、以てこの書の世に益あるを知るべし、(傅玄)を參看せよ、

【婦寺】婦人と宦官と、詩經大雅瞻卬に「匪教匪誨、時

維一」(婦寺ノ忠)を見よ、

【鳥氏】官名、書言故事に「鐘ヲ鑄ル匠ヲ一トイフ」周禮冬官考工記に「一」爲「鐘」注に「鐘大ニシテ短ナルレバ、ソノ聲疾ニシテ短ク聞ユ、小ニシテ長ケレバ、ソノ聲舒ニシテ遠ク聞ユ」とあり、正字通に「鳥ハ水ニ入りテ、溺レズ、以テ鐘工ニ名ヅクルハ、虚浮ノ義ニ取ル」

【敷施】政教を敷き施す、書經の「翁受一」の孔傳に「能合、受二六之德、而用之以布、施政教」史記の夏本紀に「は翁受普施に作る、

【普施】「アマネク」施す、史記五帝紀に「高辛一利物、不於其身」

【無二】無雙に同じ、史記淮陰侯傳に「功ト一於天下」

【無似】禮記の哀公問に「公ノ曰ク、寡人雖一也、願聞所以行三言之道」の註に「無似トハ、猶ホ不肖トイフガゴトシ、肖モ亦似ルナリ、哀公ノ謙辭、愚蔽ニシテ、能ク賢人ニ似ルコト無キヲイフ」

【武士】武夫に同じ、莊子人閒世に「上微一」則支離攘臂於其閒、支離は支離疏なり、史記蘇秦傳に「一二十萬」

【無仕】無は厚なり、厚く人を使ふなり、詩經小雅節南山篇に「瑣瑣姻亞、則無一」ニ「一」ニ「一」ニ「一」官に任ずるを

【無事日月長】白樂天の句、下に「不羈天地間」の句あり、

【不日】日を経ざる義、詩經邶風終風篇に「終風且曠、不日有暄」

【父執】父の朋をいふ、禮記の曲禮に「見父之執、不謂之進、不敢進、不謂之退、不敢退、不問不敢對、此孝子之行也」後漢書馬援傳に「援爲、梁松一、松貴、拜、援牀下、援不之答、杜甫の詩に「怡然敬一」問我來何方」

【鉄鎖】公羊傳襄二十七年に「負羈繫執一」鎖一に質に作る、腰斬の刑をいふ(斧質ニ)を參看せよ、

【斧質ニ伏ス】(伏斧質)質は鏃(キリダイ)をいふ、古人を斬るに鏃の上に加へ斧を以て之を斫る、故に斬に處せらるるを、斧質に伏すと云ふ、漢書項籍傳に「執與身一」妻子爲戮乎、史記廉頗藺相如傳に「肉袒一」

【俛シテ地芥ヲ拾フガ如シ】(如俛拾地芥)得易さに喩ふ、漢書の夏侯勝傳に「勝講授スル毎ニ、常ニ諸生ニ謂ヒテ曰ク、士ハ經術ニ明カナラザルヲ病ム、經術苟

【武周】周の武王の德をたたへたる樂の名、後漢書班彪傳の注に「一」ハ武王ノ樂ナリ、象武ともいふ、

【撫州】唐以後の州名、今の江西一府臨川縣治、また元の遼陽省東寧路一は、今の朝鮮平安道平壤府の西北、

【不二價】少しも、カケネなきをいふ、孟子滕文公上に「見ゆ(價)を見よ、

【不自棄ノ文】朱子文錄に出づ、その略に曰く「夫天地之物皆物也、而物有一節之可取、且不爲世之所棄、可謂人而不如物乎、蓋賤如石而有攻玉之用、毒如蠅而有和藥之需、糞其穢矣、而施之發、田、則五穀賴之以秀實、灰既冷矣、而俾之洗濯、則衣裳賴之以清潔、食、龜之肉、甲可遺也、南人用之以占年、食、鵝之肉、毛可棄也、桐、屨縫之以禦臘、推而舉之、類而推之、則天下無棄物矣、今人而見棄焉、特其自棄耳、五行以性、其性、五事以形、其形、五典以教、其教、五經以學、其學、(中略)若是則於身不棄、爲人無媿、祖父不失其貽謀、子孫不淪於困辱、永保其身、不亦宜乎」

【不死草】麥門冬の一名、容易に枯死せざるによりて名づく、

フシウ—フシテ

モ明カナレバ、其ノ青紫ヲ取ルコト、俛シテ地芥ヲ拾フガ如キノミ、經ヲ學ンデ明カナラザレバ、歸耕スルニ如カスト註に「青紫ハ卿大夫ノ服ナリ、俛ハ（ふす）ナリ、地芥ハ、草芥ノ横ニ地上ニ在ル者ヲ謂フ、俛シテ之ヲ拾フトハ、其ノ易クシテ必ズ得ルヲイフ」

【不死之樹】博物志に「員丘上有不死之樹、食之乃壽」

【不死之藥】韓非子説林に「有獻不死之藥于荆王者、中射之士奪而食之、王欲殺之、中射之士曰、客獻不死之藥、臣食之而王殺臣、是天藥也、乃不殺」とあり、史記にも齊人徐市等秦の始皇帝に上書して、童男童女と海に入り蓬萊、方丈、瀛州の三神山の仙人及び不死の藥を求めんと請ふ、始皇その言の如くする由を記せり、同書封禪書を參看せよ、李白の詩に「安得不死藥、高飛向蓬萊」

【婦寺ノ忠】論語の憲問篇に「子曰、愛之能勿勞乎、忠焉能勿誨乎」とあり、蘇軾曰く「愛シテ勞スルコトナキハ、禽犢ノ愛ナリ、忠ニシテ誨ウルナキハ、婦寺ノ忠ナリ、愛シテ之ヲ勞スルコトヲ知レバ、則チソノ愛タルヤ深シ、忠ニシテ之ヲ誨ウルコトヲ知レバ、則チソノ忠タルヤ大ナリ」と、婦寺は婦女と寺人周禮ニ寺人

ハ王ノ内人ヲ掌ルトアリ、即チ宦官ナリとをいふ、婦寺の忠は、姑息の忠にして眞の忠にはあらざり、【不脂戸】脂を塗らざる戸は、開閉し難し、以テ人の安りに口をさかざるに喩ふ、淮南子に「人有多言者、猶百舌之聲、人有少言者、猶不脂之戸也」

【不仁】仁徳なきをいふ、左傳に「臧文仲不仁者三」また手足の「シビレル」をいふ、後漢の班超の妹昭兄の西域に老ゆるを以て、超に命じて漢土に還らしめんとを請ふ上書にいふ「兄年七十兩手不仁」

【不審】（審カ）を見よ、【夫人】貴人の配なり、禮記曲禮に「天子ノ妃ヲ后トイヒ、諸侯ニハ夫人トイヒ、大夫ニハ孺人トイヒ、士ニハ婦人トイヒ、庶人ニハ妻トイフ」註に「妃ハ配ナリ、后ハ後ナリ、夫ハ扶ナリ（夫を扶くる義）孺ハ屬ナリ、婦ハ服ナリ、妻ハ齊ナリ」

また古は、天子の后をいふ、周禮考工記玉人に「一以勞諸侯」注に「一ハ天子ノ一」

また古は人の母を尊びて稱す、史記刺客傳「用一蠶繅之費」の注に「章昭云フ、古者男子ヲ名ヅケテ丈夫ト爲シ、大嫗ヲ尊ビテ一トナス」

【以疾言曰、某有】一、【婦人ノ三從】（三從）を見よ、【負薪之資】「ツマラヌ」ウマレツキ」謙していふ、後漢書袁紹傳に「臣以一拔于陪隸之中」

【婦人之仁】施すに足らざる小惠をいふ、史記淮陰侯傳に「韓信曰ク、項王人ヲ見ルトキ、恭敬慈愛ニシテ、言語嘔啞タリ、人疾病アルトキハ、涕泣シテ食飲ヲ分ツ、人ノ功アリテ當ニ封爵スベキ者ニ至リテハ、印刷弊（つぶれる）スレドモ忍ンデ予フル能ハズ、此所謂婦人之仁ナリ」註に「嘔啞ハ猶ホ嫗嫗ノゴトシ、漢書ニ、媯媯ニ作ル、媯媯ハ和好ノ貌」

【婦人ノ手ニ死セズ】（不死）於婦人手）死生の際は人の最も謹むべき所なり、故に男女の別を明かにせんために男子は婦人の手に死せざるなり、禮記喪大記に「男子一、婦人死、男子之手」

【薄將】（帝命）を見よ、【覆醬】覆は「オホフ」なり、醬油入の「フタ」にする義、著書の世に行はれずして、反古となるにいふ、故に自ら作りし詩文を、謙するにも用ふ、漢書の揚雄傳の贊に「鉅鹿侯芭、常ニ雄ニ從ヒテ居ル、其ノ太玄法言ヲ受ク、劉歆亦嘗テ之ヲ觀ル、雄ニ謂ヒテ曰ク、空シク自ラ

また古は己の母を稱していふ、後漢書應奉傳注に「汝南記云、元義謂人曰、此我故婦、非有他過、家一遇之、實酷」

また人人の義、左傳襄八年に「一愁痛不知所庇」註に「夫人ハ猶ホ人人ノ如シ」

また衆人の義、淮南子本經訓に「一相樂」註に「夫人ハ衆人ナリ」

【腐心】心を苦め、クサラスこと、史記刺客傳に「日夜切齒」

【武人】武夫に同じ、詩經の小雅漸漸之石篇に「一東征」また武暴の人の義にも用ふ、易の履卦六三に「一爲子大君」

【武信君】項羽の季父項梁自ら號して「一」といふ、【武臣死ヲ惜マズ】（文臣）錢）を見よ、【不仁者ハ以テ久シク約ニ處ル可カラズ】（不仁者不）可以久處、約）論語里仁篇に出づ、孔子の語、下に「不可、以長處、樂」とあり、約とは貧賤窮困なり、樂とは富貴豊裕なり、不仁の人は私欲に蔽はれて其の本心を失ふ、故に久しく窮約と富貴との境に處り難しとの義、【負薪之憂】己の病を謙していふ、負薪の餘勞ありて、事に堪へざる意、禮記曲禮に「君使士射、不能、則辭

苦ム、今學者祿利アリ、然レドモ尙ホ易ヲ明カニスル能ハズ、又玄ヲ如何セン、吾レ後人ノ用ヒテ醬蔬カメヲ覆ハンヲ恐ルト、雄笑ヒテ應ヘズ」とあり、註に「説ハ小聖ナリ」

晋書左思傳に「陸機曰、聞有僉父欲賦三都待其成、取覆醬蔬」

【亡狀】 無禮なり、亡は無なり、晋書漢書項籍傳に「秦中遇之多一亡無狀に通ず」

【無狀】 (一)一を見よ、量壽經鈔註に「情滯色欲、名淫欲、亦名淫色、亦名淫荒、故書云、内作色荒、外作禽荒、約内典、名一、謂愛染汚心名爲一、非法境、汗淨戒品、故云、行、即業也、亦名非梵行」

【不借】 中華古今註に「一ハ艸履ナリ、其ノ物輕賤ニシテ得易ク、人人自ラ之ヲ有シ、人ニ借ラザルノ義ニヨリ名ヅク、漢ノ文帝一ヲ履ミ、以テ朝ヲ視ル、是レナリ(軍持)を見よ、

【腐儒】 荀子の非相篇に「易曰、括囊、無譽無咎、一之謂也、註に「朽腐ノ物、用フル所ロナキガ如キヲ言フ、史記蘇布傳に「何爲一、爲天下安用一、何は、隨何」

【撫循】 撫は拊に通ず、慰め安んずる義、拊循を見よ、

【富春山】 後漢書に「嚴子陵少クシテ光武ト同ジク學ブ、後チ光武位ニ即ク、身ヲ隱シテ見エズ、徵シテ諫議大夫ト爲ス、屈セズ、一ニ隱レテ垂釣ス、後人因リテ以テ名ヅケテ嚴陵瀬トナス、子陵名は光、その釣せし釣臺は、桐廬縣の南、東西二臺あり、高各數丈、下に羊裘軒、客星館、招隱堂あり、嚴子陵を見よ、

【富春秋】 (春秋富ム)を見よ、

【部署】 「ヤクワリ」を定むる義、部「フケ」して署置する義、漢書高祖紀に「遂聽韓信策、一諸將、史記淮陰侯傳に「欲襲、呂后太子、一已定」

【不如歸】 「ホトトギス」の異名、その聲は一一一と聞ゆるを以てなり、蜀王本紀に「蜀望帝淫、其臣繁靈妻、乃禪位亡去、時此鳥鳴、故蜀人見、杜鵑鳴、而悲、望帝、其鳴如曰、一一一去、蘇轍の詩に「身慙啼鳥一一」范成大の詩に「杜鵑終勸一一」歸ルニ如カズ」の義に取りて、(杜鵑)を參看せよ、

【不食之地】 耕墾せざる地をいふ、禮記に「子高曰、我死則擇一一一而葬、我焉」

【膚寸ニシテ合ス】 膚寸とは少しの義、略して膚合ともいふ、切れ切れの雲が、あつまり合ふの義、風俗通に

【不淑】 淑は善良なり、一は不善の義、失徳者といふ、詩經邶風君子偕老篇に「子之不淑、云如之何」また不賢をいふ、韓愈の對禹問に「傳之子而當一一、則奈何」また人の死をいふ、禮記に「如何一一」また國の亡ぶるをいふ、逸周書に「王乃升、汾之阜、以望商邑、曰、嗚呼一一」

【不恤緯】 (菱緯ヲ)を見よ、

【夫須獨速】 夫須は草の名、笠に作るを以て、轉じて笠の義とす、詩經南山有臺篇の「南山有臺、北山有萊」の毛傳に「臺ハ夫須ナリ、萊ハ草ナリ、疏に「夫須ハ莎草ナリ、菱笠ト爲スベシ」獨速は菱の形をいひ、轉じて直ちに菱の義とす、楊萬里の詩に「尙書親餉老農夫、塞道夫須與獨速」なほ葛原詩話に詳説あり、參考すべし、

【膚受之愆】 愆は訴に同じ、肌膚に受くる如く、利害の身に切なる「ウツタヘ」をいふ、論語の顔淵篇に「浸潤之譖、一一一不行焉、可謂明也已矣」

【拊循】 拊は撫に同じ、慰撫する義、荀子富國に「一一一之、呪、嘔、之、また史記司馬穰苴傳に「問疾醫藥、身自一一一之」

【夫稅】 田百畝の稅、周禮載師の注に「一一ハ百畝ノ稅」

【夫婿】 「ヲツト」をいふ、王維の詩に「一一輕薄兒」

【浮生】 「ハカナキ」人生をいふ、史記賈誼傳に「其生若浮兮、其死若休、また杜甫の詩に「是非何處定、高枕笑一一」

【敷政】 政をシキオコナフ、詩經商頌長發篇に「一一優優、百祿是適、優優は寛裕の意、適は聚なり、

【不成人】 不具の人をいふ、また禮を知らざる人に喩ふ、禮記の禮器に「禮也者、猶體也、體不備、君子謂之一一」(朱熹ノ類異)を參看せよ、

【不世出】 數世を経て、稀に出づる義にて、いつの世にも、常に出づべき者にあらざる義、史記淮陰侯傳に「功無二於天下、而略一一者也、また漢書伍被傳に「參太子智略一一、非常人也、淮南子秦族訓に「夫欲治之主不世出、韓愈の與于襄陽書に「側聞閣下抱一一之、之、」

【浮生半日ノ閑】 人生の定りなく、又事多き中に半日の清閑を得たるをいふ、唐の李涉の題鶴林寺僧舍の詩

に終日昏昏醉夢、忽聞春盡、強登山、因過竹院、逢僧話、又得「フセイ」

【浮生夢ノ如シ】(浮生若夢)人生の「ハカナキ」こと夢の如しとの義、李白の春夜宴桃李園序に「フセイ」爲「權幾何、莊子刻意篇に「其生如浮、其死如流」(浮生)を參看せよ、

【不肖】肖は似なり、善に似ざる意にて、人に及かざるをいふ、史記の五帝紀に「堯、知子丹朱之不肖、不足授天下、中庸に「子曰、道之不明也、我知之矣、賢者過之不肖者不及也」一説に不肖は父に似ざる義、また一解に人は天の生ずるところなり、故に天に似ざるを「フセイ」といふと、漢書刑法志に「人肖天地之貌」注に「庸妄ノ人之ヲ、トイフ、其ノ狀貌、象似スル所、ロナキヲ言フナリ」

また自ら謙稱して「フセイ」といふ、

【不肖之主】愚なる主君、論衡福虛篇に見ゆ、

【不肖之父】愚なる父、孔子家語七十二弟子解に「冉雍生於「フセイ」

【負析薪】左傳昭七年に見ゆ「析薪ヲ」を見よ、

【不屑】(屑)トセズ事物を輕んじて意を加へざる義、屑は潔なり、詩經鄘風君子偕老篇に「鬢髮如雲、不屑ヲ言フナリ」

鬢也、鬢は髮髮(ソヘカミ)人髮少ければ鬢を以て之を益す、髮雲の如く多くして美なれば鬢を用ふるを屑とせざるをいふ、また鄘風君子偕老篇の「不我屑」の傳に「我ヲ以テ潔シトセザルナリ」

【符節ヲ合スル若シ】(若合符節)符節は、全き竹を剖きて兩とし、各、其の一を執り、之を合せて信とす、「フセイ」は、兩者の同じくして差ふ所なき義、孟子離婁下篇に「地之相去也、千有餘里、世之相後也、千有餘載、得志行於中國、フセイ」朱註に「符節ハ、玉ヲ以テ之ヲ爲リ、文字ヲ篆刻シテ、之ヲ中分シ、彼ト是ト各、其ノ半ヲ藏メ、故アレバ、左右合セテ以テ信ト爲ス、フセイ」トハ、其ノ同ジキヲ言フナリ」この語、荀子の儒效篇にも出づ、

【不屑之教誨】人をして自ら啓發せしめん爲めに教ふるを屑しとせずして自ら反省せしむるやうにする教誨法をいふ、孟子告子下篇に「孟子曰、教亦多術矣、予不屑之教誨者、是亦教誨之而已矣」

【布泉】錢をいふ、後周書に「武帝保定元年、更鑄錢、文曰「フセイ」以「當五」(泉布)を參看せよ、

【膚淺】淺薄なり、韻會に「フセイ」ハ、喻ハ、皮膚ニ在リテ深カラザルナリ」

【惘然】茫然として自失する貌、孟子滕文公上篇に「夷子「フセイ」廣韻に「失意ノ貌」

【不善人ト居ル、鮑魚ノ肆ニ入ルガ如シ】(與不善人居、如入鮑魚之肆)鮑魚を見よ、

【扶疎】分ち布く貌、一解に枝葉盛なる貌、韓非子に「木枝「フセイ」將塞、公問「上林賦に「垂條「フセイ」漢書武五子傳に「枝葉「フセイ」異姓不得閉也」

【扶蘇】秦の始皇の長子、直諫を好む、史記の始皇紀三十五年に、「フセイ」諫めて曰く、天下初めて定るも、遠方の黔首未だ集まらず、諸王皆孔子に誦法す、今上皆法を重くして之を繩さば、臣恐くは天下の安んぜざらんことを、唯上之を察せよと、始皇怒りて、「フセイ」をして北の方蒙恬の軍を上郡に監せしむ、始皇三十七年巡遊して道に崩す、趙高李斯等謀りて詔を詐り、死を賜はらしむ、即ち自殺す

また小木の名、詩經鄘風山有扶蘇篇の傳に「フセイ」ハ扶胥、皆小木ナリ」

【敷奏】敷、陳べて奏進するなり、奏聞に同じ、書經舜典に「フセイ」以「言」

【不測之淵】危険の地といふが如し、史記袁盎傳に「陸下從代乘、六乘傳馳、フセイ」

【負俗之累】負俗とは、俗に負きて世に讓らるるをいふ、漢書武帝紀に「士或有「フセイ」而立功名」

【扶蘇刑セラレテ秦世傾ク】太平記卷十二に見ゆ、秦の始皇沙丘に至りて病甚し、乃ち璽書をつくり、公子扶蘇に賜はらんとし、未だ使者に授けずして崩す、是に於て趙高李斯相與に謀りて公子胡亥を立て太子と爲し、更めて書を爲り長子扶蘇を數むるに罪を以てして死を賜ふ、やがて秦衰へ、漢のために亡ぼさる「扶蘇」を參看せよ、

【不孫】不順なり、謙恭ならざるなり、論語陽貨篇に「子貢曰、惡「フセイ」以爲「勇者、惡訐以爲「直者、孫は遜に同じ、次條を見よ、

【不遜】不順に同じ、論語述而篇に「奢則「フセイ」儉則「固、與「其不遜也、寧固」固は陋なり、

【負戴】孟子の梁惠王上篇の「頽白者不「フセイ」於道路、矣」の註に「負ハ任にもつ、背ニ在ルナリ、戴ハ任ノ首ニ在ルナリ」

【譜第】世統をいふ、系譜の義、晉書杜預傳に「參考衆家、フセイ」

【覆轡】天のあまねく、オホヘル義「覆載」を見よ、

【葡萄】西陽雜俎に「フセイ」ハ本ト大宛ヨリ出ツ、張騫西

域ニ使シテ致ス所口、白黒黄ノ三種アリ、一名ハ馬乳、マタ黒水晶ト名ヅク、國人醸シ以テ酒ヲ爲ル、富人ハ酒ヲ藏スル千斛ニ至ル、十年敗レズ、韓愈の詩に「若欲滿盤堆馬乳、莫辭添竹引龍鬚」次條を見よ、

葡萄

明 馮 琦

暖繁陰覆、綠苔、藤枝羅蔓共繁翹、自隨博望仙、棧後、詔許甘泉別殿栽、的的紫房含雨潤、疎疎翠幄向風開、詞臣消渴沾新醖、不羨金莖露一杯、

蒲萄

【蒲萄】本草に「一、益氣強志、令人肥健、少饑延、年輕身、廣志に「一、有黃黑白三種」史記に「大宛以「一」爲酒、富人藏酒至萬餘石、久者數十歲不敗、博物志に「西域一酒、傳云可至十年、また曰く張騫使西域、還得一、一、葡萄に同じ、史記大宛傳に「有蒲陶酒、多善馬、陶萄通ず、

不倒翁

【不倒翁】小兒の玩具、起キ上リコバフシト云ふもの、該餘叢考に「兒童嬉戲有「一」糊紙作醉漢狀、虛其中而實其底、雖按捺旋轉不倒也、吳偉業集中有詩考之、撫言、則唐人已有此物、名酒胡子乃勸酒具也、云云、

葡萄酒

【葡萄酒】事文類聚續集卷の十二に「史記貨殖傳ニ、漢大宛國造「一」一、また唐書の列傳に「唐憲宗遣使、賜

扶持

【扶持】「タスケモツ」義、禮記に「適、父母舅姑之所、下氣怡聲、問衣煖寒、出入則或先或後、而敬「一」之、孟子に「疾病相「一」杜甫の古柏行に「一、自是神明力、

釜中魚ヲ生ズ

【釜中魚ヲ生ズ】（釜中生魚）極めて貧しくして炊ぐものなきをいふ（飯中）を見よ、

釜中ノ魚

【釜中ノ魚】世に生存することの久しからざるに喩ふ、通鑑漢順帝紀に「廣陵賊張嬰曰、相聚、偷生若魚遊釜中、知其不可久、

扶竹

【扶竹】「フタマタダケ」楊升菴集に見ゆ、また「扶老竹」を見よ、

不知足

【不知足】（足ルヲ知ラズ）分に安んずることを知らず、貪求して厭くことなきをいふ、遺教經に「雖處天堂、亦不稱意、一、者雖富而貧、

淵ニ臨ミテ魚ヲ羨ムハ、退キテ網ヲ結ブニ如カズ

【淵ニ臨ミテ魚ヲ羨ムハ、退キテ網ヲ結ブニ如カズ】（臨淵羨魚不如退而結網）徒らに幸福を望まんよりは、退いて幸福を得べき素地をつくるに若かざるに喩ふ、漢書の董仲舒傳に「古人有言曰、臨淵羨魚不如退而結網」とあるに本づく、淮南子には「臨河而羨魚、不如歸家織網」に作る、文子抱朴子漢書禮樂志等に類語あり、

淵ノ爲メニ魚ヲ斃ル

【淵ノ爲メニ魚ヲ斃ル】（爲淵斃魚）暴君が、仁者の爲

類語あり、

李絳

【葡萄ノ美酒夜光ノ杯】唐の王翰（字ハ子羽）の涼州詞の起句なり、曰く「一、一、一、欲飲琵琶馬上催、醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回、涼州詞は、樂府の題なり、この詩は、北邊に征伐に出て居る時のもやうを作れり、起承は、美酒を夜光の玉の、サカヅキに酌み、飲まんと欲し、馬上に琵琶を弾じてその飲を催すなり、催は、ウナガスの義、轉結は、共に酔ひてそのま沙場に臥すをば、君必ず笑ふこと勿れよ、古より征戰に來たりし者が、幾人か生きて歸ることを得たりしぞと、君は他の人を斥す、最も悲壯の詩なり、この詩初唐七絶の第一なりと聞く、定めて然るなるべし、

負擔

【負擔】物を持つに背に負といひ、肩に擔といふ、管子に「負任擔荷、服牛輅馬、以周四方、左傳莊二十二年に「敬仲辭齊侯曰、免于罪戾、弛于一、君之惠也、

武斷

【武斷】其の饒富を恃みて、行を擅にし、罰を成すなり、史記平準書に「兼并豪黨之徒、以一、於鄉曲、武威を以て擅に人民を制する義、

補陀落

【補陀落】補陀落迦ともいふ、海島と譯す、祖庭事苑に「西域記云、梵語實陀洛伽山、此言孤絕處、觀自在菩薩所居之山、在南海中、

浮沈

【浮沈】浮びたり沈みたりする義、蘇軾の詩に「龜魚自一、また定りなき貌、詩經小雅に「載沈載浮、また世の變遷につれて行くにいふ、史記に「與世一、而取名哉、

浮湛

【浮湛】俗にしたがひて浮き沈みする義、湛は沈に通ず、前條を參看せよ、漢書袁盎傳に「與閭里一、

腐腸之藥

【腐腸之藥】腸をクサラシ身をそこなふ毒藥をいふ、美味醇酒に喩ふ、枚乘の七發に「甘脆肥饜、命曰「一、

負重涉遠

【負重涉遠】（重ヲ負ヒ）を見よ、

縛ヲ執ル

【縛ヲ執ル】（執縛禮記の曲禮に「助、葬必「一」と、註に「縛ハ棺ヲ引ク索ナリ、釋名に「前ヨリ之ヲ引クヲ縛トイフ、縛ハ發ナリ、車ヲ發シテ前マシム「一」は送葬の義、禮記檀弓に「弔、於葬者、必執引、若從柩、及塋皆一

めに、民を驅逐して、之に歸せしむるに喩ふ、孟子離婁上篇に「一、一、一、者類也、爲叢、斃、爵者、鷓也、爲湯武、斃、民者、榮與紂也、爵は雀なり、鷓は、スズメタカ、

淵變ジテ瀾ト爲ル

【淵變ジテ瀾ト爲ル】世の變遷常なきに喩へていふ、偃諺なり、紀淑望の古今集序に「淵變作瀾」とあり、古歌に「世の中は何か常なるあすか川、さのふの淵は今日の瀾となる、

浮沈

【浮沈】浮びたり沈みたりする義、蘇軾の詩に「龜魚自一、また定りなき貌、詩經小雅に「載沈載浮、また世の變遷につれて行くにいふ、史記に「與世一、而取名哉、

浮湛

【浮湛】俗にしたがひて浮き沈みする義、湛は沈に通ず、前條を參看せよ、漢書袁盎傳に「與閭里一、

腐腸之藥

【腐腸之藥】腸をクサラシ身をそこなふ毒藥をいふ、美味醇酒に喩ふ、枚乘の七發に「甘脆肥饜、命曰「一、

負重涉遠

【負重涉遠】（重ヲ負ヒ）を見よ、

縛ヲ執ル

【縛ヲ執ル】（執縛禮記の曲禮に「助、葬必「一」と、註に「縛ハ棺ヲ引ク索ナリ、釋名に「前ヨリ之ヲ引クヲ縛トイフ、縛ハ發ナリ、車ヲ發シテ前マシム「一」は送葬の義、禮記檀弓に「弔、於葬者、必執引、若從柩、及塋皆一

引とは概車の索棺に在るを縛といひ、道を行くに

【物議】世論といふに同じ、南史謝幾卿傳に「二人意相得、並肆情誕縱、或乘露車、歷游郊野、不屑一二人

【佛經】佛教の經文なり、後漢の明帝永平年中に、摩騰竺法蘭、白馬に經を馱して東都に至る、則ち四十二章

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

【佛國記】一卷、宋六朝の釋法顯撰す、法顯晉の義熙中

ハ、全く如來在世ノ尊ヲ拜スルニ同じ、故ニ佛滅後繪

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

【佛生日】釋迦の誕生日をいふ、東京夢華錄に「四月八

謂蒼毫ナリ、形管赤漆ノミ、史官事ヲ記スニ之ヲ用フ、五維組に、古人書鳥文小篆、似不用筆亦可、自真草八分興、而筆之權逾重矣、史記に、始皇命蒙恬與太子扶蘇築長城、恬取中山兔毫造筆、初學記に、尙書中候ニ、玄龜圖ヲ負ヒ出ヅ、周公筆ヲ授リ、時文ヲ以テ之ヲ寫ス、曲禮ニイフ、史載筆士載言ト此レ則チ秦ノ前已ニ筆アリシナリ、陶弘景傳に、弘景年四五歲、常以荻爲筆、畫灰中學書、世說に、王羲之得用筆法於白雲先生、先生遺以鼠鬚筆、又鍾繇張芝皆用鼠鬚筆、拾遺記に、任末年十四、學無常師、或依林木之下、編茅爲菴、削荆爲筆、夜則映月望星、暗則燃蒿自照、晉書に、左思爲三都賦、門庭藩溷皆置筆硯、十稔方成、東坡志林に、筆秃千枝、墨磨萬挺、退筆管城子、筆諫椽大ノ(五色ノ筆)形管ノ(筆頭花ヲ)等を參看せよ、

【不逞】逞は快なり、心に快からざる不平の人をいふ、左傳に、鄭尉止及五族、聚群一之人、以爲亂、正謂には、不檢謂之、一とあり、不檢とは檢束することなき、驕慢なる人をいふ、

【不庭】王庭に來朝せざるをいふ、詩經大雅韓奕篇に、幹一一方以佐戎、辟一また左傳隱十一年に、以王命討一、

【富鄭公】(富弼)を見よ、

【不弔】弔は愍なり、天のあはれむ所と爲らざる義、詩經小雅に、不弔昊天、

また不仁といふが如し、左傳襄十三年に、君子以、吳爲、

【筆ヲ落シ蠅ヲ點ス】(落筆蠅)を見よ、

【筆ヲ落ス】(落筆)下筆に同じ、杜甫の詩に、閱書百紙盡、一四座驚、

【筆ヲ呵ス】(呵筆)寒中文を書くに筆に暖き息を吹きかくるをいふ、開元遺事に、李白子、便殿撰制誥、時大寒、筆凍、帝勅宮嬪十人侍、白左右執牙筆、呵之、受聖眷如此、

【筆ヲ下ス】(下筆)筆を乗りて詩文を作る義、唐の岑參の詩に、學富贍、清詞、一不能休、

【筆ヲ下シ章ヲ成ス】(下筆成章)筆を下して容易に文章を成すをいふ、魏志文帝紀評に、文帝天資文藻、下筆成章、博聞強識、才藝兼該、

【筆ヲ閣ク】(閣筆)閣は、サシオクなり、筆を置くをいふ、事類全書に、後漢東觀大集、群儒、而著述無主、每欲載一事、皆閣筆相視、含毫不斷、東觀は閣の名、

【筆ヲ投ズ】(投筆)文事をすてて武事に従ふをいふ、漢

の班超字は仲升、大志あり、家貧しく、傭書して以て自ら給す、乃ち筆を地に投じて曰く、大丈夫當に張騫傅介子に效ひ、功を異域に立てて、以て封侯を萬里の外に取るべし、安んぞ能く久しく筆硯を事とせんやと、西域に使用して、功あり、封ぜられて定遠侯となれり、魏徴の述懐の詩にも、中原還逐鹿、一戎事戎軒、

【筆ヲ硯ル】(硯筆)筆を「ナメ」て書かんとする義、莊子田子方篇に、一和墨、

【筆ヲ載ス】(載筆)自ら筆を隨へ持つなり、禮記の曲禮に、史一、一士載言、

【筆花ヲ生ズ】(筆生花)筆頭花ヲ)を見よ、

【不天】天の祐くる所ると爲らざる義、左傳に、孤一不能事君、

【不腆】腆は善なり、多なり、厚なり、禮の厚からざるをいふ、人に物を贈る謙辭、左傳文十二年に、一敝器、不足辭也、禮記郊特性に、幣必誠、辭無不腆、

【普天之下率土之濱】詩の小雅北山篇に、普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣、この註に、土ノ廣キ臣ノ衆キヲ言フナリ、率ハ循、濱ハ涯ナリ、普は徧なり、天の徧く覆ふところの下、地の長く續ける限りにて、天下中の義、普はもと溥に作る、溥は大なり、孟子にこの詩

を引きて普に作る、義同じ、

【溥天之下】前條を見よ、

【浮屠】佛または佛教または僧をいふ、祖庭事苑に、梵語ノ佛陀、或ハ浮圖トイフ、或ハ部多トイフ、或ハ母駄、或ハ沒陀、皆五天ノ語ナリ、今竝ニ譯シテ覺道士トナス、三破論に、佛ノ舊經本ニ、一トイフ、羅什改メテ佛徒ト爲ス、歐陽修の釋秘演詩集序に、曼卿隱於酒、祕演隱於浮圖、皆奇男子也、また塔をいふ、次條を見よ、

【浮圖】浮屠に同じ、卓氏漢林に、浮圖ハ塔ナリ、圖ハ屠ト通ズ、唐書張巡傳に、射佛寺一、洛陽伽藍記に、永寧寺中有九層一、

【埠頭】通雅に、水濱ナリ、また水邊にて物を販賣する處をいふ、康熙字典に、一籠貨物、積販商泊之所、ハ

【不動尊】佛經に明王の一、一切の鬼魅諸障、煩惱を降服すといふ、顔色瘳惡にして、右に降魔劍を持し、左に縛の繩といふを握り、背に火焰ある像、脇士の二童子を制叱迦、矜羯羅といふ、

【婦德】婦人の備ふべき徳なり、禮記の昏義に、婦人先嫁三月、教以一婦言、婦容、婦功、(四行)を參看せよ、

【夫倡婦隨フ】關尹子に、天下之理、夫者倡、婦者隨、杜

者馳、化者逐、雄者鳴、雌者應、入も禽獸も男先ちて女隨、ふは自然の天理なりとの義、

【婦ニ七七去アリ】(七七去)を見よ、

【婦ニ長舌アルハ維レ厲ノ階ナリ】(婦有長舌、維厲之階)長舌を見よ、

【不如意】(意ノ如クナラズ)己の「オモハク」通りにならざる義、晉書羊祜傳に「祜曰、天下ノ一ノ者、恆十居七八」

【舟】釋名に「舟ハ周流ヲ言フ、淮南子に「古人窺木ノ浮、ブヲ見テ舟ヲ爲ル、易の繫辭ニ「剡木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利、以濟不通」世本に「黃帝ノ臣共鼓貨狄、剡木爲舟、呂氏春秋には「虞姁作舟、墨子には「工倕作舟」とあり、揚子方言に「關ヨリシテ西ハ之ヲ船トイヒ、關ヨリシテ東ハ之ヲ舟トイフ、今吳越ハ皆之ヲ船トイフ」史記に「武王渡河、中流白魚躍入王舟中、武王俯取以祭、拾遺記に「漢成帝常與趙飛燕、戲太液池、以沙棠爲舟、貴其不沈沒也」後漢書に「郭泰見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善、後歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩、泰唯與膺同、舟而濟、衆賓望之、以爲神仙焉」王弼の周易略例に「同舟而濟、則胡越何患乎、異心、漢宮殿疏に「武帝作昆明池、周匝四十里爲豫章大船、可載

萬人、船上起宮室、(布帆恙ナシ)舟中ノ指)を參看せよ、

【不佞】口才なきなり、論語公冶長篇に「雍也仁而」また自ら不才を謙していふ、左傳昭二十一年に「寡人一國語の晉語に「夷吾一」

【舟ヲ操ス】(操舟)舟を「アヤツル」義「フネヲコグ」をいふ、莊子に「津人一若神」

【船ヲ好ム者ハ溺レ、騎ヲ好ム者ハ墮ツ】(好船者溺、好騎者墮)越絶書に「夫好船者溺、好騎者墮、君子各以所好爲禍」

【船ヲ沈メ釜ヲ破ル】(沈船破釜)必死を極めて、決戦するをいふ、背水の陣と同じ、史記の項羽本紀に「項羽乃悉悉兵ヲ引イテ河ヲ渡ル、皆船ヲ沈メ、釜飯ヲ破リ、慮舍ヲ燒キ、三日ノ糧ヲ持タシメ、以テ士卒ニ必死シテ一モ還ル心ナキヲ示ス」

【舟ヲ載セ、舟ヲ覆ス】(載舟覆舟)水能ク舟)を見よ、

【舟ニ刻ミ、劍ヲ求ム】(刻舟求劍)時勢の推し移るは、舟の進むに似たり、舊法を固執するの益なきは、猶ほ劍を舟より落し、舷を刻記して之を求めんとするも、その劍の所在はすでに過ぎ去りて、求むべからざるが如し、呂氏春秋の察今に「楚人有、涉江者、其劍自舟

中墜、于水、遽刻其舟、曰、是吾劍所從墜也、舟止、從其所刻處、入水求之、舟已行矣、而劍不行、求劍若此、不亦惑乎」とあり、一本に刻を契に作る、

【船ヲ以テ家ト爲ス】(以船爲家)漢書五行志に「吳地一、以魚爲食」

【婦ノ爲メニ眉ヲ畫ク】(爲婦畫眉)漢書張敞傳に「張敞爲京兆尹、一、長安中傳、張京兆眉嬋、有司奏敞、上問之、對曰、臣聞閨房之内、夫婦之私、有過於畫眉者、上愛其能、弗責也」

【駙馬】天子の女婿なり、駙は乘輿に用ふる副馬なり、漢の武帝の時、駙馬都尉の官を置き、駙馬を掌らしむ、其の後、公主を尙する者、必ず此官に拜せし故、天子の女婿の稱と爲りしなり、行營雜錄に「皇女爲公主、其夫必拜駙馬都尉、故謂之、一、事物紀原に「公主に尙する者、必ず一、都尉に拜するは、魏晉より以來の例なりとあり、

【母望之福】望まざして忽ち至る幸福をいふ、史記の春申君傳に見ゆ、

【巫馬期】孔子の弟子(星ヲ戴キ)を見よ、

【不佞】いへからざる義、シツカリとしたる義、宋史に「崇獎維持、以成一之基」

【桴筏】桴は小なる、イカダ、筏は大なる、イカダ、論語公冶長篇の集解に「大者曰筏、小者曰桴」

【膚ハ凝脂ノ如シ】(膚ハ凝脂)を見よ、

【舞馬ノ災】火災をいふ、晉書藝術傳に「黃平問索統曰、我昨夜夢、舍中馬舞、數十人向馬拍手、此何祥也、曰、馬者火也、舞爲火起、向馬拍手、救火人也、平未歸而火作」

【負版】邦國の圖籍を持つ者、論語鄉黨篇に「式一者、式は車前の横木、敬ふ所ろあれば、伏してこれに憑るなり、

【負販】負は力を事とし、販は利を事とする、賤民をいふ、禮記の曲禮に「雖一者、必有尊也」

【普汎】「アマネク、ユキワタル」淮南子本經訓に「一無私」

【布帆恙ナシ】船中無事なるをいふ、布帆は「モメン」ホ世説に「晉書顧愷之傳を引きて「行人安穩、布帆無恙」また李白の秋下荆門詩に「布帆無恙掛秋風」(鱸魚ノ)を見よ、

【布被】「ヌ」の「フスマ」後漢書祭遵傳に「遵爲人廉約、小心、克己奉公、賞賜盡與士卒、家無私財、身衣草袴、布被、夫人裳不加緣、帝以是重焉」とあり(公孫弘ガ)

【拊髀】(髀ヲ拊ツ)を見よ、

【斌媚】「ナマメキ」て「コビル」蔡邕の文に「都冶—」

【富弼】字は彦國、河南の人、篤學にして大度あり、宋の

仁宗の時、茂才異等に擧げらる、累遷して樞密使に拜

す、後ち文彦博と竝に相たり、天下稱して富文となす、

鄭國公に封せらる、卒して太尉を贈り、文忠と諡す、宋

史に「富弼天性忠義ナリ、仁宗命ジテ契丹ニ使セシム

ルトキ、一女ノ卒スルヲ聞キ、再ビ使スルトキ、一男ノ

生ルルヲ聞ケドモ、皆顧ミズ、家書ヲ得レドモ未ダ嘗

テ之ヲ發セズ、輒チ之ヲ焚キテ曰ク、徒ニ人意ヲ亂ス

ノミト、帝召シテ樞密副使ト爲ス、弼當世ノ務十餘條

及ビ安邊十三策ヲ上ル、後チニ仕ヲ致シ洛ニ居リシ

トキ、清心獨居シ、夫人ニ對スルコト、賓客ノ如シ、毎ニ

蚤起シテ、家廟ヲ瞻禮スルコト、肅如タリ、年八十二シ

テ終リ、中宗ノ廟庭ニ配享セラル

【不敏】猶ほ不明の如し、不明なれば事に敏捷ならず、

論語顔淵篇に「同難—」請事、斯語、矣、戰國策に「寡

人—」孝經に「參—」何足、以、知之、參は曾參、

【膚敏】膚は大なり、敏は達なり、才行すぐれて美にし

て、事を爲すに敏達なるをいふ、一解に膚は容貌の美

なるをいふと、孟子離婁上篇に「般士—」裸、將子京、

裸は音クワン宗廟の祭に鬱鬯の酒を以て地に灌ぎて

神を降すをいふ、

【布覆】「アマネク」四方を、オホフ、義、文選長笛賦に「氣

噴勃以—」兮、

【武夫】「モノノフ」詩經周南兔置篇に「赴赴—」公侯、干

城、

また戰國策に「白骨疑象、—」類、玉の—は斌砮を

いふ、次條を見よ、

【斌砮】玉に似たる一種の石、斌—に斌に作る、王褒の

論に「故美玉蘊於—」凡人視之、快、馬、良工、砥、之、然、

後、知其和實、也、司馬光稷下賦に「—」亂、玉、魚、目、聞、

珠、—」に武夫とも書く、

【扶風】晉より隋に至るまでの郡名、或は雍州に屬し、

或は益州に屬す、唐以後の縣名、今の陝西省鳳翔府—

縣治、

【扶服】力を致すをいふ、禮記に「—」救、之、一解に、—

は、匍匐に同じ、手足并せ行くなり、揚雄の解嘲に「—

—」入、豪、

【怖覆】怖れて、ヒツクリカヘル、文選神女賦に「神心—

—」注に「—」恐怖シテ反覆スルナリ、

【傅粉カト疑フ】(疑傅粉)魚豢魏略に「何晏字ハ平叔

姿儀ニ美ナリ、面絶ダ白シ、魏ノ文帝其ノ粉ヲ傳クル

カラ疑フ、後、夏月ニ至リ喚ビ來リ、熱湯餅ヲ與フ、大ニ

汗出ヅ、遂ニ朱衣ヲ以テ自ラ拭フ、色轉タ皎然タリ、帝

始メテ之ヲ信ズ、

【傅粉郎】白粉をつけたる男、前條を見よ、

【負米ノ嘆】(子路米)を見よ、

【不平之鳴】韓愈の送孟東野序に「大凡物不、得其

平、則鳴、草木之無聲、風撓之鳴、水之無聲、風蕩之鳴、

云云、物はすべてその常を得ざれば必ず鳴聲を發す

るをいふ、人の感情も喜怒哀樂すべて常を得ざれば

亦不平を鳴らすものなり、必ずしも不滿の時のみに

限らず、

【斧劈】畫家の用語、石の皴を畫くに、斧もて木を劈き

たる如き線を描くをいふ、大—小—の稱あり、妮

古録に「皴法、董源麻皮皴、范寬雨點皴、李將軍小—

皴、李唐大—皴、云云(披麻)を參看せよ、

【武弁】武人のかぶる冠、魏志陳思王植傳に「辭、遠遊、

戴、—」解、朱組、佩、青紱、轉じて武人をいふ、儲光義の

句に「—」朝、建章、建章は宮殿の名、

【不變之法】尹文子に「—」君臣上下是也、

【父母】書經泰誓に「惟天地、萬物、—」蔡邕獨斷に「天子

父事天、母事地、兄事日、姊事月、詩經小雅に「豈弟、君

子、民之—」同、參我篇に「父兮生、我、母兮鞠、我、拊、我、

畜、我、長、我、育、我、顧、我、復、我、出入腹、我、欲、報、之、德、憂

天罔極、禮記の祭義に「—」愛之、喜而不忘、—」惡

之、懼而無怨、

【賻贈】喪儀を助くる贈物、公羊傳隱元年に「車馬ヲ賻

トイヒ、貨財ヲ賻トイフ」註に「賻ハ猶ホ覆ノ如キナリ

賻ハ猶ホ助ノ如キナリ、皆生ヲ助ケ死ヲ送ルノ禮、

【覆醬】醬は「カメ」「モタヒ」醬を入るる「カメ」をおほふ

反古とする義にて、己の詩文著書を謙していふ(覆醬)

を見よ、

また明の劉基の號(劉基)を見よ、

【扶木】扶桑をいふ、淮南子、地形訓に「—」在、陽州註

に「—」ハ扶桑ナリ、扶桑を見よ、

【腐木ハ以テ柱ト爲スベカラズ】(腐木不可以為柱)

愚劣の人は、要職に任ずべからざるに喩ふ、漢書劉輔

傳に「—」唯、其、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、

子、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、

子、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、父、母、之、疾、之、憂、

る者は、よくその心を體して疾なきやう心掛くるを孝といふなりとの義、論語爲政篇に「孟武伯問、孝子曰、一—」舊説には、子たる者は父母をして己の不義に陥らんことを憂へしむることなく、唯己の疾に罹ることのみを憂へしむるやうすべしと、

【不凡】「ナミナミ」ならざる義、凡漢音ハ「非凡」と義同じ、汝南先賢傳に「薛勤謂陳仲舉父曰、足下有—子、此時仲舉年十五、與勤言議盡日、」

【父母疾アレバ爲ム可カラズト雖モ藥ヲ下サザルノ理ナシ】親の身に疾ありて、とても治すべからざる大病と雖も藥を飲まざりて捨て置くの道理なしとの義、宋史文天祥傳に「元丞相字鑑怒曰、爾立—王、竟成何功、天祥曰、立君以存宗社、存—日、則盡臣子一日之責、何功之有、曰、既知其不可、何必爲、天祥曰、父母有疾、雖不可爲、無—下藥之理、盡吾心焉、不可救、則天命也、今日天祥至此、有死而已、何必多言、」

【不毛之地】史記の鄭世家に「哀シテ其社稷ヲ絶ツニ忍ビズシテ不毛ノ地ヲタマヒ、復タ改メテ君王ニ事フルヲ得シメバ、孤ノ願ナリ、註に「境塙ニシテ五穀ノ生ゼザルヲ不毛トイフ、謙シテ敢テ肥饒ヲ求メズ、公羊傳宣十二年にも見ゆ、孔明の出師表に「五月渡瀘、深

入、不毛ニ註に「不毛ハ草木ヲ生ゼザルノ地、」

【浮民】「ゴクツブシ」近思錄の註に「京師—一途、百萬、」

【文】數義あり、説文に「錯畫ナリ、玉篇に「文章也、釋名に「文ハ衆綵ヲ會集シテ以テ錦繡ヲ成シ、衆字ヲ合集シテ以テ辭義ヲ成ス、文繡ノ如ク然リ、禮記の樂記に「五色成文而不亂、尙書の序に「古者伏羲氏之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生焉、疏に「文ハ文字ナリ、説文に「依、類象形、故謂之文、其後形聲相益、即謂之字、」(文字)を見よ、

史記證法に「經緯、天地曰文、道德博聞曰文、勤學好問曰文、慈惠愛民曰文、愍民惠禮曰文、錫民爵位曰文、」

また飾る義、論語子張篇に「小人之過也必文、」

また文體の名、凡そ筆を執りて辭を屬する者、文にあらざるはなし、而して別に文の一體に文と稱するものあり、其の文格たる散文あり、韻語あり、或は楚辭に倣ひ、或は四六となす、其の用たる、或は以て神に盟ひ、或は以て人を諷する等、その體、その用各同じからず、

【文友】文學を以て交る友、文ヲ以テ友ヲを見よ、

【聞一知十】論語公冶長篇に出づ、「一ヲ聞テ十ヲ知ル」を見よ、

【分陰】少しばかりの時刻なり、晉書陶侃傳に「陶侃嘗語人曰、大禹聖者乃惜寸陰、衆人當惜—」

【汾陰】兩漢の河東郡—縣、北魏、隋の縣名、今の山西蒲州府榮河縣の北、

【氛氲】氣の盛なる貌、謝惠連の雪詩に「散漫交錯—」

【紛紜】亂るる貌、楚辭怨思に「腸—以縲轉兮、」

また盛なる貌、司馬相如の書に「威武—」班固の東都賦に「萬騎—」

【紛紜】盛んなる貌、楚辭九章に「—宜修姱而不醜、」

【文苑英華】一千卷、宋の太平興國七年李昉等勅を奉じて編す、蓋し以て蕭統の文選に續ぐに在り、故に文選は梁初に至るを以て、この書は即ち始を梁末に託し、以て唐に至る、されども南北朝の文は十の一弱にして唐代の文は十の九強に居り、往往全部を收入せしものあり、唐人の諸集の世に佚せしもの、幸にこの書に賴りて傳はるを得たるもの少からず、宋の彭叔夏の文苑英華辨證十卷、異同を考訂して極めて精核と爲す、

【文翁】前漢の益江、舒の人、少くして學を好み、春秋に

通ず、景帝の時、蜀郡の守となり、教化を崇尚し、學校を興し、以て風俗を變ず、是に由りて蜀の文風齊魯に比すべし、武帝の時、天下皆學を建つるは文翁より始まる、後ち、蜀に終る、蜀人之を祀る、詳しくは漢書の循吏傳を見よ、

【文ヲ賣リ活ヲ爲ス】(賣文爲活)文章を以て生活の資とする義、杜甫の詩に「故人南郡去、去索作碑錢、本賣文爲活、歸令室倒懸、」

【文ヲ屬ス】(屬文)屬は綴るなり、綴文また作文に同じ、漢書賈誼傳に「誼年十八、以能誦詩書—、稱於郡中、」晉書に「陸雲字ハ士龍、六歲ニシテ能ク文ヲ屬ス、」

【紛ヲ解ク】(紛争)紛争(モツレ)を解くをいふ、史記に「魯仲連曰、欲爲人排難解紛而無取也、」

【憤ヲ發シ食ヲ忘ル】(憤食忘)論語述而篇、孔子の語、其爲人也—、樂以忘憂、不知老之將至云、爾と、理の未だ會得せざる所、あれば憤を發してその理を得んことを求め、食事も忘るる程なり、すてにその理を得れば一途に之を樂みて憂をもち忘るる程なりとの意、

【文ヲ舞ス】(舞文)文は刑法の文なり、擅に刑法の文を玩びて、罪に致すをいふ、漢書汲黯傳に「好與事舞、」

【文法】また貨殖傳に「吏士一弄法刻章僞書」

【文ヲ以テ詩ヲ爲ル】(以文爲詩)后山詩話に「黃魯直云、詩文各有體、韓一、杜以詩爲文、故不工爾」

【文ヲ以テ友ヲ會ス】(以文會友)文學の爲めに、友人相會するをいふ、論語顔淵篇に「曾子曰、君子以文會友、以友輔仁」の註に「學ヲ講ジテ以テ友ヲ會スルトキハ、道益、明カナリ、善ヲ取リテ以テ仁ヲ輔クルトキハ、徳日ニ進ム」

【紛更】「ミダリに改め換ふるをいふ、漢書汲黯傳に「何空取高皇帝約束、一之爲」

【文行忠信】論語の述而篇に「子以四教、一、一」とあり、孔子人に教ふるにこの四者を以てせしなり、文を學び、行を修め、忠信を存するをいふ、忠は心を盡し、信は事を實にするなり、

【胎合】吻一音ピン兩唇の相合ふが如く、事がよく相合するをいふ、莊子齊物論に「爲其一」

【扮戲子】俳優が種種の人物に打扮(ヨソホフ)するをいふ、傳習錄卷上に「若只是那些儀節、求得是當便謂至善、即如今一扮、得許多溫清奉養的儀節、是當亦可謂之至善矣、扮の字、扮戲、打扮、假扮等の義の時、は音ハン又はヘンを正とすれども、俗讀に従ひこ

【文獻不足】(文獻不足)文は典籍、獻は賢人をいふ、徵證すべし、典籍と賢人との乏しきをいふ、論語八佾篇に「子曰、夏禮吾能言、之杞不足徵也、殷禮吾能言、之宋不足徵也、一、一故也、足則吾能徵之矣、不足とは全く無きにあらず、唯缺くる所あるなり、杞國は夏の後、宋國は殷の後なり、

【文獻徵存錄】十卷、錢林(字ハ東生)の輯むるところ、清初より道光頃に至る學者四百五十九人の傳記にて、その學說詩文の一斑をも論ぜり、

【文獻通考】(通考)を見よ、

【文彥博】字は寛夫、宋の介休の人、進士に及第し、四朝に累仕し、出でては將、入りては相たること五十餘年、再び相たる時、富弼と並び命ぜらる、士大夫庭に相賀す、彦博朝に立つに端重にして威あり、契丹の使望見して容を改め、手を拱して曰く、天下の異人なりと、官太師に至り、潞國公に封ぜらる、紹聖四年卒す、年九十

【賁鼓】大鼓なり、詩經大雅靈臺篇に「一維鏞鏞は六鐘、

【紛紅駭綠】紛は亂るるなり、駭は驚くなり、紅は花の色、綠は草木の葉をいふ、花葉の風のために吹き搖

に收む、

【文魚】「モヤウ」あるうつくしき魚をいふ、山海經の中

山經に「唯水其中多一」

【文君壚ニ當ル】(卓文君)を見よ、

【分外】己の身分の外をいふ、三國志魏志に「程曉疏曰、上不責非職之功、下不務一之賞」

【文官錢ヲ愛セズ武臣死ヲ惜マズ】宋史の岳飛傳に「或人天下ハ何ノ時カ太平ナラント問フ、曰ク、文官不愛錢、武臣不惜死、天下平カナラント」官一に臣に作る、

【刎頸之交】生死を共にし、頸を刎ねらるるも悔いざるをいふ、史記の廉頗藺相如傳に「廉頗肉袒負荆、至門謝罪曰、鄙賤之人、不知將軍寬之至此、卒相與驩爲一、一」荆は答刑に用ふる杖、古は「ニンジンボク」にて作る、

【文教熙ル】文學の教が興り廣まる、熙は説文に「興也、廣韻に「和也、廣也、長也」とあり、韓愈の河南府同官記に「武志既揚、一亦一」

【文鑑】文は飭なり、鑑首に同じ、天子などの遊樂に用ひらるる舟をいふ、子虛の賦に「游於清池、浮一、一」(龍頭鷓首)を見よ、

かざるる状をいふ、柳宗元の袁家渴記に「毎風自四山而下、振動大木、掩冉衆草、一、一」蕪勃、香氣、陸游の詩に「人在一、一中」

【粉骨碎身】身を「コナゴナ」にして「ハタラク」義、禪林類纂に「一、一難報此德、證道歌に「一、一未足酬、一句了然超百億」

【文采】文章光彩をいふ、荀子に「此文、而不采者、歎」連文釋義に「采爲文之實、文爲采之華」

【分歲】字典に「風土記除夜祭、先竣事、長幼聚飲、祝頌而散謂之一、一」

【分散】「ハナレバナレ」になる、離散に同じ、左傳に「國人一、一」

【文山ガ衣帶ニノコレル贊】駿臺雜話の「歲寒知松柏」に見ゆ、文山は、文天祥の號なり、燕京の柴市にて殺されし時、衣帶中に贊あり、曰く「孔曰成仁、孟曰取義、惟其義盡、所以仁至、讀聖賢書、所學何事、而今而後、幾無愧」と、孔曰成仁とは、論語の衛靈公篇に「志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁」とあるを斥し、孟曰取義とは、孟子の告子篇に「生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生取義者也」とあるを斥す、

【文山集】二十一卷、宋の文天祥撰す、凡そ詩文十七卷、

指南前録一卷、後録二卷、紀年録一卷、天祥大節炳然必ずしも詞章を以て重しとせず、而かも詞章も亦實に卓然として傳ふべし。

【文字】(一)を見よ。

【文子】二卷、一名を通玄真經といふ、欽定四庫全書簡明目録に「一ハソノ名字ヲ知ラズ、漢志ニ、タダ老聃ノ弟子ト稱スルノミ、或ハ計然トイフハ誤ナリ、書凡十二篇皆聃ノ説ヲ述ブ、柳宗元ハ、ソノ多ク他書ヲ竊取シ、以テ之ヲ合スト稱ス、然レドモ要スルニコレ唐以前ノ古本ナリ」

唐の徐靈府の通玄真經注十二卷、宋の杜道堅の續義十二卷あり。

【文事有ル者ハ必ず武備有リ】(有文事者必有武備)文武は一方に偏すべからざるをいふ、史記の孔子世家に「孔子相ノ事ヲ攝セリ、曰ク、臣聞ク、有文事者必有武備、有武事者必有文備、云云」家語相魯篇にも見ゆ。

【文質三統】論語に「子曰、殷因於夏禮、所損益可知也、周因於殷禮、所損益可知也、馬融の注に「所因謂三綱五常、所損益謂文質三統」と、一説に、文質とは、夏は忠を尚び、商は質を尚び、周は文を尚ぶをいふ、三統と

【文臣錢ヲ愛セズ】(文臣不愛錢)宋史岳飛傳に「或問、岳飛、天下何時太平、飛答曰、一、一、一、武臣不惜死、則天下平矣、蓋有宋積弱、文臣愛錢、武臣惜死、岳飛所以致有斯言」

【文心雕龍】十卷、梁の劉勰撰す、上篇二十五は主として文章の體裁を論じ、下篇二十四は文章の工拙を論ず、別に序志一ありて、この書を著す由を言ふ、この書は論文の書の最も古くして且つ精しきものなり、その世に盛行せしは、獨りその行文の妙なるに由るのみならず、清の黃叔琳の「一、一、一、輯注十卷あり、

【氛祥】天の氣なり、凶氣を氣と爲し、吉氣を祥と爲す、國語に「臺、不過望、一、一、一」

【文章】「アヤモヤウ」荀子富國篇に「輔轍一、一、一」周禮冬官考工記に「畫繪之事、青與赤謂之文、赤與白謂之章」

また文字を連ねて篇を成せるもの、漢書に「一、一、一」則司馬遷相如杜甫の詩に「文章千古事、得失寸心知」

【文章一貫】二卷、明人高琦等編す、琦は山東武城の人、丙戌の進士、嘉靖丁亥季夏、煙霧程默の序あり、上卷は、立意氣象、篇法、章法、句法、字法に分ち、下卷は、起端、敘事、議論、引用、譬喻、含蓄、形容、綴緒に分ちて、古人

は、夏の正は建寅人統たり、商の正は建丑地統たり、周の正は建子天統たるを謂ふと。

【文質彬彬】彬彬は猶ほ班々の如し、物の相雜りて適ひ均しき貌、即ち文と質と適當に雜れるをいふ、論語雍也篇に「質勝文則野、文勝質則史、一、一、一」然後君子

【文人】文徳ある人、詩經大雅江漢に「告于、一、一、一」注に「一、一、一」先祖ノ文徳アル者、文王ヲ謂フ」また廣く文學ある人をいふ、一、一、一、墨客などと連用す、文士に同じ。

【文身】肌に「イレズミ」して飾る、史記の周紀に「太伯處仲知、古公欲立、季歷以傳昌、乃二人亡、如荊蠻、一、一、一、斷髮以讓、季歷、淮南子に「民人被髮文身、儼鱗蟲、斷髮」

【聞人】名高き人家語に「少正卯魯之、一、一、一」也

【文人相輕】文藝に従事する人は、自ら高くかまへて相互に輕侮する習あるをいふ、典論に「文人相輕、自古而然、傅毅之於班固、伯仲之聞耳、而固小之、與弟超書曰、武仲以善屬文、爲蘭臺令史、下筆不能自休、夫人善於自見、而文非一體、鮮能備善、是以各以其所長、相輕所短」

論文の法則とすべきものを類輯せり、如蘭社舖刻本あり。

【文章軌範】七卷、宋の謝枋撰す、舉業者の爲めに軌範とすべき文章凡て六十九篇を選集せしものにして、侯王相將有種乎の七字に配して七卷に分ち、一二卷を放膽文といひ、三卷以下を小心文といふ、その意に以爲らく、凡そ文を學ぶには、初はその膽の大なるを要し、終は心の小なるを要すと、探るところの文は陶淵明の歸去來辭、諸葛亮の出師表を除くの外は、皆唐宋作家の文なり、每篇批點評語あり、唯出師表と歸去來辭とのみこれ無し、蓋し枋得は宋の忠臣にして此書は宋の亡後に編せしものなれば、曾に二子を尊重して然るのみにあらず、寓意の存するものあるならん、この書別に鄒守益、東郭ト號ス、明ノ正徳ノ進士

の續「一、一、一」七卷あれども選擇宜しきを失せり、蓋し狡猾なる書肆の名を守益に託せしものか、是に於て頼山陽は謝選拾遺六卷を選集して世に行へり、

【文昌星】北斗星の魁前に在る六つの星なり、魁といふ名に因りて科第をこの星に祈ることとなり、五雜組に「俗以魁故祠文昌、以祈科第、因其近斗也、故亦稱文昌司命、云、傳會甚矣」

【文章 正宗】二十卷、續集二十卷、宋の眞德秀撰す、正編録する所は皆唐以前の文なり、辭命議論敘事詩歌の四類に分つ、續集は皆北宋の文にして、議論敘事の二類のみ、蓋し猶ほ未成の稿本なるべし、收むるところ大抵理を言ふを以て主と爲す、故にその去取は古來文を論ずる者と迥に異なり、その説普く行はるべからずと雖も、選擇嚴正にして、正宗の名にそむかずと謂ふべし、

【文章 鉅公】文章の大家をいふ、李賀の高軒過の詩に「馬蹄隱耳聲隆隆、入門下馬氣如虹、云是東京才子」と謂ふべし、

【文章 四友】唐書杜審言傳に「少與李嶠・崔融・蘇味道、爲一門」世號崔李蘇杜、

【文章ノ四體】文に散文・四六・韵語・時文の別あり、散文といふは、字數定まらず、平仄韵章もとよみかまひなし、また古文といふ、古は四六の體なし、六朝以來これあり、それ故に後世にても散文に書けば古の法なる故に、これを古文といふ、秦漢の文は、皆古文にて散文なり、六朝以來四六の體盛んに行はれ、古文廢絶せり、唐の韓文公、當時の弊をためて上代の體を又書きあらはせり、蘇軾が「文起八代之衰」といふは、この義を

右の外に、語録體あり、東牘體あり、公移體あり、演義體あれども畢竟俗語なり、文章とするにたらず、以上伊藤東涯の操觚字訣の説に係る、

【文章 宿老】文章家中の老先生といふ義、唐書に「李嶠字巨山、爲鳳閣舍人、文冊太號多主、爲之、嶠富才思、然其仕前與王勃・楊益川接、中與崔融・蘇味道、齊名、晚諸人沒、而爲一門、一時學者取法焉、」(李嶠)を見よ、

【文章之絶唱】文章の美なること、比なきをいふ、鶴林玉露に「太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、文章絶唱也、」

【文章 小技】下に「於道末爲尊」の句あり、杜甫の句、文章はもと一小藝なれば、道の上に於て尊さものと云ふを得ずとの意、洪容齋はこの語を評して「杜甫が激するところに出でし失言なりといへり、(文者貫道)を參看せよ、」

【文章ハ經國ノ大業】魏文帝の典論に「文章經國之大業、不朽之盛事、年壽有時而盡、榮樂止乎其身、二者必至之常期、未若文章之無窮」とあり、經國とは國を治むるをいふ、

【文章命達ヲ憎ム】(文章憎命達)文人は兎角不仕合の者多し、故にいふ、杜博の句、

稱美したるものなり、四六また駢儷といふ、南北以來文を對對に書きて句數字數を同じやうにまくばり作る、最初を四字六字に作る故に、四六といふ、中になりて色色變化して、或は三七或は五八、或は六八、字數定まらず、しかれども必ず對句と字數とを合するなり、其の内に隔句對あり、二句對あり、二句對を散聯といふ、隔句對を偶聯といふ、句の末に平仄を互にとる、韵語といふは、韵字をふみたる文なり、賦・贊・銘・頌の類の如きこれなり、時文といふは及第の文章なり、また制藝ともいひ、制義ともいふ、程文・程墨ともいふ、近世明清の時文の本は、宋の時、王荆公よりはじまる、宋以前及第にとるは、皆詞賦を以て試む、その無益なるを以て、經書の文句を題にして天下の學士を試む、是を經義といふ、宋の時の經義亡びて傳はらず、ただ張子叔が答經義二篇、宋文鑑にこれをのせたり、元の時の經義も亦傳はらず、明の世、清の世の經義多くあり、それも文法時時に變ずれども、大較首に二句破題といひて、末に必ず矣也焉等の字をおき、その次ぎに承題といふ、一くさりあり、その次に長き對八段あり、畢竟四聯なり、是を八股といふ、又八比ともいふ、終りに結語あり、その内に少少變體あり、

【文儒】文學に長じたる儒者、晉書に「逮于孝武、崇尚」

【分手】(手ヲ分ツ)を見よ、

【分銖】少しの分量をいふ、錙銖に同じ、史記の大宛傳に「其人皆深眼多須鬚、善市買、爭一」

【蟲首】微細の義、蟲は蚊の古文なり、淮南子に「權輕重、不差一」

【文春華ノ如シ】(文如春華)文辭の華麗なるをいふ、曹植の文に「一、思若湧泉」

【粉飾】女子の紅白粉等にて假粧するをいふ、史記滑稽傳に「視人家女好者、云當爲河伯婦、共一之、轉じて飾りて美しく見せる如く人を褒めて善き者にする義、韓詩外傳に「善辨治人者、故人安之、善一、人者、故人樂之、」

【文成ガ偽】太平記卷二十六に見ゆ、齊人李少翁、鬼神の方を以て武帝に見ゆ、帝幸する所乃の王夫人卒す、少翁方を以て夜、鬼を致す、王夫人の貌の如し、帝帷中より望む、乃ち拜して文成將軍となし、客を以て之を禮す、文成又上に勸めて甘泉宮を作らしめ、祭具を置き以て天神を致す、居る歳餘、その方益衰ふ、乃ち帛書を作り以て牛に飯せしめ、伴りて知らざるまね

し、言ひて曰く、この牛の腹中奇ありと、殺し視て書を
得たり、書言甚だ怪し、上その手書たるを識りて之を
誅す、時に元狩四年なり、詳しくは資治通鑑を見よ、

【蚊蚋山ヲ負フ】 蚋も亦蚊なり、説文に「秦晉ハ之ヲ蚋
トイヒ、楚ハ之ヲ蚊トイフ」莊子應帝王篇に「使蚊蚋
負山」(蚊負)を見よ、

【文石】 西京雜記に「五鹿充宗學ヲ弘成子ニ受ク、成子
少時人アリ授クルニ一以テテ、大サ燕卵ノ如シ、
成子之ヲ吞ミ、犬ニ明悟シ、天下ノ通儒ト爲ル、成子後
病ミ此石ヲ吐出ス、以テ充宗ニ授ク、充宗マタ碩學ト
ナル」

【文籍】 書物をいふ、書經の序に「由是一一生焉」
「憤セザレバ啓セズ、排セザレバ發セズ」(不憤不啓、
不排不發)論語述而篇、孔子の語下に「舉一隅、不以
三隅反、則不復也」とあり、憤とは心通せんことを求
めて未だ得ざるの意とありて、憤り慙ること、排とは、
口言はんと欲して未だ能はざるの貌とありて、その
貌屈まり抑へられて伸びざるをいふ、啓はその憤慙
の意を開き知らしむるなり、發はその能はざる所の
の辭を達して言はしむるなり、學者をして反覆推究
して、教を受くるの地を爲さしめ、而る後に啓發する
をいふ、

【文籍】 書物をいふ、書經の序に「由是一一生焉」
「憤セザレバ啓セズ、排セザレバ發セズ」(不憤不啓、
不排不發)論語述而篇、孔子の語下に「舉一隅、不以
三隅反、則不復也」とあり、憤とは心通せんことを求
めて未だ得ざるの意とありて、憤り慙ること、排とは、
口言はんと欲して未だ能はざるの貌とありて、その
貌屈まり抑へられて伸びざるをいふ、啓はその憤慙
の意を開き知らしむるなり、發はその能はざる所の
の辭を達して言はしむるなり、學者をして反覆推究
して、教を受くるの地を爲さしめ、而る後に啓發する
をいふ、

【紛拏】 亂れて相搏つをいふ、漢書霍去病傳に「漢匈奴
相一」

【粉黛】 「オシロイ」と「マユズミ」と、假粧の義、轉じて美
人をいふ、白樂天の長恨歌に「六宮一無顔色」

【粉黛】 「オシロイ」と「マユズミ」と、假粧の義、轉じて美
人をいふ、白樂天の長恨歌に「六宮一無顔色」

【文體三アリ】 (文體有三) 朱子の語録に「有治世之文、
有衰世之文、有亂世之文、六經治世之文也、如國語委
靡繁絮、眞衰世之文耳、是時語言議論如此、宜乎周之
不能振起也、至於亂世之文、則戰國是也、然有英偉
氣、非衰世國語之文之比也、楚漢閒文字眞是奇、豈易
及也」

【文體明辨】 八十四卷、明の徐師曾撰す、師曾字は伯魯、
吳興の人、嘉靖二十六年の進士、官左給事中に至る、こ
の書は、明の吳訥の文章辨體に據り之を取捨して著
したるなり、分ちて文章綱領一卷、詩文六十七卷、附録
十六卷とす、體例蕪雜の嫌あれども、寛文十三年の翻
刻ありて、頗る世に行はる、

【聞道】 「キクナラク」と讀む、聞説に同じ、道説は竝に助
辭なれども、人ノ某事ヲ道フヲ聞クの意あり、詩に多
く用ふ、孟浩然の洛陽訪袁拾遺不遇の詩に「一梅

【噴雪】 浪の散り亂るるに喩ふ、李白の詩に「潮似連
山一蹴來」

【蚊蚋之蟲】 蚊の「マツゲ」に巢をくふ蟲なり、列子湯問
篇に「江浦之閒、生廢蟲、其名曰焦螟、群飛而集於蚊蚋、
弗相觸也、栖宿去來、蚊弗覺也」とあり、廢は細小の義、
【芥然】 土の「モリアガル」貌、管子の地員篇に「一若
灰註に「一ハ壤起ノ貌」

【文宣王】 唐の玄宗開元二十七年八月孔子を先聖と
稱し、追諡して「一」といひ、南面に坐して王者の服
を被らしめ、弟子に追贈して、公侯伯となす、唐書禮樂
志を參看せよ、

【分疏】 「イヒツケスル」實退録に「世俗謂「自辨解」曰「一
」品字箋に「一ハ即チ條陳ナリ」

【文宗】 文人の宗師をいふ、晉書陸雲傳に「百代一
人而已」また唐書陳子昂傳に「是必爲海內一」

【文則】 二卷宋の陳騭字ハ叔通、嘉泰三年卒ス、年七十
六、撰す、この書上巻は多く文法を論じ、經傳の文を評
す、下巻は主として句法文體を論ぜり、修辭の參考と
す、べし、我が國にては享保十三年、山井鼎校刊す(陳騭
)を參看せよ、

【文其ノ實ニ過グ】 (文過其實) 文飾の實地に過ぐるを

花早、何如此地春
【文蜻】 蜻は龍の屬「アマリヤウ」黃色にして角なし、
一は「アヤ」ある蜻なり、王鑒七夕の詩に「六龍奮、瑤轡
一負瓊車、秦觀八駿圖序に「彪虎一之流」

【文忠公全集】 一百五十三卷、附録五卷、宋の歐陽修撰
す、固必大(字ハ子充、宋ノ廬陵ノ人、嘉泰二年卒ス、年
七十九)編す、修の詩文、唯居士集五十卷は、その手定せ
しところ、その餘の諸集は皆他人の綴拾して、編せし
ところにして、諸州にて刻せし異本亦多し、必大參互
考訂して合せてこの集を成す、諸本に比すれば特に
精善となす、卷首に像贊年譜あり、その目は左の如し、
居士集五十卷 外集二十五卷 易童子問三卷
外制集三卷 內制集八卷 表奏書啓四六集七卷
奏議集十八卷 雜著十九卷 集古錄十卷
書簡十卷

【文中子】 十卷、一に中説ともいふ、諸子中、儒家に屬す、
舊本、隋の王通撰すと題すれども、その子福郊等の纂
述せし所るなり、通は王勃の祖父なり、居然として聖
人を以て自ら居る、この書論語に擬し、誇張甚しと雖
も、典要の言少からず、學者宜しく一讀すべし、文中子
と名づけたるは、その證を取りしなり、

中説注十卷は宋の阮逸の撰なり、

【文陣之雄師】文章の大家をいふ、唐書蘇頌傳に「張九齡嘗覽頌文卷謂同列曰蘇生之俊膽無敵真文陣之雄師也陣とは文章を戰陣に喩へていひしなり、

【文場之元帥】文章の大將といふ義、事文類聚に「唐ノ張九齡ハ、詞人之冠ト號シ、又一一一ト號ス」

【文徵明】林の子、字は徵仲、衡山と號す、初の名は璧、字を以て行はる、明の長州の人、嘉靖の初、薦擧せられ、翰林院待詔に任ず、致仕して郷に歸り、詩文書畫を事とす、就中書は李應禎に學びてその名天下に高し、嘉靖三十八年卒す、年九十、著すところ、甫田集三十五卷あり、文學德行の宗とする所となる、子の彭嘉俱に文名あり、名山藏に「沈周博學ニシテ畫ヲ善クス、徵明之ヲ師トシ、ソノ髣髴ヲ得、益スニ神采ヲ以テシ、更ニ周ノ上ニ出ヅ、人ソノ趙孟頫倪瓚黃公望ノ體ヲ兼有スト稱ス」丹青志に「文先生ノ畫、李唐吳仲圭ヲ師トシ、翩翩トシテ室ニ入ル、大圖小軸奇致アラザルナク、海宇欽慕シ、練素山積ス云云」

【噴嚏】「クサメ」古語、ハナヒリ氣の急に鼻を衝きて發するもの、野客叢書に「隨筆曰、今人一一不止者、必云有人説我、按、詩、邶風、寤言不寐、願言則嚏、注、女思我、心、則嚏也、今俗人嚏云、人道、我、此古之遺語、余觀類要編風篇、正有是說」

【墳典】三墳五典の略、古書なり、魏書韓顯宗傳に「陛下耳聽法音、目覩一一、口對百辟、心虞萬機、南史丘巨源傳に「少好學、居貧、屋漏、恐濕、一一乃舒被覆、書獲、全而被大濕、三墳五典を見よ、

【文恬】世の中安らかにして、文官事なく樂む義、韓愈の平淮西碑に「相臣將臣、一一武嬉」

【文點ヲ加ヘズ】「文不加點」文にすこしの疵もなきをいふ、書言故事に「文ヲ作リテ、全ク美ナルヲ、一一一トイフ、李白翰林ニ在リ、白蓮花序及ビ宮詞ヲ草スルコトヲ詔ス、方ニ大ニ醉ヘリ、中貴人、水ヲ以テ之ニ沃グ、稍ク醒メ筆ヲ索メテ、一タビ揮フ、文點ヲ加ヘズ」とあり、中貴人とは、内臣の貴幸せらるる者、沃ぐとは冷水にて、其の面を浸す、其の醉の速かに醒めん事を欲してなり、文選、禰衡鸚鵡賦序に「筆不停綴、一一一」

【文天祥】字は宋瑞、一の字は履善、文山と號す、宋の吉州廬陵の人、年甫めて弱冠、理宗親から進士第一に擢んず、咸淳九年、起されて、湖南提刑となる、元兵類に諸州を陥れ、國事日に急なり、天祥勤王の詔を捧げ、涕泣

【糞土ノ牆ハ朽スベカラズ】論語、公冶長篇に「宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可朽也、於、予與何誅」とあり、牆は土屏なり、牆も堅固なれば、鏝にて塗りて裝飾すべけれど、糞土もて築ける牆は、鏝塗して裝飾すべからず、人もまことに能く志を立て自ら強めば、教ふるもその甲斐あれども、宰予の如く志氣昏惰して晝寢するが如きは、なほ朽木の如く、糞土の牆の如し、教ふるも益なし、我又何ぞ之を責めんや、責むるに足らざるなりと、その實は深く之を責められし辭なり、

【分謗】（謗ヲ分ツ）責め謗りを分ち受くる義、國語に「敢不分謗乎」

【聞望】連文釋義に「名ノ人ニ聞ユルヲ聞トイヒ、人ノ爲メニ仰ガルルヲ望トイフ」

【蚊蠅之勞】蠅は、カアブといふ小蟲なり、細小なる技能をいふ、莊子、天下篇に「由、天地之道、觀、惠施之能、其猶、一蚊一蠅之勞」

【蚊蠅ハ牛羊ヲ走ラス】（蚊蠅走牛羊）小能く大を制するに喩ふ、説苑の説叢篇に「蠶、蜂、牛、羊、蚊、蠅、走、牛羊」とあり、蜂は、蚍蜉の子なり、淮南子にも、類語あり、

【蚊蠅背見】智の明かなること、明月の如くなれば、蚊

語ヲ引キテ嬉ヲ熙ニ作ル

【糞土】連文釋義に「三尺以上曰糞、三尺以下曰土」

【文同】字は與可、笑笑先生と號し、又石室先生、錦江道人と稱す、宋の梓潼の人、進士に擧げられ、仕へて太常博士、司封員外郎、充祕閣校理と爲る、山水は摩詰に減せず、頗る關全に似たり、最も畫竹を善くし、瀟灑の姿に富む、詩文篆隸行草、飛白、皆その妙を得たり、人となり靖深、世故に羈せられず、文彦博嘗て之を稱して、襟懷灑落、晴雲秋月の如く、塵埃犯すべからずといへり、元豐二年卒す、年六十二、著す所、丹淵集四十卷あり、

【糞土之言】理にそむきて、賤むべき言をいふ、左傳に「其言糞土也」

蕤の如き小人も悉く見ゆるをいふ漢書中山靖王傳に「明月夜曜——」

【粉白黛黑】 次條に同じ、列子周穆王篇に「娥媿靡曼者、——以滿之」この語、淮南子修務訓にも出づ、

【粉白黛綠】 「オシロイ」や「マユズミ」にて化粧をこらせる美人の義、韓愈の送李愿歸盤谷序に「——、列屋而閑居、妬寵而負愛、爭妍而取憐」とあり、富貴の人の肉體の樂を求むる状をいへり、

【粉白手ヲ去ラズ】 「粉白不去手」オシロヒを手より離さぬ、男子の化粧に意を用ふることの甚しきをいふ、魏志何晏傳の註に「魏畧ニ晏、性自ラ動靜ヲ喜ミ、粉白手ヲ去ラズ、行歩影ヲ顧ミル」

【文者貫道之器】 李漢の韓昌黎集序に「——、——也、不深、於斯道有至焉者、不也、鶴林玉露に「文章ハ——小技、道ニ於テ未ダ尊シトナサズトハ、此レ後世ノ文ヲ論ズルナリ、文ハ貫道ノ器トハ、此レ古人ノ文ヲ論ズルナリ云云」

【文ハ草スベカラズ】 「文不可草」宋の許彪孫傳に「劉整元ニ降ラントシ、彪孫ヲ召シテ降文ヲ草セシム、彪孫曰ク、腕ハ斷ズベキモ、文ハ草スベカラズト、遂ニ藥ヲ仰ギテ死ス」方孝孺を參看せよ、

【芬馥】 花などの香ふ貌、文選吳都賦に「光色炫晃——河也、必不勝任矣」

【蚊負】 蚊をして山を負はしむる義にて、重任に耐へざるに喩ふ、莊子秋水篇に「是猶使蚊負山、商鉅馳河也、必不勝任矣」

【文武兼備】 文と武とを兼ね備へたる士をいふ、唐書裴行儉傳に「帝曰、行儉提孤軍、深入萬里、兵不血刃、而叛黨禽夷、可謂——矣」

【文物】 禮樂典章の類をいふ、左傳桓二年に「火龍黼黻、昭——其文也、五色比象、昭——其物也、李白の詩に「朝野盛——、衣冠何翕絕」

【芬芬】 カヲリよき貌、詩經大雅鳧鷖篇に「燂炙——」注に「——ハ香ナリ」

【紛紛】 事多くして煩はしきをいふ、孟子滕文公上に「何爲——然、與百工交易、また衆なり、亂なり、文選神女賦序に「——擾擾、漢書禮樂志に「羽旄——」注に「——ハ其ノ多キヲイフ」

【粵粵】 雪ふる貌、詩の小雅信南山篇に「上天同雲、雨雪——」

【憤發】 心通せんことを求めて未だ得ざるを憤といひ、發はその辭を達するをいふ、啓發を見よ、

【文ハ八代ノ衰ヲ起ス】 「文起八代之衰」東坡が潮州韓文公廟碑の中の句なり、韓愈が古文に復古せし功を稱していふ、八代とは東漢、魏、晉、宋、齊、梁、陳、隋をいふ、

【文法】 法律規則をいふ、漢書酷吏傳に「司馬安之——」註に「——ヲ以テ人ヲ傷害スルナリ」

【文ハ道ヲ貫クノ理ナシ】 李漢の文者貫道之器也の語を駁せし言なり、朱子語錄に「朱子曰、這文是從道中流出、豈有文反能貫道之理、文是文、道是道、若以文貫道、却是把本爲末、以末爲本、可乎」(文者貫道之器)を參看せよ、

【噴飯】 失笑する義、「フキダス」瓊言に「東坡云、文與可見、予詩云、料得清貧饑太守、渭川千畝在胸中、不覺失笑、噴飯滿案、この事、山家清供にも見ゆ、

【紛披】 「ミダレ」開く義、杜甫の詩に「此節東離菊、——爲誰秀、また亂るる貌、蘇軾の詩に「誰道茅簷劣容膝、海天風雨看——」

【憤排】 (啓發)を見よ、

【文武】 文道と武道とをいふ、帝範崇文篇に「——二途、——」

【文文山】 文山は文天祥の號なり、(文天祥)を見よ、

【文武兩道】 (忠孝兩全)を見よ、

【粉米】 書經益稷篇に「宗彝藻火——黼黻繡、繡注に「——ハ白米ナリ、ソノ糞ヲ取ル」

【分袂】 人と別るる義、分手、分首皆同じ、袂は「タモト」杜詩に「歲晚仍分袂、また、分手開元末、また、直到綿州、始分首」

【墳墓】 墳は土を積みかさねて封するなり、墓は葬る穴なり、連文釋義に「高曰墳、平曰墓、禮記の檀弓に「古者墓而不墳、註に「土ノ高キ者ヲ墳トイフ」また禮記に「奈何去——也、管子に「親戚——之所在也」

【粉本】 畫の「シタガキ」なり、事類全書に「畫論ニイフ、古人ノ畫葉、之ヲ粉本トイフ、前輩多ク之ヲ寶蓄ス、蓋シ其ノ草草意ヲ經ザル處、自然ノ妙アリ」草本ともいふ、

【文罔】 法禁をいふ、罔は網に同じ、史記游俠傳に「雖時扞當世之——、然、其私義廉潔、退讓有足稱者」

【文當ニ遷ヲ學ブベシ】 (文當學遷)事文類聚別集卷五に「六經以後、便有司馬遷、三百五篇之後、便有杜子美、

【文無害】文は刑法なり、刑法を用ひて人を害する所

【文命】文徳教命なり、書經大禹謨に「一敷于四海」

【文明】文理ありて光明なる義、書經舜典に「濬哲」

【憤懣】「イキドホリ、モダユル」義、懣は煩悶の義、司馬

【分野】古昔の天文家が列國の領土を天體に分ち配し

【汾陽】西漢の太原郡一縣は、今の山西太原府陽曲

【不夜城】夜も晝の如く明かなる城の義、漢書地理志

【文王之圃】周の文王の圃なり、圃とは説文に「苑ニ垣

【不麗】容貌の醜きをいふ、左傳昭二十八年に見ゆ

【巫陽】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】姫姓名は昌、父季歷、太任を娶りて昌を生む、

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【墳羊】「バケモノ」後漢書張衡傳の註に「土之怪曰」

【汾陽王】唐の郭子儀をいふ、郭一見よ

【空涌】空は塵なり、塵の聚り起るが如く、さかんに湧

【文與可】(文同)を見よ

【蚊雷】蚊のあつまりて鳴く聲の盛んなるをいふ、南

【分理】「イヒワケスル」分疏に同じ、鄭氏家範に「子孫

【文林】宋史に「歐陽公ハ一代ノ文宗タリ後進ニ於テ、

【分龍雨】「ユフダチ」なり、埤雅に「今ノ俗五月ノ雨

【不夜城】夜も晝の如く明かなる城の義、漢書地理志

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【文王】「カンナギ」蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人

【冬ハ歳ノ餘】(三餘)を見よ、

【不豫】豫は悦なり、一は心に悦びざるなり、孟子公孫丑下に「夫子若^レ有^レ一^レ色然^レ」

また人の疾病あるをいふ、書經金縢篇に「王有^レ病、弗豫、弗は不に同じ、

【扶餘】遼の縣名、上京道懷州に屬す、今の盛京奉天府開原縣治、

【夫容】芙蓉に同じ、淮南子本經訓に「一^レ菱荷(芙蓉)を見よ、

【附庸】諸侯に附屬する小國をいふ、禮記の王制に「天子ノ田ハ、方千里、公侯ノ田ハ、方百里、伯ハ、方七十里、子男ハ、五十里、五十里ニ能^レラザル者ハ、天子ニ合セズシテ、諸侯ニ附クヲ附庸ト曰フ」註に「此ハ、天子諸侯田里ノ廣狹ヲ言フ、天子ニ合セズトハ、王朝ノ聚會ニ與カラザルナリ、民功ヲ庸トイフ、其ノ功勞大國ニ附ケテ、天子ニ達ス、故ニ附庸トイフ」正義に「小城ヲ一^レトイフハ、庸ハ城ナリ、小國ノ城ヲ謂フ、自ら通ズルコト能ハズ、其ノ國事ヲ以テ大國ニ附ク、故ニ一^レト曰フ、此レ五十里ニ能^レラズ、故ニ小國ノ城ト爲ス」

【芙蓉】山堂肆考に「一名木一^レ名木蓮、一名拒霜、羣

芳譜に「一名華木、一名桃木、一名地一^レ」石林燕語に「一^レ有^レ二種、出於水者、謂之草一^レ、出於陸者、謂之木一^レ、即木蓮也、樂天詩曰、水蓮開盡、木蓮開、謂此(木一^レ)を見よ、

草一^レは即ち蓮花なり、爾雅に「荷、芙蓉、蓮、芙蕖、別名一^レ、疏に「江東ノ人、荷華ヲ呼ビテ一^レト爲ス」文海披沙に「一^レハ蓮花ナリ、一名ハ荷、一名ハ芙蓉、一名ハ菡萏、根ヲ藕トナシ、莖ヲ茄トナシ、葉ヲ蓮トナシ、實ヲ蓮トナス云云、

また美人の姿に喩ふ、李白の詩に「美人出南國、灼灼一^レ姿、

【婦容】女子の身、ヅクロヒ、周禮に見ゆ、女子四行の一、列女傳に「不必^レ顔色美麗也、盥洗塵穢、服飾鮮潔、是謂一^レ」(四行)また(婦德)を見よ、

【芙蓉峯】芙蓉は蓮花なり、峯の形の似たるによりて名づく、文海披沙卷三に「一^レ在^レ衡山、芙蓉嶺在^レ婺源、等、芙蓉と名づくる山、八十餘種を列舉せり、我が富士山を一^レといふもこれに本づく、荊州記に「衡山有^レ三峯、極秀、一峯名一^レ、最爲^レ竦、自非清霧、素朝、不可^レ望見、

【無頼】「ハチシラズ」史記の高祖本紀に「以^レ臣無頼、この

竿玉、一^レ萬幅屏、

【浮利】浮きて定めなき利益をいふ、後漢書逸民傳に「飾^レ智巧以^レ逐^レ利、鄭雲叟の詩に「浮名一^レ濃於酒、醉得人心^レ死、不醒^レ管道昇の詩に「人生貴極是王侯、一^レ浮名不^レ自由、

【富利】富める財利なり、史記李斯傳に「向使^レ却客而不内^レ、疏士而不^レ用、是使^レ國無^レ一^レ之實、而秦無^レ疆大之名也、韓詩外傳に「耳不聞^レ學、行無^レ正義、迷迷然以^レ一^レ爲^レ隆、是俗人也、

【膚理】肌膚の文理をいふ、「ハダ」の「キメ」荀子榮辱篇に「骨體一^レ、辨^レ寒暑疾養、養は瘻に同じ、

【不律】筆をいふ、爾雅釋器に「不律、謂之筆、註に「蜀人呼筆爲^レ不律也、説文に「楚ハ之ヲ聿トイヒ、吳ハ之ヲ一^レトイヒ、燕ハ之ヲ拂トイヒ、秦ハ之ヲ筆トイフ、不律の二字の合音はヒツ(筆)なり、筆」を參看せよ、

【不立文字】意義を文字に書きあらはす能はざる義にて、即ち以^レ心傳心を要するをいふ、高僧傳に「達摩曰、我法一心、一^レ道は心を以て悟るべし、言傳すべからざるをいふ、五燈會元に「世尊在^レ靈山會上、拈^レ華示^レ衆、是時衆皆寂然、惟迦葉尊者破顏微笑、世尊云、吾有^レ正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門、一^レ教外

【浮嵐】山氣の浮べるをいふ、黃庭堅の詩に「有人半夜出^レ山去、頓覺一^レ暎翠空、陸游の白堦院詩に「冷翠千

【部落】人の種類をいふ、唐書の李勣傳に「會長率^レ部落五萬、降^レ于勣、

【不老不死】人の極めて長壽なるをいふ、列子湯問篇に「海中の五山を述べて「珠玕之樹皆叢生、華實皆有^レ滋味、食之皆一^レ、

【浮嵐】山氣の浮べるをいふ、黃庭堅の詩に「有人半夜出^レ山去、頓覺一^レ暎翠空、陸游の白堦院詩に「冷翠千

註に「頼ハ恃ナリ」とあり、傲放にして依り託すべきなきをいふ、孟子の趙岐の註には「頼ハ善ナリ」とあり、一解に頼は利なり、家に利なきなり、或は曰く、江淮の間小兒多く狡猾を作す者を謂ひて一^レと爲すと、

【扶老】杖をいふ、歸去來辭に「策一^レ以^レ流憩、古雋考略に「老人持ツトコロノ杖ヲ一^レトイフ(杖)を參看せよ、

【浮浪人】浪人に同じ、又單に浮人ともいふ、通典に「高齊ノ時、無貫ノ人州縣ニ編セラルルヲ樂マザル者ハ、之ヲ一^レト爲ス」と、一^レの字は隋書にも見ゆ、

【扶老竹】節高く中の實ちて虚ならざる竹の名、扶竹ともいふ、山海經の中山經に「龜山多^レ扶竹」注に「扶竹ハ節竹ナリ、高節實中ニシテ杖ニ中ル、之ヲ一^レト名ツク、

【不老不死】人の極めて長壽なるをいふ、列子湯問篇に「海中の五山を述べて「珠玕之樹皆叢生、華實皆有^レ滋味、食之皆一^レ、

【部落】人の種類をいふ、唐書の李勣傳に「會長率^レ部落五萬、降^レ于勣、

【浮嵐】山氣の浮べるをいふ、黃庭堅の詩に「有人半夜出^レ山去、頓覺一^レ暎翠空、陸游の白堦院詩に「冷翠千

別傳、付囑摩訶迦葉、世尊は釋迦なり、祖庭事苑に、禪門自佛敎東流、後六百年、達摩祖師、方至漢地、不立文字、單傳心印、直指人心、見性成佛

【夫里之布】 夫布と里布とをいふ、布は錢なり、夫布は一夫力役の征(ネンク)なり、里布は、里は居なり、居室に桑麻を植ふる者、を罰するなり、孟子公孫丑上篇に「塵無^一一^一、則天下之民皆悅而願爲^一之^一、賦矣^一」

【浮梁】 支那江西省饒州の縣名、茶を産する地、白居易の琵琶行に「前月一買^一茶去^一」

【武陵】 西漢の郡名、今の湖南辰州淑浦縣の南三清里、また西漢、晉、南宋、南齊の縣名、今の湖北鄖陽府竹溪縣の東に當る、また東漢、晉、南宋、南齊の郡名、今の湖南常德府一縣の西に當る、隋以後明に至るまでの縣名、今の常德府一縣治これなり、

【武陵桃源】 陶潛の桃花源記に「晉ノ太元中、武陵ノ人魚ヲ捕ヘテ業ト爲ス、溪ニ縁リテ行ク、忽チ桃花林ニ逢フ、林盡キテ、水源ニ一山ヲ得、小口アリ、口ヨリ入ル、行クコト數十歩、豁然トシテ開朗ナリ、其ノ閑、男女怡然トシテ自ラ樂ム、漁人ヲ見テ大ニ驚ク、自ラ云フ、先世秦ノ亂ヲ避ケ、此ノ絶境ニ來ル、問フ今ハ何レノ世ゾト、乃チ漢アルヲ知ラズ、魏晉ニ論ナシ、漁人辭

シ去リ、太守ニ詣リテ説ク、即チ人ヲ遣シテ隨ヒ往カシム、竟ニ迷ヒテ路ヲ得ズ、桃源)を見よ

【不顧】 類は善なり、一は、不善に同じ、晉書元帝紀に「抗^一明威^一、以懼^一一^一」

【故ヲ温ネテ新ヲ知ル】 (温故而知新) 舊聞を温習シテ、新知を發明するの義、論語の爲政篇に「子曰、一^一一^一、可以爲^一師矣^一、また漢書百官公卿表に「略表舉大分^一以通^一古今^一、備^一一^一一^一之義^一云」

【富樓那ノ辨舌】 太平記卷三十六に見ゆ、富樓那是具には、富樓那彌多羅尼子といふ、富樓那は滿願と譯し、彌多羅は慈行また知識と譯す、樓一に婁とも書く、尼は女なり、十大弟子の一にして、辨舌に長じ、説法第一と稱せらる、但諺にも「一^一一^一一^一舍利弗の智惠」といへり、舍利弗は智に長ず、

【不祿】 其の俸祿を終へざる義にして、士の死するをいふ、禮記の曲禮に出づ、また諸侯の薨するるとき、他國に討ぐる謙辭なり、同書に「君討^一於他國^一之君^一曰^一寡君一^一敢告^一於執事^一」

【部勒】 勒は治なり「ヲサム一^一一^一は兵を部わけして治む、史記に「以兵法^一一^一賓客及子弟^一」

【武王】 周の第一世、姫姓、名は發、文王の子なり、嘗て

東、兵を觀して盟津に至る、白魚王の舟中に入る、是の時諸侯期せずして會する者八百、皆曰く紂伐つべしと、武王曰く、汝未だ天命を知らずと、可かず、師を引き返して歸る、居ること二年にして紂過を改めず、昏亂益甚し、武王乃ち紂を伐ち、西伯(即チ文王)の木主を載せて以て行く、進んで商郊の牧野に至り、牧誓を作る、紂大兵を發して之を拒ぐ、紂の師戰ふの心なし、皆兵を倒にす、武王遂に紂を滅し、功を論じ賞を行ひ、馬を華山の陽に縦ち、牛を桃林の野に放ち、干戈を偃せ、天下に復た用ひざるを示す、武王立ちて十三年、殷を亡し、後ち七年にして崩す、太子誦立つ、是を成王と爲す、詳しくは史記の周本紀を見よ、

【不惑】 四十歳をいふ、論語爲政篇に「四十而一^一陶潛の詩に「行行向^一一^一、淹留遂無成^一、また道理を知る」と明かなる義、論語子罕篇に「知者一^一一^一(楊秉)を參看せよ、

風日 陶潛少懷高尚、博學善屬文、類脫不羈、環堵蕭然、不蔽風日、短褐穿結、單瓢腹空、晏如也 (晉書陶潛傳)

風月 徐勉嘗與門人夜集、客有談盛、求廢事五言、勉正色答曰、今夕止可談風月、不宜及公事 (南史徐勉傳)

風景 過江人士每至暇日、相要出遊、新亭飲宴、周顧中坐而歎曰、風景不殊、舉目有江山之異、皆相視流涕、惟王導慨然變色、曰、當共戮力王室、克復神州、何至作楚囚、(晉書王導傳)

風物 父居業、嘗過洛、嘉其山川風物、曰吾得老於此、足矣、觀於是買田宅、營林樹、以適其意、(宋史張觀傳)

風韻 石秀幼有令名、風韻秀徹、博涉群書、尤善老莊、常獨處一室、簡於應接、時人方之、庾純、甚爲簡文帝所重、(晉書桓石秀傳)

【兵】説文に「械ナリ増韻に「戎器ナリ」世本に「蚩尤以金作兵、兵有五、一弓、二矛、四戈、五戟、孟子梁惠王篇に「可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵」

また兵器を執りて戎に従ふものをいふ、禮記月令に「命將帥選士厲兵」漢書魏相傳に「救亂除暴謂之義兵」周禮夏官に「中秋教治兵管子に「兵者外以誅暴、内以禁邪、故兵者尊王安國之經也、不可廢也」杜甫の詩に「函關猶出將、渭水更屯兵」

また敵を撃つを兵之といふ、左傳定十年に出づ、【乘彝】張九齡の詩に「明德有自來、奕世皆一一」【舞ヲ乘ル】を見よ、

【敵帷】「ヤブレたる」トバリ、説文に「在旁曰帷幔也、一曰圍也、禮記に「一一不棄爲埋馬也」

【米友仁】宋の畫人、字は元暉、瀨拙老人と號す、仕へて兵部侍郎敷文閣直學士に至る、畫繼に「一一ハ芾ノ子ナリ、世ニ小米ト號ス、天機超逸、繩墨ヲ事トセズ、ソノ作ル所、山水烟雲ヲ點滴シ、艸艸ニシテ成ル、而

シテソノ天真ヲ失ハズ、ソノ風骨乃翁ニ肖タリ、毎ニ自ラソノ畫ニ題シテ墨戲ト曰フ、年八十二シテ神明少壯ノ時ノ如ク疾ナクシテ逝ク」

【平易】シテ民ニ近ヅケバ、民必ズ之ニ歸ス」(平易近民、民必歸之)史記の魯の世家に「魯公伯禽ノ初メテ封ヲ受ケ魯ニ之クヤ、三年ニシテ後、政ヲ周公ニ報ズ、周公曰ク何ゾ遅キヤト、伯禽曰ク、ソノ俗ヲ變ジ、ソノ禮ヲ革メ、喪三年ニシテ然ル後ニ之ヲ除ク、故ニ遲シト、太公亦齊ニ封ゼラル、五月ニシテ政ヲ周公ニ報ズ、周公曰ク何ゾ疾キヤト、曰ク吾レソノ君臣ノ禮ヲ簡ニシ、其ノ俗ニ從ヒテヲサムト、後ニ伯禽ノ政ヲ報ズルノ遅キヲ聞クニ及ビ、乃チ歎ジテ曰ク嗚呼魯ハ後世北面シテ齊ニ事ヘン、夫レ政簡ナラズ、易ナラザレバ、民近ヅクアラズ、平易ニシテ民ヲ近ヅクレバ、民必ズ之ニ歸スト」

【敵邑】わが國といふ謙辭なり、敵は「ヤブルル」左傳隱四年に「君若代、鄭以除」君害、君爲主、一一以賦與、陳蔡從、賦は兵賦なり、

【平允之士】公平誠實にして巧文慘刻をなさざる者をいふ、宋史の仁宗の贊に「刑法似縱弛而決獄多一一」

【屏營】 惧るる貌、怔忡また怔忡に同じ、また「ウロウロする貌、國語の吳語に「王親獨行、一一彷徨於山林之中」三日「また彷徨の貌、後漢書清河王慶傳に「夙夜一一」

【屏翳】 廣雅に「雨師ナリ」アメノカミ」一説に雷師をいふ、

【米鹽】 米と、シホ、轉じて瑣末煩碎の義に用ふ、墨子非命篇に「吾嘗一一數天下書、漢書黃霸傳にも一一の字あり、注に「至細ヲイフ」

【兵ヲ洗フ】 戰をやむること(洗兵)を見よ、

【兵ヲ伏ス】 (伏兵)を見よ、

【兵ヲ用フルノ道】 (用兵之道)戰を行ふの道なり、蜀志馬謖傳に「一一攻心爲上、攻城爲下、心戰爲上、兵戰爲下、十六國春秋前燕錄に「一一敵疆、則用智、敵弱、則用勢、是故以大事、小猶狼之食豚也、以治易亂、猶日之消雪也」

【兵ヲ勸ス】 (勸兵)勸は治なり、隊伍を配置し、點檢する義、史記孫子傳に「可以少試一一乎」

【兵ヲ論ズ】 (論兵)兵事を談論する義、李白の詩に「莊周空説劍、墨翟恥一一」

【陛下】 人臣天子を稱する辭、陛は堂にのぼる「キザハシ」なり、天子は必ず近臣あり、兵を執りて陛側に立ち

不虞を戒む、故に群臣天子と言ふに、敢て指斥せず、陛下に在る者と呼びて之と言ふ、卑に由りて尊に達する意なり、この稱は秦の始皇の時より始まる、史記秦紀に「今陛下興義兵、誅殘賊、平定天下、始皇以前に諸侯の臣がその君を呼びて一一といひし例あり、戰國策秦策に「一一嘗勸車於趙」矣」

【平衡】 人を拜する法式なり、磬折して頭と腰と、衡の如く平かなる義、荀子に「一一曰拜、下衡曰稽首、至地曰稽顙」

【批亢擣虛】 批は一音、ベツ、觸撃するなり、亢は吭に同じ、咽喉なり、虚は空虚なり、敵の肝要なる處を撃ち、空虚に衝き入るなりと、なほ異説あり(亢ヲ批キ)を見よ、

【兵革】 兵甲に同じ、イクサ」詩經の鄭風出其東門篇の序に「一一不息、革は甲冑の類をもいふ、また革車は兵車なり、

【兵艦】 「イクサブネ」字彙に「艦、戰船、四方施板、以禦矢者」とあり、列仙傳に「大聚一一欲襲襄陽、戰艦、關艦に同じ、

【屏氣】 屏息に同じ、屏息を見よ、

【屏棄】 退け棄つる義、書經に「一一典刑」

【蔽虧】 草木繁茂して日光の缺くるなり、上林賦に「翠

【崋參差、日月一】

【蔽牛ノ木】 牛をオホヒカクス程の太木をいふ、莊子の人間世篇に「匠石之齊見櫟社樹其大蔽牛、繁之百圍」

【丙魏姚宋】 四人は皆賢相なり漢ノ丙魏を見よ、

【丙吉牛喘ヲ問フ】 漢書列傳四十四に「丙吉字ハ少卿魯國ノ人、宣帝ノ時、丞相ト爲ル、嘗テ出デテ道ヲ清メ、群鬪スル者、死傷道ニ横ハルニ逢フ、吉之ヲ過ギテ問ハズ、吉前ミ行キ、人ノ牛ヲ逐フニ逢フ、牛喘ギテ舌ヲ吐ク、吉止駐シ、騎吏ヲシテ問ハシム、牛ヲ逐ヒ行クコト幾里ゾト、掾史獨リ謂ヘラク、丞相前後問ヲ失スト、或ハ以テ吉ヲ譏ル、吉曰ク、民鬪ヒテ相殺傷スルハ長安令、京兆尹、職當ニ禁備逐捕スベキ所、歳ノ竟ニ丞相其ノ殿最ヲ課シ、奏シテ賞罰ヲ行ハン而已、宰相ハ小事ヲ親カラセズ、當ニ道路ニ於テ問フベキトコロニアラザル也、春ニ方リ、未ダ太ダ熱スベカラズ、恐クハ牛近ク行キ暑ヲ用テノ故ニ喘グナランカ、此レ時氣節ヲ失ヒ、傷害スル所、アアルヲ恐ル、三公ハ陰陽ヲ調和スルヲ典ル、職當ニ憂フベシ、是ヲ以テ之ヲ問フト、掾史乃チ服シテ以テラク吉大體ヲ知ルト、漢ノ丙魏を參看せよ、

【屏居】 屏は退なり、隱なり、退隱して居ること、漢書に「寶嬰謝病一」

【炳煥】 「アキラカ」に「カガヤク」をいふ、東京賦に「瑰異譎詭、燦爛一」

【俾倪】 邪に視るなり、俾倪を見よ、また天子の馬車の上ニ立つる蓋(カサ)通雅釋詁に「唐鹵簿有「一」、宋志載「俾倪、漢乘輿用之、如「華蓋」而小、顏師古注、急就一謂持蓋之杠、在「軾」中央、環爲之、所以止蓋弓之前却也、今曰「一」扇」

【坤瓊】 城上の女牆(ヒメガキ)韓愈の雪詩に「城寒裝一、樹凍裏「莓苔」また俾倪に通ず、俾倪を見よ、

【睥睨】 邪に視るなり、漢書息夫躬傳に「一、兩宮閉」(俾倪)を見よ、

【睥睨】 衰視の貌、ヨコメニ、ニラム、俾倪また睥倪に作る同じ、正しく視ざるなり、史記信陵君傳に「侯生下見其客朱亥、一故久立、睥一本俾に作る、

また城上の「ヒメガキ」をいふ、坤瓊に作る、同じ、次條を參看せよ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

【睥睨】 睥は睥に同じ、晉書列傳に「一、漢廷(睥睨)を見よ、

鄭玄盛名アリ、當時文壇ノ領袖タリ、原寒貧ノ後輩ヲ以テ數年ノ閉ニ、名之ト相埒シキニ至レリ、

【陸見】 天子に謁見する義、北史張普惠傳に「自此之後、月一」

【平原君覽者ニ謝ス】 史記の平原君列傳に「平原君趙勝者、趙之諸公子也、諸子中、勝最賢、喜賓客、賓客蓋至者數千人、平原君相、趙惠文王及孝成王、三去相、三復位、封于東武城、平原君家樓臨民家、民家有覽者、漿散、行汲、平原君美人居樓上、臨見大笑之、明日覽者至、平原君門請曰、臣聞君之喜士、士不遠千里而至者、以君能貴士而賤妾也、臣不幸有罷癯之病、而君之後宮、臨而笑臣、臣願得笑、臣者頭、平原君笑應曰、諾、覽者去、平原君笑曰、觀此賢子、乃欲以一笑之、故殺吾美人、不亦甚乎、終不殺、居歲餘、賓客門下舍人、稍稍引去者過半、平原君恠之、曰、勝所以待諸君者、未嘗敢失禮、而去者何多也、門下一人前對曰、以君之不殺笑覽者、以君爲愛色、而賤士、士即去耳、於是平原君乃斬笑覽者、美人頭、自造門、進覽者、因謝焉、其後門下乃復稍稍來、唐物語にこの一節を譯して曰く、

昔平原君と聞ゆる人、三千人のつかはれ人を集めて、

これを憐み懇切に思ひけるに、この主君の寵姫、高き樓の上に居て四方を見渡しけるに、跋へたる者の、はふはふるざりつつ水をくみに行きけり、左右の膝よりも頭猶引き入りて、人の姿にも似ず、世にをかしげなりければ、この女、思ひわくかたもなく、打ち笑ひてけり、このかたは人笑ふ聲を聞きて、我かか病に煩ひて、年月久しくなりぬ、今始めて人の笑ひ嘲るべきにあらず、これ偏に君の色を好みて、つかはれ人を輕しめ給ふ故なり、若し我を棄てぬ心ならば、笑ひつる人を失ひ給ふべしと、強ひて主君に憂ふるに、おのれ憤怒をやむべしとは、いひながら、さすがにあるべくもなきことなれば、その後月日を経るに、三千人のつかはれ人、やう／＼數少くなりゆくを、我れ聊も過つことなし、然れども怨を抱きて、遁れざる心知り難しと、各に言ひくだしけり、この中に事に詳なるもの、申していはく、君このかたは人を賤し給へり、これ我が身の上にあらずや、若しかくの如くならば、何をたのもしと思ひてか、身を捨て心を勵して君に仕へ奉るべきといへり、主君これを聞きて、淺からぬ年比のむつまじさをも顧みず、この女を忽に殺してけり、かたは人これを見て心ゆきぬ、又その外につかはれ人

ども、もとの如くかへりにけり、
 【米元章】(米芾)を看よ、
 【平原督郵】惡酒の異名、青州從事を見よ、
 【屏語】屏は、シリソクル義、人をシリソクテ語るをいといふ、漢書傅介子傳に「王起隨介子入帳中、師古曰く、人ヲ屏ケテ獨リ共ニ語ルナリ」史記の目者傳にも、乃相引一、
 【鼙鼓】「セメツツミ」説文に「鼙ハ騎鼓ナリ」白樂天の長恨歌に「漁陽一動地來」、
 【閉口】(口ヲ閉ヅ)口を、ツグミテ言はざる義、史記張儀傳に「願陳子一復言鹽鐵論に、一不不言」、
 【弊袴ヲ愛惜ス】信賞必罰をいふ、韓の昭侯に弊袴あり、命じて之を藏めしむ、左右曰く、一弊袴なり、何ぞ左右に賜はずして、之を藏めしむる、君も亦不仁者なりと、昭侯曰く、吾聞く明主は一嘲一笑を愛むと、今袴は豈特に嘲笑のみならんや、吾れ必ず有功の者を待たんと、
 【閉戸先生】(戸ヲ閉ヂ)を見よ、
 【丙午丁未之歲】「ヒノエウマ」ヒノトヒツジの兩年は禍災多しとの古傳説あり、容齋五筆に「一一一一中國遇此、輒有變故、非禍生於内、則夷狄外侮、中略」

總而言之、大抵丁未之災、又慘於丙午、昭昭天象、見於運行、非人力之所能爲也、

【榎植】和名、クワリン、花欄に似たれば、轉呼すといふ、木の高さ一二丈に及ぶ、幹の皮一二寸毎に、鱗の如く落ちてその痕うるはし、葉は林檎に似て、長大にして細かさ刻みあり、質堅く互生す、春の末に淡紅の花開く、實は秋熟す、マクハウリに似て小さく、末廣く香多し、蜜に漬けて菓とす、木理密に淡紅色にして、花欄に似たれども、質やはらかにして、磨りて光澤なし、蘇頌圖經に「一木葉花實酷類木瓜、云云」、

【閉藏】「トヂ」カクルルなり、淮南子天文訓に「萬物一閉藏」、
 【弊帚】身の程を知らずして「ウヌボレル」に喩ふ、文選の魏文帝の典論に「里語ニ曰ク、家ニ弊帚アリ、之ヲ千金ニ享ス、斯レ自ラ見ザルノ患ナリ」とある註に「家ニヤブレタル帚アリ、自ラ以テ寶重ト爲ス者、乃チ千金ニ比ス、此レ自ラ見ザルノ患ナリ」、

【并州ノ感】己の第二の故郷ともいふべき地を戀ひ慕ふ情をいふ、唐の賈島の渡桑乾詩に「客舍并州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望并州是故郷、并州に十年の久しき客寓して、歸心が晝も夜も咸

陽の都のことのみ思ひたりしが、今又遠く去りて他に行くが爲め、端無く、桑乾河の水を渡れり、さればこれまでは旅と思ひし并州を望めば、却りて故郷の如くなつかしき感ありとの意なり、

【敝蹠ヲ棄ツルガ若シ】(若棄敝蹠)蹠は草履なり、之を遺棄するも、毫も惜む所なきをいふ、孟子盡心上篇に「舜視棄天下、猶棄敝蹠也」、
 【嬖人】身賤しくしく君の寵愛を受くる者、妾などをいふ、左傳隱三年に「公子州吁、一之子也、註に「賤ニシテ幸ヲ得ルヲ嬖トイフ」禮記の緇衣に「愛妾ヲ嬖御人トイフ」とあるも同じ、

【平津館叢書】清の孫星衍輯す、主として自ら校正せし古逸書を收め、自著及び近世學者の著書數種をも加へて甲より癸に至る十集に分つ、平津とは嘗て遊官せし地名を、その館に名づけたるなり、

【平章】平は均なり、章は明なり、よく庶民を平かに治むる義、書經堯典に「克明俊德、以親九族、九族既睦、一百姓、百姓昭明」、
 また公平に物を品評する義、陸游の詩に「一春莖秋菘味」、
 また夫婦を媒合する義、太平廣記に「天寶中范陽盧子、

謁其從姑姑聞質當爲兒盧未婚曰吾外甥有姓鄭者甚有容

【平壤】もと王儉城と稱し、一に西京といふ、朝鮮の平安道の首府なり、豊公征韓の役、明の大軍と激戦せし古跡にして、又日清戦役にわが第一軍、京城より北進して、この城に據れる清兵二萬餘を殲せし地なり。

【平城】西漢の侯國、北海郡に屬す、今の山東萊州府昌邑縣の南、また西漢以後北魏に至るまでの縣名、今の山西大同府大同縣の東、また隋以後宋に至るまでの縣名、今の山西遼州和順縣の西一百里に在り。

【屏障】「ベウブ」ツイタテの類、すべて内外の「ヘダテ」となるもの、晉書阮籍傳に「壞府舍」使内外相望、法令清簡

【平出】書式の用語、文中に敬ふべき文字ある時は、次の行へ上げて出して、その文字を他の行の頭字と平等にするをいふ、

またその文字を他の行へ出し、他の行の頭字よりも一字若くは二字分、上げて書くを擡頭といふ、

【陛楯】「タテ」を推して陛下に守衛するをいふ、陛戟に同じ、史記滑稽傳に「秦始皇時置酒、而天雨、陛楯者皆沾寒」

ナリ」とあり、後漢書に「公孫述帝ヲ蜀ニ稱ス、隗囂、馬援ニ往キテ之ヲ觀シム、援素ヨリ述ト里閭ヲ同クシテ、相善シ、以爲ラク、既ニ至レバ當ニ手ヲ握リテ歡平生ノ如クナルベシト」

【兵燹】燹は野火なり、一は兵火に燒かるるをいふ、宋史神宗紀に「詔岷州界經鬼章一者賜錢、脅從來歸者釋其罪、烽燹は「ノロシ」

【炳然】炳は明なり、アキラカなる貌、廣雅釋訓に見ゆ、

【平泉ノ別墅】圓機活法に「唐ノ李德裕、平泉ノ別墅ニ於テ天下ノ珍木、奇石ヲ採リ、園池ノ玩ト爲ス、醒酒石アリ、德裕最モ保惜スル所、醉ヘバ即チ之ニ踏ス」また曰ク「李德裕平泉ニ山居シ、子孫ヲ戒メテ曰ク、平泉ヲ鬻グ者ハ、吾ガ子孫ニ非ズ、平泉ノ一樹一石ヲ以テ人ニ與フル者ハ、此レ佳子弟ニ非ザルナリト」

【屏息】屏は藏なり、氣を藏めて息をなござるが如く、するをいふ、恐れ謹む「サマ」論語郷黨篇に「屏氣似不息者」

【平臺紀略】一卷、清の藍鼎元鹿州著す、聖祖の康熙六十年四月より雍正元年四月に至る間、臺灣の賊朱一貫を討平せし始末を紀す、鼎元の兄廷珍、時に命を奉じて征討軍に帥たり、鼎元その參謀たり、故に書中紀

【兵書】兵法の書をいふ、宋以後歴代の制、大學に武學を設け以て武生を養ひ、孫子、吳子、司馬法、六韜、三略、尉繚子、李衛公問對を以て七書と爲し、武學に頒行して講習せしむ、この内、六韜は舊本周呂望撰と題し、三略は黄石公撰と題すれども、二者共に後人依託の書なり、この外、黄帝の時、風后の撰と題する握奇經あれども、隋唐志共に著録せず、宋史藝文志に始めて載するを見れば、唐以後の偽書たること論なし、されば兵書中の最も古くして正しき者は孫子を推して第一とすべし。

【秉燭夜遊】好景の過ぎ易きを惜み、晝日の遊行のみにては物足らずとして、燭火を秉りて夜遊する義、文選の魏文帝與吳質書に「年一過往、何可攀援、古人思」

【萍水相逢】萍は浮草なり、偶然出逢ひたるを一一一

【瓶水ノ凍ルヲ見テ天下ノ寒ヲ知ル】（見瓶水凍知天下之寒）北史崔浩傳に「夫一一一」膏肉

【平生ノ歎】平素の嗜好をいふ、漢書の陳餘傳に「勞苦如平生歎」の註に「勞苦ハ、其ノ勤苦ヲ相勞問スル

するところ、實録にして信ずべしといふ、

【平旦之氣】平旦は天將に明けんとして未だ物と接せざる時なり、清明の氣をいふ、孟子告子上篇に「一一一其好惡與人相近也者、幾希」

【兵連リ禍結ブ】兵亂の久しくやまざる義、漢書匈奴傳に「一一一三十餘年」

【平頭】「テウド」といふ義、白居易の除夜の詩に「火銷燈盡天明後、便是一一六十人」また等頭は同等の義、同人の贈劉夢得詩に「甲子等頭憐其老、文章敵手莫相疑」樂天は夢得と同年なればなり、

【兵ニ酔ス】（醉兵）酒食を以て、兵士を「ネギラヒ」養ふなり、史記淮陰侯傳に「百里之内、牛酒日至、以饗士大夫一一」

【兵ニ常勢ナシ】（兵無常勢）孫子の虚實に「水因地面制、流、兵因敵而制、勝、故一一」水無常形、能因敵變化而取勝者、謂之神」

【米年】わが國にて八十八歳をいふ、米の字を析ては八十八となる故なり、夜航詩話に「邦俗八十八ヲ稱シテ一一ト爲ス、亦未ダ典ナラズト爲サザルシ」

【餅ノ馨クルハ疊ノ恥】（餅之馨矣、維疊之恥）餅は瓶に同じ、疊は和名モタヒ形は壺に似て大なり、一斛を受

くる者、餅は小にして、疊は大なり、皆酒器なり、疊は盡なり、餅は疊に資り、疊は餅に資る、猶ほ父母と子と、相倚りて命を爲すが如し、故に餅の疊きたるは、疊の恥なると同じく、父母の其の所を得ざるは、子の責なりとの意、詩經小雅蓼莪篇の句なり、また左傳昭二十四年に詩曰、「……王室之不寧、晉之恥也」とあるは、餅を周に比し、疊を晉に比したるなり、周は常に晉を恃む、今周に亂ありて晉之を助くるなきは、是れ晉の恥なりとの意、

【兵者詭道也】 詭は正しからざるなり、兵を行るには正道のみに由らず、種種の奇計を用ふるをいふ、孫子始計篇に「……故能而示之不能、用而示之不用、劉子に「兵者詭道、而行以其智、勝也」

【兵者凶器】 人を害するによりていふ、國語に「勇者逆德也、……也、不可不審用也、漢書鼂錯傳に「兵凶器、戰危事也、以大爲小、以強爲弱、在俯仰之間耳、また淮南子に「怒者逆德也、……也、爭者人之所末也、老子に「兵者不祥之器、非君子之器、……也、義同じ、兵ハ詐ヲ厭ハズ」(兵不厭詐)兵戰の上には敵を欺くことを咎めざる義、韓非子に「兵陣之間、不厭詐僞」

【米芾】 字は元章、宋の襄陽の人(一ニイフ吳ノ人南宮、また海嶽外史また鹿門居士と號す、文を爲る奇險、特に書に工にして、又畫を能くし山水人物に妙なり、鑒識に精しく、古器物書畫を愛す、官禮部員外郎に至り、淮陰軍に知たり、大觀元年卒す、年五十七、著す所る米芾書畫史、海岳名言等あり、法帖には、天馬賦、西園雅集記等數十種あり、子友仁(字ハ元暉)その文詞書畫、深く家法を得たり、苦性好潔癖を成す、人と巾器を同うせず、多く奇石を蓄ふ、世と俯仰する能はず、故に仕途數、困せり(奇石ヲを參看せよ、

【弊弊】 經營の貌、また心力をつからず貌、莊子逍遙遊に「孰一然以天下爲事」

【平民】 庶人をいふ、書經呂刑に「蚩尤惟始、作亂、延及于……」一説に、平は善なり、農民をいふ、先王農を以て本と爲すに由る、

【屏面】 面を蔽ふ物なり、便面に同じ、漢書王莽傳に「莽常翳雲母、……非親近、莫得見也」

【聘問】 禮記の曲禮に「諸侯大夫ヲシテ他ノ諸侯ヲ問(あつづれたづぬる)ハシムルヲ聘トイフ」儀禮の聘禮に「大問ヲ聘トイヒ、小聘ヲ問トイフ」

【丙夜枕ヲ安ンゼズ】 天子の深夜まで國事を憂ひて

【兵ハ神速ヲ貴ブ】 (兵貴神速)兵を用ふるは神速を要する義、魏志郭嘉傳に「太祖將襲袁尙、嘉言……歐陽修の王彥章畫像記に「乃知古之名將必出於奇、然後能勝、然非審於爲計者、不能出奇、奇在速、速在果」とあるも亦この意なり、

【兵ハ拙速ヲ聞ク】 (兵聞拙速)兵を用ふるは拙くとも速かなるを貴ぶ義、孫子作戰篇に「……未觀巧之入也」

【兵ハ猶火ノ如シ】 (兵猶火也)下に「不戢將自焚也」とあり、左傳に出づ、

【平反】 獄を斷じて、その罪をゆるし、活かしむるなり、漢書雋不疑傳に「不疑京兆尹ト爲ル、縣ヲ行リ、囚徒ヲ録ス、還ルゴトニ其ノ母問フ、……母喜ビ、飲食ヲ爲シ言笑ス、或ハ出ス所口無ケレバ母爲メニ食セズ、故ニ不疑ガ吏ト爲ル、嚴ニシテ酷ナラズ」

【屏風】 唐書の房玄齡傳に「治家有法度、嘗恐諸子驕侈、席勢凌人、乃集古今家誡書爲一冊、各一具、曰留意於此、足以保躬矣」(一)を見よ、

【平復】 病氣の全快する義、韓詩外傳に「上古醫曰弟父(中畧)諸扶輿而來者、皆一一如常」

【狴牢】 牢獄をいふ、狴は一に隄に作る、牢なり、易林に「失意懷憂、如幽」(一)

【平涼】 北魏の涇州一郡は、今の甘肅一府一縣の西南に在り、隋の雍州一郡は、今の一府固原州治これなり、隋以後は、縣名にもあり、元、明の陝西省一府一縣は即ち今の平涼縣治これなり、

【辟荔】 和名イタビカヅラ、一種の蔓草、その實食ふべし、木饅頭といふ、祕傳花鏡に「一名巴山虎、無根可以緣、木而生、藤蔓、葉厚實而圓勁如木、四時不凋、在石曰石綾、在地曰地錦、在木曰長春藤、好敷岩石與牆上、紫花發、後結實云云」方干の詩に「應戶涼生一風」また屈原の離騷に「貫一之落葉」註に「一ハ香草ナリ」とあるは別種の草に似たり、

【聘奩】「ヨメイリ」の道具、齊家實要に「一從儉粧奩、貨奩、嫁奩、奩具皆同じ、奩は香料を盛る器、カウバコ、また鏡匣、ケシヤウバコをいふ、それより一切の嫁入道具に用ふ、奩に作る同じ。」

【表】文の一體なり、文體明辨に「字書ヲ按ズルニ、表ハ標ナリ、明ナリト、事緒ヲ標著シテ、之ヲシテ明白ナラシメ、以テ上ニ告グルナリ、古ハ言ヲ君ニ獻ズ、皆上書ト稱セシガ、漢禮儀ヲ定メテ、乃チ四品アリ、其ノ三ヲ表トイフ、諸葛亮ノ出師表、韓愈ノ賀皇帝即位表ノ如キ是レナリ」後世、表の用、益廣ク、論諫なり、請勸なり、陳乞なり、進獻なり、推薦なり、慰安なり、辭解なり、證理なり、彈劾なり、施して可ならざるところなきに至れり、漢晉は多く散文を用ひ、唐宋以下は多く四六を用ふ、

また日晷を測る木、ヒカゲバシラ北史蘇綽傳に「表不正、不可求直影的、不明、不可責射中」とあり、この語の前に「凡ソ人君ノ身ハ乃チ百姓ノ表、一國ノ的ナリ」とあり、

【豹】説文に「虎ニ似テ圖文アリ」陸璣の詩疏に「毛赤クシテ文黒キ、之ヲ赤豹ト謂フ、毛白クシテ文黒キ、之ヲ白豹ト謂フ」

また玄豹、青豹、金錢豹、金線豹等あり、金錢豹はその文錢の如し、裘と爲すに宜し、易の革卦に「君子豹變、疏に「豹文ノ蔚縟ノ如キナリ」晉書に「王獻之數歲、嘗觀門生榜蒲、曰、南風不競、門生曰、此郎亦管中窺豹、時見一斑」

【苗裔】苗は胤(タネ)なり、裔は末なり、末胤をいふ、楚辭に「帝高陽之苗裔兮」の朱註に「苗ハ草ノ莖葉根ノ生ズル所ロナリ、裔ハ衣裾ノ末ニテ衣ノ餘ナリ、故ニ以テ遠末子孫ノ稱トナス」史記司馬穰苴傳に「司馬穰苴者、田完之—也」

【票姚】勁疾の貌、また漢の兵官の名、漢書霍去病傳に「去病爲—校尉」史記には「票姚」に作り、荷悅漢紀には「票姚」に作る、唐人票を票に作る、

【嫫姚】前條を見よ、

【颯颯】風の高く吹く貌、曹植の詩に「—隨長風」また孟郊の詩に「鏡海見、織悉、水天步—」

【剽悍】剽は急なり、悍は輕なりと、史記酷吏傳の注に見ゆ、次條を見よ、

【標悍猪賊】標は輕なり、疾なり、悍は勇なり、躁急悍猛にして、持重せざるをいふ、猪賊は狡猾にして人を賊害するをいふ、史記高祖紀に「項羽爲人—」標は

刺と通ず、漢書地理志に「患其剽悍」

【豹脚ノ蚊子】爾雅翼に「蚊ハ草中ニ生ズル者、吻尤モ利ニシテ、足ニ花文アリ、吳興ニ—ト號ス」東坡志林にも「湖州蚊多シ、其ノ中豹脚トイフ者アリ、尤モ毒アリ」

【逸乎】人を疎んじ輕んずる貌、韓愈の與陳給事書に「—其容、若不察其愚也」

【眇忽】眇は少なり、—は極めて少數をいふ、文選司馬相如の子虛賦に「眇眇忽忽、若神仙之髣髴」眇忽に同じ、

【秒忽】秒は禾芒なり、忽は蜘蛛の網の細かなる者、よりに極めて少き數量の名、漢書敘傳に「造計—」

【廟算】廟謨に同じ、算は計謀なり、古は謀を定むること祖廟に於てす、故にいふ、孫子始計篇に「兵未戰而—勝者得算多也、未戰而—不勝者得算少也、多算勝、少算不勝、而況於無算乎、吾於是觀之、勝負見矣」

潘岳の西征賦に「制勝於—」

【豹死シテ皮ヲ留メ、人死シテ名ヲ留ム】(豹死留皮、人死留名)金壁故事に五代史記死節傳を引きて「梁ノ王彥章、字ハ子明、人トナリ驍勇ニシテ力アリ、能ク跳足ニシテ棘(ばら)ヲ履ミ、百歩ヲ行ク、一鐵槍ヲ持チ、

馬ニ騎シテ馳突シ、奮疾スルコト飛ブガ如シ、而シテ他人能ク與ニスルナシ、嘗テ人ニ謂ヒテ曰ク、豹死留皮、人死留名ト、其ノ忠義蓋シ天性ナリ、歐陽修の王彥章畫像記にも見ゆ、

【眇視跛履】盲眇の人にして明かに視んとし、跛蹙の人に於て遠く履み行かんとするは、危地に陥るを免れず、以て才の足らざる者、強ひて分外の事を行はんとするは、禍敗を招くに至るに喩ふ、易經履卦の六三に「眇能視、跛能履、履虎尾、咥人、凶」

【廟寢】「オタマヤ」淮南子時則訓の注に「前ニ在ルヲ廟トイヒ、後ニ在ルヲ寢トイフ」晉書賀循傳に「別立—」

【標準】標は木表、準は平を爲る者なり、「ミヅモリ」標的として準據する義、韓愈伯夷頌に「聖人乃萬世之—也」

【漂杵】戰血流れて杵(キネ)を「タダヨハス」激戦の状を形容す、書經武成に「罔有敵于我師、前徒倒戈、攻于後、以北、血流—」一解に杵は盾(タテ)なりと「鹵ヲ漂ス」を參看せよ、

【廟勝】廟算に勝つをいふ、漢書趙充國傳に「非素定—之冊」冊は策に通ず、曹植の封—子爲公謝恩章

【廟食】 廟祠に祭らるる義、漢書淮南王傳に「高皇帝之神、不_レ一_レ於大王之手、明白_ニ、また後漢書梁竦傳に「大丈夫居世、生當封侯、死當一_ニ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「能信_ニ、於南海之民、一_ニ百世_ニ」

【貌諸孤】 貌は一音バク小なり、諸は助字、小弱なる孤兒の義、左傳僖九年に「初獻公使荀息、傅奚齊、公疾、召之曰、以是_一一_ニ辱在大夫、其若_之何_一」

【標青】 「ハナダイロ」標は青黄色なり、曹植の棄婦篇に「石榴植前庭、綠葉搖_一一_ニ」

【剽竊】 人の詩文を盗みて己の作とする義、事文類聚卷六に國史補を引き「能詩亦_一一_ニと題して、王維有詩名、然_レ好竊人詩句、如_レ行到水窮處、坐看雲起時、英華集中詩、漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木嘯黃鸝、乃李嘉祐詩也」とあり、されども水田夏木の對句は、李の句なれども、それに漠漠、陰陰の二疊字を加へて己の句とせしなればこれをも_一一_ニといふはやや酷なるべし、

【漂然】 高遠の意、漢書楊敞傳に「_一一_ニ皆有節概、知_レ去就之分_ニ」

【剽賊】 前人の詩文などを竊みて己の作とするなり、韓愈の樊宗師墓銘に「惟古於詞、必己出、降而不能_レ乃_一」

故尙書令荀攸於太祖_一一_ニ

【抄冬】 抄は「コズエ_一一_ニ」は陰曆十二月をいふ、季冬に同じ、

【標梅】 嫁期の過ぎたるをいふ、詩經召南標有梅篇に「標有梅、其實七兮、求我庶士、迨_レ其吉兮」の註に「標ハ落ナリ、庶ハ衆、迨ハ及ナリ、吉ハ吉日ナリ、梅落チテ樹ニ在ル者少シ、以テ時過キテ太ダ晩キヲ見ル、我ヲ求ムルノ衆士、其レ必ズ、コノ吉日ニ及ンデ來ル者アランカトナリ」

【森茫】 森は水の洪大なる貌、_一一_ニは水の限りなく廣きなり、文選郭璞の江賦に「狀滔_ニ天_一以_一一_ニ森漫に同じ、

【標榜】 榜は「タテフダ」表識とすること、史記留侯世家に「武王表_ニ商容之閭_ニ注に「表トハ其ノ里門ニ_一一_ニスルナリ」又名目を附けて稱揚する義、後漢書李膺傳に「海内共相_一一_ニ」

【廟貌】 「オタマヤ」詩經小序の「清廟祀_ニ文王_一也」の箋に「廟之言_ニ貌也_一、髣髴として死者の容貌を見る心地する義、宋史の禮志に「_一一_ニ猶在_レ久_レ廢_ニ性_一牢_ニ」

【剽剽】 剽もまた剽なり、_一一_ニは、擊ち「ソコナフ」義、史記莊周傳に「指事類_ニ情_一、_一一_ニ儒墨_ニ」

【漂泊】 水上に「タダヨフ」如く、住所の定まらざる義

【廟堂】 宗廟をいふ、禮記禮器に「_一一_ニ之上_ニ、鼎樽在_レ階、犧尊在_レ西_一一_ニ之下_ニ、縣鼓在_レ西、應鼓在_レ東_一」また朝廷の義、劉向の九歎篇に「始結_ニ言_ニ於廟堂_一、今信中途_ニ而叛_レ之_一」の註に「廟トハ、先祖ノ居ル所_ニロナリ、人君政ヲナシ、事ヲ舉グルニハ、必ズ宗廟ニ告グ、之ヲ明堂ニ議ス_一」呂覽類似篇に「夫修_レ之於_一一_ニ之上_ニ、而折衝乎千里外_一」漢書徐樂傳に「賢主獨觀萬化之原、明_ニ於安危之機_一、修_レ之_一一_ニ之上_ニ、而銷_レ未_レ形_レ之患_一也」儲光義の送_ニ丘健_一詩に「元戎啓_ニ神皇_一、_一一_ニ發_ニ嘉謀_一」

【標致】 旨趣を表示する義、魏書文苑傳に「自昔聖達之作、賢詰之書、莫_レ不_レ統_レ理成_レ章、蘊氣_一一_ニ」

【標映】 映は、書冊を被ひ「ツツム」もの、書衣なり、_一一_ニは、「ハナダ」色の映をいふ、唐の太宗の帝京篇に「草編斷復續_一一_ニ舒_レ還_レ卷_一」

【表著ノ位】 公會の位次をいふ、表は野會に旂を設けて表とするをいひ、著は著定にして、朝會に佇立する一定の處をいふ、左傳に「朝_ニ有_レ著定_一、會_ニ有_レ表_一、會朝之言必聞_一一_ニ之_一」所以昭_ニ事序_一也、また漢書五行志に「朝内列位有_レ定處_一、所謂表著也」

【廟廷】 廷は庭に同じ、「オタマヤ」魏志齊王芳紀に「詔_レ祀_ニ流寓_一なり、庾信の哀江南賦に「下亭_一一_ニ高橋_ニ羈_レ旅_一、また杜甫の詩に「即今_一一_ニ干戈_ニ際_一、また漂は_一一_ニに飄_ニに作る、北史に「雖羈_レ旅_一飄_ニ泊_一、而清貧守_レ度_一」

【豹皮】 儀禮疏に「畿外諸侯亦以_一一_ニ爲_レ鶴_一」五代史に「王彥章曰、豹死留_レ皮_一、人死留_レ名_一」

【渺瀰】 水の「ムナシク」遠き貌、天に連る如く廣き水、木華海賦に「_一一_ニ深漫_ニ、白居易の詩に「江平綠_一一_ニ」

【兵部】 宋史職官志に「兵部掌_ニ兵衛儀仗_一、鹵簿、武舉、民兵、廂軍、蕃軍、四夷、官封承襲之事、與馬器械之政、天下地土之圖_一」

【標風】 「ハゲシキカゼ」飄風に同じ、史記禮書に「卒如_一一_ニ」

【森風】 下より上に回旋する烈しき風、「ツムジ」禮記の月令に「孟春行_ニ秋令_一、則_一一_ニ暴雨_ニ總_レ至_一」註に「回風ヲ森トイフ」漢書韓安國傳に「匈奴輕疾之兵、至如_一一_ニ去_レ如_レ收電_一、扶搖に同じ、

【颶風】 下から上へ吹きあぐる暴風、颶は森に同じ、前條を見よ、

【飄風ハ朝ヲ終ヘズ】 「飄風不_レ終_レ朝」飄風は暴風なり、詩經小雅何人斯に「彼何人斯、其爲_一一_ニ勢威_ニのはげしきものは、長くつづかざるにたとふ、老子の語「驟

【雨】を見よ、

【鹿麋】 武さ貌、詩經鄭風清人に「清人在消、麋介」

【鶴鶴】 「ニギヤカ」に行く貌、詩經齊風載驅に「行人」

「傳に「一ハ衆キ貌」

また禽獸の多き貌、同小雅吉日に「一俟俟」

【瀟瀟】 雨雪の盛んなる貌、詩經小雅角弓に「雨雪」

【標渺】 遠くカスカに見ゆる貌、木華海賦に「群仙」

【標渺】 前條に同じ、宣和畫譜に「李思訓工、山石林泉筆」

格遒勁、得「瀟瀟瀟瀟煙霞」難寫之狀、李白の天門

山詩に「參差遠天際、一晴霞外」

【渺渺】 小なる貌、書經顧命に「予末小子、史記秦紀」

【渺渺】 水の大いに廣き貌、隋煬帝の句に「平淮既」

【渺渺】 水の長く廣き貌、管子内業篇に「一乎如」

【豹變】 善に移るの義なり、豹の皮毛の變更して、文を

成すこと彬蔚なるが如し、易の革卦に「君子一、小人

革、面君子善に遷りて、舊惡を改め去るは、その著見な

ること豹の斑采のうつくしが如し、故に譬ふ、また

晉書應貞傳に「位以龍飛、文以一」

【漂母】 水にて架を撃ちて「サラス」ことを業とする者

【廟謨】 朝廷の「ハカリゴト」後漢書光武紀贊に「靈慶既

啓、人謀咸贊、明明一、赴赴雄斷」元稹の詩に「努力一

【廟謨】 朝廷の「ハカリゴト」廟略に同じ、杜甫の詩に「猛

【森漫】 森は大水なり、一は水廣くして「カギリナキ」

【廟廊】 朝廷をいふ、趙賢の贈「趙祭酒」詩に「一贊畫贊

【表裏ヲ爲ス】 (爲「表裏」内外に在りて互に相撥くる

義、漢書蕭望之傳に「中書令弘恭、石頭、久典「樞機、明習

【剽掠】 人の物を「カスメ」奪ふこと、唐書に「山賊一」

【廟略】 朝廷の「ハカリゴト」晉書羊祜傳に「外揚「王化

【漂幽】 (幽「漂」ハス)を見よ、

【碧漪】 「ミドリ」の「サザナミ」李賀の詩に「金塘閉水搖

【碧宇】 「アラゾラ」陳樵の夜闌曲に「一星同夜漫漫」

【碧雲】 「ミドリ」の雲、江淹の擬休上人詩に「日暮一

合、佳人殊未來、戴叔倫の夏日登鶴巖詩に「願借「老僧

雙白鶴、一深處共翱翔」劉禹錫の廣宣上人詩卷詩に

「一佳句久傳芳、曾向「成都住草堂」

【辟易】 漢書の項羽傳に「人馬俱ニ一スルコト數里

の註に「一ハ、開キテ、其ノ本ノ處ヲ易フルヲイフ」

に驚き却くの貌とも解す、史記項羽本紀にも見ゆ、

【璧ヲ衝ミ觀ヲ興フ】 降伏の禮なり「衝璧」を見よ、

【碧海】 十洲記に「扶桑、在「東海之東岸、岸直陸行登岸一

萬里、東復有「一、海廣狹浩汗與「東海等、水既不鹹苦、

正作「碧色、甘香味美、杜甫の戲作絶句に「或看翡翠蘭若

上、未掣鯨魚一」中、また「アラウミ」李商隱の嫦娥の

詩に「嫦娥應「悔偷靈藥、一青天夜夜心」

【碧海中央六里松】 益軒の勝景圖記「天橋立の條に見

ゆ、これは材庵の詩として「一」一、天橋絶境是

仙蹤、夜深人待「龍燈出、月落文珠堂裏鏡」と、橋立案内

志に出づ、

【碧漢】 「アラゾラ」漢は「アマノガハ」江總の和衡陽王

高樓看妓詩に「起「樓侵、一」初日照「紅妝」

【碧眼】 「ミドリ」の「マナコ」高僧傳に「達摩、眼紺青色、稱

一「胡僧」

【碧巖】 「ミドリ」の「イハ」陶弘景の水仙賦に「一無霧

綠水不風、李白の宿「清溪主人」詩に「夜到「清溪宿、主人

一裏、また宋の釋圓悟の撰せし「一集あり、

【辟寒丸】 (一「一」)を見よ、

【碧虛】 「アラゾラ」吳均の詠雲詩に「飄飄上、一「萬萬

【碧玉】 「ミドリ」色の美しき玉、拾遺記に「周穆王即位

三十二年、巡行天下、馭「黃金一」之車、

また水又は天の清く「ミドリ」なるに喩へていふ、柳宗

元の酬曹侍御詩に「破額山前「一流、騷人遙駐木蘭舟、

元稹の清都夜境詩に「寥天如「一、歷歷綴「華星」

【碧空】 「アラゾラ」李白の黃鶴樓送孟浩然詩に「孤帆

遠影「一盡、唯見長江天際流」

【壁畫】 「カベ」に畫ける繪畫なり、楓窗小牖に「李成以

山水供「奉禁中「中略」識者謂「一最入「神妙、惜在「白壁

上耳、崔國輔の宿「法華寺」詩に「一感「靈跡、龜經傳異

【碧溪】 「アラゾラ」の水の流るる「タニ」張籍の夜宿

【碧梧】 「アラゾラ」翠梧に同じ、韓愈の馬少監誌銘に「翠

竹「一鶯、鶴停時、范成大の詩に「雲橫、朱閣「一寒」

【壁虎】 蟲の名、ヤモリ守宮と同じ、廢宅の壁間等に棲む形、トカゲに似て尾短く、指端に小珠の如きものありて物に著く、色灰黒にして黒斑あり、夜出てて小蟲を捕り食ふ。

【辟公】 辟は君なり、諸侯をいふ、詩經周頌雍篇に「相維天子穆穆」

【碧山】 「ミドリ」の山、李白の山中問答詩に「問余何意栖—笑而不答心自閑」

【辟書】 「メシブミ州府の召を辟といふ、裴子野碑に「—交乎塗路」

【碧水】 「アラミドリ」の水、梁昭明太子の詩に「桂楫蘭橈浮—江花玉面兩相似、李白の早春寄王漢陽詩に「—浩浩雲茫茫、美人不來空斷腸」

【癖性】 書言故事に「性偏好アルヲ—トイフ、晉ノ王濟ハ馬癖アリ、和嶠ハ錢癖アリ、杜預ハ左傳ノ癖アリ、蓋シ偏好スル所ロアリ、人ノ病癖痊エザル如シ」

【碧霄】 「アラソラ」碧漢と同じ、崔鉉の咏架上鷹詩に「萬里—終一去、不知誰是解縑人」

【襲積】 衣裳の「ヒダ」なり、漢書司馬相如傳に「—褰縑注に「—ハ即今ノ裙褶」

【碧蘇】 「ミドリ」の「コケ」權徳輿の建昌丞崔君墓誌に

「疏清流蔭—樹藝偃仰有終焉之志、碧苔に同じ、【碧桃】 「アライロ」の桃の實、尹喜内傳に「老子西遊省太真王母共食—紫梨、郎士元の聽隣家吹笙詩に「重門深鎖無尋處、疑有—千樹花」

【碧潭】 「ミドリ」の「フチ」劉勰の新論に「懸瀾—瀾波洶湧、魚龍之所安也、人入而畏、寒山の詩に「我心似秋月、—清皎潔」

【碧天】 「アラソラ」王羲之の蘭亭集詩に「仰視—俯瞰、綠水濱、唐彦謙の中秋夜翫月に「—夜高樓萬景奇、—無際水無涯」

【碧甯杯】 酉陽雜俎に「歷城ノ北ニ、使君林アリ、魏ノ正始中、鄭公愨、三伏ノ際、每ニ賓僚ヲ率キ、暑ヲ此ニ避ク、大蓮葉ヲ取り、酒ヲ盛ルニ升、管ヲ以テ葉ヲ刺シ、酒ヲシテ柄ト通ゼシメ、莖上ヲ屈シ、輪函象鼻ノ如クシ、之ヲ傳嗜ス、名ツケテ—ト爲ス、歷下之ヲ學ブ、言フ酒味、蓮氣ヲ雜エ、香冷水ニ勝ル、蘇軾の詩に「碧甯時作象鼻彎、白酒微帶荷心苦」

【癖標】 「ムネ」を拊つ、悲ひ義、張協七命に「氣凌爲—癖標」癖は辟に通ず、詩經邶風に「癖癖有標」

【碧蔓】 「ミドリ」の「ツル」范成大の西瓜園詩に「年來處處食西瓜、—凌霜臥軟沙」

【河朔春時、疾風數日、一作三日乃止、曰吹花—】

【壁立】 家貧しくして只「カベ」のみ立てるをいふ、史記司馬相如傳に「相如使人重賜、文君侍者通殷勤、文君夜亡奔相如、相如乃與歸、家、居徒四壁立耳云云」宋書吳遠傳に「家徒—冬無被綉、晝則備賃、夜則伐木燒博云云、南史江革傳に「革三爲二千石、傍無姬侍、家徒—時以此高之」

また岸などの、壁の如く聳え立つ義、水經注に「釋法顯曰、度葱嶺、已入天竺境、於此順嶺西南行、十五日、其道艱阻、崖岸險絕、其山唯石、—千仞、臨之目眩欲進、則投足無所、庾信終南山義谷銘に「寥廓上浮、崢嶸下鎮、—千丈、峰橫萬仞」

【壁壘】 「トリデ」文選の張衡の思立賦に「觀—於北落—」

【碧琉璃】 「琉璃」を見よ、

【霹靂】 漢書天文志に「—夜明霹靂に同じ、次條を見よ、霹靂」激雷なり、爾雅の註に「雷之急擊、爲霹靂」とあり、枚乘の七啓に「夏則雷霆—所感也」

【霹靂手】 書言故事に「人敏オアルヲ霹靂手トイフ、唐ノ裴琰、司戸參軍トナル、凡ソ舊事未ダ決セズ、書吏數人ニ命ジテ、紙數幅ヲ連ネ、須臾ニシテ、剖斷シテ、竝ニ

【辟雍】 天子の學宮にして、大射に禮を行ふの處、辟は明、雍は和にして明達諧和ならしむる義、雍或は雍に作る、雍は澤なり、辟は壁なり、水澤丘をめぐると壁の如し、以て觀る者を節す、故に辟雍といふ、禮記に「大學在郊、天子曰—、諸侯曰—、詩經大雅靈臺篇に「於論鼓鐘、於樂辟雍、雍はまた離に作る、白虎通には「辟ノ言タル積ナリ、天下ノ道德ヲ積ムナリ、雍ノ言タル壅ナリ、天下ノ殘賊ヲ壅グナリ、故ニ之ヲ—トイフ、類宮」を參看せよ

【辟踊】 辟は心を拊つなり、通じて辟に作る、踊は跳躍（オドル）なり、孝經に「—哭泣」

【碧蘿】 「ミドリ」の「ツタ」劉勰の新論に「—附於青松、以茂凌雲之業」

【碧落】 天をいふ、オホゾラ、黃庭堅詩に「心似蛛絲遊—度人經の注に「東方第一天、碧霞ノ遍滿スルアリ、是ヲ—トイフ」

【汨羅之鬼】 汨羅は江名、説文に「長沙汨羅淵、屈原所沈之水」一統志に「汨羅江名、在湘陰縣北十里、源出豫章、流經湘陰、分二水、一南流曰汨水、一經古羅城、曰羅水、至屈潭、復合、故曰汨羅、西流入湘、（屈原）を見よ、

【孽柳風】 柳を「ツンザク」春の暴風をいふ、風土記に

【辟糴】 麻を績むを辟といひ、其の麻を練るを糴といふ。孟子滕文公下篇に「彼身織屨妻一以易之也」

【碧鱸】 「スズキ張末の詩に「蓴菜一秋正美」

【辟王】 「キミ詩經大雅棫樸篇に「濟濟一左右趣之」注に「辟ハ君ナリ、君王ハ文王ヲ謂フ」

【別駕】 官名なり、刺史が州を巡る時に隨ひ行く官なり、事物紀原に「唐六典ニ曰ク、後漢ハ、州ニ一置ク、歷代皆之レ有リ（中略）通典ニ曰ク、刺史ニ從ヒ部ヲ行ル、別ニ一乘ノ傳車ニ乘ル、故ニ之ヲ一ト謂フ、漢ノ制ナリ」

【別號】 人すてに名ありて、別に一の名即ち號を命ずるを一また別字といふ、書經の疏に「保衡、伊尹一人ナリ、時ヲ異ニシテ號ヲ別ニス」後村題跋に「豈摩詰一耶」

【別業】 別莊をいふ、南史の謝靈運傳に「移籍會稽、修營一傍山帶江、盡幽居之美」また通鑑の漢紀の註に「別ニ田園ヲ他所ニ置ク、之ヲ一トイヒ、亦之ヲ莊トイフ」別墅に同じ

終南別業

唐 王 維

中歲頗好道、晚家南山陲、興來每獨往、勝事空自知、行到水窮處、坐看雲起時、偶然值林叟、談笑忘還期、

【瞥見】 説文に「瞥ハ過目ナリ」一は瞥觀に同じ、僅に「チラ」と目を過ごし見るなり、梁書王筠傳に「余少好書、雖偶見瞥觀、皆即疏記」

【別歲】 年の暮に酒食を設けて親戚朋友等を招くをいふ、トシワスレ蘇軾の饋歲詩序に「蜀中值歲晚、間遺謂之饋歲、酒食相邀爲一」

【蹠蹠】 蹠一音セツ跛なり、また旋行の貌、莊子馬蹄篇に「垂人一爲仁、蹠蹠爲義」音義に「心ヲ用ヒテ仁義ヲ爲スノ貌」とも見ゆ、蹠蹠も心力を用ふる貌、また柳宗元の詩に「一皆蹠蹠」

【別墅】 墅は田中に收穫のために結びたる廬なり、轉じて「シモヤシキ」の義に用ふ、別業に同じ、晉書謝安傳に「圍碁賭一唐書裴度傳に「東都立第於集賢里、又於午橋創一花木萬株、起涼臺暑館、名曰綠野堂」

【襍綵短才】 特に長じたる才藝なきをいふ、襍は足衣（タビ）なり、之を解くも長き糸なし、故に短才の義とす、瑣言に「僞蜀韓紹書言故事に韓昭祖に作る琴碁書畫射皆涉獵ス、李台瑕曰ク韓ノ藝ハ襍綵ヲ析ツ如ク一條ノ長キ者ナント」

【別天地】 人閉の外なる世界、別乾坤ともいふ（別ニ天地を見よ、

【別天地ノ人閉ニ非ルアリ】 李白の山中問答に「問余何意栖碧山、笑而不答心自閒、桃花流水窅然去、別有天地非人閒」余は李白自ら謂ふ、他の人が、余に何の意を碧山に栖むかと問ふ、余は笑つて答へず、心自ら閒かなり、余は唯桃花流水の裏に、自然深遠ノ貌として去る、去るは行くなり、この閒、別天地ありて人閉の天地とは異なるをいふ、笑而不答とあれども末の二句は答なり、

【ノハ】 説文に「ノハ右戻ナリ、ハ左戻ナリ」とあり、右戻とは右より左に戻る義、左戻はその反なり、舟などの「エレウゴク」貌、翠雨軒詩話に「紀藩松本元資所著童蒙百絶有坤位風來檣聲近、漁舟一卸、帆歸之句」とあり、支那人の一の熟語を用ひたる例は未だ見ず、

【蟻蟻】 「ヌカガ」古名「カツラムシ」蚊の類、極めて小さく大一分許、色白く首に絮あり、蚋子ともいふ、揚雄甘泉賦に「浮一而撤天」

【鞭ヲ執ル】 人の爲めに馭するをいふ（執鞭）を見よ、

【辯ヲ以テ知ヲ飾ル】 （以辯飾知）辯舌を以て知をかざり、其の實なきなり、莊子の繕性篇に「古之存身者、不以辯飾知」とあり、註に「其ノ眞知ありのままのちる

ノ言行ノ是非眞僞ヲ執リテ、大義ヲ以テ之ヲ裁斷スルナリ」漢以前に在りては作る者なし、故に文選に所見なく、劉勰も亦其の説を著さず、唐の韓愈柳宗元に追ひ、始めて諱辯、論語辨などの篇出でて其の集に見えたり、然れども其の原を推究するに、實は孟子、莊子の諸家に胚胎し、未だ篇目の設なかりしものと、韓柳二氏に至りて其の篇目を立てて以て一體と爲したるに過ぎざるなり、蓋し至當不易の理に本づき、反復曲折の詞を以て發揮するに非ざれば、未だ能く工なる者あらざるなり、

【駢雅】七卷、明の朱謀瑋撰す。謀瑋字ハ鬱儀、寧獻王七

世ノ孫ナリ。爾雅の體例に仍り釋詁、釋訓、釋名、釋釋、釋服、釋器、釋天、釋地、釋草、釋木、釋蟲、魚、釋鳥、釋獸の十三篇に分ちて訓釋す、徵引精確なり、

【扁額】説文に「扁ハ署ナリ、戸冊ニ从フ、戸冊ハ門戸ニ署スルノ文ナリ」ハ門戸の額に字を扁するをいふ、程史に「吳山有、伍員祠、歐園園、都人敬事之、有富民捐貲爲、金碧甚侈」

【便宜施行】その場の便を見計らひて都合よきやう事を行ふ義、史記蕭相國世家に「即不及、奏上、輒以、施行、上來、以聞、上は漢の高祖を斥す、

【編急】心のせまくして、事にせくをいふ、南史に「駱達大度、漢祖之德、猜忌、魏武之略」

【下急】下は躁疾なり、輕躁急促なるをいふ、キバヤシ左傳定三年に「邾莊公、而好潔」

【勉強】強ひて勉むるをいふ、中庸の字面、漢書儒林傳に「願少自、

【苾愚】苾は、イシバリ、愚をいましむる義、伊洛淵源錄に「其室之左、曰、易の繫辭上傳に「見矣、變化」アラタマリ、カハル易の繫辭上傳に「見矣、

【偏枯】半身不隨の人をいふ、管子に「聾盲啞跛蹙、者上收而養之」

【編戶】戸籍に編列せる人民の義、庶人をいふ、漢書梅福傳に「孔子孫不免、同高祖紀の註に「編戶民者、言列次名籍也」

【下壺】字は望之、晉の宛句の人、父粹字は玄仁、中書令たり、兄弟六人竝に台輔に登る、世に下氏の六龍、玄仁無雙なりと稱す、壺弱冠にして名譽あり、官尙書令に至る、庾亮と心を同うして政を輔く、蘇峻反するに及び、壺疾を扶けて與に戰ひ、克たずして死す、子瞻肝相隨ひて賊に赴き同時に害せらる、母裴氏戸を撫して哭して曰く、父は忠臣たり、子は孝子たり、君の爲に命を捨つる、又何ぞ怨まんと、峻平ぎ、侍中を追贈せらる

【辯護】「イヒワケ」して庇護する義、漢書貢禹傳に「以王命、生家、雖、百子、何以加」

【邊功】邊土の功、即ち夷狄を征する、テガラ「唐書姚崇宋璟傳贊に「崇勸天子不求、璟不肯賞邊臣、而天寶之亂、卒陷其害、可謂先見矣」(新豐折臂翁)を見よ、

【辯口】口才あるをいふ、史記の范雎傳に「齊襄王聞雎、口、また朱建傳に「爲人辯、有口」

また佛經にては「と讀ひ、法華經に「神通、不可思議、國語にて變化といふは、妖怪の義、源氏物語に「もし狐などのへんげにやと覺ゆれど略しては「ヘン」ともいふ、

【下和玉ニ泣ク】(和氏ノ)を見よ、

【下和之璧】韓非子の下和篇に出づ、和氏ノ)を見よ、

【駢脅】駢は比なり、脅は腋下の名、アラバ、その骨を肋骨といふ、ハ助骨合して一の如くなるをいふ、イチャイアバラ「左傳僖二十三年に「聞其、欲觀其裸浴、薄而觀之、國語の晉語にも見ゆ、史記商君傳に「多力而、者爲、驂乘」

【便娟】輕き貌、雪の如くみだれて飛ぶ貌にも用ふ、文選謝惠連の雪賦に「初、于廊廡、未、盈于帷席、後漢陳紀傳「紀見禍亂不復、即時之郡註に「嚴讀ミテ裝ノ若クス」

【片言獄ヲ折ム】(片言折獄)片言は半言の義、折は斷なり、半言獄を斷めて、人之に信服し、其の辭の擧るを待たざるをいふ、論語顔淵篇に「片言可以、者、其由也、歟、由は子路の名、

【片言雙辭】一言半句といふに同じ、陸機の謝表に「

【偏國】「カタキナカ」列子楊朱篇に「雖殊方、返魂樹」十洲記に「聚窟洲海中申未地上有大樹與楓相似、而花葉香聞數百里、名爲、伐其根心於玉釜中煮取汁令可丸、名曰驚精香、或名震靈丸、或名返生香、氣聞數百里、死屍在地、聞氣即活(返魂香)を參看せよ、

【便座】正寢に非ずして傍側に在る休息の室なり、漢書張禹傳に「禹見之於、

【邊塞】夷狄を防ぐために邊境に「トリデ」を作るを塞といふ、因りて廣く邊境の地の義とす、史記三王世家に「大司馬去病上疏曰、陛下過、聽、使臣去病、待罪行、閉宜專、之思慮、中野、無以報、杜甫の詩に「悠悠照、悄悄憶京華」

【辨才天】辨一に辯に作り、才一に財に作る、大辨天大辨功德天、吉祥天ともいひ、略しては辨天ともいふ、辯舌に長じ、智慧または財寶の福を與ふといふ、天竺の女神の名、この天の寶冠中には、一の白蛇あり、その顔面は老人の如く、眉毛甚白し、過去諸佛の出世に遭ひ、衆生を利益すること久しきを表するの相なり、また琵琶を彈ずる相をも畫く、妙音天女の名もあり、

【扁舟】廣韻に「扁ハ小舟ナリ」史記貨殖傳に「乃乘、